新潟県埋蔵文化財調査報告書　第192集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅩⅦ

大館跡Ⅱ
東興屋遺跡
高山東遺跡
窪田遺跡Ⅱ

2009

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅩⅧ

大館跡Ⅱ
東興屋遺跡
高山東遺跡
窪田遺跡Ⅱ

2009

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海沿岸東北自動車道は新潟市を起点に、日本海側を北上し青森県に至る高規格幹線道路です。新潟県内では平成14年度に胎内市の中条インターチェンジまでが開通しました。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがありますが、平成15年末の国土開発幹線自動車道建設会議において、日本海沿岸東北自動車道の中条―朝日間は日本道路公団が有料道路として建設することとなりました。その後、公団の民営化により、平成17年10月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成18年2月の国土開発幹線自動車道建設会議において、荒川―朝日間については国土交通省が新直轄道路として建設することになりました。

日本海沿岸東北自動車道は地域内外の経済的な交流・連携を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送等の「命の高速道」としての役割も期待されており、早期の開通が望まれています。

本書は、この日本海沿岸東北自動車道建設に先立って発掘調査を実施した「大館跡」、「東興屋遺跡」、「高山東遺跡」、「窪田遺跡」の報告書です。特に大館跡は村上市域にあって最大級の規模を持つ中世の方形居館で、平成18年度からの継続調査です。館東側の堀からは当時高級品とされる皆朱漆器や大型鉄鍋といった希少品、そして遠く畿内から持ち込まれた土師質土器皿など多くの遺物が出土しました。館主の特定には至っていませんが、出土品や遺構の規模から国人領主クラスの館であった可能性が高く、当時の社会情勢を考える上で貴重な資料を提示することができました。

今回の発掘調査が、考古学研究者はもとより、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っています。

最後にこの調査に参加された地元の方々や区長並びに村上市教育委員会には、多大なご協力とご援助をいただきました。また、国土交通省北陸地方整備局羽越国道河川事務所及び東日本高速道路株式会社、三面川沿岸土地改良区には調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚く御礼を申し上げます。

平成21年3月

新潟県教育委員会

教育長　武　藤　克　己

例　言

1　本書は新潟県村上市天神岡字大館ほかに所在する大館跡、同市東興屋字宮ノ前120ほかに所在する東興屋遺跡、同市仲間町字高山361ほかに所在する高山東遺跡、同市（旧神林村）南田中字窪田1252ほかに所在する窪田遺跡の発掘調査記録である。

2　本発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道（以下、日沿道とする）建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、県教委とする）が国土交通省から受託したものである。調査は県教委が主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団とする）に委託し、埋文事業団の管理・監督のもと加藤建設株式会社が平成19年度に行った。

3　新潟県では記録保存のための発掘調査を行う範囲は、近世初頭までとしている。近世の遺構・遺物については所在市町村の意向を尊重することから、村上市教委と協議した結果、調査・報告することとなった。

4　整理及び報告書作成に係る作業は、平成19年度に埋文事業団指導のもと、加藤建設株式会社がこれに当たった。

5　出土遺物及び調査・整理・自然科学分析に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。

6　遺物の註記は、大館跡「'07 大タテ」、東興屋遺跡「'07 ヒガコ」、高山東遺跡「'07 タカヤ」、窪田遺跡「'07 クボ」として、出土位置や層位を続けて記した。

7　本書で示す方位はすべて真北である。また本文で述べる軸方位は真北に対する東西方向の傾きである。

8　遺物番号は遺跡ごとに通し番号とし、本文及び観察表・実測図版・写真図版の番号は一致している。

9　本文中の註は脚註とし、引用文献は筆者及び発行年を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

10　現在の村上市は、平成20年4月に1市（村上市）、2町（荒川町・山北町）、2村（神林村・朝日村）が合併して誕生した。本書では報告遺跡の位置及び地理的環境を理解しやすくするため、遺跡が所在する村上市に限って合併前の市町村名を使用した。

11　空中写真撮影は、J・T空撮に委託した。

12　自然科学分析は、すべてパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

13　大館跡出土の木簡の釈文は、田中一穂（埋文事業団調査課嘱託員）が行った。

14　遺構・遺物図の各種図版作成・編集に関しては以下のとおりである。遺構図はAdobe社Illustratorを用い、遺構写真はリバーサルフィルムで撮影したものをスキャニングし、遺物写真はデジタルカメラで撮影し、入稿した。また遺物図版に関してもスキャニングし入稿した。

15　本書の執筆は、青木　学（加藤建設株式会社主任調査員）、石川博行（同社調査員）、北村和標（同社調査員）、鈴木俊成（埋文事業団調査課課長代理）がこれに当り、編集は青木が行った。執筆分担は以下のとおりである。

Ⅰ章1（鈴木）　Ⅰ章2A、3（青木）　Ⅰ章2B1　2C、D（北村）　Ⅰ章2B2（石川）

Ⅱ章（北村）

Ⅲ章1、2、3、5（青木）　4（高橋　敦・伊藤良永・斉藤紀行　パリノ・サーヴェイ株式会社）

Ⅳ章（石川）

Ⅴ章・Ⅵ章（北村）

16　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご教示・ご協力をいただいた。ここに記し、厚く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

阿部泰之　荒川隆史　五十川伸矢　磯部保衛　小熊博史　金子拓男　久保智康　佐藤雅一
塩原知人　関　雅之　田中耕作　田中真吾　谷藤保彦　鶴巻康志　長澤展生　増子正三
水澤幸一　宮内信雄　宮尾　亨　百瀬正恒　横山勝栄　吉井雅勇
常　栄　寺　村上市仲間町区自治会　村上市天神岡区自治会

目　次

第Ⅰ章　序　　章 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調 査 経 過 …… 2

A　大　館　跡 …… 2

1）確 認 調 査 …… 2　　2）平成18年度本発掘調査 …… 2

3）平成19年度本発掘調査 …… 2

B　東興屋遺跡 …… 3

1）試 掘 調 査 …… 3　　2）本発掘調査 …… 4

C　高山東遺跡 …… 5

1）試 掘 調 査 …… 5　　2）本発掘調査 …… 5

D　窪 田 遺 跡 …… 5

1）試 掘 調 査 …… 5　　2）平成18年度本発掘調査 …… 6

3）平成19年度本発掘調査 …… 7

3　調査・整理体制 …… 7

第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 9

1　地理的環境 …… 9

2　周辺の遺跡 …… 9

A　縄文時代の遺跡 …… 9

B　中世の遺跡 …… 12

第Ⅲ章　大　館　跡 …… 14

1　概　　要 …… 14

A　遺跡の概要 …… 14

B　グリッドの設定 …… 14

C　基 本 層 序 …… 15

2　遺　　構 …… 16

A　遺構の概要 …… 16

B　記述の方法 …… 16

C　遺 構 各 説 …… 16

1）堀 …… 16　　2）土　　塁 …… 18

3）井戸・土坑 …… 18　　4）溝・自然流路 …… 19

5）性格不明遺構 …… 20

3　遺　　物 …… 21

A　遺物の概要 …… 21

B　記述の方法 …… 21

C　遺 物 各 説 …… 21

1）陶磁器・土器類 …… 21　　2）銭貨・金属製品 …… 23

3）石 製 品 …… 24　　4）木 製 品 …… 24

5）縄文時代以前の遺物 …… 26

4　自然科学分析 …… 27

A　堀１内の堆積環境 …… 27

1) 試料と分析方法 …… 27　2) 結　果 …… 27
3) 考　察 …… 29
B 木 製 品 …… 29
1) 試　料 …… 29　2) 分 析 方 法 …… 29
3) 結　果 …… 30　4) 考　察 …… 34
5 ま と め …… 37
A 大館跡の年代について …… 37
B 大館跡の位置づけ …… 37
C 木簡について …… 40
1) 題籤状木簡について …… 40　2) 塔婆種字について …… 41
3) 札状木簡について …… 41　4) 小　結 …… 42

第Ⅳ章 東興屋遺跡 …… 43
1 概　要 …… 43
A 遺跡の概要 …… 43
B グリッドの設定 …… 43
C 基 本 層 序 …… 44
2 遺　構 …… 45
A 遺構の概要 …… 45
B 記述の方法 …… 45
C 遺 構 各 説 …… 45
1) 竪 穴 住 居 …… 45　2) 竪 穴 建 物 …… 46
3) 掘穴・土坑・ピット・遺物集中 …… 47
3 遺　物 …… 48
A 遺物の概要 …… 48
B 記述の方法 …… 48
1) 土器の分類 …… 48　2) 石器の分類 …… 49
C 遺 物 各 説 …… 50
1) 竪穴住居・竪穴建物出土の土器 …… 50　2) ピット・遺物集中出土の土器 …… 51
3) 遺構外出土の土器 …… 52　4) 石　器 …… 53
4 ま と め …… 54
A 土　器 …… 54
B 竪穴住居・竪穴建物 …… 55
C 集　落 …… 55

第Ⅴ章 高山東遺跡 …… 56
1 概　要 …… 56
A 遺跡の概要 …… 56
B グリッドの設定 …… 56
C 基 本 層 序 …… 57
2 遺　構 …… 58
A 遺構の概要 …… 58
B 記述の方法 …… 58
C 遺 構 各 説 …… 58
1) 土　坑 …… 58　2) ピット群 …… 59
3) 性格不明遺構 …… 59

3 遺　　物 …… 59
A 遺物の概要 …… 59
B 記述の方法 …… 60
C 遺物各説 …… 60
1) 土　　器 …… 60　　2) 石　　器 …… 61
4 ま と め …… 62
A 土　　器 …… 62
B 遺　　構 …… 63

第Ⅵ章 窪田遺跡 …… 64
1 概　　要 …… 64
A 遺跡の概要 …… 64
B グリッドの設定 …… 64
C 基本層序 …… 64
2 遺　　物 …… 65
3 ま と め …… 65

<要　　約> …… 66
<引用・参考文献> …… 68
<観 察 表> …… 72

挿図目次

第 1 図　大館跡確認調査位置及び本調査範囲図 …… 3
第 2 図　東興屋遺跡・高山東遺跡試掘調査位置及び本調査範囲図 …… 4
第 3 図　窪田遺跡試掘調査位置及び本調査範囲図 … 6
第 4 図　地形概念図 …… 9
第 5 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 10
第 6 図　奥三面遺跡群 …… 12
第 7 図　阿賀北地域の主な中世城館及び生産遺跡 13
第 8 図　大館跡　グリッド設定図 …… 14
第 9 図　大館跡　基本層序 …… 15
第 10 図　堀 1　土層模式図 …… 17
第 11 図　堀 1　造り替え模式図 …… 17
第 12 図　珪藻化石 …… 27
第 13 図　主要珪藻化石群集 …… 27
第 14 図　FT-IR スペクトル …… 33
第 15 図　五輪塔型塔婆の記載内容 …… 41
第 16 図　東興屋遺跡　グリッド設定図 …… 43
第 17 図　東興屋遺跡　基本層序 …… 44
第 18 図　高山東遺跡　グリッド設定図 …… 56
第 19 図　高山東遺跡　基本層序 …… 57
第 20 図　前期中葉土器類例 …… 63
第 21 図　窪田遺跡　基本層序 …… 65

表目次

第 1 表　周辺の遺跡一覧 …… 11
第 2 表　珪藻分析結果 …… 28
第 3 表　FT-IR 測定条件 …… 30
第 4 表　漆薄片観察結果 …… 32
第 5 表　時期別・器種別種類構成 …… 34
第 6 表　新潟県内の方形居館 …… 38
第 7 表　年　表 …… 39
第 8 表　小泉荘内の居館 …… 39

図版目次

[図　版]

図版 1　大館跡　全体図
図版 2　大館跡　遺構全体図
図版 3　大館跡　遺構分割図（1）
図版 4　大館跡　遺構分割図（2）
図版 5　大館跡　遺構分割図（3）
図版 6　大館跡　遺構分割図（4）
図版 7　大館跡　遺構実測図（1）堀 1、空堀 2、SD17、土塁 10
図版 8　大館跡　遺構実測図（2）堀 1、SR9
図版 9　大館跡　遺構実測図（3）堀 1、堀 1（K32・33）、土塁 10
図版 10　大館跡　遺構実測図（4）SE25・35、SK26・40、SR16（K11・12・13・14・28・31）
図版 11　大館跡　遺構実測図（5）堀 1、SR16、SD17
図版 12　大館跡　遺構実測図（6）SR39、SR39（K1・3）、SX27
図版 13　大館跡　遺物分布図
図版 14　大館跡　遺物実測図（1）
図版 15　大館跡　遺物実測図（2）
図版 16　大館跡　遺物実測図（3）
図版 17　大館跡　遺物実測図（4）
図版 18　大館跡　遺物実測図（5）
図版 19　大館跡　遺物実測図（6）
図版 20　大館跡　遺物実測図（7）
図版 21　大館跡　遺物実測図（8）
図版 22　大館跡　遺物実測図（9）
図版 23　大館跡　遺物実測図（10）
図版 24　大館跡　遺物実測図（11）
図版 25　大館跡　遺物実測図（12）
図版 26　大館跡　遺物実測図（13）
図版 27　大館跡　遺物実測図（14）
図版 28　東興屋遺跡　遺構全体図
図版 29　東興屋遺跡　遺構実測図（1）SI1
図版 30　東興屋遺跡　遺構実測図（2）SI2
図版 31　東興屋遺跡　遺構実測図（3）SI4
図版 32　東興屋遺跡　遺構実測図（4）SK5・6・75・112、P9・16
図版 33　東興屋遺跡　遺物分布図
図版 34　東興屋遺跡　遺物実測図（1）
図版 35　東興屋遺跡　遺物実測図（2）
図版 36　東興屋遺跡　遺物実測図（3）
図版 37　東興屋遺跡　遺物実測図（4）
図版 38　東興屋遺跡　遺物実測図（5）
図版 39　高山東遺跡　遺構全体図
図版 40　高山東遺跡　遺構実測図　SX1、SX18・SK17、SK9・20・27・28、ピット
図版 41　高山東遺跡　遺物実測図（1）
図版 42　高山東遺跡　遺物実測図（2）
図版 43　窪田遺跡　遺構全体図、SR5

[写　真]

図版 44　大館跡　全景
図版 45　大館跡　調査区全景、基本層序
図版 46　大館跡　遺構写真（1）堀 1、SD17
図版 47　大館跡　遺構写真（2）堀 1、K32・33・37
図版 48　大館跡　遺構写真（3）堀 1、空堀 2、土塁 10、SE25
図版 49　大館跡　遺構写真（4）SE35、SK26、SR9・16、SD17
図版 50　大館跡　遺構写真（5）SR39、SX27、SK40
図版 51　大館跡　遺物写真（1）
図版 52　大館跡　遺物写真（2）
図版 53　大館跡　遺物写真（3）
図版 54　大館跡　遺物写真（4）
図版 55　大館跡　遺物写真（5）
図版 56　大館跡　遺物写真（6）
図版 57　大館跡　遺物写真（7）
図版 58　大館跡　遺物写真（8）
図版 59　大館跡　遺物写真（9）
図版 60　大館跡　遺物写真（10）
図版 61　大館跡　木簡赤外線写真
図版 62　大館跡　自然科学分析　（1）木材
図版 63　大館跡　自然科学分析　（2）漆薄片
図版 64　東興屋遺跡　調査区遠景
図版 65　東興屋遺跡　調査区全景、基本層序
図版 66　東興屋遺跡　遺構写真（1）SI1 全景、SI1 P1・3
図版 67　東興屋遺跡　遺構写真（2）SI1 P5・7・炉、SI2 全景
図版 68　東興屋遺跡　遺構写真（3）SI2 遺物出土状況、SI2 P8・13・19・27・炉
図版 69　東興屋遺跡　遺構写真（4）SI4 全景・遺物出土状況
図版 70　東興屋遺跡　遺構写真（5）SI4 P4・18、2・3C 区全景、SK5
図版 71　東興屋遺跡　遺構写真（6）SK6・75・112、P9・16・40
図版 72　東興屋遺跡　遺物写真（1）
図版 73　東興屋遺跡　遺物写真（2）
図版 74　東興屋遺跡　遺物写真（3）
図版 75　東興屋遺跡　遺物写真（4）
図版 76　高山東遺跡　調査区全景、基本層序、SK20
図版 77　高山東遺跡　遺構写真（1）SK9・17・20、SX18
図版 78　高山東遺跡　遺構写真（2）SK27・28、SX1
図版 79　高山東遺跡　遺物写真
図版 80　窪田遺跡　調査区全景、基本層序、Ⅲ層上面全景、SR5、出土遺物

第Ⅰ章　序　　章

1　調査に至る経緯

法定路線名「日本海沿岸東北自動車道」（以下、「日沿道」）は、新潟市の新潟空港インターチェンジ（以下、「IC」）を起点に北上し、山形県、秋田県を経て青森市に至る高規格幹線道路である。また、新潟中央ジャンクション（以下、「JCT」）～秋田県河辺 JCT 間は営業路線名「日本海東北自動車道」とも呼称される。新潟県側は新潟空港・中条 IC 間が平成 14 年に完成している。中条 IC 以北は平成元年及び平成３年に基本計画が決定され、本遺跡が所在する中条・朝日 IC 間は、平成 10 年４月に施行命令が出された。これを契機に、日本道路公団（以下、「道路公団」）と新潟県教育委員会（以下、「県教委」）との間で、道路法線内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

中条・朝日 IC 間の埋蔵文化財の分布調査は、県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」）が平成 11 年度に実施した。調査の結果、道路法線上には８か所の周知遺跡と 27 か所の遺跡推定地が存在し、これらについて試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。その後、試掘確認調査を平成９年～ 19 年にかけて実施した結果、本発掘調査対象面積は約 600,000m^2 と膨大なものとなった。本書に係る大館跡の試掘確認調査は平成 17・18 年度に、東興屋遺跡・高山東遺跡は「遺跡推定地８」として平成 18 年に、窪田遺跡は「周知遺跡２（田屋道遺跡）」として平成 14 年にそれぞれ実施している。

平成 14 年 12 月 18 日の道路公団、県教委及び埋文事業団との協議で、日沿道早期開通のため、当面は暫定二車線分に調査範囲を限定することを決定した（以下、「限定協議」）。また、平成 15 年 10 月１日の道路公団・県教委及び埋文事業団との協議で、道路公団が示した平成 16 年度の調査要望は膨大で、工事工程から 17 年度以降もこの調査量が維持されると想定された。県教委と埋文事業団はこの要望に対応できるだけの調査体制を持っていないことから、平成 16 年度以降の日沿道建設に限って、埋文事業団職員の管理・監督の下、民間調査機関に発掘調査を全部委託し、これに対応するという方針を出した。

その後、日沿道の事業は、道路公団の分割民営化に伴い、平成 17 年 10 月１日に設立された東日本高速道路株式会社（以下、「東日本高速道路」）に引き継がれた。また平成 18 年２月７日の国幹会議により、荒川 IC 以南は東日本高速道路が「有料道路方式」で、荒川 IC 以北は国土交通省（以下、「国交省」）が「新直轄方式」で整備することとなり、平成 14 年 12 月の限定協議内容も、国交省に引き継がれることが確認された。

平成 19 年度の本発掘調査が所は、平成 19 年２月６日の国交省、県教委、埋文事業団による協議で最終的な決定をみた。調査対象は荒川町に所在する桜林遺跡（中世）、神林村の西部遺跡（古代）・窪田遺跡（中世）・田屋道遺跡（中世）・宮の越遺跡（古代）・八太郎遺跡（中世）、村上市の高山東遺跡（縄文）・東興屋遺跡（縄文）・長割遺跡（縄文）・大館跡（中世）・谷地遺跡（縄文）の計 11 遺跡で、調査対象面積は約 24,000m^2 である。なお、本書に係る４遺跡の内、大館跡と窪田遺跡の本発掘調査は工事工程の関係で平成 18 年にも実施しており、報告書は既刊している。

2 調査経過

A 大館跡

1）確認調査

大館跡の確認調査は、県教委からの委託を受けた埋文事業団が平成17年11月18日～22日と平成18年8月7日～10月26日に実施した。なお平成17年度確認調査範囲は、平成18年度に本発掘調査を行っている。平成18年度確認調査の対象範囲は、小谷川両岸の沖積地延長約750mである。

確認調査の結果、大館跡付近に位置する複数のトレンチ（以下、T）において遺構及び遺物を検出した。館内部に位置する39Tでは土坑を検出し、白磁・青磁・土師質土器などが出土した。大館跡外縁の35～41Tからは、館の周囲を巡ると推定する堀を検出、内部からは漆器や珠洲焼などが出土した。そのほか館の堀に直交して東西に伸びる溝を3条検出したが、時期などは判明しなかった。小谷川右岸に位置するトレンチからは、小谷川の旧流路とそれに伴う護岸状の木組遺構を検出した。調査の結果、遺構のいくつかは時期不詳であるものの、大館跡に関連する可能性も考慮し、堀の外側（東側）と北側の小谷川旧流路を含め本発掘調査範囲とした（第1図）。

2）平成18年度本発掘調査

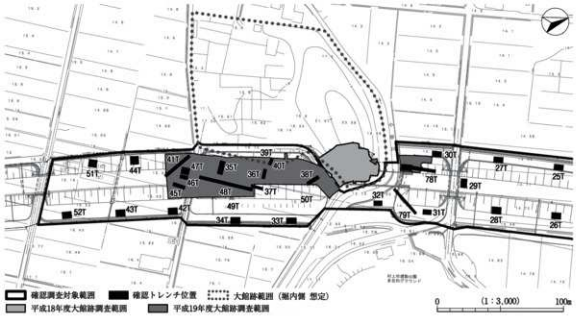
平成18年度の本発掘調査は（以下、18年度調査）、8月1日から12月19日に、1,270m^{2}を対象に行った。調査対象範囲は、平成19年度本発掘調査区（以下、19年度調査）の北西側に当り、独立丘陵と低地部分からなる。なおこの部分に係る報告書は平成20年3月25日に刊行した［青木ほか2008］。

発掘調査では、中世及び縄文・弥生時代の遺構・遺物を検出した。中世の遺構は、独立丘陵上に構築した土塁2基、堀1条、低地部分に構築した堀などである。遺物は、青磁・珠洲焼・越前焼・瀬戸美濃焼などで、時期は15世紀を中心とする。縄文・弥生時代の遺構は、フラスコ状土坑・土坑・ピットなどで、遺物は縄文時代前期末・中期後半の土器、弥生時代中期後半～後期前半の土器及び石器である。なお詳細は、『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅩⅥ 松蔭東遺跡 中曽根遺跡Ⅱ 大館跡Ⅰ』［青木ほか前掲］を参照されたい。

3）平成19年度本発掘調査

本発掘調査は、確認調査結果及び日沿道工事内容に基づいて調査区を設定して行った。調査期間は、4月12日から10月24日までである。調査は、工事工程の関係から小谷川右岸に位置する調査区（北側調査区　以下北区）から開始し、小谷川左岸の調査区（南側調査区　以下南区）に移行した。なお発掘調査は、東興屋遺跡・高山東遺跡・窪田遺跡と一時並行して行った。

北区は4月12日に表土掘削を開始し、4月16日から作業員を投入した。自然流路の両側に各1条の木組遺構を検出した。遺物は木組部分や流路内から散漫に出土し、時期は中世から近世前半までのものであった。木組遺構が調査区外へ伸びることが判明し、調査区の拡張を4月19日に行った。木組遺構の検出が終了した4月24日に写真実測用の撮影を行い、27日に県教委による終了確認を受けた。5月8日に調査区全景の写真撮影を行い、その後木組遺構の材の取り外しを開始した。5月9日から重機による最終確認作業を行い、翌10日に調査を終了した。



第１図　大館跡確認調査位置及び本調査範囲図

南区の調査は、高山東遺跡調査終了後開始した。遺構確認面の標高が現水田面よりも低くなるため、調査区周囲に排水用開渠を掘削した。調査対象範囲は当初東側畑部分（館内部と土塁）も含まれていたが、遺跡の重要性を鑑みて高速道路本体部分のみを調査対象とし、東側畑部分は低盛土し調査除外することとした。調査は、6月5日から開始した。最初に重機による表土掘削を行い、6月11日から作業員を投入し、遺構検出を行った。遺構検出と並行して、6月下旬から堀などの遺構掘削を開始した。その後国交省から県教委に小谷川の護岸改修に係る調査要望が出された。改修部分は18年度調査区に隣接する独立丘陵北斜面で7月2日から3日間調査した。調査によって､18年度調査で検出した空掘2の続きを確認した。また南区北端に関して、国交省から先行引渡しの要望が出たため、ほかの部分よりも調査を先行し、8月6日に引渡した。7月31日に東興屋遺跡の調査が終了し、作業員が本遺跡に合流することとなった。8月は、堀などの遺構掘削が続いた。堀の調査がおおむね終了した9月24日に現地説明会を開催し、発掘調査成果を一般に公開した。説明会終了後､残っている遺構の掘削などを進め､10月11日に空中写真撮影を行い、10月24日に県教委による終了確認を受けた。その後11月6日に国交省に現地を引渡し、本発掘調査の現場作業が終了した。調査面積は、計3,878m^{2}である。

なお遺跡の重要性を鑑みて、堀1及び土塁10の一部は国交省の理解を得て形状を破壊することなく埋め戻した。

B　東興屋遺跡

1）試掘調査

東興屋・高山東遺跡の試掘調査は、埋文事業団が荒川I.C～朝日I.C間の推定地8として、平成18年10月27日から11月27日、平成19年3月2日に実施した。調査対象面積54,760m^{2}に対し、実質2,260m^{2}を調査した。推定地8は門前川左岸の岩船丘陵上に立地し、幅の狭い尾根と谷部からなり、標高は25～89mと起伏に富む。任意の地点に47か所のトレンチを設定して調査を行った。その結果、調査区域中央の17・19Tと北側の41・42Tから柱穴の可能性がある遺構を検出し、縄文土器が出土したこと

から本発掘調査が必要であると判断した。遺跡の名称については、41・42T を含む地点を大字名から「東興屋遺跡」とし、17・19T を含む地点を、高山遺跡（高山製鉄跡）の東側に位置することから同字名の新遺跡「高山東遺跡」とした。　本推定地では土層をⅠ～Ⅸ層に分層した。Ⅰ層:茶褐色土層（表土）、Ⅱ層:明褐色土層、Ⅲ層:黒色土層（遺物包含層）、Ⅳ層:明茶褐色土層（遺物包含層）、Ⅴ層:暗黄褐色土層、Ⅵ層:暗茶褐色土層、Ⅶ層:暗灰褐色土層、Ⅷ層:暗褐色粘土層、Ⅸ層:黄褐色土層（基盤層）である。尾根部はⅡ～Ⅳ・Ⅷ層、谷部はⅤ～Ⅶ層を基本層序とし、Ⅰ・Ⅸ層は両者で確認した。

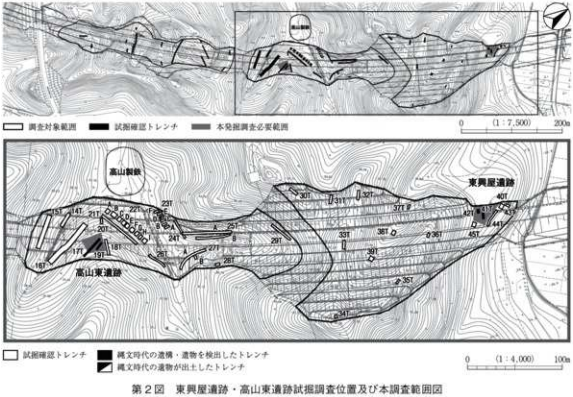
高山東遺跡で確認した基本土層は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ（遺物包含層）・Ⅸ層である。調査地点は丘陵斜面地であり、標高は 17T が約 33m、19T が約 34m を測る。17・19T からは、計 10 基の遺構を検出した。それらは柱穴と推定できるが、長楕円形の土坑に関しては風倒木痕の可能性がある。遺物は縄文土器が12点出土した。土器の時期は、北陸系の新保・新崎式であり、このことから遺跡の時期は縄文時代中期前葉と推定した。

東興屋遺跡で確認した基本土層は、Ⅰ・Ⅲ（遺物包含層）・Ⅸ層である。調査地点は丘陵上で緩やかに傾斜しており、標高は 41T が約 34m、42T が約 35m を測る。41・42T からは、計 15 基の柱穴を検出し、縄文土器 75 点、剥片石器 1 点が出土した。特に 42T からは多くの遺物が出土した。土器の時期は東北系の大木 7b・8a 式であり、このことから遺跡の時期は縄文時代中期前～中葉と推定した。

2）本発掘調査

本発掘調査は、試掘調査の結果に基づいて 480m^2 を対象に行った。

4 月 23 日に調査を開始し、26 日まで重機を使用して表土掘削を行った。調査区の地形に合わせてベルトを設定し、1A・2A・2B 区、3B・4B 区、1C・2C、3C・4C 区の順で掘削を進めた。なお、調査区の現況が山林であることから、重機による抜根が遺構・遺物を破壊することを懸念し、この段階では切株を残して掘削することとした。27 日から調査区内の土層堆積状況を再確認するために、試掘調査 41T・42T



第２図　東興屋遺跡・高山東遺跡試掘調査位置及び本調査範囲図

を掘削した。5月10日から人力による遺物包含層掘削、遺構検出作業を開始し、遺物が集中する地点を4か所ほど確認した。それらの遺物が遺構に伴うのか否か、随時サブトレンチ・土層観察用ベルトを設定し調査を行った。遺構の確認作業は極めて難航した。遺構は黒褐色土（Ⅲ層）を掘り込んでいること、斜面地形であること、更に木根による攪乱が著しかったことも加わり、遺構範囲が捉えがたかった。最終的に、Ⅳ層中及びⅤ層上面で複数の竪穴住居や土坑を確認し、縄文時代中期の小規模集落であることが判明した。また、この時点で遺構・遺物の分布や地形から、北側の4B・4C区、東側の2D・3D区に遺跡の伸びが想定できたため、6月30日の現地説明会後、この部分を拡張調査した。しかし拡張範囲では、遺構・遺物の広がりは認められなかった。7月25日に空中写真撮影を行った。その後、調査区内のⅣ層以下の層序を確認するためトレンチを8か所設定した。30日に県教委による終了確認を得て、翌31日に国交省へ現場を引渡した。実質調査面積は798m²である。

C　高山東遺跡

1）試掘調査

高山東遺跡の試掘調査に関しては、本章B 1）を参照されたい。

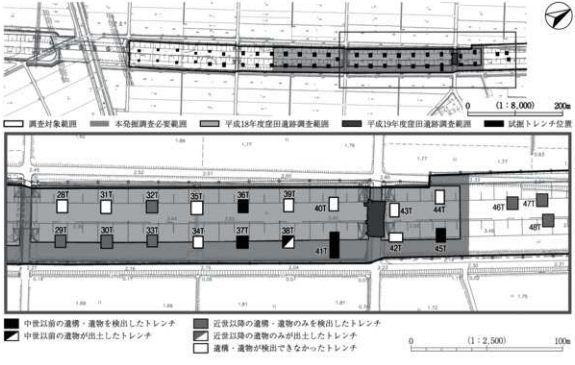
2）本発掘調査

本発掘調査は試掘調査結果に基づいて350m²を対象に行った。5月7日、表土掘削を開始した。8日、作業員を投入し、試掘坑の土層確認を行った。また同日、表土掘削が終了したためグリッド設定を行った。14日、作業員を増員し、トレンチを掘削し土層確認を行った。18日、包含層掘削と、一部で遺構検出を開始した。3か所で遺物がまとまって出土したことから、それらの地点をSX1・3・4として調査を行った。21日、遺構確認面まで達した所から遺構の検出及び遺構の掘削を開始した。22日、遺物を取上げながら掘削を進めたが、遺物が集中していたSX3では掘り込みが検出できなかった。24日、遺構掘削作業がほぼ終了したことから作業員を減員し、遺構の断面・平面実測を開始した。25日、SK20からほぼ完形の大木2a式並行の土器が出土した。また同日、県教委による終了確認を得た。29日、ローリングタワーを設置し、調査区全景の写真撮影を行った。撮影終了後には、基本層序及び旧石器時代の確認のため深掘りを実施した。6月1日、断面・平面実測が終わり、調査の全工程を終了した。5日、国交省へ現場引渡しを行った。調査面積は353m²である。

D　窪田遺跡

1）試掘調査

窪田遺跡に関わる試掘調査は、埋文事業団が平成14年6月17日～7月5日、8月19日～10月11日の期間に実施した。検出した遺構は環状遺構・井戸・土坑・ピットなどで、遺物は近世・中世・古代に帰属するものである。広範囲に渡り攪乱を受けていたが、検出した遺構・遺物の様子から集落遺跡と想定した。調査対象地に隣接する南田中集落は、慶長の絵図「越後国瀬波群絵図」（米沢市立上杉博物館所蔵）に描かれた田中村に該当し、「色部氏所領注文写」にも記載されていることなどから、この集落との関わりにも注目し、本発掘調査が必要であると判断した。遺跡の名称に関しては、小字から窪田遺跡と呼称することとした。本発掘調査面積は26,400m²と推定したが、高速自動車道早期共用のため、今回の調査範囲を暫定二車線分に限定することとなり、16,730m²が対象となった。なお詳細については、「日本海沿岸東



第３図　窪田遺跡試掘調査位置及び本調査範囲図

北自動車道関係発掘調査報告書ＸⅩⅢ『窪田遺跡Ⅰ』［前川ほか2007］を参照されたい。

2）平成 18 年度本発掘調査

本発掘調査は、4 月 11 日から 12 月 8 日の期間に 16,730m^2 を対象に行った。ただし、調査区西側に接する農道の崩壊を防ぐため、調査区の西側を幅 1.5m 前後狭めたことにより、最終調査面積は 15,900m^2 となった。整理作業は現場作業と一部並行して 6 月以降に開始し、2 月中旬まで行い、報告書は平成 19 年 3 月 31 日に刊行した［前川ほか前掲］。

本調査では、近世・中世・古代以前の 3 つの時代の遺構を確認した。

近世の遺構は、杭列群を中心とする SR1 の護岸及び漁撈施設 1 か所、土坑 3 基、溝 3 条、ピット 14 基を検出した。遺物は、肥前系を中心とする近世陶磁器、漆器などの木製品、寛永通寶、キセル、墨書された祈願札が出土した。漁撈施設に関しては、エビス杭が 2 本打たれていることや祈願札が出土したことなどが性格決定の根拠となった。遺物においても、生活必需品である灯明皿・秉燭など灯火具、火鉢・手あぶりなど暖房具、紅猪口・鬢盥など化粧具がほとんど出土していない。これらのことから、近世における本調査区は居住域の一部というよりも集落の縁辺に位置すると考えた。

中世の遺構は、掘立柱建物 1 棟、杭列 1 列、井戸 33 基、土坑 10 基、溝 5 条、ピット 38 基、性格不明遺構 4 基、礎板 27、柱材 20、単独の杭 48 及び河川 2 か所を検出した。遺物は、珠洲系陶器を中心に若干の瀬戸焼・越前焼・信楽焼・船載磁器、漆器類・曲物・鍬先・田下駄・人形などの木製品、小刀、北宋銭などが出土した。中世における本遺跡は、低湿地にできた小さな微高地に島状に居住域が立地し、散居村の景観を呈すると考えた。また、出土遺物からその中心は 13 世紀代と判断でき、14 世紀後半以降には集落が移転したと推測した。15 世紀以降の遺物が SR1 から出土していることから、移住地はそう遠くないと考え現在の南田中集落及び牧目集落をその推定地とした。

古代以前の遺構は、掘立柱建物７棟と柵２条を検出した。遺物は、須恵器・ハケ調整の土師器が出土した。建物は打ち込み柱建物であり、柱を放射性炭素年代測定した結果、７世紀後半～８世紀後半に伐採されたものであることが判明した。また、８世紀代の須恵器が出土していることから、建物跡は主にその時期に機能していたと推測した。

3）平成 19 年度本発掘調査

平成 19 年９月 27 日から 18 年度調査のＢ区とＣ区の間の農道部分､560m^2 を対象に行った。10 月１日、表土掘削が終了し、グリッド及び調査区中央に南北ベルトを設定した。グリッド設定及び土層観察用ベルトの位置は、18 年度調査を踏襲した。２日、作業員を投入し、土層確認を開始した。３日、18 年度調査の基本層序との照合を行った。また、Ⅱ層上面で遺構の確認を行ったが検出できなかった。４日、前日の結果を受けてⅢ層上面まで重機による掘削を行い、東西方向に伸びる杭列と溝状遺構を検出した。５日、遺構調査を行ったが、溝状遺構からは近・現代の遺物が出土し、杭列も同時期の埋設管を固定するためのものと判明し、どちらも調査対象外と判断した。この頃から湧き水や雨水のため調査区が水浸しになることが多くなり、水中ポンプによる水抜きを行いながらの調査となった。10 日、調査区の東側からⅦ層上面まで重機による掘削を行った。その結果、調査区東端で南北方向に伸びる SR5 を検出した。11 日、トレンチを掘削し、SR5 の断面確認を行った。また同日、調査区中央の南北ベルトにて基本層序を記録した。16 日、ローリングタワーを設置し、調査区全景の撮影を行った。17 日、土壌サンプルを採取し、調査の工程をすべて終了した。24 日、県教委による終了確認を得て、30 日、国交省へ現地引渡しを行った。調査面積は、撹乱の影響により大幅に減り、264m^2 であった。

3　調査・整理体制

各遺跡の試掘・確認調査と平成 19 年度の本発掘調査の調査体制は以下のとおりである。

【試掘・確認調査】

大館跡・東興屋遺跡・高山東遺跡

調査期間　平成 17 年 11 月 18 日～ 22 日、平成 18 年８月７日～ 10 月 26 日（大館跡）
　　平成 18 年 10 月 27 日～ 11 月 27 日、平成 19 年３月２日（東興屋遺跡・高山東遺跡）
調査主体　新潟県教育委員会
調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　武藤　克己）
　管　　理　波多　俊二　（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　専務理事・事務局長）
　　長谷川二三夫（　同　総務課課長・17 年度）
　　斎藤　　栄　（　同　総務課課長・18 年度）
　　藤巻　正信　（　同　調査課課長）
　庶　　務　長谷川　靖　（　同　総務課班長）
　調査指導　寺崎　裕助　（　同　調査課課長代理・17 年度）
　　田海　義正　（　同　調査課課長代理・18 年度）
　調査担当　滝沢　規朗　（　同　調査課班長）
　調 査 員　齋藤　　準　（　同　調査課嘱託員）

窪田遺跡

調査期間　平成14年6月17日～7月5日・8月19日～10月11日
調査主体　新潟県教育委員会
調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　板屋越　鱗一）
管　　理　黒井　幸一（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　専務理事・事務局長）
　　長谷川司郎（　同　総務課課長）
　　岡本　郁栄（　同　調査課課長）
庶　　務　高野　正司（　同　総務課班長）
調査指導　寺崎　裕助（　同　調査課課長代理）
調査担当　澤田　　敦（　同　調査課班長）
　　石川　智紀（　同　調査課班長）
調 査 員　佐藤　優一（　同　調査課主任調査員）
　　後藤　　孝（　同　調査課主任調査員）
　　阿部　友晴（　同　調査課文化財調査員）
　　片岡　千恵（　同　調査課嘱託員）

【本発掘調査・整理作業】

本発掘調査　平成19年4月12日～5月10日・6月5日～10月24日（大館跡）
　　平成19年4月23日～7月31日（東興屋遺跡）
　　平成19年5月7日～6月5日（高山東遺跡）
　　平成19年9月27日～10月30日（窪田遺跡）
整理作業　平成19年10月1日～平成20年3月31日
調査主体　新潟県教育委員会
調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　武藤　克己）
管　　理　木村　正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　専務理事・事務局長）
　　斎藤　　栄（　同　総務課課長）
　　藤巻　正信（　同　調査課課長）
監　　督　鈴木　俊成（　同　調査課課長代理）
　　木村　雄司（　同　調査課主任調査員）
庶　　務　長谷川　靖（　同　総務課班長）
　調査組織　加藤建設株式会社
　　現場代理人　川上　　浩（加藤建設株式会社新潟支店）
　　調 査 担 当　青木　　学（　同　主任調査員）
　　調　査　員　石川　博行（　同　調査員）
　　北村　和穂（　同　調査員）

第 II 章　遺跡の環境

1　地理的環境

大館跡・東興屋遺跡・高山東遺跡・窪田遺跡は新潟県の下越地方に所在する。遺跡は三面川以南、荒川以北に位置し、東は飯豊山地、西は日本海を望む。また、遺跡は越後平野の北端に当たり、以北は朝日山地の険しい山々が連なっている。越後平野は、南北約 100km、東西 10 ～ 25km、面積約 2,000km^2 の沖積低地である。越後平野の海岸線には、角田山麓から約 70km に渡る新潟砂丘が連なっており、窪田遺跡の西側が北端となる。越後平野の東側は、褶曲運動による北北東－南南西に雁行配列する山地・丘陵列が顕著である。荒川・三面川などの河川は、それらの山地・丘陵列の主方向と直行するように越後平野に流れ込んでいる。

第 4 図　地形概念図

今回調査した大館跡は村上市大字天神岡に所在し、天神岡集落の東側に位置する。三面川によって形成された左岸の沖積段丘上に立地する。大館跡の北東には坊ヶ山が存在し、大館跡との間を山田川支流の小谷川が流れる。郭内の北側には独立丘陵が存在し、土塁などはその独立丘陵を利用して構築している。

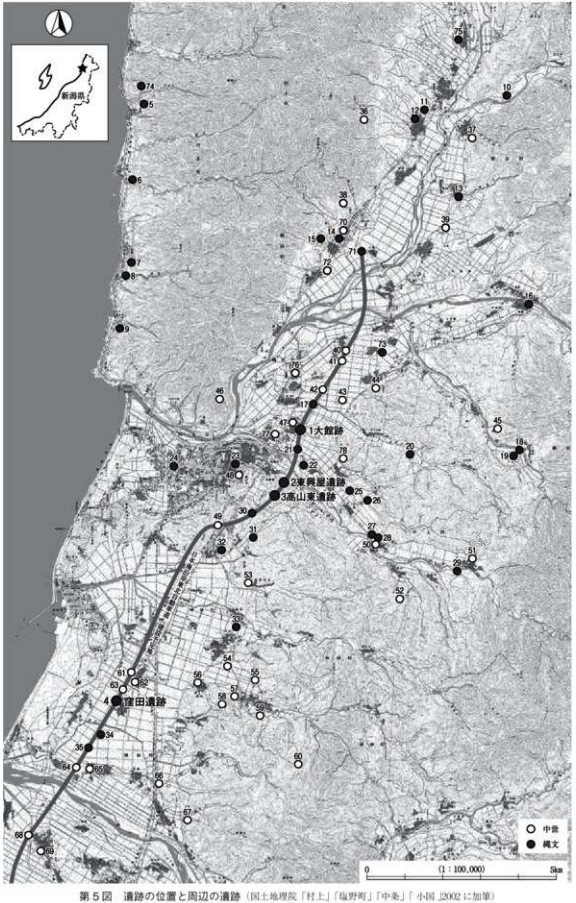
東興屋遺跡は村上市大字東興屋に、高山東遺跡は村上市大字仲間町に所在する。門前川左岸に位置し、岩船丘陵上に立地する。標高は東興屋遺跡が約 33m、高山東遺跡が約 26m を測る。門前川は、山形県境の山地に水源があり、下流域では谷幅を広げ両岸に河岸段丘を持つ、本流延長約 15km の河川である。特に、右岸の河岸段丘上に遺跡が多く分布する。

窪田遺跡は神林村大字南田中に所在し、南田中集落の西側に位置する。新潟砂丘の後背地に立地する。砂丘列の内側は、以前は湿が広がり、河川の自然堤防上に集落が散在していた。しかし大正年間以来、多い所では 5 回、少ない所でも 2 回程度のほ場整備が行われ、近代化された水田が広がっている［前川ほか 2007］。

2　周辺の遺跡

A　縄文時代の遺跡

東興屋・高山東遺跡の周辺の遺跡として、まず門前川流域の遺跡を概観してみる。門前川中流域には、高平・大間上野・山崎・お丸山遺跡などが所在する。それらは右岸の河岸段丘上に位置する。高平遺跡の時期は、出土土器から中期前～中葉の大木 7b ～ 8b 式並行とされ、遺構は大型竪穴住居 1 軒やそれに伴う 3 基の石囲炉などが検出された［塩塚ほか 2001］。大間上野遺跡の時期は、出土土器から中期前葉の新保・



第５図　遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院「村上」「塩野町」「中条」「小国」2002 に加筆）

No.	遺跡名	時　代
1	大原跡	縄文（前・中期）・弥生・中世
2	東興屋	縄文（中期）
3	高山東	縄文（前・中期）
4	窪田	古代・中世・近世
5	太田	縄文（中期）
6	小坂	縄文（中期）
7	鷺元	縄文（中期）
8	野出上山	縄文（中・晩期）
9	道下原	縄文（中期）
10	川向A	縄文（中期）
11	行塚	縄文（前・中期）
12	谷地尻	縄文（中・後期）
13	黒田中道	縄文（前・中期）
14	上屋敷	縄文（中期）
15	古寺跡	縄文（中・後期）
16	新屋ノ下	縄文（前・中期）
17	谷地	縄文（前期）・中世
18	中平	縄文（中期）
19	中平南	縄文（中期）
20	道山	縄文（中期）
21	長須	縄文（後期）
22	下相川	縄文（後期）
23	下渡戸	縄文（中期）
24	観音寺裏	縄文（中期）
25	高平	縄文（中期）
26	お丸山	縄文（中期）
27	大関上野	縄文（中期）
28	山崎	縄文（中期）・中世
29	中ノ平	縄文
30	前北畑	縄文（後半期）
31	水口沢	縄文（前期）
32	八幡山	縄文（前・中期）
33	城田	縄文（中～後期）・弥生・古代・中世・近世
34	衣田	縄文・古墳・古代
35	中部定	縄文（中・後期）・古代
36	飯坂越城	中世
37	関口城	中世
38	猪沢城	中世
39	築城	中世
40	下新保高田	古墳・中世
41	堂の前	弥生・中世
42	古西跡	中世
43	堺ケ山	中世
44	大薬沢城	中世
45	能平城	中世
46	下渡山城	中世
47	御所館	中世
48	本庄城（村上城）	中世・近世
49	八太郎	中世
50	館ノ腰	中世
51	小原	中世
52	普通ヤナクノ沢鉄跡	中世
53	内前堂ど	中世
54	石川	古代・中世
55	千眼寺跡	中世
56	飯塚館跡	中世
57	草田	中世
58	桃川古城	中世
59	桃川館	中世
60	桃川城	中世
61	田頭遺	古代・中世
62	牧目館	中世
63	松森東	古代・中世
64	西部	古代・中世
65	牛屋館	中世
66	館田城	中世
67	平林城	中世
68	梅林	古代・中世
69	鳥海館跡	中世
70	上野池	中世
71	上野大田	中世
72	杉木田	中世
73	鳥井田	中世
74	新保山	縄文（中期）
75	一貫地	縄文（中期）
76	小川館跡	中世
77	山道里館跡	中世
78	日下館跡	中世

第１表　周辺の遺跡一覧

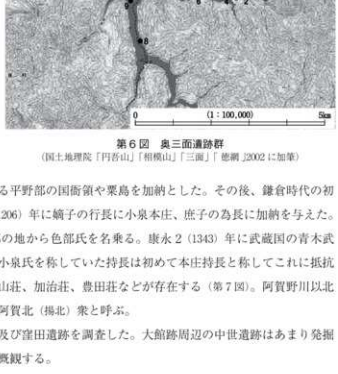
新崎式並行とされ、フラスコ状土坑６基や土坑 34 基などが検出された。また、出土した尖頭器は平面形態が半月形で、細微な調整が施される。奥三面遺跡群樽口遺跡・ガラハギ遺跡に類例が求められ、旧石器時代終末から縄文時代草創期前半に所属する可能性が高いという［塩原ほか 2000］。山崎遺跡の時期は、出土土器から中期前葉の新保・新崎式並行とされ、遺構は攪乱が著しいためか検出されていない。大関上野・山崎遺跡は縄文集落の外縁に位置すると結論付けられ、付近に環状集落を想定している［塩原ほか前掲］。お丸山遺跡は、高平遺跡が立地する段丘面よりも一段高い段丘面に立地しており、周辺から中期と推定される土器が採集されている。門前川の下流域には、長割遺跡や下相川遺跡などが所在する。長割遺跡の時期は、出土土器から後期前葉とされ、大規模集落が想定されている［滝沢 2007］。下相川遺跡は、段丘上に立地し、後期の土器が採集されている。三面川と門前川の合流部付近には、中期の下渡門遺跡が所在し、中期の土器が採集されている。

門前川流域を除く、東興屋・高山東遺跡周辺の遺跡を概観すると、まず北へ約 2km の地点に谷地遺跡が所在する。谷地遺跡は、山田川左岸に広がる低湿地に立地する遺跡であり、時期は出土土器から前期の花積下層～布目式に相当する［大島 2007］。南西へ約 2km の地点には八幡山遺跡が所在する。八幡山遺跡は、神林村に所在し、浦田山丘陵の東側の独立丘陵上に位置する。時期は出土土器から、前期末の大木６式並行、中期前葉の新崎式並行とされ、特に前期末のフラスコ状土坑６基が検出され、集落の中心から外れた貯蔵用の場所であると推測された［田辺 1994］。また、南西へ約 4km の地点には城田遺跡が所在する。時期は出土土器から中期末葉から後期中葉で、南三十稲場式・加曽利 B3 式土器がまとまって出土した［田辺ほか 2001］。日本海側を概観すると、まず大日川下流域には、右岸に新保山遺跡が、左岸に太田遺跡が所在する。どちらの遺跡も中期に所属する。大川下流域には中期の小坂遺跡が所在する。境川下流域の左岸には中・晩期の野潟上山遺跡が、右岸には中期の腰元遺跡が所在する。朝日村を概観すると、高根川の右岸には、中・後期の古寺跡、中期の上屋敷遺跡、更に上流には中・後期の谷地尻遺跡、前・中期の行塚遺跡、中期の川向Ａ遺跡が所在する。黒田川左岸には前・中期の黒田中道遺跡、三面川左岸には前・中期の新屋宮ノ下遺跡が所在する。長津川上流域には中期の中平遺跡及び中平南遺跡が所在する。

村上市に隣接する朝日村には、三面ダム建設に伴い発掘調査された奥三面遺跡群が所在する（第６図）。奥三面遺跡群は、東興屋・高山東遺跡の東方、直線距離で約 20km の位置にあり、19 遺跡からなる［滝

沢ほか1998]。竪穴住居20軒以上とした拠点的集落は、変遷を追うことが可能であり、中期中葉の前田遺跡から若干の空白期を経て下クボ遺跡、アチヤ平遺跡、元屋敷遺跡に至るとされる。アチヤ平段丘上に立地するアチヤ平遺跡では、中期末葉～後期前葉の直径約60m規模の環状集落が検出された。敷石住居12軒、直径約6mの環状配石、大型掘立柱建物などが注目され［富樫ほか2002］、当該期の集落構成を考える指標となる。坂巻段丘上に立地する元屋敷遺跡は、後期前葉～晩期末葉を主体とする遺跡であり、当該期の集落跡である。磨製石斧の未成品が13,000点以上出土していることから、磨製石斧など石器の生産遺跡であることが判明した［滝沢ほか2002］。

No.	遺跡名	時　代
1	長浦り	縄文（中・後期）
2	脇ノ沢	縄文（前～晩期）
3	黒　岩	縄文（草創～後期）
4	ミヤソリ	縄文（前期）
5	上向い	縄文（早・中～晩期）
6	本道平	縄文（前～晩期）
7	元屋敷	縄文（早～晩期）、弥生
8	二　又	縄文（中期）、弥生
9	落合向い	縄文（前・後期）
10	幡　口	旧石器、縄文（草創～晩期）
11	アチヤ平	縄文（草創・前～後期）
12	ミヤソリ	縄文（中期）
13	前　田	縄文（中期）
14	沼ノ沢	縄文（前～晩期）、古墳
15	坂　巻	縄文（前・後期）
16	ガラハギ	旧石器、縄文（草創期）
17	祭　岩	縄文（後・晩期）、弥生
18	弥三郎	縄文（草・前期）
19	トゾリ	縄文（前～後期）



第６図　奥三面遺跡群
（国土地理院「円吞山」「相模山」「三面」「徳網」2002に加筆）

B　中世の遺跡

12世紀半ばになると越後国の各地に荘園が成立する。仁平３（1153）年に金剛心院領小泉荘が成立し、現在の村上市付近を小泉本庄、旧岩船潟とその南方に広がる平野部の国衙領や栗島を加納とした。その後、鎌倉時代の初めに地頭となった平姓秩父季長は建永元（1206）年に嫡子の行長に小泉本庄、庶子の為長に加納を与えた。行長は小泉氏を名乗り、為長は加納の色部の地から色部氏を名乗る。康永２（1343）年に武蔵国の青木武房が小泉荘の所領を獲得しようとした時、小泉氏を称していた持長は初めて本庄持長と称してこれに抵抗した。小泉荘の南には荒川保をはさんで奥山荘、加治荘、豊田荘などが存在する（第７図）。阿賀野川以北に位置することから、国人領主を総称して阿賀北（揚北）衆と呼ぶ。

今回、中世に該当する遺跡として大館跡及び窪田遺跡を調査した。大館跡周辺の中世遺跡はあまり発掘調査されていないので、歴史的背景と共に概観する。

大館跡の周辺には、中世城館が多く所在する。大館跡の南西には、慶長２（1597）年に描かれた「越後国瀬波群絵図」で「村上ようがい」と記される本庄城（村上城か）が所在する。城主は本庄時長、房長、繁長と代わり、永禄11（1568）年には繁長が上杉謙信と対峙し龍城するなど、中世越後の一翼を担った山城である。その永禄11年の本庄氏の乱で、一時謙信方が本庄城攻撃の拠点としたのが、下渡山城である。下渡山城は大館跡の西方にある標高約237mの下渡山に位置し、臥牛山に構えられる本庄城に相対している。大館跡の北東には、大葉沢城が所在する。城主は鮎川氏であり、本庄氏との争いが絶えなかった。また、大葉沢城から東に約4km離れた所にも、鮎川氏の居城とされる笹平城が所在する。笹平城は、本庄氏の乱で繁長に奪われた大葉沢城を奪還するために築かれた城とされる。大館跡の北方には猿沢城が所在

する。時長が隠居した所という記録も残っているが、地形を巧みに利用した縄張りが見られ、軍事拠点としての役割を十分に果たしたものと推測する。大館跡の南西、本庄城との間には山辺里館が所在したとされる。地名にも山辺里館や館畑などが残っており、本庄氏の重臣山辺里氏が居住したものと考えられる。大館跡の南東には、日下館が所在したといわれている。日下部落から北へ約 200m の場所に存在したと伝承され、付近では珠洲焼の破片などが出土している。大館跡の北西には、小川館が所在したといわれ、曹洞宗金源寺の境内が館跡の範囲に想定される［村上市 1999］。また、大館跡の北隣では谷地遺跡の調査が行われ、縄文時代のほかに中世の遺物も出土している［大島前掲］。

窪田遺跡の北には牧目館が所在する。牧目館は色部氏の居館とされ、遺物から 15 世紀前半～ 16 世紀前葉を中心に機能していたものと推定される［田辺 1992］。牧目館の付近には、18 年度に調査を行った松蔭東遺跡が所在する。12 ～ 16 世紀後半の遺物が出土し、隣接する田屋道遺跡、牧目館と密接に関連していたものと推定した［青木ほか 2008］。田屋道遺跡は、18・19 年度に調査を行った。18 年度の調査では、時期は遺物から 12 世紀末～ 13 世紀が中心とされ、遺構は掘立柱建物 18 棟、井戸 22 基などを検出した［大島ほか 2006］。窪田遺跡を含めてこれらの遺跡は、中世における集落の変遷を探る上で注目される。窪田遺跡の付近には色部氏の重臣飯岡氏や牛屋氏、宿田氏が館を構える。窪田遺跡の北東には飯岡館、南西には牛屋館、南には宿田城が所在する。これらの館は、慶長 3（1598）年の国替えにより三者が色部光長に随伴したため、その後廃れたものと考える。また、窪田遺跡の東には桃川遺跡群が所在する。桃川城は典型的な根小屋式築城方法であることが判明している［神林村史編纂委員会 1985］。同じ桃川遺跡群の石川遺跡は集落跡の一部と推測され、草田遺跡は館跡と推測される［田辺ほか 2002］。荒川右岸、要害山の西側山裾部に突き出た標高 20 ～ 40m の舌状丘陵上には平林城が所在する。平林城は色部氏の城館であり、15 世紀末には築城されており、16 世紀後半に改修されたことが判明した［田辺ほか 2005］。平林城も慶長 3 年の国替えによって廃城となった。窪田遺跡の南側、荒川左岸には桜林遺跡が所在する。桜林遺跡は、17 ～ 19 年度に調査が行われた。遺構は掘立柱建物、井戸、溝などが検出され、中世の遺物は青磁、白磁、瀬戸焼、珠洲焼などが出土した。桜林遺跡は金屋（村）の一部であり、現在と同じく金屋集落の縁辺に位置していたものと推定される［雛 2007］。桜林遺跡から南東へ 500m ほどの地点には馬場館が所在する。時期は出土遺物から 15 世紀代を主体とする［吉井 2004］。

第 7 図　阿賀北地域の主な中世城館及び生産遺跡

第III章　大　館　跡

1　概　　要

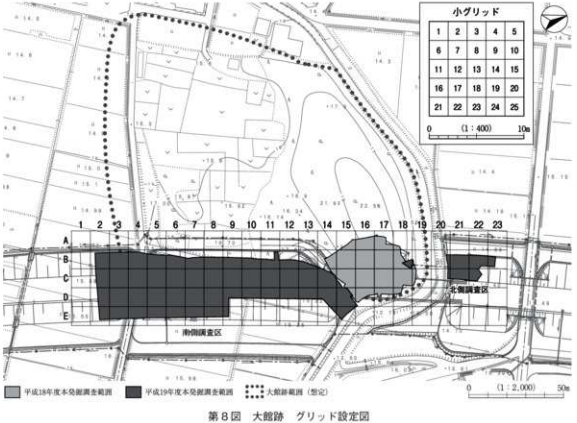
A　遺跡の概要

本遺跡は、小谷川左岸に立地する中世の方形居館であり、館の規模は南端で東西約 110 m（堀を含めず）、西端で南北約 100 m（堀・独立丘陵部分を含めず）を測る。調査区は、大館跡の東輪外縁部分（南区）と小谷川右岸（北区）に分かれる。調査範囲の大部分は、館の周囲を巡る堀の位置に当たり、この堀は南区をほぼ縦断するように検出された。遺物のほとんどは、堀から出土した。中世のものが中心で、白磁、青磁、珠洲焼、土師質土器や多量の木製品などである。

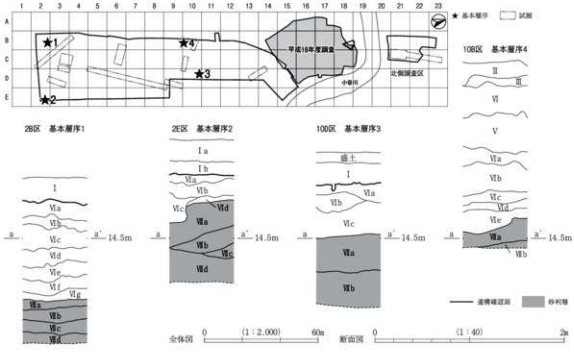
本発掘調査面積は、3,878m^2 を測る。

B　グリッドの設定

グリッドは、18 年度調査で使用したものを踏襲することとした。これは遺跡の南西部分に任意に基点を作り、グリッドの南北のラインが本線に沿うように設定したものである。基点（1A）は、X：247731.894、Y：88186.490 で、23A は X：247943.283、Y：88247.437 である。主軸は真北から 16° 5′ 0″ 東偏している。大グリッドは 10m 四方であり、名称は南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベットの大文字として、両者の組み合わせで「1A 区」などとして表した。また小グリッドは大グリッド



第 8 図　大館跡　グリッド設定図



Ⅰ．水田耕作土
Ⅱ．暗褐色土（10YR3/4）しまり・粘性普通。
Ⅲ．暗褐色土（10YR4/4）しまりやや強く、粘性普通。Ⅳ層への漸移層。
Ⅳ．褐色土（10YR4/6）しまり・粘性やや強い。ローム層。
Ⅴ．にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまりやや強く、粘性普通。やや粘土化。
Ⅵa．灰色シルト（5Y4/1）など。しまり・粘性普通。地点により、色調異なる。

基本層序1
Ⅵb．灰色砂質シルト（5Y4/1）しまりやや弱く、粘性やや強い。
Ⅵc．暗青灰色砂質シルト（5BG4/1）しまりやや弱く、粘性やや強い。
Ⅵd．暗青灰色シルト（5BG3/1）しまり普通、粘性強い。少量の褐鉄鉱付着。
Ⅵe．暗オリーブ色砂質シルト（7.5Y4/3）しまり・粘性やや強い。褐鉄鉱付着。
Ⅵf．オリーブ褐色砂（2.5Y4/6）しまり強く、粘性弱い。褐鉄鉱付着。
Ⅵg．暗青灰色砂質シルト（10BG3/1）しまり強く、粘性やや弱い。砂との互層。
Ⅶ．以下砂利層。

基本層序2
Ⅵb．灰色シルト（5Y5/1）しまり強く、粘性やや強い。
Ⅵc．暗青灰色砂質シルト（5BG4/1）しまりやや強く、粘性強い。
Ⅵd．暗青灰色シルト（5BG4/1）しまりやや強く、粘性強い。Ⅵb層とⅥc層の混合。
Ⅶ．以下砂利層。

基本層序3
Ⅵb．暗灰黄色砂（2.5Y5/2）しまり・粘性やや強い。砂利（10mm）少量、褐鉄鉱起多量に含む。
Ⅵc．灰オリーブ色砂（5Y5/2）しまり強く、粘性弱い。
Ⅶ．以下砂利層。

基本層序4
Ⅵb．褐灰色砂質シルト（5Y5/1）しまり・粘性やや強い。
Ⅵc．灰黄褐色砂質土（5Y5/2）しまり強く、粘性やや強い。
Ⅵd．褐灰色シルト（5Y5/1）しまり・粘性強い。
Ⅵe．褐灰色シルト（5Y5/1）しまり・粘性強い。砂との互層。
Ⅶ．以下砂利層。

第９図　大館跡　基本層序

を 2m 四方に 25 等分して 1 ～ 25 のアラビア数字で表し、南西隅を 1、北東隅を 25 とした。表記は大グリッド表示に続けて、「1A10」のように呼称した。

C　基本層序

調査区は南北に長く、地形的にも水田、水田よりも一段高い畑地（館内部）、丘陵と多岐に渡る。調査区の大部分を占める水田部分は河川氾濫原であり、場所によって細かい堆積状況は異なる。大枠は１層（水田耕作土）の下位に、Ⅵ層（砂質土・砂質シルト・砂層）、Ⅶ層（砂利層）が堆積する。畑地部分は段丘と考えられ、Ⅵ層の上位にⅡ～Ⅴ層が堆積する。丘陵及びその周辺は、ほかと異なり泥岩が基盤となり、その上位にⅡ～Ⅴ層（丘陵部分）またはⅦ層（水田部分）が堆積する。

2 遺　構

A 遺構の概要

検出した遺構は、堀２条、土塁１基、井戸２基、土坑２基、ピット 14 基、溝１条、性格不明遺構１基であり、そのほか自然流路３条を確認した。時期は、堀・土塁が中世、溝・自然流路のうち SD17・SR39 が近世、SK40 が近代であり、そのほかは時期の特定ができなかった。検出層位は、土塁、SK26 及び丘陵部に構築された空堀２を除き、水田耕作土（Ⅰ層）下面である。

B 記述の方法

本遺跡から検出した遺構種別の略号は、溝を「SD」、井戸を「SE」、土坑を「SK」、性格不明遺構を「SX」、ピットを「P」、自然流路を「SR」、杭を「K」とし、堀・空堀については 18 年度調査の遺構名とした。

検出した遺構は個別図等で詳細を示したが、ピットに関しては分割図に掲載するに留めた。また杭は、検出状況から堀１または SR16 に付属すると推測でき、それらの遺構の中で記述することとした。各遺構の計測方法は、以下のようにした。

堀・溝・自然流路

全長は確認できる最長の距離とし、途中で角度が変わる部分はそれごとに計測して合計した数値を表した。軸方位は真北からの東西方向への角度で表した。深さは遺構確認面から最深部を計測した。

土　　塁

全長は、確認できる最長の距離とした。軸方位は真北からの東西方向への角度とした。高さは土塁底面から最上部までを計測した。

井戸・土坑・性格不明遺構

規模の記述は、円形・楕円形については径（長径・短径）を用い、方形そのほか不整形のものについては長軸・短軸として最大値を表した。深さは、遺構確認面からの最深部を計測した。また軸方位は長軸を主軸と仮定して、真北からの東西方向の角度で表した。

C 遺構各説

1）堀

空　堀　2（図版 7・48）

18・19B 区に位置する堀で、調査区外西方向に伸びる。今回調査した部分は、18 年度調査で検出した堀の西側である。規模は幅約 3m、深さ約 0.7 m を測り、断面形状は逆台形を呈する。検出した全長は 18・19 年度合計で約 8m であるが、地形等からみて総延長 40m 前後と推定する。覆土は３層に分層し、２層から 17 世紀前～中葉の肥前系磁器椀（1）が出土した。このことから 17 世紀中葉以降に埋まったと推測する。

堀　　1（図版 7～9・11・46～48）

南区をほぼ縦断するように、3B・C 区から 15C・D 区に位置する堀で、18 年度調査区（17D 区）まで伸び、その先は現在の小谷川に切られる。この堀は、位置関係から館の周囲を巡ると推測する。調査した部分は、館東辺の大半と南辺のごく一部で、3・4B 区付近が南東コーナー部分に当る。調査区内では、ほぼ南北方

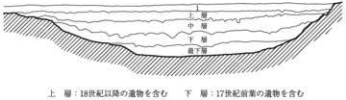
向に走り、12 ～ 14 区にかけては 10m 弱西方向へ弧状に入り込む。規模は最大幅約 10m、深さ約 1.6 m、平均幅約 8m、深さ約 1.4m を測る。断面形は逆台形で、館側の 10・11 B 区では階段状を呈する。底面は 3・4 区が最も深く、北から南に深くなる傾向が看取される。堀の最下層（図版 7 堀 1　4B・C 区東西セクション 6・7 層）は、多量の木製品を含む層であり、自然科学分析（第Ⅲ章 4）から中世段階では湿地状をなしていたと推測できる。

堀 1 は、約 130 mに及ぶ長大な遺構であり、地点によって遺構の形態や堆積状況が異なる。そのため 3 区分して記述する。

3 ～ 10 区間は館南東隅部分（3・4 B 区）を除き、南北方向に伸び、長軸方位は N - 24° - E を測る。覆土は 4 層に大別でき（第 10 図）、最下層（6・7 層）は遺物から中世に堆積した層と推定する。この層は、堀全域に渡って堆積する。上層～下層は、中世遺物と共に近世陶磁器や寛永通寶が出土しており、近世以降の堆積層と考える。そのうち下層（4・5 層）は、珠洲焼などの中世遺物と共に、胎土目痕を持つ唐津焼など 17 世紀前葉の陶磁器類が出土しており、17 世紀前葉前後に堆積したと推測する。中層（3 層）は、出土した陶磁器から、17 世紀中葉以降に堆積したと推測する。上層（1・2 層）は現代の水田層の直下にあり、近代以降の陶磁器類も混入することから、ほ場整備の影響を受けたと考える。周囲には SE35、SR16、SD17 やピットなどが存在し、SR16、SD17 とは重複関係にある。土層観察の結果、本遺構は SR16 より新しく、SD17 より古いことが判明した。

11 ～ 14 区南側間は、館側に弧状に入り込む部分である。長軸方位は、12 ～ 13 区南側が N - 14° - W、13 区北側～ 14 区南側が N - 72° - E となる。周囲には SE25、SR9 や SX27 が存在し、それぞれ本遺構と重複関係にある。土層観察などの結果、本遺構は SD9 より古く、SX27 より新しいことが判明した。覆土は、最下層（図版 7　堀 1・土塁 10　11B・C 区東西セクション 11・12 層）は 3 ～ 10 区間の 6・7 層相当であるが、その上位は砂利主体の層となっている。この砂利層は、薄い砂層（4・8・10 層）などが介在しており、洪水などによって堆積したものと考える。図版 7 の 10・11B・C 区東西セクションなどから東方向からの堆積土と推測でき、供給源は小谷川ないし SR9 の可能性が高い。遺物の出土は少ない。

14 区北側～ 15 区間は、丘陵に沿って弧状に伸び、長軸方位は N - 25° - E を測る。14 区付近は、SR9 に壊されており、東側立ち上がりはほとんど確認できなかった。また独立丘陵に近接しているため、基盤層はほかと異なり、泥岩層となっている。覆土は、シルト層及び粘質土層を主体とする。最下層（図版 8　堀 1　15C・D・16D 区南北セクション 9・10 層など）は 3 ～ 10 区間の 6・7 層相当であり、その上部にごく薄い砂層（8 層）が堆積する。また 15 区では、堀の造り替えが確認できた（第 11 図）。初期の堀は、確認できる部分で幅約 2.5m、深さ約 0.4 mを



上　層：18世紀以降の遺物を含む　　下　層：17世紀前葉の遺物を含む
中　層：17世紀中葉の遺物を含む　　最下層：中世遺物包含層

第 10 図　堀 1　土層模式図

第 11 図　堀 1　造り替え模式図

測る。造り替えは以前の堀の東偶を基盤層の泥岩ブロックで埋め立て、底面を再掘削し、幅約4.5m、深さ約0.6mの堀としている。この造り替えは、底面の段差や泥岩ブロック層の存在から18年度調査区においても行われていた可能性があるが、調査ではそれを確認できていない。堀の造り替えの時期・意図は不明である。

堀に伴うと考えた施設は、杭及び葺き石状遺構がある。杭は、5B区の館偶壁面部分から3本（K-32・33・37）、7・8B区で8本（K-11～15・28・30・31）検出した。そのうち7・8B区のものは、分布などから、SR16に伴うものと考える。5B区の3本は、約2mの間にほぼ直線的に並ぶ。杭はすべて割材となっており、先端が一部炭化している。用途は不明である。葺き石状遺構は、9・10C区の堀底に近い館偶斜面地から検出した。階段状の壁面に、拳大ほどの円礫（花崗岩を主体）を貼り付けたものである。円礫は、黒色粘質土によって壁面にまばらに貼り付けられ、堀の第1堆積土（図版9　堀1　9・10B区　葺石状遺構7層）に覆われていた。礫は、計58点出土し、平均重量は約1,300gである。用途は不明である。なお葺き石状遺構上及びその周辺から京都産の土師質土器皿がまとまって出土した。

遺物は上層～最下層の各層から出土し、最下層（図版7　堀1　4B・C区　東西セクション6・7層）は15世紀中～後半を中心とする珠洲焼や多量の木製品など中世期の遺物のみが出土した。遺物の分布には偏りがあり、器種・種別に関わりなく3・4区及び8～10区に集中する傾向があるが、漆器及び木地椀・皿は、4・5区、8～10区及び15D区に集中し、木簡や刀形・舟形など祭祀や信仰に関わるものは、4・5区、7・8区、9区、11区から出土し、特に7区に集中する。鉄鍋は、7C区から出土した。また径60cm、長さ2～4mほどの加工痕のある木の幹3本が下層（5層）から出土している。

2）土　　塁

土　塁　10（図版9・48）

11A・B～14A区に位置する土塁で、本来は館周囲を巡っていたと推測する。土塁北端は独立丘陵に接し、南側は耕作などによって崩されたと考える。大部分が調査区外に当るが、構造及び構築方法を確認する目的で、日沿道用地内にトレンチを設定して調査を行った。トレンチは、土塁南端近くの11B区に設定した。

土塁はほぼ南北方向に伸び、現状で全長約30m、幅は基底部で約7mを測る。高さは、土塁基底部から約1.7mを測るが、当初はこれよりも高かったと推測する。堀底面からの比高差は、約4mとなる。

構築方法は、地山面を平らに整地した後、盛土を開始している。堀側斜面は、地山を階段状に掘削し、その後盛土を行っている。この方法は、時代は下るが江戸城外堀建設においても確認できる［地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会1996］。盛土は泥岩ブロック主体の黄褐色土・暗褐色土及び黒色土などとなる。盛土方法は、それらの土を交互に積んでいるが、硬くしまっていない。盛土の供給元は、黒色土や暗褐色土の存在から、堀掘削時の土ではなく独立丘陵方面から運ばれた可能性が高い。

遺物は、1層（表土）から珠洲焼甕口縁部（64）、瓦器風炉脚部（65）が出土した。

3）井戸・土坑

SE25（図版10・48）

11C区に位置する井戸で、堀1と重複関係にある。堀1の掘削中に検出した遺構であり、断面で新旧関係を捉えることはできなかった。平面形は、長径2.4m、短径1.9mほどの南北に長い楕円形で南側はやや外側に広がり、深さは確認面から約1.2mを測る。底面はややいびつな円形で、西寄りに杭が3本打たれ、

板材が3段重なる。覆土は7層に分かれ、粘質土・シルトからなる。遺物は、上記の杭・板材以外出土しておらず、詳細な時期は不明である。

SK26（図版10・49）

8B区に位置する楕円形を呈する土坑である。規模は長径1.5m、短径0.95m、深さ0.27mを測り、長軸方位はN－33°－Eとなる。検出位置は農道下で土塁の推定延長線下に当るが、土塁との新旧関係は不明である。覆土は単層で、暗褐色土である。遺物は出土していない。

SE35（図版10・49）

3B区に位置する円形を呈する井戸で、直径1.2m前後、深さ1.25mを測る。底は砂利層（3B区基本層序Ⅶ層）まで掘り込まれ、その層から調査中に湧水を確認した。堀1から南に4mほど離れ、北側の一部は攪乱を受ける。断面形状は、壁面中位が崩落のため一部外側に張り出す。覆土は9層に分け、3～5・7層に炭化物が含まれる。遺物は、底面近くから炭化材や焼け礫などが出土したのみである。

SK40（図版10・50）

12C区に位置し、SX27中央付近に構築された楕円形の土坑である。上位には、土坑を塞ぐ形で丸釘が打たれた丸材が2本置かれる。構築は、SX27の覆土に含まれる円礫を取り除き、木の幹を切断して構築されている。覆土は、2層に分けられる。遺物は、1層から珠洲焼片口鉢（82）と肥前系磁器椀（83）、底面から碧（113）及び断面が丸い針金状の鉄線が出土した。時期は、丸釘の存在などから近代以降と考える。

4）溝・自然流路

SR9（図版8・49）

平面形状や土層の状況から人為的なものとは考え難く、自然流路であったと推測する。11D区、12C・D区、13C区、14C・D区、15D・E区に位置し大きく蛇行する。また、12D区で二股に分岐する。調査区内での全長は約47mで、両端は調査区外へと伸びる。12C区でSX27、14C・D区で堀1と重複しており、本遺構が両遺構を切っている。幅は確認面で4～6.4mを測り、14区付近で一番狭くなる。深さは0.6～0.8mとなる。覆土は、黒色シルトや砂利を主体としており、場所によって大きく異なる。底面付近の黒色シルト層から、かつて生息していたと思われる二枚貝を検出した。遺物は非常に少なく、瓦器風炉脚部（68）や瀬戸・美濃焼平椀（66）、信楽焼（67）などである。なお木製品は、まったく出土しなかった。時期は、堀1を壊していることから中世以降と考えるが、詳細は不明である。

SR16（図版10・11・49）

平面形状や断面観察から自然流路であったと推測する。7・8B～E区にかけて位置し、7・8B・C区で堀1に切られる。調査区内の全長は約30mで、東端は調査区外へと伸びる。7・8E～7・8C区間では東西方向にやや蛇行しながら走り、7・8B区付近で約90°方向を変え南に向かうが、これ以降堀1に切られている。幅は確認面で3.2～5m、深さは1.5～1.8mを測る。断面形は箱状を呈し、壁面はほぼ垂直であり、一部オーバーハングする部分もある。覆土は7・8E区で12層に分層した。これらの土壌は、南側から供給されたと考えられる。7・8B区では、この遺構に伴う杭を8本（K-11～15・28・30・31）検出した。これらは、方向を90°ほど変える部分の西側立ち上がりにほぼ一直線に打ち込まれており、護岸などの施設に関連する可能性がある。遺物は、1層から青磁（69）や縄文土器（319・321）、鉄滓（111・112）など、また11層からは木製品2点（309・310）が出土した。流路の時期は、堀1に切られることから中世以前と考えるが、詳細は不明である。

SD17（図版 7・11・46・49）

3・4B・C・D 区、3E 区に位置する溝で、3・4B 区で堀 1 と重複する。調査区内の全長は 35m で、両端は調査区外に伸びる。土層観察の結果、堀 1 の埋没中に本遺構を構築し、最終埋没時は堀 1 と同時期であることが判明した（図版 7 堀 1・SD17 3・4B 区南北セクション）。東西方向に走り、長軸方位は N - 65° - E となる。幅は確認面で 3.2 ～ 5.7m、深さは 0.35 ～ 0.85m を測る。断面形は、おおむね「U」字状となる。覆土は、灰色シルトを主体とする。また 3D 区では、この溝に伴う杭群を検出した。これらは、溝中央にやや太い 2 本の杭、北側立ち上がりに細杭が 15 本打ち込まれていた。遺物は、下層（図版 11　SD17 南北セクション 1　5 層）を中心に中世陶器（70・71）と近世磁器（72）、下駄（315）などが出土した。遺構の時期は、堀 1 との関係及び出土遺物から近世と考える。

SR39（図版 12・50）

北区 20C 区、21・22B・C 区に位置する東西方向に走る自然流路で、両端は調査区外に伸びる。調査区内での全長は約 13 mで、幅 10 ～ 11 m、深さ約 1.1m を測るが、これは以前の流路の 1 つで、小谷川の氾濫原は、現小谷川から北へ約 140m の地点にまで及んでいることが、18 年度の確認調査で明らかとなった。南北両岸から護岸と考える木組施設を検出した。木組施設は、杭と横木及び横木に直交する材から構成される。構造は、横木を杭で押さえ、そこに直交する材を渡し、それらを黒褐色粘質土（13 層）で覆ったものと推測する。使用された木材は、枝や幹、根などさまざまな部位で、切断痕のほか、加工はほとんど見られない。遺物は、流路内及び木組施設に接するように少数出土した。時期は、中世・近世で、両者の割合はほぼ同じである。中世の遺物は、青白磁合子（73）、珠洲焼・越前焼（74 ～ 79）であり、近世の遺物は、肥前系磁器など（80・81）となる。これらの遺物には、縁辺が摩耗したものがあり、近隣から流れてきたものと推測する。遺構の時期は、17 世紀代の肥前系磁器などが出土したことから近世段階に使用・埋没したものと考える。ただし上限は、珠洲焼などの中世遺物の出土から、中世に遡る可能性もある。

5）性格不明遺構

SX27（図版 12・50）

12C 区に位置する遺構で、堀 1・SR9・SK40 に切られる。堀 1 との前後関係は、堀 1 掘削後、堀底面にて本遺構の広がりを確認したことによる。SX27 の平面形状は不整形で、規模は長軸 5.2 m以上、短軸 5m 以上で、深さ約 0.8m を測る。覆土には、2 ～ 4 層を中心として径 20cm、長さ 50cm ほどの破砕した木の幹 2 本と花崗岩を主体とする多量の円礫が出土した。円礫は長径 30 ～ 50cm、重さ約 50kg のものが中心で、割れたものも確認できる。一部に被熱し、ススが付着したものがあり、そのうち 1 点には柱の当たりと考えられるスス痕が確認できた。

そのほかの遺物としては、7 層から不明木製品（317）が出土している。遺構の時期は、堀 1・SR9 との関係から中世以前と考えるが、詳細は不明である。

3　遺　　物

A　遺物の概要

遺物は、中世を中心に縄文時代から近代まで幅広い時代のものが平箱（54 × 34 × 14cm）で25箱出土した。中世の遺物の大部分は、館の周囲を巡る堀1からの出土である。そのほかの時代の遺物は、調査区内全域から散発的に出土した。

中世の遺物は、青磁・白磁などの輸入磁器、珠洲焼・越前焼・瀬戸美濃焼などの国産陶器、土師質土器、銭貨・鉄鍋などの金属製品及び漆器を含めた木製品などである。このうち木製品が、全体の7割以上を占める。そのほかの時代の遺物は、縄文土器、古代と推測する土師器、近世・近代陶磁器や木製品・石器などである。

B　記述の方法

遺物の記述は、種別ごとに大別し、遺構ごとに記載することとした。堀1では、多量の遺物が各層位から出土したため、極力層位順に図示することとした。

遺物の編年区分などについて、白磁は森田勉［森田1982］、青磁は上田秀夫［上田1982］、青花は小野正敏［小野1982］、瀬戸美濃焼は藤澤良祐［藤澤2005］、珠洲焼は吉岡康暢［吉岡1994］、越前焼は田中照久・木村宏一郎［田中ほか2005］、肥前系陶磁器は九州近世陶磁学会［九州近世陶磁学会2000］の区分を参考とし、胎内市下町坊城遺跡・江上館の成果［水澤2001］も援用した。

C　遺物各説

1）陶磁器・土器類

空　堀　2（図版14・51）

1は肥前系磁器椀で、外面に草花文が施される。時期は、17世紀前～中葉である。

堀　　1（図版14～16・51・52）

最下層（中世段階堆積層）　図版7の堀1　4B・C区東西セクション6～7層を基準とする層位から出土したものを最下層とした。なお水の湧き出す状況であったため、細かな層位毎での取り上げは実施できなかった。2は青白磁で、内面底部に段を有する。器形は、皿と推定する。3は白磁皿D群で、内湾する口縁を持つ。4・5は青磁である。4は見込み部分に釉がみられず、高台内面途中まで釉がかかり、外底無釉となる。器形は、皿と推定する。5は、高台内の釉を削り取っている。6は輪花状を呈する青花で、外面に木瓜状の文様、内面に亀甲文を施す。小片であるため、器種は不明である。時期は、16世紀代か。7は瀬戸美濃焼の卸皿で、被熱し、内外面に炭化物が付着する。特に内面は炭化物が厚く卸目がほとんど覆われる。8～12は、珠洲焼である。8は壺K種で、非常に薄い器厚となる。9・10は壺T種で、うち10は綾杉状に叩き目を施す。11は甕体部で、外面に叩き目を施す。12は片口鉢体～底部で、内面は使用により摩滅する。時期は、卸目などから珠洲Ⅵ期と推定する。13は越前焼甕体部で、内面に指圧痕が残る。14～20は、土師質土器皿である。14～16は、ロクロ成形である。14・15は底部回転糸切りとなり、15は内面のロクロ痕が顕著である。17～20は、手づくね成形である。すべて口径20cmを超え、17・18の内面には「2」の字状ナデ上げ痕が観察できる。胎土・製作技法などから京都産と推定する。時期は15世

紀中葉と考える。

下　層　堀覆土4・5層出土のものを下層とした。21は青磁の腰折皿で、内面に線描の文様を施す。22～24は、瀬戸美濃焼である。23は天目茶椀で、釉は2度掛けされる。時期は古瀬戸後Ⅳ期と推定する。22は袴腰形香炉で、鉄釉が掛かる。時期は古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期と推定する。24は袋物の体部で、内外面に鉄釉が掛かる。25は壺体部で、無釉となる。胎土などから、信楽焼の可能性がある。26～28は珠洲焼片口鉢で、26が珠洲Ⅲ期、27が珠洲Ⅵ期である。28は片口部となる。29・30は越前焼甕肩部で、29には格子文と凸字の「本」、30には凸字の「本」または「大」を押印する。時期は越前Ⅳ期前後と推定する。31～34は土師質土器皿で、すべてロクロ成形である。うち31～33は、底部に回転糸切り痕が残る。35は瓦器火鉢口縁部で、口唇部及び口縁部内面上端にスタンプ文を施す。36は唐津焼皿で、胎土は褐色を呈する。外面に藁灰釉が一部みられ、また見込みに胎土目痕が1か所確認できる。時期は17世紀初頭のⅠ－2期と推定する。

中　層　堀覆土3層出土のものを中層とした。37は白磁皿D群である。38・39は青磁である。38は直口縁の椀E類で、横位の線描文を施す。39は盤口縁部で、体部内面に幅広の丸彫りを施す。釉は厚く、焼成も良い。40は瀬戸美濃焼壺または甕底部で、鉄釉が掛かる。41・42は珠洲焼である。41は甕体部で、外面に叩き目を施す。42は片口鉢で、卸目は6本一単位となる。時期は珠洲Ⅵ期である。43～45は越前焼甕である。43は口縁部であり、口縁上端が外傾し、内面に浅い沈線が巡る。時期は、15世紀中葉の越前Ⅳ-2期と推定する。44・45は肩部で、共に格子文を施す。46は産地不明の磁器質の皿で、胎土は浅黄色を呈する。釉は灰白色で高台を含めて全面に掛かり、また見込みに砂目痕が1か所確認できる。時期は近世前半か。

上　層　堀覆土1・2層出土のものを上層とした。47～51は青磁である。47は椀口縁部で、口縁は膨らみ、やや外反する。48は椀底部で、高台内は釉を削り取っている。49・50は、椀体部である。51は外面に線描の文様を施し、また内面途中まで釉が掛かる。器種は、香炉と考える。52は青花端反椀口縁部で、器厚は非常に薄い。青花椀B群であり、時期は15世紀後半と推定する。53は瀬戸美濃焼卸目付大皿で、現状では釉は確認できない。また断面に漆が付着しており、漆継が行われたと考える。古瀬戸後期様式である。54～56は珠洲焼である。54は甕で、円頭状の口縁部を持つ。55は片口鉢口縁部で、片口部分に当る。卸目は6本一単位と推定する。56は片口鉢の体～底部で、卸目単位は9本一単位である。断面に漆が付着しており、漆継が行われたと考える。時期は、卸目などから珠洲Ⅴ期前後と推定する。57・58は越前焼である。57は壺または甕体部で、外面に自然釉が掛かる。58は片口鉢で卸目は8本一単位である。59は土師質土器皿である。ロクロ成形で、全体が摩耗している。60・61は肥前系磁器である。60は椀の体～底部で、外面に文様が描かれる。時期は18世紀前～中葉である。61は皿で、淡緑色の釉が掛かる。時期は17世紀前～中葉である。62は土鍋口縁～体部で、口縁上部及び内面に極暗赤褐色釉が掛かる。時期は近世後半以降か。63は肥前系擂鉢で、内外面に鉄釉が掛かる。時期は18世紀後半以降である。

土　製　10（図版16・52）

64は珠洲焼甕の口縁～肩部で、円頭状の口縁部を持つ。時期は、口縁形状などから珠洲Ⅵ期と推定する。65は瓦器風炉脚部で、色調はにぶい黄橙色を呈する。出土層位は、共に1（表土）層である。

SR9（図版16・52）

66は瀬戸美濃焼平椀体部で、時期は古瀬戸後期様式、15世紀代と推定する。67は体部片で、胎土から信楽焼とした。68は瓦器風炉脚部で、色調は橙色を呈する。

SR16（図版 16・52）

69 は青磁直口縁の椀 E 類で、釉調は灰オリーブ色を呈する。

SD17（図版 16・52）

70・71 は珠洲焼である。70 は甕体部で、外面に叩き目を施す。71 は片口鉢体～底部である。内面は使用により摩滅し、また炭化物が付着する。72 は磁器小椀である。時期は近世であるが、詳細は不明である。

SR39（図版 16・52）

73 は青白磁合子で、釉調は明緑灰色を呈する。時期は、13 世紀代か。74 ～ 78 は珠洲焼で、水流によって全体が摩耗している。74 ～ 76 は甕体部で、外面に叩き目を施す。叩き目は細かいものと幅広いものがあり、複数時期が混じると考える。77 は片口鉢の口縁～体部で、内面は使用により摩滅する。時期は珠洲Ⅱ期と推定する。78 は片口鉢体部で、内面は使用による摩滅が進み、わずかに卸目が確認できる。79 は越前焼甕体部で、水流によって全体が摩耗している。80 は肥前系磁器椀で、外面に雨降り文を描く。時期は 17 世紀後半である。81 は陶器鉢で、外面に鉄釉、内面に淡緑色釉を掛ける。時期は近世である。

SK40（図版 16・52）

82 は珠洲焼片口鉢体部で、内面は使用により摩滅する。83 は肥前系磁器椀で、被熱している。時期は 17 世紀代か。出土層位は、共に 1 層である。

遺　構　外（図版 17・52）

館　内　堀・土塁の内側の遺物は、18 年度に実施した確認調査（試掘坑 39T）で得られたもののみである。以下、39T 出土の遺物について説明する。84 は白磁皿 D 群で、見込みに 4 か所目跡が確認できる。断面に漆が付着しており、漆継が行われたと考える。また外面には、底部を中心として漆と推定する黒色物質が付着する。85・86 は青磁椀である。85 は椀 C 類で、外面に雷文、内面に線描文を描く。86 は椀 D 類で、外反する口縁を持つ。時期は共に 15 世紀代である。87 は珠洲焼片口鉢の口縁～体部で、卸目は 6 本一単位となる。時期は、珠洲Ⅴ期である。88 は漆塗り天目で、内外面に漆が塗られ、縦方向の筋も描かれる。近隣では、舳内市江上館跡で複数個体出土しており、15 世紀中葉と推定している。89 ～ 93 は土師質土器皿で、大きさにバリエーションがある。すべてロクロ成形で、90 ～ 93 は底部回転糸切りとなる。

館　外　堀の外側から出土したもので、中世の包含層は削平を受けており、すべて表土からの出土である。94 ～ 97 は青磁である。94・95 は椀の口縁～体部で、前者が D 類、後者が E 類となる。96 は稜花皿で、内面に丸彫りを施す。時期は 14 世紀代と推定する。97 は盤底部で、釉は厚く濃緑色を呈する。98・99 は青花である。98 は椀で、外面及び見込みに文様を施す。端反椀と推測し、時期は 15 世紀後半と考える。99 は主として内面に文様を施し、皿と推測した。100 は瀬戸美濃焼壺または瓶底部で、わずかに鉄釉が確認できる。101 は珠洲焼片口鉢で、時期は珠洲Ⅵ期である。102 は越前焼甕体部片で、破片同士が二次焼成を受け、融着する。窯道具か。103 は土師質土器皿で、ロクロ成形となる。104 は肥前系磁器壺底部で、色調は灰色を呈する。本資料は沈香壺と呼ばれるもので、時期は 17 世紀代か。

2）銭貨・金属製品（図版 17・53）

105 ～ 108 は銭貨で、105 ～ 107 は堀 1 最下層から出土した。105 は摩滅するが、北宋の元豊通寶または元祐通寶と推測する。106・107 は摩滅が激しく、非常に薄くなる。108 は、金の正隆元寶である。調査区一括。

109 は、鉄鍋で堀 1 最下層から出土した。径 80cm 弱を測る大型品で、口縁～体部片と体～底部片から

なり、図上で復元をした。口縁部は、大きく屈曲し外反する。頸部もまた大きく屈曲し、体部は直線的となる。体・底部境は明瞭に分かれ、現存の底部には湯口などの痕跡は確認できない。外面頸部付近に、幅約6cm、高さ約1cmの突起（外耳）が付く。本資料は、五十川伸矢の分類［五十川1997］で西日本系とされる鍋Aの系統を引くものと推定する。110は堀1上層出土の蹄鉄で、釘穴が8か所確認でき、一部釘が残存する。111・112は、SR16覆土上位出土の鉄滓である。112は形状から椀型滓と考える。113は、SK40出土の銅製簪で、一部に鍍金が残る。上部に菊花を付け、また頭部の耳掻きは形骸化している。

3）石　製　品（図版18・53）

114は硯で、正裏面使用される。裏面には、持ち主の名前と思われる「道□」が線刻される。115は砥石で、特に裏面の使用が顕著である。出土位置は共に堀1上層で、近代以降と考える。116は石鉢で、外面に鑿痕が残る。14D区出土。

4）木　製　品

堀　1（図版18～27・53～60）

117～306は堀1出土であり、出土層位は142・143を除き、すべて最下層出土となる。117～143は漆器である。117～120は高級品の普朱漆器で、器形は椀となる。117～119は内面有段で、117の口縁部は直縁となる。122・123は椀で、外面に同一意匠の亀甲文を描く。121は花と推定する文様、124・125・127は草花文、126は扇文を外面に描く。124は高台内に「寿」と推定する文字を記す。128は、底部内面に文様を描く。121・126・127は文様に引掻技法を用いており、時期は15世紀後半と推定する。129～132、134・135は漆の剝落が進んでいるが、内面に朱漆が残り、外面には文様が描かれていたと推定する。133・136は、内外面黒漆塗りとなり、133には外面に文様が描かれる。137・138は黒漆塗の皿である。137は、底部外面に留め具痕が残る。138は内面に漆生地及びヘラによる工具痕が残り、漆パレットとして使用したと推定する。139・140は鉢と推定し、140は底部内面に文様を描く。141は板状の漆器で、器種は盤の可能性がある。142・143は下層出土の漆器で、142が椀、143が皿と推定する。

144は木地椀で、底部に2個一対の留め具痕3か所が残る。底部に穿孔があり、通常の使用に耐えないため、漆器未製品の可能性もある。145～147は木地皿で、145に「×」の刃物痕、147に留め具痕が残る。

148は小型の曲物で、上部を欠損している可能性がある。綴じ方は、現状1列下内2段綴じである。149～153・272は曲物側板で、149は1列内2段綴じとなる。272は、放射状に刃物痕が入る。154は底板で、樹皮が残存する。155～163は、円形または楕円形板で、底板と推定する。そのうち157～159・162・163には、目釘穴が存在する。また163は、外面黒漆塗となる。164・165は、円形蓋である。164は内外面黒漆塗で、内面は縁辺有段となる。165は、外面黒漆塗となる。内面は中央縁辺を除き、面取りがなされ、また目釘穴が確認できる。

166～171・173～184は方形板、172は角材で、指物の部品と考える。166～170・172は黒漆塗となり、166・169・170には刃物痕が観察できる。172は、両側面が黒漆塗となる。173は側面に目釘穴・木釘があり、底板と推定する。180・183は弧状に削られ、うち180は側面に目釘穴・木釘が残る。184は、下部両端に突起状の部分が付く。185～187は、結物側板である。185・186はほぼ同寸であり、同じ結物を構成していたと考える。187は、内面下部に横位の圧痕及び接着材と推測する漆が観察できる。188は、反りは見られないが、187と同様に下部に漆が付着する。189・190は栓で、釘穴・木釘が残る。191～194は折敷

と考える。これらは隅切となり、193を除き縁を留めるための釘穴が確認できる。195は隅切り状となり、折敷または八寸の可能性がある。197・198は杓子である。197は全面黒漆塗となり、先端は使用により摩耗する。198は板状で、杓文字に近い形状と推定する。199～205は箸状製品で、199のみ完形となる。断面形状は、円形に近いものと四角形に近いものに分かれる。206は柄と推定でき、上端は面取りを施す。

207～210は扇と推定する。207は現状で3枚の羽が付き、そのほか2枚羽が外れた状態で出土した。本資料は幅が広く柾目取りとなり、通常の扇とは様相が異なる。208は、寸法や出土位置から207の部品と推定する。209・210は基部に穿孔があることから、扇と推定した。

211･212は把手と考える。211は上面に3か所穿孔があり、中央が小さい。212は左髄柄部分に樹皮が残る。形状から灯篭の把手と推定する。213は、赤漆塗の鞘である。内部を刃形に刳り貫き、糸によって合わせ、その後赤漆を塗る。214は縁を持つ板状の製品で、大きさから硯台の可能性がある。215～223は部材である。215は枘、216～218・221は相欠、220が相欠継、219・222は木釘での接合となる。そのうち221は、接木を行った痕が確認できる。223は、裏面中央に方形の切り取りを施す。

224～240は、下駄及び下駄歯である。224・225は露卯下駄である。225は前壺付近に足指のよると推定する摩耗があり、また歯が残る。226、231～234、238～240は下駄の歯である。233は接地面を欠損する。本体との接合は、枘が1本と2本のものがある。227～230・235～237は連歯下駄で、角型と丸型がある。229は、表面に長楕円形を呈する刻みがある。237は、225と同様に前壺付近に摩耗がみられる。また228・236の歯髄面部分には円形の穿孔がある。241～243は板草履で、うち241・242は木取りなどから対になると推定する。

244は木鎚で、芯持丸太を用いて、柄部分は削り出す。245･246はコモツチで、共に芯持丸太を用いる。245は2か所、246は1か所抉りを入れる。

247・248は舟形である。共に中央を刳って作り、247は中央に、248は船尾寄りに孔を開ける。249は船形の板材で、先端部に削りを施す。中央に2個一対の穴が2か所ある。福井県一乗谷遺跡において帆柱付きの板状の舟が出土しており［朝倉氏遺跡調査研究所1976］、同様のものと考えた。250～252は刀形である。250は、ナイフのような形状となる。251・252は両区を設けて中心と刀身を分け、中心先部分も表現する。252は70cmほどの大型品で、廃棄時の切断と考える刃物痕がある。266は形状から槍形と推測する。

253～258は木簡である。253は、梵字を5文字（キャ　カ　ラ　バ　ア）記しており、塔婆である。下部を欠損しているが、刃物痕は確認できない。調整は滑らかであるが、表裏に調整時の刃物痕が残り、特に裏面が顕著である。254は下部を欠損し、その影響で墨書遺存状況は非常に悪く、内容は不明である。255は断片であるが、『札』の字などが記される。256～258は同一規格のもので、梵字（オン）が記される。257・258は厚さが一定ではなく、また257には刃物痕が確認できる。259～265、267～270は木簡状製品及び串状製品で、墨書は確認できない。259は、256などと規格が類似し、組の可能性がある。260～262、263・264は規格などから、それぞれ組関係にあったものと考える。265・269は串状で、共に上部を欠損する。267は釘孔があり、折敷などからの転用品と考える。

271、273～304は器種不明で、単体で成り立つものから部材と考えるものも含む。275は箸状であるが、上部がくびれて続くため器種不明とした。277は表面に円形の刃物痕、中央に留め具痕がある。145のような皿の祖形の可能性もある。279・280は板状で、図の下側が斜めに切断される。281は形状から下駄の歯とも推測できるが、接地面の潰れがないことから器種不明とした。283・284は、側面に刻みを持つ木

製品である。283は両側面に刻みを入れ、下部を細く削りだす。284は板状で、表面に5組の刃物痕が残る。刃物痕・刻みが一定でないことから器種不明としたが、算木の可能性も考えられる。285・286は、側面が刃状を呈する。287・288は共に下部が削られ、楔状を呈する。289・290は薄い板材で、それぞれ刃物によって切断された痕跡が残る。291は、竹製品で上部が斜めに切断される。292は、底板と考えることも可能であるが、不整形であるため器種不明とした。295は、木目から材を削り、径7cmほどの棒状に加工したことが看取される。296～298は板材である。296は上端、297は下面を除きそれぞれ面取りする。299～301は端部が炭化しており、付け木と推測する。

302～306は、杭である。302は小型の完形品で、上部が2か所穿孔される。303～305は芯外しの割材となる。306は半截材を使用したもので、15C区底面直上で横倒しの状態で出土した。

SE25（図版27・60）

307はSE25に伴った板状の材3枚のうち、最大のものである。柾目材を使用し、器面を平坦に仕上げている。308は板材を支えるための杭で、芯持丸太を使用している。

SR16（図版27・60）

309は、片面に斜め方向の刃物痕が11本付く。310は板状の材である。311～314は7・8B区検出の杭である。これらは、芯持丸太・半截材・割材を使用している。

SD17（図版27・60）

315は下層（5層）出土の下駄である。226などと同様、歯の芯部分に穿孔がある。近世と考える。

SR39（図版27・60）

316は漆器椀で、外面に黄漆で「丸ニ釘抜キ」を描く。時期は、近世と考える。

SX27（図版27・60）

317は器種不明で、板状の材を弧状に削り、上下端を細くしている。

5）縄文時代以前の遺物（図版27・60）

318～321は胎土や文様から縄文土器と推定した。318は、深鉢口縁部で、横位及び渦巻き状の沈線が施される。時期は縄文時代後期前半と推定する。堀1最下層出土。319は深鉢の口縁～胴部で、無文である。321とともに、SR16覆土上層からの出土である。320は深鉢胴部で、横位の半隆起線及び幅広の沈線が施される。8D区出土。321は深鉢の胴～底部である。

322は柳葉形の尖頭器で、上下部を欠損する。正裏両面とも平坦な剥離を施し、素材面を残さない。断面形は、不整凸レンズ状を呈する。石材は、黒色を呈する珪質頁岩である。時期は、形態などから縄文時代草創期の可能性が高い。調査区一括。323は、形状及び石材から「しゃもじ形石製品」と推測した。奥三面遺跡群元屋敷遺跡（上段）においてまとまって出土、分類されており、A類に該当すると考える［櫻井2002］。石材は、千枚岩である。堀1最下層出土。時期は縄文時代後期以降である。

4　自然科学分析

本報告では、堀機能時の堀内の堆積環境や、堀内から出土した木製品の樹種や木材利用、漆器（塗膜）製作の技法の検討を目的として、自然科学分析調査を実施する。

A　堀１内の堆積環境

1）試料と分析方法

珪藻分析

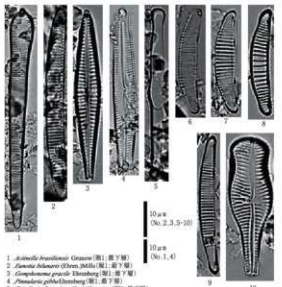
試料は、堀１最下層から採取した土壌１点である。本試料の観察では、暗(灰)褐色のシルト質粘土であり、亜角状の細礫～極細礫や枝状の木片、炭化物の混じる状況が認められる。

分析方法は、西部遺跡、道下遺跡に準拠した。詳細は［パリノ・サーヴェイ株式会社 2005・2007a］を参照されたい。

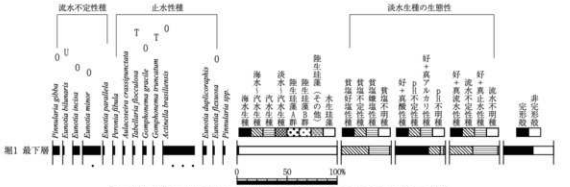
2）結　　果

結果を第２表、第13図に示す。堀１最下層からは、珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は約60%であり、珪藻化石の保存状態は比較的良好である。また、産出分類群数は、16属44分類群である。以下に、珪藻化石群集の特徴を述べる。

珪藻化石群集は、淡水域に生育する珪藻が大部分を占める。淡水生種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性）の特徴は、貧塩不定性種と貧塩嫌塩性種、真＋好酸性種、流水不定性種と真＋好止水性種が優占あるいは多産する。主要種は、止水性で沼沢湿地付着生種の *Actinella brasiliensis* が約30%と優占し、これに次いで流水不定性で沼沢湿地付着生



第12図　珪藻化石



各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満の産出を示す。(U:沼沢湿地付着生種、U:広域適応性種、T:好清水性種)

第13図　主要珪藻化石群集

種　類	生態性			環境指標種	第1面下層
	H.R.	pH	C.R.		
Bacillariophyta（珪藻植物門）					
Centric Diatoms（中心型珪藻類）					
Aulacoseira crassipunctata Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		4
Araphid Pennate Diatoms（無縦溝羽状珪藻類）					
Araphidineae（無縦溝類）					
Tabellaria flocculosa（Roth）Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	4
Raphid Pennate Diatoms（有縦溝羽状珪藻類）					
Biraphid Pennate Diatoms（双縦溝羽状珪藻類）					
Cymbella tumida（Breb.）Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	1
Cymbopleura naviculiformis（Auerswald）Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O,U	2
Encyonopsis spicula（Huste.）Krammer	Ogh-hob	ac-il	l-ph	T	1
Encyonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	1
Gomphoneis eriense var. *variabilis* Kociolek & Stoermer	Ogh-unk	unk	ind	T	1
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	1
Gomphonema angustatum（Kuetz.）Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	1
Gomphonema augur Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind		1
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	7
Gomphonema insigne Gregory	Ogh-ind	ind	unk		1
Gomphonema parvulum（Kuetz.）Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1
Gomphonema subtile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind		1
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	3
Gomphonema sp.A	Ogh-unk	unk	unk		1
Stauroneis phoenicenteron fo. *hattorii* Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	1
Frustulia rhomboides var. *saxonica*（Rabh.）De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P,O	2
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		1
Pinnularia brevicostata var. *sumatrana* Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	14
Pinnularia gibba var. *linearis* Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		1
Pinnularia hustedtii F.Meister	Ogh-hob	ac-il	ind		1
Pinnularia mesolepta（Ehr.）W.Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1
Pinnularia neomajor Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi		1
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	2
Pinnularia schroederii（Hust.）Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1
Pinnularia stomatophora（Grun.）Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		1
Pinnularia viridis（Nitz.）Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O,U	2
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		4
管縦溝類					
Hantzschia amphioxys（Ehr.）Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	1
Rhopalodia gibberula（Ehr.）O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	1
短縦溝類					
Actinella brasiliensis Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-bi	O	66
Eunotia arcus var. *bidens* Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1
Eunotia bilunaris（Ehr.）Mills	Ogh-hob	ac-bi	ind	U	3
Eunotia duplicoraphis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		7
Eunotia flexuosa（Breb.）Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	3
Eunotia formica Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	1
Eunotia gracialis Meister	Ogh-hob	ind	l-bi		1
Eunotia implicata Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O,U	14
Eunotia minor（Kuetz.）Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	37
Eunotia monodon var. *asiatica* Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	ind		1
Eunotia parallela Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind		3
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1
Peronia fibula（Breb.ex Kuetz.）Ross	Ogh-hob	ac-il	ind		4
海水生種					0
海水－汽水生種					0
汽水生種					0
淡水－汽水生種					1
淡水生種					209
珪藻化石総数					210

凡　例

H.R.：塩分濃度に対する適応性		pH：水素イオン濃度に対する適応性		C.R.：流水に対する適応性	
Ogh-Meh	淡水－汽水生種	al-bi	真アルカリ性種	l-bi	真止水性種
Ogh-hil	貧塩好塩性種	al-il	好アルカリ性種	l-ph	好止水性種
Ogh-ind	貧塩不定性種	ind	pH 不定性種	ind	流水不定性種
Ogh-hob	貧塩嫌塩性種	ac-il	好酸性種	r-ph	好流水性種
Ogh-unk	貧塩不明種	ac-bi	真酸性種	r-bi	真流水性種
		unk	pH 不明種	unk	流水不明種

環境指標種群

O: 沼沢湿地付着生種 ,P: 高層湿原指標種（安藤 ,1990）、S: 好汚濁性種 ,U: 広域適応性種 ,T: 好清水性種（以上は Asai and Watanabe, 1995）、
R: 陸生珪藻（RA:A 群 ,RB:B 群 ,RI: 未区分、伊藤・堀内 ,1991）

第２表　珪藻分析結果

種の *Eunotia minor* が約 20%、同じ生態性の *Eunotia incisa*、*Pinnularia gibba* がそれぞれ約 7%産出する。

3）考　　察

堀 1 最下層の珪藻化石群集では、沼沢湿地付着生種群の一種で、弱汚濁耐性種で高層湿原や腐食質に富む湖沼・池沼や河川に出現するとされている *Actinella brasiliensis* が優占した。*Actinella brasiliensis* と共に、伴出する分類群も沼沢湿地付着生種群に含まれる流水不定性種や止水性種も多く検出されたことから、沼沢地のような水深の浅い水域環境が示唆される。

また、本試料では多量の有機物の混入が認められたほか、発掘調査では木製品をはじめとする遺物が出土している。植物遺体や木製品等の有機質遺物が腐らず保存された要因としては、上記したような堆積環境や遺跡周辺の水域環境が背景として考えられる。

B　木　製　品

1）試　　料

樹種同定

試料は、堀 1 からの出土遺物を主体とする木製品 174 試料である。これらの木製品のうち、複数の部品からなる 4 試料〔148 曲物（側板・底板）、221 部材（本体に別材が接木されている）、224 差歯下駄（台・前歯）、225 差歯下駄（台・前歯・後歯）〕については、各部品を分析対象としたことから、分析対象とした試料は 174 試料 179 点となる。

漆塗膜薄片作成観察

試料は、漆器 24 点である。分析対象試料には、内・外面で色の異なるものが認められたことから、このうち 4 試料（123・125・126・135）を選択して、内・外面の 2 か所より試料を採取している。したがって、分析対象とした試料は 24 試料 28 点となる。

赤外分光分析

試料は、漆器 5 点（117・118・121・123・142）と漆塗りの鞘 1 点（213）の計 6 点である。このうち、121・123・142 の 3 点については、外面の黒色部分を分析試料としている。

2）分 析 方 法

樹種同定

分析方法は、西部遺跡、窪田遺跡に準拠した。詳細は［パリノ・サーヴェイ株式会社 2005・2007b］を参照されたい。

漆塗膜薄片作製観察

塗膜片の表面の水分をとり、小さく切ったプラスチック板に接着剤で固定する。塗膜片を合成樹脂で包埋し、樹脂を固化させた後、ダイヤモンドカッターで断面が出るように切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドグラスに接着し、反対側も切断と研磨を行ってプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡、落射蛍光顕微鏡、反射顕微鏡を用いて塗膜構造や混和物について観察する。なお、観察の際には、［岡田 1995］を参考にする。

赤外分光分析

有機物を構成している分子は、炭素や酸素、水素などの原子が様々な形で結合している。この結合した

原子間は絶えず振動しているが、電磁波のようなエネルギーを受けることにより、その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は、その結合の種類によって、ある特定の波長の電磁波を受けたときに突然大きくなる性質がある。この時に、電磁波のエネルギーは結合の振動に使われて（すなわち吸収されて）、その物質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。

有機物を構成している分子における結合の場合は、電磁波の中でも赤外線の領域に入る波長を吸収する性質を有するものが多い。そこで、赤外線の波長領域において波長を連続的に変えながら物質を透過させた場合、さまざまな結合を有する分子では、様々な波長において、赤外線の吸収が発生し、いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常、このスペクトルは、横軸に波数（波長の逆数 cm^{-1} で示す）、縦軸に吸光度（ABS）を取った曲線で表されることが多い。したがって、既知の物質において、どの波長でどの程度の吸収が起こるかを調べ、その赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的に標本化し、これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンとを定性的に比較することにより、未知物質の同定をすることもできる［山田 1986］。

光学系の構成	
光学系	Avatar System 370
光源	IR
ビームスプリッタ	KBr
測定アクセサリ	Centaulus
測定法	透過法
検出器	MCT/A
測定情報	
サンプルスキャン回数	64
バックグラウンドスキャン回数	64
分解能	4.000
サンプルゲイン	8.0
ミラー速度	1.8988
アポダイゼーション	Happ-Genzel
位相補正	Mertz

第３表　FT-IR 測定条件

膜状物質から微量採取した試料をダイヤモンドエクスプレスにより加圧成型した後、顕微ＦＴ-IR 装置（サーモエレクトロン（株）製 Nicolet Avatar 370,Nicolet Centaulus）を利用し、測定を行う。赤外線吸収スペクトルの測定は、作成した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み、アパーチャでマスキングした後、透過法で測定する。得られたスペクトルは CO_2 除去、ベースライン補正などのデータ処理を施した後、吸光度（ABS）で表示している。本調査における測定条件の詳細は第３表に示す。

3）結　　果

樹種同定

結果を木製品観察表に示す。木製品は、針葉樹４種類（マツ属複維管束亜属・スギ・ヒノキ・アスナロ）、広葉樹８種類（ブナ属・クリ・ケヤキ・モクレン属・サクラ属・カエデ属・トチノキ・ハリギリ）に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　**マツ科**

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成されるが、水平樹脂道とエピセリウム細胞の多くは破損しており、空壁として痕跡が認められるのみである。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-10 細胞高。

スギ（*Cryptomeria japonica*（L.f.）D.Don）　**スギ科スギ属**

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に 2-4 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*（Sieb.et Zucc.）Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

アスナロ（*Thujopsis dolabrata* Sieb.et Zucc.）　ヒノキ科アスナロ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

ブナ属（*Fagus*）　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔及び階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

クリ（*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

ケヤキ（*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino）　ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

モクレン属（*Magnolia*）　モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独及び2-4個が放射方向に複合して散在し、年輪界近くで径を減少させる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-40細胞高。

サクラ属（*Prunus*）　バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2-6個が複合、年輪界に向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

カエデ属（*Acer*）　カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独及び2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。木繊維が木口面において不規則な帯状の紋様をなす。

トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）　トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1-15細胞高で階層状に配列する。

ハリギリ（*kalopanax pictus*（Thunb.）Nakai）　ウコギ科ハリギリ属

環孔材で、孔圏部は接線方向にやや疎な1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、多数が複合して接線・

斜方向に帯状あるいは紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状または対列状に配列する。放射組織は異性～同性、1-5 細胞幅、1-30 細胞高。

漆塗膜薄片作成観察

薄片観察結果を第 4 表に記す。以下に、漆器の種類別に観察結果を記載する。

皆朱漆器

皆朱漆器（117 ～ 120）の 4 点は、下地、透明漆、赤漆の順に塗布される。下地は、いずれも炭粉下地であるが、厚さや炭粉の比率は試料によって異なり、117・118 では比較的下地層は薄く、119・120 は比較的厚い。また、119 は、他の試料と比較して、組織の断片が確認できる炭粉が粗く、混合率が低い。透明漆は、いずれの試料でも 2 層認められる。透明漆の厚さは各試料で異なり、117・120 では比較的厚いが、119 では薄い。最上面には、赤色顔料を混ぜた赤漆が塗布される。赤色顔料は、赤鉄鉱が確認できることから、ベンガラと考えられる。赤漆の厚さは、118・120 では薄いが、117・119 では比較的厚い。119 では、上面にベンガラの濃度の高い赤漆、下面に濃度の低い赤漆を 2 層塗布する状況が認められる。

漆　器　椀

分析試料の大部分を占め、121 ～ 129・131 ～ 133・135・136・142 の 15 点からなる。これらの漆器椀は、

報告 No.	器　種	形　態	木取り	面	色	紋　様	下地	漆層 1	漆層 2	漆層 3	漆層 4	備　考
117	漆器椀	ケヤキ	横木地横目取	内外面	赤		炭粉	透明漆	透明漆	赤漆（ベンガラ）		皆朱漆器
118	漆器椀	ケヤキ	横木地横目取	内外面	赤		炭粉	透明漆	透明漆	赤漆（ベンガラ）		皆朱漆器
119	漆器椀	ケヤキ	横木地横目取	内外面	赤		炭粉	透明漆	透明漆	赤漆（ベンガラ）	赤漆（ベンガラ）	皆朱漆器
120	漆器椀	ブナ属	横木地横目取	内外面	赤		炭粉	透明漆	透明漆	赤漆（ベンガラ）		皆朱漆器
121	漆器椀	ブナ属	横木地横目取	外面	黒	赤	－	－	－			未分析
				内面	赤		炭粉	赤漆（ベンガラ）				
122	漆器椀	ブナ属	横木地横目取	外面	黒	赤	炭粉	透明漆	赤漆（ベンガラ：横縞部分）			122 と同一意匠
				内面	赤	－	－	－	－			未分析
123	漆器椀	ブナ属	横木地横目取	外面	黒	赤	炭粉	透明漆	赤漆（ベンガラ：横縞部分）			123 と同一意匠
				内面	赤	－	炭粉	透明漆	赤漆（ベンガラ）			
124	漆器椀	ブナ属	横木地横目取	外面	黒	赤	－	－	－	－		未分析
				内面	赤		炭粉	赤漆（ベンガラ）				
125	漆器椀	ブナ属	横木地横目取	外面	黒	赤	炭粉	透明漆	透明漆			
				内面	赤		炭粉	赤漆（ベンガラ）				
126	漆器椀	ブナ属	横木地横目取	外面	黒	赤	炭粉	透明漆				
				内面	赤	－	炭粉	赤漆（ベンガラ）				
127	漆器椀	ブナ属	横木地横目取	内外面	黒	赤	炭粉	透明漆				
128	漆器椀	ブナ属	横木地横目取	内外面	黒	赤（内面）	炭粉	透明漆				内面に文様
129	漆器椀	ブナ属	横木地横目取	外面	黒		炭粉	透明漆				
				内面	赤		－	－	－	－		未分析
131	漆器椀	ブナ属	横木地横目取	外面	黒	赤	炭粉	透明漆				
				内面	赤	－	－	－	－	－		未分析
132	漆器椀	ブナ属	横木地	外面	黒	赤	－	－	－	－		未分析
				内面	赤	－	炭粉	赤漆（ベンガラ）				
133	漆器椀	ブナ属	横木地	外面	黒	赤	炭粉	透明漆				
				内面	赤	－	－	－	－	－		未分析
135	漆器椀	ブナ属	横木地横目取	外面	黒	赤	炭粉	透明漆				
				内面	赤		炭粉	透明漆	赤漆（ベンガラ）			
136	漆器椀	ケヤキ	横木地横目取	内外面	黒		布着？	透明漆				
137	漆器皿	ケヤキ	横木地横目取	内外面	黒		炭粉	透明漆	透明漆			
138	漆器皿	ブナ属	横木地横目取	内外面	黒		－	透明漆	透明漆			漆パレットに使用
139	漆器脚？	ケヤキ	横木地	内外面	黒		炭粉	透明漆	透明漆			
140	漆器脚？	トチノキ	横木地横目取	内外面	黒	赤	炭粉？	透明漆				底部内面に文様有
141	漆器脚？	マメナロ	横木地	内外面	黒		？	透明漆	透明漆	透明漆		
142	漆器椀	ブナ属	横木地横目取	外面	黒	赤	－	－	－	～		未分析
				内面	赤	－	炭粉	黒漆	赤漆			

第 4 表　漆薄片観察結果

外面が黒、内面が赤色となるもの（121 ～ 126･129･131･132･135･142）と、内外面共に黒色となるもの（127･128･136）がある。前者の試料のうち、121 ～ 126・129・131・132・135には赤色の模様が描かれている。後者の試料では、127は両面に、128は内面に、赤色の模様が描かれている。内外面で色が異なる試料については、123・125・126・135は両面、122・129・131・133は外面、121・124・132・142は内面を対象に薄片作成鑑定を行っている。

下地は、136を除く14点で炭粉を用いた下地が確認され、125 ～ 127･133･142では比較的厚い。136は、下地と考えられる部分は厚いが、所々に空隙が見られるほか、黒色物質が点在し、木地のケヤキとは明らかに異なる繊維の集まりが認められる。試料採取時の肉眼観察では確認できなかったが、布着せをしている可能性がある。

下地の上は、外面が黒色、赤色といった差異により塗布状況が異なる。黒色となる試料では、下地の上に透明漆が塗布され、透明漆を通して下地を見ることで黒色を呈する。透明漆は、基本的に1層であるが、125のみ2層認められる。漆層の厚さは、20-30 μ m程度が多いが、128は10 μ m以下と薄く、135は約40 μ mと厚い。また、122・123の模様部分の薄片作製鑑定結果では、ベンガラを混ぜた赤漆で黒色漆上に模様を描いている状況が観察される。

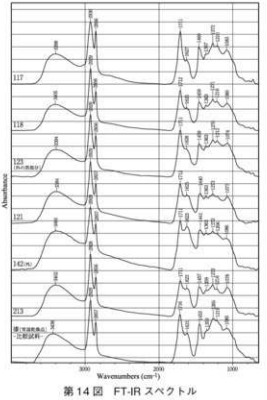
一方、赤色となる試料では、下地の上に直接ベンガラを混ぜた赤漆を塗るもの（121･124 ～ 126･132）が多い。また、漆層は、比較的薄いもの（132・135）と比較的厚いもの（121・126）に分けられ、123・135では下地の上に透明漆を塗布した後、赤漆を塗っている。142では、下地の上に黒色層が1層あり、その上に赤漆が薄く塗られ、赤漆の厚さは不均一である。142の黒色層は、炭粉のような組織を有する破片が全く認められないことから、油煙等に由来する可能性がある。

漆器皿・漆器盤？・漆器鉢？

漆器皿は、137・138の2試料からなり、いずれも内外面共に黒色である。137は、炭粉を用いた下地の上に透明漆が2層塗布される。一方、138は、塗膜の状態が悪く、下地が認められないが、透明漆が2層認められる。

漆器盤は、141の1試料であり、内外面共に黒色である。木地と漆層の間に極めて薄い黒色の層があるが、これが下地に相当するかは不明である。漆層は、透明漆が3層認められ、更に、最上部には褐色の層が認められるが、透明漆が酸化し褐色を呈するものか、何らかの混和物を混ぜた漆層であるかは不明である。

漆器鉢？は、139・140の2試料であり、いずれも内外面共に黒色である。下地は、いずれも炭粉を用いた下地であり、下地の上には透明漆が塗布される。透明漆は、140は1層、139は2層認められる。



第14図　FT-IR スペクトル

赤外分光分析

FT-IR スペクトルを第14図に示す。図中には比較試料として供した漆の実測スペクトルを併記している。

時期・器種		分類群	マツ属複維管束亜属	スギ	ヒノキ	アスナロ	ブナ属	クリ	クヌギ	モクレン属	サクラ属	カエデ属	トチノキ	ハリギリ	合計
15世紀後半	工　具	台	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
		柄	－	1	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
		木栓	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
	編み具・紡織具	コモグチ	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	2
	武器・武具・馬具	鞘	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1
		漆塗下駄	－	－	－	－	2	－	4	－	－	－	－	－	6
		差歯下駄（台）	－	－	－	－	1	－	1	－	－	－	－	－	2
	服飾具	差歯下駄（歯）	－	－	－	－	－	－	6	－	－	－	－	－	6
		下駄鼻？	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1
		板草履	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
	容　器	蓋	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
		曲物側板	－	5	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	6
		曲物底板	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
		結物側板	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3
		指物部品	－	6	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	8
		漆器椀	－	－	－	－	1	－	1	－	－	－	－	－	2
		漆器脚？	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1	－	2
		漆器盤？	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	1
		漆器椀	－	－	－	－	16	－	4	－	－	－	－	－	20
		木地椀	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	3
		木地椀	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1
	調理加工具	杓子	－	－	1	－	－	－	－	1	－	－	－	－	2
	食事具	折敷	－	2	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4
		漆以外製品	－	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7
	祭祀具 1	舟形	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3
		刀形	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3
	遊戯具・日用品	扇	－	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4
		板	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
	祭祀具 2	木簡	－	5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5
		木簡状木製品	－	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	10
	建築部材	絵子	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
	施設材・器具材	角杭	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	1
		円形板	－	6	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	9
		格円形板	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
		部材	－	13	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	14
		方形板	2	8	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	11
	土木材	杭	－	1	－	－	－	6	－	－	－	－	－	－	7
		小杭	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
	そのほか	不明製品	3	5	1	－	－	2	－	3	－	1	－	－	15
近　世	服飾具	漆器下駄	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	1
そのほか	容　器	漆器蓋	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1
	容　器	漆器椀	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1
	そのほか	不明製品	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
合　計			8	93	8	5	23	14	6	18	1	1	1	1	179

1）漆器蓋？は漆器椀、杓子？は杓子、折敷？は折敷、舟形？は舟形に含めて集計

第５表　時期別・器種別種類構成

FT-IR スペクトルは、いずれの膜状物質も類似した赤外線吸収特性を示し、3400cm^{-1} 付近の幅広い吸収帯のほか、2930cm^{-1}、2860cm^{-1}、1710cm^{-1}、1620cm^{-1}、1450cm^{-1}、1270cm^{-1} 付近の強い吸収帯や 1360cm^{-1}、1080cm^{-1} 付近の吸収帯によって特徴付けられる。なお、3400cm^{-1} 付近の吸収帯は O-H 基の伸縮振動、2930cm^{-1}、2860cm^{-1} 付近の吸収帯はメチル基及びメチレン基の C-H 伸縮振動、1710cm^{-1} 付近は C=O 伸縮振動、1620cm^{-1} 付近は C=O 伸縮振動または C=C 伸縮振動、1450cm^{-1}、1270cm^{-1} 付近はメチル基の対称変角振動や C-O 伸縮振動あるいは O-H 変角振動と予想される。

4）考　　察

木材利用

今回分析対象とした木製品は、大半は大館跡に関連するとみられる 15 世紀中葉～後葉の遺物からなり、近世の木製品も一部含まれる。これらの木製品は、工具、編み具・紡織具、武器・武具・馬具、服飾具、容器、調理加工具、食事具、祭祀具、遊戯具・日用品、建築部材、施設材・器具材、土木材に分類される。これらの分類に基づく、器種別の樹種構成を第５表に示す。

工具では、台・柄・木槌がある。台はヒノキ、柄はスギであり、共に木理が通直で割裂性が高く、加工

が容易な木材の利用が認められた。木槌は、落葉広葉樹のサクラ属で、緻密・重硬で強度の高い木材の利用が認められた。また、編み具・紡織具では、コモヅチ2点はいずれもクリであった。重りとして比重の重い木材を選択・利用していることが推定される。

武器・武具・馬具は、鞘が1点あり、均質で加工が容易なモクレン属であった。新潟県内では、中世の鞘については、浦廻遺跡（新潟市）や樋渡・堤下遺跡（神林村）で調査事例［パリノ・サーヴェイ株式会社2003a・2003b］があるが、いずれも針葉樹のスギの利用が認められている。また、寛政13（1801）年に刊行された「万金産業袋」では、鞘に関する記述として、モクレン属のホオノキを利用し、その理由として木材に油脂が少なく、磁石を隔てる効果があることを挙げ、古来より利用されてきたと記されている。これらの記述がいつまで遡るのか明確ではないが、今回の結果から少なくとも中世にはモクレン属が鞘として利用されていたことが窺われる。

服飾具は、履物の下駄と板草履がある。下駄は、台と歯を一木で作る連歯下駄と台と歯を別材で作る差歯下駄がある。連歯下駄・差歯下駄は、共にクリとモクレン属の2種類の樹種が認められた。モクレン属は、下駄材として一般的なホオノキの可能性がある。比較的軽いモクレン属に対して、クリは耐朽性が高いが硬く重い材質を有し、材質的に異なる木材が利用されている。差歯下駄における台と歯の樹種をみると、台にはクリとモクレン属が各1点認められている一方、歯については台を伴わない試料も含めてすべてモクレン属であった。したがって、本遺跡では、栗台朴歯の下駄と、朴台朴歯の下駄が存在したと考えられる。また、木取りや形状から差歯下駄の歯の可能性がある試料（233）もモクレン属と利用樹種が同じであったことから、下駄の歯と推定される。

新潟県内における下駄の調査事例では、城田遺跡及び桃川遺跡群（神林村）で中世の差歯下駄の台にモクレン属が確認されている［パリノ・サーヴェイ株式会社2001a・2003c］が、クリは出土例が少なく、一之口遺跡及び海道遺跡（上越市）と馬越遺跡（加茂市）から出土した古代の資料に3点、大武遺跡（長岡市）から出土した中世の資料に2点、認められるのみである。また、連歯下駄を中心に針葉樹のスギや広葉樹のケヤキの利用も確認されている［パリノ・サーヴェイ株式会社2002a・2003c］が、本遺跡ではこれらの樹種の利用は確認されなかった。

容器は、蓋、曲物（側板・底板）、結物鳶板、指物等の板状を呈する試料と、椀、皿、鉢、盤等のいわゆる挽物・刳物がある。板状を呈する資料は、針葉樹のスギを中心にアスナロが混じるといった樹種構成であり、分割加工が容易な針葉樹材を利用したと推定される。一方、挽物・刳物に分類される容器では、広葉樹のブナ属を中心にケヤキ、トチノキ、アスナロが混じる樹種構成を示し、針葉樹の利用は少ない。これらの結果から、後述するように、それぞれの形状及び加工方法に合わせて樹種選択をしていると推定される。

漆器椀・皿・盤・鉢は24点あり、皆朱漆器（4点）とそのほかの漆器類（20点）に分類される。皆朱漆器は、4点中3点がケヤキ、1点がブナ属であったが、そのほかの漆器類20点では、ブナ属が16点認められた一方、ケヤキは3点であった。皆朱漆器とそのほかの漆器類では、利用される樹種は同様であるが、皆朱漆器でケヤキの割合が高い傾向が窺われる。漆器類の薄片観察結果によれば、皆朱漆器は、下地を含めて3～4層の漆層が認められるが、他の漆器類では漆層は2～3層と、漆塗りの回数がやや多い。また、皆朱漆器に多く認められたケヤキを木地とする試料間でも、漆層の厚さや下地が異なっており、樹種による塗り方の差異は明確ではない。そのほかの漆器類のうち、比較的資料が多い漆器椀では、唯一のケヤキを木地とする136で布着せの可能性が示唆され、他のブナ属の漆器椀と製作技法が異なることが推定される。

なお、漆器類の木取は、すべて横木地であり、椀・皿の底面が柾目となる横木地柾目取が多い。これらの椀・

皿は、ミカン割状等に分割した木材から粗形を作っていることが推定される。一方、トチノキの鉢？は今回の資料の中で唯一の横木地板目取であり、ブナ属やケヤキとは木取りが異なる。横木地板目取は、丸太の表面に椀・皿・鉢を伏せたような形で粗形を作ったことが推定される。トチノキに横木地板目取の木取が多いことは、［北野 2005］でも指摘されており、樹芯まで利用可能なために柾目取りが最も効率的なブナ属と、シラタ部分が少なく椀を伏せたような木取りが最も効率的なトチノキの材質的な違いが推定されている。

調理加工具では杓子、食事具では折敷と箸状木製品、祭祀具では舟形、刀形、木簡・木簡状木製品、遊戯具・日用品では扇、桧、建築部材では把手、施設材・器具材では井戸輪板、円形板、楕円形板、部材、方形板がある。これらの試料では、いずれもスギを主とした針葉樹の利用が多く認められた。板状を呈する試料が多いことから、割裂性の高いスギやヒノキ科の木材が利用されたと考えられる。本地域では、六百地遺跡、大木戸遺跡、城田遺跡、西部遺跡（神林村）等で中世の木製品の調査が実施されており、これらの結果からも板状の製品を中心にスギが多く利用される傾向が示唆される［パリノ・サーヴェイ株式会社 2001a・2001b・2002b・2005］。

近世の試料とされる連歯下駄１点は、モクレン属に同定された。モクレン属の利用は中世の試料でも確認されており、当該期においても同様の木材利用が窺われる。

漆　塗　膜

漆器より採取した塗膜片の調査の結果、試料はいずれも漆と判断された。赤外分光分析では、対照試料とした生漆では、3400、2930、2860、1710、1620、1450cm^{-1}付近に脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯が見られるのが特徴である。分析試料は、いずれも漆の標準パターンとよく似たスペクトルパターンを示しており、塗膜片が漆である可能性を支持する結果を示した。パターンの多少の違いや、漆に特徴的な吸収帯が弱いといった状況も認められたが、分析対象とした塗膜は透明漆のみではなく、下地や赤色顔料などが混じった状態であり、こうした混和物の存在が通常のスペクトルパターンと異なった原因と考えられる。

皆朱漆器４点は、炭粉を用いた下地に透明漆を塗布し、その上に赤漆を塗布する点で共通し、他の漆器類に比較して塗布回数が多いことを特徴とする。ただし、下地や漆層の厚さは試料によって異なり、統一性は認められなかった。

皆朱漆器を除く椀をはじめとして、皿、盤？、鉢？からなる漆器類では、皆朱漆器と同様に炭粉を用いた下地が認められたが、136（漆器椀）では布着せの可能性が示唆され、他の漆器類とは技法が異なる。下地の上の漆層は、１層ないし２層の試料が多く、皆朱漆器に比べて作りが簡素と言える。漆器椀のうち、同一意匠の可能性が推定されている 122・123 は、薄片観察では、外面は２点とも下地の上に透明漆を１層塗布した上にベンガラを混ぜた赤漆で模様を描いている状況が認められた。また、漆層の厚さも含めて塗り方は類似しており、調査所見を支持する結果と言える。このほかに、薄片観察結果から、121 と 126 の試料間でも下地層及び漆層の厚さが類似することが指摘される。

5　ま　と　め

A　大館跡の年代について

今回の調査では、館周囲を巡る堀1から木製品などの多量の遺物が出土した。特に最下層出土の遺物は、館使用時のものと考えることができる。そこで、最下層の遺物を中心に、大館跡の時期をみていきたい。

堀出土の陶磁器類の内、もっとも多いものは珠洲焼となる。時期の判明するものは、13世紀後半の珠洲Ⅲ期の片口鉢（26）を除き珠洲Ⅴ・Ⅵ期が大半で、Ⅳ期のものが多い。越前焼は一定量出土したが、大半は甕体部片で、時期が判明するものは少ないが、越前Ⅳ期と考える。擂鉢は、1点のみの出土である。瀬戸美濃焼は、時期の判明するものはすべて古瀬戸後期様式であり、中でも後Ⅱ～Ⅳ期が中心となる。輸入磁器は青磁が中心であり、ほかに少数の青白磁・白磁・青花が出土した。時期は、15世紀代が中心と考える。

漆器は、最下層から25点出土している。このうち皆朱漆器が4点、内面赤色漆器が13点となり、約7割が朱漆器である。四柳嘉章によれば、皆朱漆器を含む朱漆器は13世紀から日常食器として普及し始め、15世紀代の武士クラスでは大半が朱漆器になるとしている［四柳2006］。

以上のように、大館跡出土の遺物は15世紀中～後葉が主体で、館の活動時期も同様であったと推測される。ただし、少量であるが、26や18年度調査出土遺物14など珠洲Ⅲ・Ⅳ期の片口鉢が出土しており、15世紀以前にも何らかの活動が行われていた可能性は否定できない。また6の青花など16世紀代の遺物も出土しており、出土層位からこの時期堀はほとんど埋まっていなかったと推測できることから、館が15世紀以降も存続した可能性がある。しかし遺物量が激減することから、館の性格が変化したと推測する。

B　大館跡の位置づけ

大館跡は、小泉荘本庄に位置する。遺跡は独立丘陵を取り込んでおり、丘陵及び堀推定部分を含めた規模は東西約130m、南北約160mを測る。しかし、独立丘陵の南側裾部は直線的に切り揃えられ、平地に土塁を構築したほかの三辺と合わせ、方形を意識した区画となる。この方形区画は、東西約110m、南北約100m（堀含めず）である（図版1）。

遺跡は、他遺跡での事例から居館のほかに寺院としての性格も考慮しなければならない。しかし出土遺物には明確な仏具はなく、大規模な堀の存在に着目するならば、むしろ居館（方形居館）と考えたほうが自然であろう。調査では館主などを示す資料が出土せず、文献や伝承も残っていないため、館主の特定はできなかった。そこで、ここでは大館跡の所在する小泉荘の様相を確認し、大館跡の位置付けを行うこととする。

越後国では15世紀代の領主階級の本拠は方形居館であり、県内各地に分布する（第6表）。規模が判明しているものでは、上越市至徳寺遺跡（至徳寺跡・至徳寺館跡）［鶴巻2003］・新発田市宝積寺館跡［田中ほか1990］が1辺220m（2町）以上、胎内市江上館跡［水澤1997］・神林村牧目館跡［田辺1992］・阿賀野市堀越館跡［小田ほか2001］・上越市江島神社遺跡［高橋ほか2001］などが1辺約110m（1町）を測るほかは、50～70mの例が多いとされる［伊藤2002］。これらのうち、至徳寺遺跡は越後国守護上杉氏に関連した遺跡とされ［鶴巻前掲］、宝積寺館跡は南北朝時代に足利方の国大将を務め、佐々木加地氏を代表する立場であった「佐々木加地近江権守景綱」が最初の館主と推定されている［水澤1999］。そして江上館跡は、

名 称	所在地	館 主	規 模	備 考
大館跡	村上市		1 辺約 110 m（堀含めず）	小泉荘本庄に所在
至徳寺遺跡	上越市	守護上杉氏？	1 辺 260 m以上	
江高神社遺跡	上越市		1 辺 90 m以上	
和納館跡	新潟市		50 m以上×60 m以上	
伊達八幡館跡	十日町市	后山氏？	60 ～ 65 m × 50 m	
南谷内館跡	十日町市		1 辺 60 ～ 70 m	
堀越館跡	阿賀野市	堀越氏	110m × 80m	
水原館跡	阿賀野市	水原氏	100m × 80m 程度か	近世・近代まで使用。内郭の規模
安田城	阿賀野市	安田氏	90 m× 70m 程度か	近世まで使用。本丸の規模
宝積寺館跡	新発田市	佐々木加地氏？	1 辺 205 ～ 270m	
蔵光館跡	新発田市	加地氏？	1 辺 120m	
三光館跡	新発田市	竹俣氏？	約 100m × 85m	
寺内館跡	新発田市		1 辺 73 m	
江上館跡	胎内市	中条氏	1 辺 110 m	
古館跡	胎内市	三浦和田一族高野家？	108 ～ 120m × 56 ～ 72 m	当初は 1 辺 60m 程度か
馬場館跡	荒川町	黒川氏家臣の館？	40 ～ 60m × 60 ～ 70 m	
牧目館跡	神林村	色部氏	100 m × 100 m以上	

第 6 表　新潟県内の方形居館

奥山荘の国人領主中条氏の本拠［水澤 2006］、牧目館跡は小泉荘加納の国人領主色部氏に関連する館とされ［田辺前掲］、白河荘国人領主の安田氏の安田城、水原氏の水原館跡も 100 m前後の規模と推測されている［小田前掲］。これらのことから、1 辺 220m（2 町）以上となる方形居館は守護階級、1 辺 110m（1 町）前後となるものは、有力国人領主階級の本拠の可能性を考える必要がある。

大館跡の所在する小泉荘は、村上市を中心として神林村から朝日村・山北町を含む広大な荘園であり、平安時代後期の立荘とされる［村上市 1999］。小泉荘地域の国人領主は、本庄氏や前述の色部氏が挙げられる。両氏は桓武平氏の流れを汲む秩父氏の系統で、鎌倉時代初期に地頭として下向した。その後、小泉荘本庄の本庄氏と加納の色部氏に分かれ、中世後半にはそれぞれ有力国人領主に成長したとされる。15 世紀代の小泉荘には、本庄氏・色部氏以外に大川氏・牛屋氏・桃川氏・鮎川氏・小河氏・山辺里氏・鋳物師屋氏といった領主が存在した。これらのうち大川氏は、小泉荘北部を支配した一族で、牛屋氏は色部氏の庶流である。鮎川氏は出自など不明であるが、15 世紀中葉以降に勢力を伸ばした一族とされ、桃川氏・小河氏・山辺里氏・鋳物師屋氏などは、村を支配する程度の領主階級ではないかと推測している［村上市前掲］。

14 世紀末以降 16 世紀中頃まで、小泉荘内の領主の関係した記事を年代順にみると、第 7 表のようになる。これによると 15 世紀代では、本庄・色部両氏に関わる記事が目立ち、16 世紀代になって本庄・色部氏以外に鮎川・小河氏の名前も現れるようになる。本庄・色部両氏は、中条氏・竹俣氏などといった阿賀北地方の国人領主と名を連ねることが多く、同等の立場であったと推測できる。また年代は下るが、慶長 2(1597) 年作成の「瀬波郡絵図」（米沢市立上杉博物館所蔵）によれば、村の知行関係は改易された本庄氏に代わり旧本庄領支配を行った大国氏が 68 か村、大川氏 48 か村、色部氏 37 か村、黒川氏 16 か村、鮎川氏 12 か村などとなっている［新潟県 1987］。これらのことから、小泉荘の領主では本庄氏・色部氏が、奥山荘の最有力国人領主である中条氏と並ぶような勢力を有していたと推測できる。一方鮎川氏・小河氏などは、前述の両氏より勢力が小さかったと考えることができる。

小泉荘内に残る 15 世紀代を中心に使用されたと考えられる方形居館は、大館跡を含めて約 13 か所が知られる（第 8 表）。これらのうち、大館跡と同規模またはそれ以上のものとして、色部氏の本拠の可能性が指摘される牧目館跡や神林村里本庄遺跡群内御堂 C 遺跡がある。牧目館跡は、発掘調査によって中心時期が 15 世紀前半～ 16 世紀前半とされる。里本庄遺跡群内御堂 C 遺跡は、丘陵斜面に総延長約 360 mに及ぶ土塁と堀が現在も残り、隣接地の発掘調査の結果、13 ～ 15 世紀に渡って存続した館あるいは寺

年　号	西暦	事　　柄
応永1年	1394	村上市門前に耕雲寺が建立される。本庄顕長（法名、耕雲大居士）、建立に尽力したといわれる。
応永30年	1423	越後国内に応永の大乱起こり、本庄・色部両氏参戦する。（～1426年）
嘉吉1年	1441	関東にて結城合戦起こる。色部氏参戦し、足利義教より感状を与えられる。
長禄3年	1459	越後国守護上杉房定に従い、関東に本庄氏・色部氏出陣。足利義政より感状を与えられる。
長享2年	1488	鮎川藤長、死去する（史料に初めて鮎川氏現る）。
長享2年	1488	本庄房長、守護上杉氏に反乱する。
明応2年	1493	本庄房長、再び守護上杉氏に反乱する。
明応9年	1500	本庄時長、守護上杉氏に反乱する。
永正3年	1506	守護上杉房能に越後国人衆が太刀を献上。奥山荘中条氏5番目、本庄氏6番目、色部氏8番目に位置する。
永正4年	1507	永正の乱起こる。本庄氏・色部氏・加地荘竹俣氏、反長尾為景派となる。本庄氏の本庄城陥落。
永正5年	1508	色部氏の平林城陥落。色部氏など、長尾為景と和睦する。
永正6年	1512	鮎川氏の鮎川城が長尾為景派に落とされる。
大永6年	1526	本庄氏・色部氏・中条氏・奥山荘黒川氏の阿賀北地方の国人領主が、長尾為景に起請文を提出する。
享禄3年	1530	享禄の乱起こる。本庄・色部氏など阿賀北地方の国人領主、長尾為景に味方する。
享禄4年	1531	本庄氏・色部氏・鮎川氏・小河氏が相互の団結を確認する起請文を提出。
天文2年	1533	越後国内に享禄の乱起こる。本庄・色部・鮎川・小河氏など小泉荘の領主、反長尾為景派となる。
天文8年	1538	上杉定実の養子問題で、伊達氏・中条氏、本庄・色部・鮎川氏ら阿賀北地方の国人領主と争う。本庄城・鮎川城、伊達氏によって落とされる。
永禄2年	1559	上杉謙信に太刀を献上する。国人衆中で中条氏に続き本庄氏2番目、色部氏5番目に位置する。

「村上市史別編2000　絵図・地図、年表」典拠

第7表　年　表

名　称	所在地	館　主	規　模	備　考
大館跡	村上市		1辺約110 m（堀含めず）	
牛屋氏館跡	神林村	牛屋氏	約50 m四方	規模は地形から推定
松沢館跡	神林村			
桃川館跡	神林村	桃川氏？	90 m × 60m 程度か	別称古館
牧目館跡	神林村	色部氏	100 m × 100 m以上	
内御堂C遺跡	神林村		80m 以上 × 250m	中御門家荘所関連か
山辺里館跡	村上市	山辺里氏	約40 m四方	
日下館跡	村上市	草壁氏？		
鋳物師館跡	村上市	鋳物師屋氏	約40 m四方	館の腰遺跡
御所館跡	村上市			別称御収納館
小川館跡	朝日村	小河氏		
布部館跡	朝日村		約60 m四方（中郭）	東・中・西郭からなる
黒田館跡	朝日村			

第8表　小泉荘内の居館

院の可能性が指摘されている［田辺ほか 2001］。遺跡は丘陵斜面から低地にかけての選地で、通常の方形居館と異なる。また里本庄地区は、里本庄経塚などの存在から荘園領主中御門家の荘所所在地と推定する考え［神林村史編纂委員会 1985］もあり、内御堂C遺跡を居館として良いか疑問が残る。そのほかには、館主が山辺里氏・鋳物師屋氏とされる1辺40 m前後の山辺里館跡・鋳物師館跡（館の腰遺跡）［村上市前掲］、90 × 60m と推定される桃川館などで、荘内に存在する方形居館の中では、1辺約110 mを測る大館跡・牧目館跡がほかと隔絶した規模を持つことが分かる。

このようにみていくと、大館跡は規模において、小泉荘有力国人領主階級の本拠であった可能性を指摘できる。小泉荘有力国人領主は、本庄氏・色部氏となる。加納領主であった色部氏は、15世紀代に前述のとおり牧目館跡を本拠としていたことが有力視されており、色部氏が大館跡と関係した可能性は地理的条件からも低いと考える。一方、本庄領主本庄氏の拠点は、16世紀代では村上市本庄城（村上城）・朝日村猿沢城が挙げられるが、15世紀代の拠点は現在判明しない。本庄城は、近世の村上城の前身であり、16世紀後半の本庄繁長の乱時に激しい戦闘が行われた。築城時期は、16世紀前期とされる［村上市前掲］。猿沢城は、三面川支流高根川左岸に位置し、山麓居館部と山城部からなる根小屋式城郭である［伊藤 1980］。三面川流域や出羽方面への交通路を一望できる立地などから本庄氏の重要拠点で、中心時期は構造などから16世紀後半とされる［横山ほか 2005］。また坂井秀弥によれば、根小屋式城郭の居館の成立は、社会情勢の緊迫化した16世紀代とされ［坂井 1997］、両城の時期見解と一致しており、15世紀代に拠点として使用された可能性は低いと推測する。そこでクローズアップされる館跡が、大館跡である。大館跡は、これまで述べたとおり15世紀中～後葉が中心時期となる。館内部の構造は不明であるが、館周囲の堀から複数の皆朱漆器や京都産土師質土器皿など希少品が出土しており、遺物からも館主の階層の高さを窺い知ることができる。大館跡の位置は、鮎川氏の支配地域と接するが、前述の「瀬波郡絵図」から推測

される本庄領のほぼ中央に位置する。大館跡から門前川を約6km遡った場所に本庄氏と関係の深い耕雲寺があることや、門前川流域には多くの村落が存在しており、本庄領の中心的な地域であったとされる［村上市前掲］。

以上の点から、大館跡は15世紀代における本庄氏の拠点の1つであった可能性が高いと考える。

C　木簡について

6点が出土した。すべて館を巡る堀1からの出土である。出土地点に関しては1号木簡（257）が最も北寄りの11C区、4号木簡（258）が北側の遺物集中域内に当たる9C区、2号（253）・6号木簡（254）が南側の遺物集中域に近い7C区、3号木簡（256）は最も南寄りの4C区からというように散布した状況で出土している（図版13）。いずれも堀1の最下層から横たわった状態で出土した。堀という遺構の性格と、底面標高が北側から南側へ低くなるという状況から推測すれば、流水やその影響下による木簡の移動の可能性も考慮しなければならない。しかし、木製品の傷みが少ないことや、堀1は最下層の珪藻分析で沼沢地のような浅い水域環境であったと考えられることから、遺物は堀に投棄された後、大きな移動はしていないと推測される。共伴遺物としては、陶磁器類や舟形・刀形などの祭祀具、鉄鍋、そして製作途中の木地椀や折敷・土師質土器皿（京都産と在地系）などがある。木簡からは時期を明らかにできないが、共伴遺物から15世紀代と考えられる。

1）題籤状（だいせんじょう）木簡について

【釈　　文】

◎1号木簡（257）

梵字　 　　×

（70）×25×3　　061型式

◎3号木簡（256）

梵字　 　　×

（96）×25×4　　061型式

◎4号木簡（258）

〔梵字　 ヵ〕

□　　×

（84）×25×3　　061型式

256～264の木簡及び木簡状木製品は、題籤を思い起こさせる特徴的な形状を示す。そのうち墨痕が確認できるものは、1号木簡（257）・3号木簡（256）・4号木簡（258）の3点である。これらは、形状から3分類することが可能であり、1・3・4号木簡と259、260～262、263・264となる。各分類がセットで使われたと考えることも可能であるが、出土位置・出土状況から使用方法を判断することはできなかった。

1・3・4号木簡は、圭頭形の頭部の両側から括れさせた羽子板状の形状となる。1・4号木簡は頭部に欠損は見られないが、3号木簡では右上端部をわずかに欠損している。262のような墨痕のない完形品から推測すると、3点とも細くなった括れ以下は折れて欠失したと考えられる。

墨痕は、1・3号木簡が明瞭で肉眼でも判読できる。逆に4号木簡は非常にうすく、年輪間の窪みに残った墨痕だけがようやく視認できる。それ以外の部分は赤外線カメラでもようやく墨痕を確認できる程度で

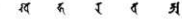
ある。それゆえ、4号木簡は墨痕だけでは判読することが難しく、形状の共通性などから、1・3号と同じ文字（梵字）が記されていると判断した。また、7C区から出土した259は墨痕が確認できないが、1・3・4号木簡とほぼ同型の頭部形状なので一緒に作成され同時に使用された可能性が高い。

文字は3点とも梵字オンと考えられる。一般に梵字オンには特段の意味はなく、いわば接頭語として用いられる［児玉2002］。おそらく、本遺跡出土の木簡の梵字は何らかの仏を示す種字として用いられた可能性は少ないであろう。管見の限りでは、木簡で梵字オンを記した事例を見いだすことができず、これ以上を明らかにすることはできなかった。おそらく、初見資料と思われる。

2）塔婆種字について

【釈　　文】

◎2号木簡（253）

梵字　  　×

（280）×30×5　　061型式

墨痕は非常に明瞭であり、特に赤外線カメラを用いなくとも判読できるほど残りが良い。墨書内容は梵字5文字による塔婆種字である。これと同じ文字内容が書かれた木簡について調べると、形状の特徴が見いだせる。一つは木簡上端部を五輪塔型に作りここに梵字5文字を記すものである。もう一つは、本木簡と同様に両側面をまっすぐに成形する短冊形の形状である。前者は、梵字以下に決り文句が記載されることもあり（第15図）、これらの例から追善供養に用いられたものと考えられる。一方、短冊形の出土例は、福島県荒目条里制遺構や山形県小田島城跡などである[1]。14世紀後半～15世紀初頭で時期的に近い小田島城跡を詳細にみると、出土遺構も自然の沢を堰き止めて作った人工の沼でありながら、同時に城館の本丸と二ノ丸の堀として機能するなど、本遺跡の堀1と類似する点もみられる［高桑2006］。小田島城跡出土木簡でも塔婆種字以下には「南無阿弥陀仏」が書かれ、さらに「□成仏願也／念仏三□□」と割書があり、追善の可能性が高い。荒目条里制遺構でも「南無阿弥陀仏」（10号木簡）の卒塔婆が共伴するなど、追善の可能性が見いだされる。

第15図
五輪塔型塔婆の記載内容
［児玉義隆2002］

このように、形状の相違があっても、塔婆種字五文字が記される場合には、追善供養に用いられた可能性が高いものと考えられ、本木簡も同様の使用目的が推測される。

3）札状木簡について

【釈　　文】

◎5号木簡（255）

〔心ヵ〕

×　札　□　　×

（96）×（19）×2　　081型式

1）荒目条里制遺構は12世紀後半～13世紀代で時期的に若干本遺跡より古い。

◎6号木簡（254）

□　〔　　〕×

（246）×34×3　　061型式

5号木簡は細長い形状から、荷札や付札の可能性も考えられる。右側面だけが原形を残し、それ以外はすべて欠損している。左側面は一文字目の墨痕の一部が欠損することから、3～4mmは欠損したと思われる。上端部右端の欠損は斜位で、明瞭な刃物痕は残っていないが、人為的に切断した可能性もある。下端部も同様に、欠損部の右半分は直線的で、人為的な可能性がある。オモテ面の調整は滑らかであるが、ウラ面は木肌が荒れており、調整が行われていないものと推測される。

墨痕の残存状況は良好とはいいがたく、肉眼で見てとれるのは1文字目の木ヘンだけで、ほかは赤外線カメラが必要である。2文字目も墨痕の左半分は赤外線カメラで見えるが、右半分はほとんど見えない。残っている墨痕の残存状況を主たる根拠として1文字目は「札」と判読した。しかし、奈良文化財研究所『木簡データベース』で「札」を検索しても、中世で該当するのは新潟市山木戸遺跡出土の折敷木簡だけである[1]。一方、1～4号木簡など共伴木簡に梵字が記され仏教儀礼に関わる可能性が推測されるので、「大日如来」や「阿弥陀仏」など別の文字の可能性も考えたが、適当な字体が見いだせず、墨痕に従い「札」と判断した。

二文字目は一層判読が難しいが、墨痕に従い可能性のある文字として「心」を提示した。

6号木簡は2号木簡と同様に頭部を圭頭型に作る。上端部や左右両側面には大きな欠損はないが、下端部は欠失している。この欠失が、人為的な切断であるかは不明である。

特徴として下端に近づくほど厚さが薄くなり1mmを下回る。また調整による滑らかさも上半分にのみ確認でき、下端付近には認められない。欠失時に表面を剝ぎ取るような状況であったのではないかと推測する。

墨痕はオモテ面だけに非常にうすく残り、赤外線カメラを用いてようやく写し出せる。木簡のほぼ中央部付近に確認されるが、中心付近は非常にぼやけた墨痕で、左側面に近づくほどやや明瞭になる。詳細に観察すると、墨痕がある所まで剝ぎ取りが及んでいるとみなされるので、本来文字を記した木面は既に欠失し、木に染み込んだ墨痕が残存していると思われる。中心より右寄りは一層長く剝ぎ取りの影響が及んだこともあり、右側面に近い部分の墨痕は欠失したのであろう。以上のような状況によって判読はできなかった。なお、上端部約1cm下にも墨痕が残る可能性がある。

4）小　　結

以上より5・6号木簡については不明な点が多いが、2号木簡は追善に使用された可能性が考えられる。注目されるのは、館内部から見て堀を隔てた丘陵には墓域の可能性もある坊ヶ山石塔群が存在することである[2]。坊ヶ山石塔群は五輪塔などが出土したとされ、これに向かって追善供養を行った可能性も推測できる。堀1の内側には高さは不明であるが、土塁が存在し、土塁上で追善供養が行われ、使用されたのであろうか。

また1・3・4号木簡の形状は初見資料であり、その希少価値は高く、資料の増加に期待したい。

1）ほかは近世に該当するものが大半であり、15世紀代のものは少ない。
2）時期を中心とする詳細については明らかでない。

第 IV 章　東興屋遺跡

1 概　　要

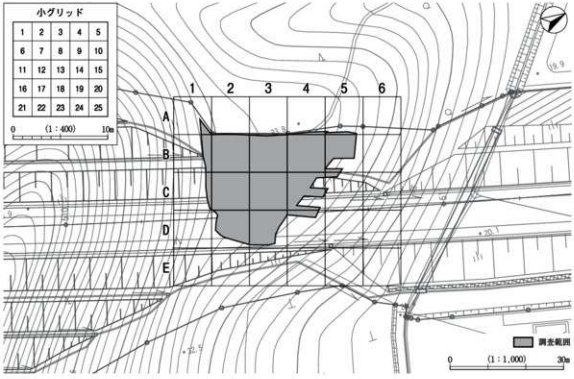
A　遺跡の概要

東興屋遺跡は、門前川下流域の左岸に広がる岩船丘陵上に立地する。遺跡は丘陵中腹に位置し、周囲は起伏に富む険しい地形である。調査区周辺の地形を詳しくみると、南側は東西方向に伸びる尾根からの急傾斜地が迫り、調査区内で一旦平坦となる。北側は再び急傾斜地となって門前川の沖積地に至る。東側も北側同様に急峻な下り勾配となり、丘陵の端部を形成する。一方、西側は北・東側と異なり幾分緩やかな下り勾配となる谷地形を呈する。調査区内の高低差は 2 mほどで、標高は 32 ～ 34 mを測る。

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居 2 軒、竪穴建物 1 軒、陥穴 1 基、土坑 3 基、ピット 96 基、ほかに遺物が集中する地点を 3 か所確認した。出土した土器は、中期前～中葉の汎北陸系・越後系・汎東北系のものである。石器は石匙・不定形石器・剝片・磨製石斧・石錘・磨石類などが出土した。調査面積は 798m^2 である。

B　グリッドの設定

調査区の地形を考慮し南西に任意の基点（1A　X = 246443.145、Y = 87826.841）を設置し、10 m四方の方眼を組み大グリッドとした。グリッド南北ライン（1A － 5A（X = 246477.881、Y = 87846.674））は真北から 29° 43′ 24″ 東偏している。



第 16 図　東興屋遺跡　グリッド設定図

大グリッドは南西隅を基点とし、南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベットとし「1A区」のように表示した。大グリッドはさらに2m四方に25分割し、小グリッドとした。小グリッドは1～25のアラビア数字で表し、南西隅が1で、北へ2・3・4・5、東へ6・11・16・21の順で、北東隅を25とした。小グリッドは大グリッドの後に続けて「1A25」のように表示した。

C　基本層序

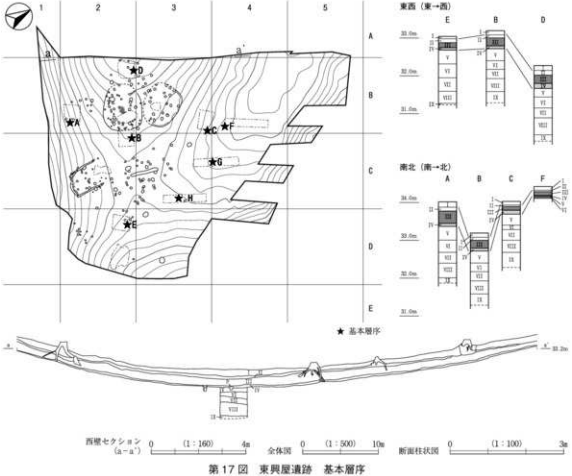
基本層序は、調査区内の斜面地形を考慮して南北斜面部分2か所（A・C）、平坦部分2か所（B・E）、西縁斜面部分1か所（D）、支尾根部分3か所（F～H）で確認した。Ⅰ層は暗褐色土層、Ⅱ～Ⅳ層は黒褐色土層、Ⅴ～Ⅸ層は黄褐色土層と大きく3分することができる。遺物包含層はⅢ層であるが、樹木根による攪乱を受けている部分が多い。また、北側の微高地では、堆積が総じて薄いためⅡ・Ⅲ層は明確に分層できなかった。以下、基本層序を記していく。

Ⅰ層　暗褐色土（7.5YR3/4）しまり・粘性弱い。円礫（5～20mm）を少量含む。表土。

Ⅱ層　黒褐色土（10YR2/1）しまり・粘性やや弱い。暗褐色土ブロックを中量含む。円礫（5～20mm）を少～中量含む。Ⅰ・Ⅲ層の漸移層。

Ⅲ層　黒褐色土（10YR4/4）しまり・粘性普通。礫（5～20mm）を中量含む。遺物包含層。層厚は、尾根上で20cm、谷内で40cmほどを測る。

Ⅳ層　褐色土（10YR4/4）しまり・粘性やや強い。礫（2～15mm）を少量含む。Ⅲ・Ⅴ層の漸移層に相当する。



第17図　東興屋遺跡　基本層序

層厚は、尾根上で2～5cm、谷内で20cmほどを測る。

Ⅴ層　黄橙色土（10YR8/6）しまり・粘性強い。礫（2～20mm）を微量含む。

Ⅵ層　黄橙色土（10YR8/6）しまり・粘性強い。礫（2～20mm）を少量含む。

Ⅶ層　明黄褐色土（10YR7/6）しまり・粘性強い。礫（2～20mm）を少～中量含む。

Ⅷ層　明黄褐色土（10YR7/6）しまり・粘性強い。上層よりも粘性に富む。礫（2～20mm）を少量含む。

Ⅸ層　明黄褐色土（10YR7/6）しまり・粘性強い。上層よりも粘性に富む。礫（5～7mm）を微量含む。

2　遺　　構

A　遺構の概要

検出した遺構は、竪穴住居2軒、竪穴建物1軒、陥穴1基、土坑3基、ピット96基の計103基である。また、2C区北側から3C区南側（遺物集中1）、2C区西側（遺物集中2）、3B区南西側（遺物集中3）で遺物が集中する地点を確認した。遺構の分布は斜面地の調査区内にあって比較的平坦な部分に集中する。陥穴や土坑・ピットが集中する2・3C区の境付近が調査区内で最も平坦となる場所である。竪穴住居が位置する2･3B区境付近は、南北方向の比高差が1mほどとなるが、東西方向は0.6mと幾分傾斜が緩くなる。また竪穴建物を検出した2C区の南側は、丘陵北斜面に当たり、南北方向の比高差は0.8mを測る。遺構の検出層位は竪穴住居・竪穴建物がⅣないしⅤ層上面で、陥穴・土坑・ピットはⅤ層上面である。

B　記述の方法

遺構番号は、種別を問わず検出したものから番号を付与した。整理作業段階で遺構と認定できなかったものについては欠番とした。遺構の略称は竪穴住居・竪穴建物を「SI」、陥穴・土坑を「SK」、柱穴・ピットを「P」とした。なお、SIについては、炉を有するものを竪穴住居、無いものを竪穴建物とした。

遺構の観察表は、「C 遺構各説」で記述したものに限って掲載した。

C　遺構各説

1）竪穴住居

SI1（図版29・33・66・67）

調査区中央の西寄り、2・3B区にかけて位置する。Ⅴ層部分において壁の立ち上りを検出したが、Ⅲ層掘削中いきなり炉が見つかり、その段階では覆土のほとんどが残っていなかった。Ⅳ層下部からⅤ層上面に床面が構築されていた。遺構内の東側には後世の風倒木痕があり、床面・炉の一部が破壊されていた。しかし、風倒木痕よりも深い柱穴は、辛うじて残っていた。平面形は楕円形を呈する。長径6.07m（推定値）、短径5.12m、確認面（Ⅳ層下部）からの深さ0.05mを測る。床面積は26.13m^2（推定値）である。長軸方位はN-59°-Wである。床は貼床されている。貼床土はⅣ層が主体で、Ⅴ層の黄褐色土ブロックを中量含む（6層）。主柱穴と考える柱穴の外縁と壁の間には小さな段差がある。壁際が高く、この部分にも貼床が確認できた。他遺跡の類例からみて、ベッド状遺構の可能性がある。また、SD41は周溝状の浅い穴である。覆土は5層に分層した。1～3層は土色からⅢ層に由来すると考える。4層は床面上、5層は壁際に堆積する。ピットは住居内から計49本検出した。主柱穴については、確実ではないがP3・5・7・12の4本を想定している。炉からの距離、柱穴の平面規模などが同様であり、P3についてはほかの主柱穴と比べて浅いが、

覆土が共通する。主柱穴としたピットの芯心間の距離は、P3・5が2.05 m、P7・12が2.35 m、P3・12が2.9 m、P5・7が2.85 mを測る。炉は地床炉である。住居の中央やや東寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.95 m、短径0.60 mを測る。炉付近の床面には同心円状に被熱痕が広がる。

本遺構から出土した土器の総重量は約2,200 gで、破片数にして約130点である。そのうち2～4層から出土したものや特徴的なものを15点図化した。遺構内における遺物の分布は、比較的東側にまとまっている。土器は、汎東北系土器（8～10・15）が主体で、若干の汎北陸系土器（1～6）が加わる。そのほか越後系土器が1点（鶏頭冠突起（7））出土した。石器は、磨石類（133）が出土した。遺物の出土量はSI2・SI4と比べ少量である。遺構の時期は、出土遺物及び遺構の形態的特徴から縄文時代中期中葉と考える。

SI2（図版30・33・67・68）

調査区中央の西寄り、3B区に位置する。炉はⅣ層中に構築され、遺構の東側では、壁の立ち上がりを確認できたが、西側は谷に向かう斜面地のため確認できなかった。遺構内の中央南寄りには後世の風倒木痕があり、破壊されていた。平面形は楕円形を呈する。長径6.93 m（推定値）、短径5.85 m（推定値）、確認面（Ⅱ層下部）からの深さ0.19 mを測る。床面積は22.15m^2（推定値）である。長軸方位はN-58°-Wである。床面と考えた硬化面は、炉を境として東側部分のみに確認でき、南側は斜面のため流失していた。また、硬化した面は炉の周辺から東側の壁際に向かってしまりが弱くなる。覆土は3層に分層した。1・2層は土色からⅢ層に由来すると考える。3層は床面上に堆積する。ピットは住居推定範囲内で計22本検出した。主柱穴については、確実ではないが配置や他遺跡の類例などから考えてP5・8・12・13・26・27の6本を想定している。主柱穴としたピットの芯心間の距離は、P8・12が1.95 m、P13・27が2.80 m、P5・26が2.20 mを測る。しかし、この6本はほかの柱穴と区別されるような際立った特徴がない。炉は地床炉である。住居内のやや東寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.35 m、短径0.29 m、深さ0.08 mを測る。炉付近の床面には、同心円状に被熱痕が広がる。

本遺構から出土した土器の総重量は約5,700 gで、破片数にして約170点である。そのうち1・2層から出土したものや特徴的なものを17点図化した。遺構内における遺物の分布は、炉とP8周辺を中心にまとまっている。土器は、汎東北系土器（22～26）と越後系土器（16～21・29・30）が主体で、小破片のため図化していないが汎北陸系土器も出土した。石器は、石匙（116）、不定形石器（119・120）、磨製石斧（122・123）、磨石類（128・132）が出土した。SI1・SI4と比べ石器の出土が多い。遺構の時期は、出土遺物及び遺構の形態的特徴から縄文時代中期中葉と考える。

2）竪穴建物

SI4（図版31・33・69・70）

調査区中央の南西寄り、2C区に位置する。覆土の1層から径1～3cmほどの炭化物がまとまって出土し、その直下で不明瞭ながら硬化した面を確認した。壁は南側以外では確認できなかった。また北側は後世の風倒木痕による影響を受けていた。平面形は長方形を呈する。長軸4.38 m（残存値）、短軸3.34 m、確認面（Ⅳ層）からの深さは南側で0.08 m、床面積は11.89m^2（残存値）である。長軸方位はN-179°-Eである。床面は南から北へ緩やかに傾斜する。南側及び南西隅では周溝状の溝2条、東側と西側はそれぞれ周溝状の溝1条が確認できた。南側及び南西隅の溝は、その方向からSD1・35とSD2・7が繋がると考える。SD1・35は隅丸に、SD2・7は方形に巡る。東側（SD3）と西側（SD2）の溝は、並行するように南北方向へと直線的に伸びる。重複関係は、SD1とSD7とではSD1が新しく、SD2とSD35とでは新旧関係

が分からなかった。建物内の覆土は3層に分層した。1層は土色からⅢ層に由来すると考える。2層は床面上や周溝の上層に堆積する。3層は周溝の下部に堆積する。ピットは建物推定範囲内で計24本検出した。主柱穴については、確実ではないが配置や他遺跡の類例などから考えてP4・9・13・18・24・31の6本を想定したが、ほかと比べて規模・覆土などに際立った特徴があるとは言えない。主柱穴としたピットの芯心間の距離は、P4・18が1.10 m、P9・13が2.50 m、P24・31が1.85 mを測る。P4とP18はやや不規則な配列となるが、床面からの深さが一致する。P9とP13はやや周溝に近い位置にある。

本遺構から出土した土器の総重量は約6,650 gで、破片数にして約200点である。そのうち1層から出土したものや特徴的なものを32点図化した。

遺構内における遺物の分布は、床面を想定した範囲を中心にまとまっている。またP9・20付近は50・56などの汎東北系土器、P32から西側は36～49・63などの越後系土器片が多く出土した。土器は、汎東北系土器（50～62）が主体で、越後系土器（36～49・63）が加わる。汎北陸系土器（33～35）は少量出土した。石器は、磨石類（129）が出土した。遺構の時期は、出土遺物や遺構の形態的特徴から縄文時代中期中葉と考える。

3）陥穴・土坑・ピット・遺物集中

SK5（図版32・70）

調査区中央の東寄り、2・3C区にかけて位置する。P91を切る。遺構の確認はⅤ層上面で行った。平面形は長楕円形を呈し、長径3.71 m、短径0.40 m、深さ0.80 mを測る。長軸方位はN-15°-Eである。覆土は6層に分層した。

遺物は土器細片が遺構北側を中心に1層から11点出土した。土器の時期は、胎土からみてすべて中期に属する。周辺からの流れ込みによるものと推測する。本遺構は、形態的特徴から陥穴と考える。遺構の時期はピットとの重複関係や形態的特徴から、中期中葉より新しいと推測する。

SK6（図版32・71）

調査区中央の東寄り、3D区の南西隅に位置する。遺構の確認はⅤ層上面で行った。平面形は楕円形を呈し、長径0.77 m、短径0.59 m、深さ0.11 mを測る。長軸方位はN-15°-Wである。覆土は2層に分層した。遺物は出土しなかった。

SK75（図版32・71）

調査区東側、3D区の東側に位置する。遺構の確認はⅤ層上面で行った。平面形は楕円形を呈し、長径0.79 m、短径0.68 m、深さ0.15 mを測る。長軸方位はN-73°-Wである。覆土は2層に分層した。遺物は出土しなかった。

SK112（図版32・71）

調査区中央の南寄り、2C区の北側に位置する。P40に切られる。遺構の確認はⅤ層上面で行った。平面形は楕円形を呈し、長径0.78 m、短径0.48 m、深さ0.20 mを測る。長軸方位は真北である。覆土は2層に分層した。遺物は出土しなかった。

P9（図版32・71）

調査区中央の東寄り,3C区の南東隅に位置する。遺構の確認はⅤ層上面で行った。平面形は円形を呈し、長径0.28 m、短径0.24 m、深さ0.15 mを測る。覆土は2層に分層した。遺物は、1層から浅鉢の口縁部（65）が1点出土した。

P16（図版32・71）

調査区中央の南寄り、2C区の中央に位置する。遺構の確認はV層上面で行った。平面形は楕円形を呈し、長径0.34 m、短径0.28 m、深さ0.38 mを測る。覆土は2層に分層した。遺物は、1層から深鉢の口縁部（66）が1点出土した。

遺物集中1（図版33）

調査区中央、2・3C区に位置する。遺物の集中はⅢ層下部で確認し、その広がりは南北8 m、東西6 mである。遺物はⅢ層中に包含されており、Ⅳ層からは出土しなかった。SK5の南端付近で炭化物粒子や焼土粒子を確認した。

遺物集中2（図版33）

調査区南寄り、2C区に位置する。遺物の集中はⅢ層下部で確認し、その広がりは南北3 m、東西3 mである。遺物はⅢ層中に包含されており、Ⅳ層からは出土しなかった。SI4の北西側付近にあり、SI4出土の遺物とは時期や系統などが異なる。80・84など北側から出土した遺物付近で炭化物粒子や焼土粒子を微量確認した。

遺物集中3（図版33）

調査区西壁際、3B区に位置する。遺物の集中はⅢ層下部で確認した。調査区外西側に広がる可能性が高い。調査区内での広がりは南北5 m、東西2 mとなる。遺物はⅢ層中に包含されており、Ⅳ層からは出土しなかった。SI2の北西に位置し、SI2出土の遺物とは時期や系統などが異なる。集中範囲で炭化物粒子や焼土粒子を少量確認した。

3 遺　物

A 遺物の概要

出土した遺物は土器・石器で、浅箱（54 × 34 × 10cm）5箱分である。土器は縄文時代中期前～中葉に帰属する。中期前葉は汎北陸系土器が主体であり、汎東北地系土器は少量である。続く中葉は汎東北系土器と越後系土器が主体で、汎北陸系土器は少量となる。石器は石匙・不定形石器・剥片・磨製石斧・石錘・磨石類などが出土した。

B 記述の方法

1）土器の分類

分類は系統・器形・文様から行った。本遺跡から出土した土器は、小破片のものが多く器形や文様帯を全体的に把握できるものが少ない。なお、高山東遺跡（以下、高山東）出土の土器（縄文時代中期）についても以下の分類に準ずる。

系　統

Ⅰ（汎北陸系）　主に北陸地方に分布する新崎式・上山田式と密接に関係する土器群。半隆起線・爪形・円形文・三叉文・麻手状などの文様が描かれる。

Ⅱ（越後系）　主に新潟県内に分布する火焔型土器・王冠型土器を含む土器群。口縁部に鶏頭冠突起、また口縁部や胴部に袋状突起・橋状突起などが貼付され、頸部・胴部に起隆帯・半隆起線・沈線・隆帯でS字状文・渦巻文などの文様が描かれる。

Ⅲ（汎東北系）　主に東北地方南半に分布する大木7b・8a・8b式土器と密接に関係する土器群。連続刺突・押捺・縄文側面圧痕・沈線・隆帯により文様が描かれ、口縁部に突起などが貼付される。

Ⅳ（系統不明）　縄文のみや無文のものを一括した。

器　　形（深鉢のみ）

A　口縁部は内湾しながら上部で外傾する。胴部はやや膨らむ（高山東2）。

B　口縁部はキャリパー形を呈する。胴部はやや膨らむ（9・50・56）。

C　口縁部はキャリパー形を呈する。胴部は膨らまない（51）。

D　口縁部は緩く内湾し、胴部は膨らまない（16）。

文　　様

1類　半隆起線上に爪形が施されるもの（33・34・86・87）。

2類　半隆起線が横・縦・斜位に施されるもの（1～3・35・100）。

3類　半隆起線によって曲線的な文様が描かれるもの（4・5・69・79・89～91・96・97）。

4類　半隆起線上に刺突・刻目が加えられるもの（68・92・93・98）。

5類　半隆起線によって円形文・三叉文などが描かれるもの（6・65・67・70・78・80・84・88・99・101）。

6類　基隆帯と半隆起線が施されるもの（7・17～21・30・49・104・105）。

7類　刻目が加えられた基隆帯と半隆起線が施されるもの（16・29・36～48・63・102・103）。

8類　隆帯上が押捺されるもの（54・66）。

9類　隆帯脇に縄文側面圧痕が施文されるもの（15・85・106）。

10類　口縁部に「C」・「S」字状などの突起が貼付されるもの（53・71）。

11類　縄文が施文され、隆帯が貼付されるもの（50・55・57）。

12類　縄文が施文され、沈線が施されるもの（22・24・25・59・60・74・75・108・110）。

13類　縄文が施文され、隆帯・沈線が施されるもの（8・9・51・52・56・58・72・81・82・107）。

14類　隆帯が貼付されるもの（10・26）。

15類　沈線が施されるもの（23・73・109）。

16類　隆帯上や器面に刺突・刻目が加えられるもの（61・62・76・83・95・111）。

17類　縄文のみ施文されるもの（27・28・77・112）。

18類　無文のもの（113・114）。

2）石器の分類

分類の基準は清水上遺跡Ⅱ［鈴木1996］に準拠した。詳細は同報告書を参照されたい。なお、高山東遺跡の出土石器も同様の分類基準とした。

石　　錐　錐部とつまみ部の区別が不明瞭で、縦長剝片を素材とするもの（高山東17、清水上石錐C1類）。

石　　匙　刃部片側縁が大きく張り出し、もう一方の側縁はほぼ直線ないし内彎する。小型のつまみをもつ傾向があり、二次加工は周縁部のみに施されるもの（117・高山東18、清水上石匙A4類）。つまみ部を上位に位置させた場合、刃部が横位に位置する横形石匙（116、清水上石匙B類）。

不定形石器　大型・中型で浅角度の二次加工で刃部を作りだすもの（高山東22、清水上不定形石器G類）。

正面に礫表皮を多く残す剥片を用い、小型で浅角度の二次加工で刃部を作りだすもの（118・120、清水上不定形石器H類）。剥片の端部のみに連続的な二次加工を施し刃部とするもの（119、清水上不定形石器I類）。使用痕と考えられる微細剥離・摩耗・光沢等が剥片の縁辺に観察できるもの（121・高山東19～21、清水上不定形石器J類）。

剥片類　正面の一部が自然面であり、剥離面打面で、剥離が2つ以上のもの（高山東23、清水上剥片B3類）。

磨製石斧　定角式磨製石斧で、長さが11cm以上のもの（123、清水上磨製石斧A1類）。定角式磨製石斧で、長さが4cm以上11cm未満、幅が2cm以上のもの（122・高山東24、清水上磨製石斧A2類）。

石　皿　縁や使用面を加工していないもので、使用面が弓状にやや深く窪むもの（高山東28、清水上石皿B2類）。

磨石類　磨痕だけのもの（129～132・高山東27、清水上磨石類A類）。凹痕だけのもの（133、清水上磨石類E類）。磨痕と敲打痕のもの（128、高山東26、清水上磨石類F類）。敲打痕だけのもの（高山東25、清水上磨石類G類）。

C　遺物各説

1）竪穴住居・竪穴建物出土の土器

SI1（図版34・72）

1は深鉢の口縁部片で、半隆起線が横位に3条施される。2・3は深鉢の口縁部片で、半隆起線が施される。胎土から同一個体の可能性がある。4・5は深鉢の胴部片で、半隆起線が縦位に施される。6は深鉢の胴部片で、三叉文開に円形文が描かれる。7は鵜頭冠突起で前脚部の可能性がある。8・9は口縁端部に突起、口縁部に隆帯が貼付される。9は器面に縄文を施文した後、頸部は沈線によって横位に区画され、胴部は3条一組の縦位沈線が施される。10は深鉢の口縁部片で、隆帯によって渦巻文が描かれる。13は底部外面に網代痕が確認できる。14は小型の深鉢である。15は浅鉢の口縁部～胴部片で、口縁部は窄たれ、その直下に隆帯が巡らされる。隆帯脇は縄文開面圧痕が施文される。分類は、1～3がI群2類、4・5が1群3類、6が1群5類、7がII群6類、15がIII群9類、8・9がIII群13類、10がIII群14類に属する。

SI2（図版34・72）

16は深鉢の口縁部～胴部片で、4単位の波状口縁を呈する。文様の起点となる波頂部の外面は、三脚状の突起と横状突起が貼付され、その直下に刻目が加えられた逆「S」字状の基隆帯が垂下し、逆「S」字文の下端は袋状突起へと繋がる。頸部は内面に稜を有し、胴部は2条の基隆帯とその中間に1条の半隆起線が組み合わさり、3条一組で縦位区画文が描かれる。口縁波頂部の左側面は抉られる。17・18は深鉢の口縁部片で、胎土から同一個体の可能性がある。波状口縁を呈し、波頂部に袋状突起が貼付され、17は剥落している。19は深鉢の口縁部片で、波状口縁を呈し左側縁は抉られる。20・21は深鉢の胴部片で、渦巻文が描かれる。22は深鉢の口縁部片で、緩い波状口縁を呈し波頂部分の断面形態は内側に肥厚し、外面に瘤が貼付される。口縁端部には沈線が施される。23は沈線によって渦巻文が描かれる。24・25は深鉢の胴部片で、縄文が施文された後、24は斜位、25は渦巻き状に沈線が施される。26は口縁部に付される突起の可能性がある。27・28は深鉢の口縁部～胴部片で、縄文が施文される。28は緩い波状口縁を呈し、断面形態は内側に肥厚し、直下に稜を有する。29は深鉢の胴部～底部片で、基隆帯と半隆起線が縦位に施される。30も29と同様に半隆起線が縦位に施される。29は胎土や、基隆帯上に刻目が加えられ

る特徴から16と同一個体の可能性がある。31は底部外面に網代痕が確認できるが、磨り消されている。分類は、17～21・30がⅡ群6類、16・29がⅡ群7類、22・24・25がⅢ群12類、26がⅢ群14類、23がⅢ群15類、27・28がⅣ群17類に属する。

SI4（図版34・35・72～74）

33は深鉢の口縁部片、34は深鉢の胴部片で共に爪形が施される。36～48・63は黔土から同一個体の可能性がある。文様は基隆帯と半隆起線によって渦巻文や逆「U」字状の文様が描かれ、基隆帯上に刻目が加えられる。37は袋状突起が貼付される。45～47は鵜頭冠突起で、45は頭部の内側、46・47は前脚部に相当する。48はメガネ状突起である。50・51・55～57は深鉢の口縁部から胴部・底部に至る資料である。いずれも縄文が施文された後、隆帯が貼付される。隆帯は細い紐状を呈し、貼付部分は調整が不十分なため、剥落が著しい。50はキャリパー形を呈する。胴部上半は緩く膨らみ、下半は窄まる器形を呈する。口縁部には細い紐状の隆帯が貼付される。頸部には、口縁部と同様な隆帯が4条巡らされる。胴部は縄文のみが施文される。51は胴部に横・縦位の沈線が施される。頸部に描かれる区画文は、50・56・57が隆帯、51・55が沈線による。52は深鉢の口縁部片で、隆帯が貼付され深い沈線が施される。53は深鉢の口縁部片で、波状口縁を呈し口縁端部に沈線が施される。口縁部には「C」字状の突起が付される。54は深鉢の口縁部片で、隆帯上に押捺される。58～60は縄文が施文された後、沈線が施される。58は深鉢の頸部～胴部片で、頸部の隆帯が剥落している。61は深鉢の口縁部片、62は深鉢の胴部片で共に連続刺突が加えられている。61は口縁端部に沈線が施され、口縁部に刺突が加えられたボタン状の瘤が貼付される。分類は、33・34がⅠ群1類、35がⅠ群2類、49がⅡ群6類、36～48・63がⅡ群7類、54がⅢ群8類、53がⅢ群10類、50・55・57がⅢ群11類、59・60がⅢ群12類、51・52・56・58がⅢ群13類、61・62がⅢ群16類に属する。

2）ピット・遺物集中出土の土器

P9（図版35・73）

65は浅鉢の口縁部片である。端部は面取りされ、横位で扁平な半隆起線が2条施される。半隆起線上は連続して押捺される。分類は1群5類に属する。

P16（図版35・73）

66は深鉢の口縁部～胴部片である。口縁端部には、突起が付されると考える。口縁部の断面形態は内に屈曲した後、やや外傾する。口縁部は半隆起線が横位に1条施され上部を無文帯とし、半隆起線直下に隆帯が1条巡り、隆帯上は連続して押捺される。隆帯以下は縄文が施文される。分類はⅢ群8類に属する。

遺物集中1（図版35・36・73）

67は深鉢の頸部片で、縦位の連続する半隆起線や彫去手法の三叉文が横位の半隆起線によって区画され、単位文となる。68は深鉢の口縁部～頸部片で、縦位の連続する半隆起線が施された後、半隆起線上に刺突状の刻目が付く。71は深鉢の口縁部片で、口縁部に突起が付され内面は欠損しているが「C」字状のモチーフと推定する。口縁端部には隆帯が鋸歯状に貼付される。72は深鉢の口縁部片で、隆帯が貼付される。器面は著しく摩耗・風化している。73～75は沈線が施される。73は深鉢の口縁部片で、欠損しているが渦巻文が描かれると考える。74は深鉢の胴部片で、縦位に沈線が施される。器面が著しく摩耗・風化している。75は深鉢の胴部片で、縄文が施文された後、3条一組の沈線が横位に施される。76は深鉢の口縁部片で、連続刺突が加えられる。口縁部の内面には縦・横位の沈線が施される。77は深鉢の胴

部片で、縄文が施文される。分類は、69がⅠ群3類、68がⅠ群4類、67･70がⅠ群5類、71がⅢ群10類、74・75がⅢ群12類、72がⅢ群13類、73がⅢ群15類、76がⅢ群16類、77がⅣ群17類に属する。

遺物集中2（図版36・73・74）

78は深鉢の口縁部片で、波状口縁を呈する。3条の半隆起線が施され、三叉状や円形の文様が描かれると考える。80は深鉢の頸部～胴部片で、頸部に半隆起線により枠状に区画し、枠内は彫去手法によって三叉文が描かれる。胴部上半には蕨手状の文様が描かれる。蕨手の渦巻き部分から隣合わせでもう1条描かれ、それが一つの単位文となり斜位に流れる。胴部下半は、縦位の半隆起線となる。84は浅鉢の口縁～底部で、口縁部が内傾し、頸部は屈曲して底部に至る「く」の字形の器形となる。口縁端部の調整はP9出土の65と類似し、面取りされる。2条の半隆起線により枠状に区画され、単位文となり横位に連結する。連結部上端は刺突が加えられた円形の瘤が貼付される。その下にも隆帯が貼付されているが剝落している。81は深鉢の口縁部片、82は胴部片で胎土から同一個体の可能性がある。縄文が施文された後、深い沈線が施される。81は口縁部に突起が貼付される。83は深鉢の胴部片で、沈線による渦巻文、隆帯上に連続刺突が加えられる。85は大型突起である。突起の中央は孔が穿たれ、突起の右側面は抉られる。器面は縄文側面圧痕が施文される。分類は、79がⅠ群3類、78・80・84がⅠ群5類、85がⅢ群9類、81・82がⅢ群13類、83がⅢ群16類に属する。

遺物集中3（図版36・74）

86・87は深鉢の口縁部片・胴部片で、爪形が施される。88は深鉢の口縁部片で、口縁部に小型の突起が付される。外面は、幅の広い半隆起線が施された後、その両脇を幅の狭い半隆起線でなぞる。突起の内側は隆帯を円形に貼付し、内部を窪ませる。外面の突起下は、幅の狭い半隆起線によって横位に区画され、区画文と突起の据部分の間に縦位の半隆起線が施される。区画文以下は幅の狭い半隆起線によって鋸歯状に描かれる。89～91は深鉢の胴部片で、半隆起線により渦巻き状に描かれる。92・93は深鉢の胴部片、95は浅鉢の口縁部片で器面に刺突が加えられる。92は扁平な半隆起線間に刺突が加えられる。93は縦位の半隆起線が施された後、横位の半隆起線によって区画される。縦位の半隆起線は、遺物集中1出土の68と同様の文様が描かれるが、本資料は刺突が斜位に加えられる。94は底部外面に網代痕が確認できるが、磨り消される。95は口縁部が内に屈曲し端部は外に開く。口縁部に交互刺突が加えられる。分類は、86・87がⅠ群1類、89～91がⅠ群3類、92・93がⅠ群4類、88がⅠ群5類、95がⅢ群16類に属する。

3）遺構外出土の土器（図版36・74）

96・97は深鉢の胴部片で、縄文が施文された後、96は縦位、97は円形に半隆起線が施される。98は深鉢の胴部片で、扁平な半隆起線上に刻目が加えられる。99は深鉢の胴部片で、玉抱三叉文が描かれる。100は深鉢の口縁部片で、縦・横位に半隆起線が施される。平口縁としたが、波状口縁の可能性がある。101は深鉢の胴部片で、半隆起線上の一部に隆帯が貼付される。102・103は深鉢の口縁部片で、口縁部に鋸歯状の突起が貼付される。器面は大部分が剝落しており文様が判然としないが、基隆帯と半隆起線によって文様が描かれると考える。SI4出土の36～48・63と胎土から同一個体の可能性がある。102は口縁端部に単沈線が3条（4条か）施される。魚沼市清水上遺跡［寺崎1996b］出土土器（清水上遺跡Ⅱ　図版100　414）には鶏頭冠突起が付される口縁端部に単沈線が3条施される。本資料もおそらく鶏頭冠突起が付されていたものが破損した可能性がある。104は深鉢の胴部片で、隆起線によって渦巻文が描かれる。器面は著しく摩耗・風化している。105は鶏頭冠突起の頭部と考える。106は深鉢の口縁部片で、縄文側

面圧痕が隆帯脇に施される。107は深鉢の胴部片で、隆帯が貼付される。108～110は深鉢の口縁部～胴部片で、沈線が施される。109はSI2出土の26と貼土・文様から同一個体の可能性がある。111は口縁部に連続刺突が加えられる。112～114は縄文のみ、または無文の土器で、112は深鉢の口縁部で縄文が施文される。113は深鉢の口縁部～胴部片、114は浅鉢の口縁部～胴部片で共に無文である。114は口縁部が内側に肥厚する。分類は、100がⅠ群2類、96・97がⅠ群3類、98がⅠ群4類、99・101がⅠ群5類、104・105がⅡ群6類、102・103がⅡ群7類、106がⅢ群9類、108・110がⅢ群12類、107がⅢ群13類、109がⅢ群15類、111がⅢ群16類、112がⅣ群17類、113・114がⅣ群18類に属する。

4）石　　器

石　匙（図版37・74）　116はSI2の1層、117は42TのⅢ層から出土した。116は、正面の右側縁から下辺にかけて連続する二次加工が片面に施される。左側縁は、素材形状をそのまま活かしており、微細剥離がわずかに施されるのみである。つまみ部は両側縁から剥離が施され、刃部との境を明瞭にしている。また、つまみ部には黒色の付着物が確認できる。B類に属する。117は、正面の両側縁に不連続な二次加工が施される。下辺は素材面のままである。つまみ部を意識した剥離は左側縁に明瞭であるが、右側縁は微細剥離が施されるのみである。A4類に属する。石材は116・117共に珪質頁岩である。

不定形石器（図版37・75）　118・121は遺物集中3のⅢ層、119・120はSI2の1層から出土した。118は左側縁から下端にかけての不連続な微細剥離は、使用の結果付いた剥離と考える。H類に属する。119は縦長剥片を素材とし、両側縁の一部に連続した微細剥離が観察できる。I類に属する。120は裏面の右側縁から下端にかけて不連続な剥離が観察できる。正面は礫表皮である。H類に属する。121は下端部がやや錐状を呈しており、微細な剥離が観察できる。これは使用の結果付いた剥離の可能性がある。J類に属する。石材は118～120が珪質頁岩、121が流紋岩である。

磨製石斧（図版37・75）　122・123はSI2の1層から出土した。122は刃部が欠損しているほか、全体的に摩耗・風化が著しい。側縁・基部は平坦で、横断面は隅丸長方形を呈する。A2類に属する。123は小型の製品である。器面の一部は研磨が行き届いていない。平面形は撥形に近く、左側縁と正面の間の稜は明瞭である。一方、右側縁は素材面の形を残している。A1類に属する。石材は122が凝灰岩、123が蛇紋岩である。

石　鏃（図版38・75）　124は遺物集中1のⅢ層、125は遺物集中2のⅢ層、126は調査区内一括、127は3D区のⅢ層から出土した。どれも扁平な楕円礫を利用し、その長軸方向の両端に剥離または敲打により抉り部を作りだしている。また124と126の片側縁には剥離（124）・敲打（126）が加えられている。石材は124・126が閃緑岩、125が花崗岩、127が凝灰岩である。

磨 石 類（図版38・75）　128・132はSI2の1層、129はSI4の1層、130はSI1の1層、131は遺物集中2のⅢ層、133は2B区のⅢ層から出土した。128は円礫を利用しており、正・裏面に磨痕、正面中央部にわずかに敲打痕が確認できる。また、正面にはススが付着し、亀裂も生じていることから、被熱していることが窺える。F類に属する。石材は凝灰岩である。129は平面形が隅丸の三角形状を呈している。右側縁に磨痕が確認できる。130～132は欠損品で、共に右側縁に磨痕が確認できる。129～132はA類に属する。石材は4点とも凝灰岩である。133は正・裏面の中央部に敲打による凹が観察できる。E類に属する。石材は砂岩である。

4 ま と め

A 土　　器

ここでは本遺跡から出土した土器の編年的位置について整理してみたい。北陸系は布尾和史［布尾2007］、越後系は小熊博史［小熊2003b］、東北系は丹羽茂［丹羽1981］の論考を参考とした。また新潟県内における並行関係については高橋保・寺崎裕助［高橋・寺崎1999］によった。

汎北陸系土器（1～5類）　80は胴部に半隆起線によって蕨手状の文様が斜位に描かれる深鉢である。文様が斜位に流れる特徴は上山田式1期にみられる。84は頸部で屈曲し「く」の字の器形となる浅鉢である。新崎式～上山田式期においては一般的な形態であり、新潟県内において類例が多い。そのほか、本遺跡では1～4類が新崎式2期並行、5類が上山田式1期並行、また5類の浅鉢（65・84）については、新崎式2期～上山田式1期並行と考える。このように、汎北陸系は、新崎式2期～上山田式1期並行に位置付けられる。また、新潟県内では中期前葉5～6期に相当する。

越後系土器（6・7類）　16は器高が残存値で18cmを測る。胴部上半に施される横位の逆「S」文の割り付けから考えて胴部下半から底部の器高は10cm以内であり、少なくとも全体で30cm以内の器高と推測する。波状口縁の波頂部左側面が抉られ、基隆帯上に刻目が加えられる特徴から、2類B種に相当する[1]。また、三脚状の突起・横状突起も貼付される。本資料はすべての波頂部が残存していないが、4単位で突起が二対2単位となる王冠型土器と考える[2]。36～48・63・102・103は、口縁部破片（36・102・103）の口径からみて比較的大型になると考える。基隆帯上に刻目が加えられるが、楕円の刻目でないことから1類A種に相当する[3]。また、本遺跡で6・7類としたほかの土器も古段階のものと考える。このように、越後系は、火焔型土器・王冠型土器共に古段階に位置付けられる。また、新潟県内では中期中葉3期に相当する。

汎東北系土器（8～16類）　8・9・50・51・56は、器形がB類（9・50・56）・C類（51）に相当する深鉢である。口縁部に貼付される隆帯は細い縄状を呈し、調整が粗い特徴から、大木8a式並行に相当する。また、3本一組の沈線（9・51）が施されるものは、同式の古～中段階の特徴［森1998］とされる。15・85は縄文側面圧痕が施される浅鉢である。15は右側縁が抉られる大型の突起を有することから大木7b式並行に位置付けられるが、県内での出土例は少ない［齋田2000］。そのほか、本遺跡では8・9類が大木7b式並行、16類が大木7b～8a式並行、10～13類が大木8a式並行、14類が大木8a～8b式並行、15類が大木8b式並行と考える。このように、汎東北系は大木7b・8a・8b式並行に位置付けられる。また、新潟県内では中期前葉5・6期～中葉1～3期に相当する。

以上のように、本遺跡から出土した土器の詳細時期は中期前～中葉に収まり、土器型式の上では新崎式2期・上山田式1期、大木7b式・8a式・8b式に並行し、越後系は火焔型・王冠型の古段階の特徴と合致する。主体的な時期は、出土量の割合から中期中葉の大木8a式並行である。以前から、火焔型土器・王冠型土器を含む越後系の土器は大木7b・8a・8b式に伴うものであることが指摘されている［品田1987、

1）品田高志のAⅡ類［品田1987］、寺崎裕助のⅡC段階［寺崎前掲］に相当する。
2）突起が二対2単位となる王冠型土器は、村上市前田遺跡［富樫ほか1993］、五泉市大蔵遺跡［川崎ほか2001］、十日町市笹山遺跡［菅沼1998］、魚沼市清水上遺跡［田海ほか1990、寺崎1996b］などで類例が認められる。
3）このほか、寺崎のⅡC段階［寺崎前掲］に相当する。

寺崎 1990・1996a、小熊前掲]。本遺跡においても、その並行関係を追認する形となった。

B　竪穴住居・竪穴建物

小熊博史によると、縄文中期の竪穴住居の平面形態は、円系列・方系列の2つに大別される。住居規模の平均は平面形に関わらず、長軸 5.98 m、短軸 4.42 m、床面積 20 ～ 30m^{2}で、主柱穴は、中葉以降になると6、8本の偶数が主流となり、円系列の住居に限っては、5、7本などの奇数もみられる。炉は、地床炉（前葉）→石組炉（中葉）→複式炉（後葉）と変遷する［小熊 2003a］。ただし地床炉については中期全般を通じて構築されるようである［増子 1999］。

本遺跡で検出したSI1・SI2・SI4と比較してみると、SI1・SI2が円系列、SI4が方系列で、円系列の規模は中期の平均に近い。また、方系列のSI4は南側で周溝が途切れるものの隅が丸い。これは同系列の下越1（佐渡を除く阿賀野川から北）地域における「長方形の住居は隅丸状の形態（長楕円形に近い）」［小熊前掲］という特徴を示すと考える。

このように、本遺跡で検出した竪穴住居及び竪穴建物は平面規模・形態、付帯施設などにおいて中期の特徴を備えている。

C　集　　落

本遺跡で検出した遺構は、竪穴住居2軒・竪穴建物1軒・陥穴1基・土坑3基・ピット96基のほか遺物集中3か所である。拠点的な集落に比べ遺構・遺物は少なく、小規模集落の様相を示している。

遺跡周辺の地形をみると、SI1・SI2の西側に緩い谷地形が続き、この方面への集落の広がりが予想される。しかし、SI4の外縁部は南側の尾根が迫り、北・東側についても沖積地に至る急斜面で、集落の伸びは想定できない。このように、集落は地形的制約を受けた狭小な緩斜面地に立地するという特殊性がある。

遺構の配置については、SIをすべて居住施設と仮定した場合、それらは緩斜面地に位置し、比較的平坦となる2・3C区に構築されない点が興味深い。またSIの長軸を追ってみると、3軒共2・3C区の平坦部に向くことが看取され、ここを特別な場と認識していた可能性が高い。

遺物が出土した地点は、主に竪穴と遺物集中である。竪穴から出土した土器の系統は、SI1で汎東北系、SI2・SI4は汎東北系・越後系を主体とする。時期については、概ね中期中葉である。一方、遺物集中から出土した土器の系統は、遺物集中1・2が中期前～中葉の汎東北系・汎北陸系、遺物集中3には中期前葉の汎北陸系が多い。このように両者は系統や時期において一部重複するものの、全体としては異なった様相を示す。今回の調査では遺物集中の主体時期となる中期前葉の遺構を確認できなかったが、この時期を本集落の開始時期とすることができよう。

第Ⅴ章　高山東遺跡

1　概　　要

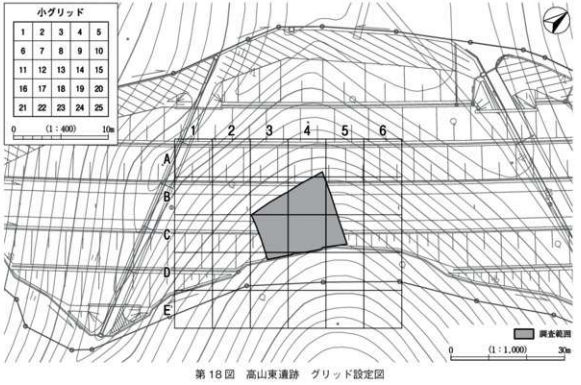
A　遺跡の概要

高山東遺跡は新潟県北部の村上市に所在し、仲間町の東部に位置する。調査地点は、南側から伸びる尾根が一部舌状に西側に張り出した部分である。本遺跡は岩船丘陵上に立地しており、丘陵の北端には東興屋遺跡が位置する。東興屋遺跡は、本遺跡から直線距離で約 300m 離れた位置にある。岩船丘陵の北側には門前川が流れており、本遺跡と門前川は直線距離で約 700m 離れている。調査区は東から西に向って傾斜し、標高は東側の高所で 29.4m、西側の低所で 24.6m、高低差が約 5m の斜面地となっている。

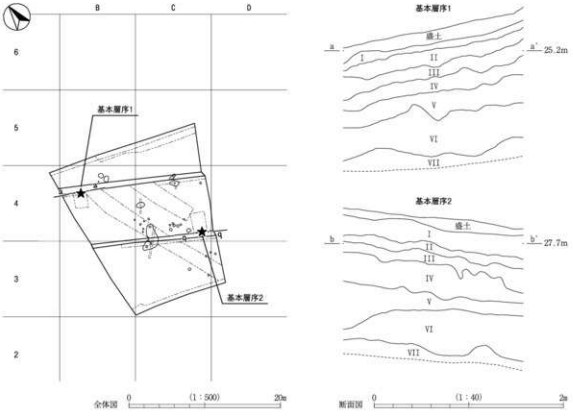
検出した遺構は土坑 5 基、ピット 23 基、性格不明遺構 2 基である。そのほか遺物包含層である Ⅲ 層中に遺物集中地点を 2 か所確認した。遺跡の時期は、遺物から縄文時代前期中葉と中期前葉である。中期前葉は本遺跡の主体であり、遺構及び Ⅲ 層から遺物が多く出土した。前期中葉は、1 基の土坑から土器と石錐が出土したのみである。

B　グリッドの設定

グリッドは南北ラインが道路法線に沿うように基点を 2 点作り設定した。2B は、X：246080.233、Y：87624.855 の座標とし、6B は、X：246111.858、Y：87649.346 とした。南北ラインは真北から 37° 45′ 19″ 東偏している。大グリッドは 10m 四方であり、名称は南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファ



第 18 図　高山東遺跡　グリッド設定図



第19図　高山東遺跡　基本層序

ベットの大文字として、両者の組み合わせで「1A区」などと表した。また小グリッドは大グリッドを2m四方に25等分して1～25のアラビア数字で表し、南西隅を1、北東隅を25とした。表記は大グリッド表示に続けて、「1A10」のように呼称した。

C　基本層序

基本層序は調査区の西側（基本層序1　4B区）と東側（基本層序2　4C区）の2か所で確認した。地表下約2mの深度で、Ⅰ～Ⅶ層の7枚の土層を確認した。Ⅰ層は現地表面を形成する表土で、Ⅲ層が遺物包含層である。Ⅱ層は試掘調査のⅡ層、Ⅲ層は試掘調査のⅣ層に対応する。Ⅳ層からⅦ層は地山層であり、Ⅳ層上面が遺構検出面である。Ⅳ層は試掘調査のⅨ層に対応する。2か所で確認した基本層序はおおよそ同じ層順であるが、Ⅵ・Ⅶ層において相違がみられたため個別に記す。

以下、基本層序を記していく。

基本層序1

Ⅰ層　黒褐色土（10YR3/1）しまり・粘性弱い。枯葉を多量に含む。表土。

Ⅱ層　暗褐色土（10YR3/4）しまり普通、粘性やや強い。小礫、炭化物（1～3mm）を微量含む。試掘調査Ⅱ層。

Ⅲ層　暗褐色土（10YR3/3）しまりやや弱く、粘性やや強い。小礫、炭化物（1～3mm）を微量含む。遺物包含層。試掘調査Ⅳ層。

Ⅳ層　褐色土（10YR6/4）しまりやや強く、粘性普通。小礫を少量含む。試掘調査Ⅸ層。

Ⅴ層　黄褐色土（10YR5/8）しまり・粘性やや強い。小礫を少量、にぶい黄褐色土を微量含む。

Ⅵ層　黄褐色土（10YR5/8）しまり普通、粘性やや強い。にぶい黄褐色土を中量含む。

Ⅶ層　黄褐色土（10YR5/6）しまり・粘性やや強い。小礫を中量含む。

基本層序 2

Ⅵ層　明黄褐色土（10YR6/6）しまり・粘性やや強い。小礫を中量含む。

Ⅶ層　明黄褐色土（10YR6/6）しまり・粘性やや強い。灰白色土を中量含む。

2 遺　構

A 遺構の概要

今回の調査で検出した遺構は、土坑 5 基、ピット 23 基、性格不明遺構 2 基である。調査範囲の東西 20m ほどの間には約 5m の高低差があり、急傾斜地である。遺構を検出した標高は 28.4m ～ 25.7m を測る。遺構の検出面はⅣ層上面である。検出した遺構は掘り込みが浅く、覆土は単層のものが多い。遺物を伴う遺構は SK20・17、SX1 であり、SK20 からは縄文時代前期中葉の土器と石錐、SK17 からは剥片、SX1 からは縄文時代中期前葉の土器と磨石類などの石器が出土した。SK20・SX1 では、口縁部から底部まで復元できる土器が 1 点ずつ出土した。SX1 は遺物がまとまって出土したため、居住施設を想定して調査を行った。しかし、炉がなく、平・断面が不整形であったため、性格不明遺構とした。また、ピット群の配列には規則性が見いだせなかった。

B 記述の方法

遺構種別の略称、遺構番号は、東興屋遺跡と同様の方法を採用した。加えて本遺跡では性格不明遺構を「SX」とした。詳細は第Ⅳ章第 2 項 B 記述の方法を参照されたい。

C 遺構各説

1）土　坑

SK20（図版 40・76・77）

調査区の中央、4C 区に位置する。平面形は長楕円形を呈する。確認面での規模は、長径 1.10m、短径 0.68m、深さ 0.40m を測る。基底面の規模は、長径 0.67m、短径 0.60m を測る。長軸方位は N-68° -W である。断面形は台形状を呈する。覆土は 3 層に分層し、1・2 層は暗褐色土に炭化物が混入し、3 層は黒褐色土に炭化物が混入する。遺物は鉢形土器（1）と石錐（17）が出土した。土器の直下に石錐が位置し、土坑底面の西寄りから出土した。時期は出土土器から前期中葉と推定した。

SK9（図版 40・77）

調査区東側、4C 区に位置する。平面形は円形を呈する。規模は、長径 0.56m、短径 0.48m、深さ 0.12m を測る。断面形は弧状を呈する。覆土は単層で、暗褐色土に炭化物とⅣ層の土が混入する。遺物は出土していない。

SK17（図版 40・77）

調査区東側、4C 区に位置する。平面形は長楕円形を呈する。規模は、長径 1.22m、短径 0.64m、深さ 0.17m を測る。長軸方位は N-54° -W である。断面形は半円状を呈する。覆土は単層で、黒褐色土に炭化物とⅣ層の土が混入する。遺物は覆土上部から剥片が出土した。

SK27（図版 40・78）

調査区の北側、4B 区に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径 0.80m、短径 0.60m、深さ 0.10m を測る。長軸方位は N-50°-E である。断面形は皿状を呈する。覆土は単層で、暗褐色土に炭化物とⅣ層の土が混入する。遺物は出土していない。

SK28（図版 40・78）

調査区の北側、4B 区に位置する。SK27 と隣接している。平面形は円形を呈する。規模は、長径 0.68m、短径 0.58m、深さ 0.14m を測る。断面形は弧状を呈する。覆土は単層で、暗褐色土に炭化物とⅣ層の土が混入する。遺物は出土していない。

2）ピット群（P2・5 ～ 8・10 ～ 16・19・21 ～ 26・29 ～ 32）（図版 40）

ピットは合計 23 基検出した。ピット同士で重複関係はない。調査区南東隅の P2・P5 ～ P8、中央やや東寄りの P10 ～ P16、中央の P21 ～ P26、P29 ～ P32 など分布にまとまりがある。規模は、平均すると長径 0.26m、短径 0.21m、深さ 0.14m である。ピットの覆土はいずれも近似しており、暗褐色土に炭化物とⅣ層の土が混入する。ただし、調査区中央で検出したピットは異なっており、P22・P26 には黒褐色土に炭化物が混入し、P29 ～ P31 は黒褐色土に炭化物と赤褐色土ブロックが混入する。P29 ～ P31 は SX1 掘削後に検出したため、SX1 より古いか同時期の可能性がある。今回検出したピット群の配置には特に規則性が見いだせなかった。また、各ピットから遺物は出土していない。

3）性格不明遺構

SX1（図版 40・78）

調査区の中央、4C 区に位置する。平面形は不整形を呈する。規模は、長軸 3.32m、短軸 1.22m、深さ 0.20m を測る。断面形は不整形を呈する。覆土は 2 層に分層した。1 層は暗褐色土に炭化物とⅣ層の土が混入する。2 層はにぶい黄褐色土に炭化物と 1 層及び、Ⅳ層の土が混入する。遺物は、土器 52 点、石器 6 点の計 58 点が、4 か所ほどの地点に分散していた。すべて 1 層から出土しており、復元可能な土器が 1 個体（2）出土した。そのほかの土器はすべて破片資料であったが、復元できた個体とほぼ同時期である。本遺構内にはピット 4 基（P29 ～ 32）が存在するが、SX1 に関わるものであるかは不明である。時期は出土土器から中期前葉と推定した。

SX18（図版 40・77）

調査区の北側、4C 区に位置する。SK17 と隣接している。平面形は長楕円形を呈する。規模は、長径 0.98m、短径 0.32m、深さ 0.14m を測る。断面形は半円状を呈する。覆土は単層で、黒褐色土に炭化物が混ざり、Ⅳ層の土が中量混入する。Ⅳ層の土がほかの遺構に比べて多いことなどから、風倒木痕の可能性がある。遺物は出土していない。

3　遺　　物

A　遺物の概要

遺物は縄文土器 86 点、石器 15 点の計 101 点が出土した。遺構内は SK20・SK17・SX1 から、そのほかは遺物包含層である Ⅲ層中から出土した。特に SX1 からは多くの遺物が出土し、全出土遺物の半数以

上を占める。そのほか、遺物集中地点を2か所確認した。土器はほとんどが中期前葉に属するもので、SK20出土土器のみ前期中葉に属する。石器の出土は少なく、不定形石器を含む剥片類・磨石類を主体とする。

B　記述の方法

遺物は、土器16点と石器12点の計28点を抽出して記述することとした。中期前葉の土器・石器の分類に関しては、東興屋遺跡と同様の基準を採用した。詳細は第Ⅳ章3項B記述の方法を参照されたい。

C　遺物各説

1）土　　器

前期中葉（図版41・79）

1は鉢である。SK20の3層から正位の状態で出土した。底部からやや膨らみながら立ち上がるが、頸部で一旦括れ、口縁部にかけて緩やかに外傾している。口縁部には3単位の小突起が付き、突起の内側は刺突される。文様は3本歯の櫛状工具による横位の押引沈線が器面全体に施され、部分的に同様の工具によるコンパス文が組み合わされている。器面には全体的にススが付着している。器厚は6mm前後と薄く、焼成は良好である。口径16.6cm、底径9.2cm、器高9.8cmを測る。胎土はやや粗く、3mm以下の石英・長石・砂を中量含む。

中期前葉

SX1（図版41・79）

2は小型の深鉢である。器形は、底部からやや膨らみながら立ち上がる。頸部で一旦括れ、口縁部はやや外傾する。口縁部には3つの小突起が確認できるが、おそらく4単位の小突起で構成されていたものと推測する。文様は口縁部に沈線が施され、頸部に半截竹管による横位の半隆起線が4条廻る。上から2条目の半隆起線には半截竹管による爪形が施される。また、爪形が施される半隆起線の直下には渦巻状の隆帯が貼付され、胴部以下の半隆起線と一体となり垂下している。その位置はすべて口縁部の小突起の下であり、欠損のため3単位の隆帯しか確認できないが、おそらく口縁部の小突起同様4単位構成であると推定する。胴部以下は縦位の半隆起線が連続して施される。口径11.7cm、底径7.1cm、器高14.7cmを測る。Ⅰ群1類に属する。口縁部がやや外傾する深鉢であることや、口縁部は横位、胴部は縦位区画になること、半隆起線・爪形など、北陸地方の新崎式の影響が強い。

3～5は胎土が類似することから同一個体と推測する。3は深鉢の口縁部破片である。小突起が確認でき、外面は半隆起線上に爪形が施される。4は胴部破片である。横位の半隆起線が3条確認でき、上から3条目には爪形が施される。半隆起線の1条目と2条目の間には、単節縄文LRが横位に施文される。5は胴部破片である。横位の半隆起線が3条確認でき、中央の半隆起線には爪形が施される。地文は単節縄文LRが横位に施文される。3～5はⅠ群1類に属する。

6は深鉢の口縁部破片である。断面形が直線的であることから、口縁部は緩やかに傾斜し、まっすぐ開く器形が想定される。外面全体に縄文が確認でき、単節縄文LRが横位に施文される。内面には指頭圧痕が確認できる。Ⅳ群17類に属する。7は深鉢の口縁部破片である。隆帯により横位・縦位に区画され、

口縁部に無文帯が作りだされている。隆帯脇に単節縄文LRによる側面圧痕が施される。8は深鉢の頸部破片である。地文は単節縄文LRが横位に施文される。また、隆帯が貼付され、隆帯脇に単節縄文LRによる側面圧痕が施される。内面には指頭圧痕が確認できる。7・8はⅢ群9類に属する。9は深鉢の底部である。底面に網代痕が確認できる。10は深鉢の胴部破片である。外面全体に単節縄文LRが横位に施文される。また焼成が良好で、外面が黒色を帯びている点で、ほかのSX1出土土器と印象が異なる。内面には指頭圧痕が数か所で確認できる。Ⅳ群17類に属する。

3B区遺物集中地点（図版41・79）

11・12は胎土や焼成の状態が類似しているため、同一個体と推測する。11は深鉢の口縁部破片である。断面形から口縁部付近で外反する器形が想定できる。口縁部の上部は横位沈線により無文帯に区画され、沈線以下は単節縄文LRが横位に施文される。12は胴部破片である。外面全体に単節縄文LRが横位に施文される。11・12はⅢ群12類に属する。

4B区遺物集中地点（図版41・79）

13・14は胎土が類似しているため、同一個体と推測する。13は深鉢の胴部破片である。横位の半隆起線が3条確認でき、中央の半隆起線に爪形が施される。14は胴部破片である。横位の半隆起線が1条と縦位の半隆起線が確認できる。口縁部下半の横位区画と胴部の縦位区画の継ぎ目部分と推測する。13・14はⅠ群1類に属する。

15は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片であり、4B区遺物集中地点のⅢ層から出土した。一部摩耗が著しいが、外面全体に縄文が確認でき、単節縄文LRが横位に施文される。Ⅳ群17類に属する。

4C区遺物包含層（図版41・79）

16は小形の深鉢の底部破片である。底面に木葉痕が確認できる。

2）石　　器

石　　錐（図版41・79）　17はSK20の3層から出土した。平面形から石鏃の可能性もあるが、厚みがあることから石錐とした。縦長剝片を素材とし、錐部とつまみ部の区別が不明瞭である。錐部は縁辺から連続剝離をし、断面形を菱形に仕上げている。基部側も縁辺からの剝離が施され、尖頭状に調整されている。正面は器面中央まで調整が施されるのに対し、裏面には中央に素材面が確認できる。石材は珪質頁岩である。時期は共伴の土器から、前期中葉と推定する。C1類である。

石　　匙（図版41・79）　3C区のⅢ層から出土した。刃部の一部とつまみが破損している。縦長剝片を素材とする。正面左側縁は弱い鋸歯を呈するのに対し、右側縁は直線的に調整されている。正面の稜線は右寄りであり、左右の側縁から長い剝離が施されている。裏面は、右側縁に剝離が施されるのみで素材面を多く残す。剝離面の切り合い関係から、裏面の側縁、正面右側縁、正面左側縁の順に剝離を施しているのが観察できる。石材は珪質頁岩である。これらの形態的・製作的特徴は、東北地方南部から北海道に分布する松原型石匙の特徴と一致する。松原型石匙は早期後～前期前葉に製作されるが［秦1991］、本遺跡では当該期の土器は出土していない。県内では、現明嶽遺跡で前期後～末葉に［高橋ほか2006］、北野遺跡下層で前期前～中葉に所属する松原型石匙が出土している［高橋ほか2003］。下限は二タ子沢A遺跡で出土した前期末～中期初頭に所属する松原型石匙である［田中ほか2003］。このことから本遺跡の石匙は、中期前葉まで下らないにしても前期中葉に位置付けることは可能であると考える。A4類である。

不定形石器（図版41・42・79）　19はSX1の1層から出土し、20～22はⅢ層から出土した。19～21

は微細剥離がみられ、22は二次加工が施される。19～21の微細剥離は側縁に集中しており、使用の結果付いた剥離とも考えられる。22の二次加工は、端部からの剥離であり、刃部を作る剥離と考えた。石材は様々で、19は玉髄、20は鉄石英、21は頁岩、22は凝灰岩である。19～21はJ類、22はG類である。

剥　片（図版42・79）　23はSX1の1層から出土した。礫の平坦部を直接打面とし、連続した剥離作業が行われたものである。石材は流紋岩である。B3類である。

磨製石斧（図版42・79）　24は4C区のⅢ層から出土した。両側面に成形段階の敲打痕及び磨痕がみられ、撥形の形状を意識していることが看取できたため、磨製石斧とした。刃部未加工の未成品と推定する。石材は流紋岩か。A2類である。

磨 石 類（図版42・79）　25はSX1の1層、26・27はⅢ層から出土した。25の平面形は長楕円形を呈する。正・裏面・両側面に敲打痕が確認できる。特に左側面の敲打痕には横位の細い窪みが複数観察できることから、剥片や両極石器のような細長いものが対象になっている可能性がある。26の平面形は円形で、断面形は楕円形を呈する。正・裏面の中央部に磨痕・敲打痕が確認できる。27の平面形は楕円形で、断面形は長楕円形を呈する。正・裏面に磨痕が確認できる。石材は、25は粗粒凝灰岩、26・27は閃緑岩である。25はG類、26はF類、27はA類である。

石　皿（図版42・79）　28はSX1の1層から出土した。正面は大きく窪み磨痕を確認できる。裏面も窪んでいるが磨痕は確認できない。また、正面には2条の擦痕もみられる。石材は粗粒凝灰岩である。B2類である。

4 ま と め

今回の調査で、遺構は土坑5基、ピット23基、性格不明遺構2基の計30基を検出し、遺物は縄文土器86点、石器15点の計101点が出土した。出土した土器から、本遺跡が縄文時代前期中葉と中期前葉の2時期に営まれたものであることが判明した。

A 土　　器

出土土器86点のうち、時期のわかるものは前期中葉が1点、中期前葉が42点で、そのほかは小破片や地文のみであるため、詳細は分からない。1の鉢は前期中葉に所属し、県内では清水上遺跡出土の土器を基本資料に寺崎裕助が「根小屋式」として分類したものに類似する［寺崎 1996b］（第20図－1）。ただし本遺跡のものは、底部に丸みがあり、直線的に立ち上がる清水上遺跡の資料とは若干異なる。文様は3本歯の櫛状工具による押引沈線・コンパス文が施文されており、大木2a式土器などに採用される技法である。類例は福島県福島市の下ノ平D遺跡出土の大木2a式土器に確認できる（第20図－2）。同様の器形も福島県西会津町の塩喰岩除遺跡出土の大木2a式に確認でき、総じて東北の影響が強い（第20図－3）。時期は、北関東地方の有尾式、関東地方の黒浜式並行と推定する。

次に本遺跡で出土遺物の多数を占める中期前葉に所属する土器であるが、Ⅰ群に属するものが多い。少量であるがⅢ群に属する土器も出土しており、Ⅱ群に属する土器は全く確認できなかった。Ⅰ群の文様の特徴は、半截竹管による半隆起線や同じく押し引きによる爪形などである（2～5・13・14）。復元個体（2）の器形は胴下半部に膨らみを持ち頸部でやや括れるが、そこから緩やかに外傾する筒形である。本遺跡のⅠ群から看取される文様や器形の特徴は、新崎式1期及び2期に共通する。東北地方の影響が顕著なもの（7・

8）は、地文に斜縄文が施され、隆帯が貼り付けられている。隆帯脇に同じ原体による側面圧痕が観察できる。斜縄文が施文される土器は、Ⅳ群17類に分類したものも含めて、原体に単節縄文LRを採用しているものが多い。本遺跡のⅢ群9類・12類は、文様の特徴や共伴関係などから大木7b式と推定する。中期前葉の土器は北陸系の新崎式、東北系の大木7b式並行と推定でき、その一時期に限られ、土器の出土量からも遺跡は短期間の活動の場であると推測する。

B　遺　　構

前期中葉

前期中葉所属の遺構はSK20であり、遺物は鉢（1）とその直下で出土した石錐（17）である。出土位置は土坑の西寄りで、土器は正位の状態であった。SK20の長軸は東西方向である。土坑墓の可能性があるが、吉峰遺跡で検出された前期の土坑墓に比べると規模がやや小さい[1]。県内で該期土坑墓の類例は少なく、今後の検出例の増加を待って再検討する必要がある。

第20図　前期中葉土器類例

中期前葉

中期前葉は本遺跡の中心となる時期である。遺物の集中地点が2か所あり、遺物の半数以上が出土したSX1も中期前葉に所属する。中期前葉の土器が出土したのはSX1のみであるが、覆土が類似することからSK20以外は中期前葉に所属すると考えた。ピットの分布にはまとまりがあるが、配列には規則性などは見いだせず、これらが何の施設に伴うものなのかは不明である。P19は1基だけ離れて検出したが、調査区外の東側に別のピット群が存在する可能性がある。ピット同士に重複関係はない。一定期間の被熱がないと残らない炉跡や竪穴住居が検出できないことからも、本遺跡の遺構群は一時期の短期的な活動痕跡を示すものと推測する。

1）県内で検出された前期の土坑墓の類例は、塩沢町吉峰遺跡の縁孔浅鉢が出土した5号土坑と、抉状耳飾が出土した10号土坑がある。5号土坑は、長径約1.66m、短径約1.06m、深さ0.37mを測る。10号土坑は、長径約1.2m＋α、短径約0.84m＋α、深さ約0.38mを測る［佐藤1990］。

第Ⅵ章　窪田遺跡

1　概　　要

A　遺跡の概要

窪田遺跡は新潟県村上市（旧神林村）南田中に所在し、南田中集落の西側に位置する。遺跡は荒川右岸の低湿地に立地し、海岸からの距離は約 2km、北側には牧目集落が存在する。18 年度調査では、2 本の農道によって調査区が 3 つに分断されており、南から A 区、B 区、C 区と呼称した［前川ほか 2007］。今回の調査地点は、2 本の農道のうち B 区と C 区を分断していた、北側の農道部分である。

18 年度調査の結果から 19 年度調査区付近の遺構を概観してみると、まず B 区北側に古代以前の打ち込み柱建物 5 棟と杭列 2 を検出している。検出層位はⅤ・Ⅵ層で、それよりも上の層は攪乱されており、古代の遺物はその攪乱土を除去する際に出土した。次に C 区北側では近世以降の土坑 1 基、溝 1 条、ピット 14 基を検出した。これらはⅡ層が遺構検出面となり、遺構出土の遺物はなく、周囲の盛土・攪乱土から出土した遺物が 18 世紀後半から 19 世紀以降のものであるため、近世後半以降に構築されたと判断した。また、B 区から C 区に跨がる遺構として SR5 を検出しており、C 区側の SR5 から SR4 が分岐して今年度調査区に向かっている。検出層位はⅥ～Ⅶ層であり、SR4 の 1 層から近代のガラス瓶が出土した。SR4 を SR5 が切っているため、SR5 の方が新しい。

19 年度調査では、Ⅶ層上面から SR5 を検出したのみとなった。SR4 は攪乱のため、検出できなかった。遺物は攪乱土から、近世の磁器 2 点及び近代以降の陶磁器類が出土した。

B　グリッドの設定

グリッドは 18 年度調査を踏襲した。詳細は窪田Ⅰ［前川ほか前掲］を参照されたい。

C　基本層序

基本層序は、18 年度調査と照合しながら記録をした。Ⅱ・Ⅲ層、Ⅴ～Ⅶ層の 5 層の土層を確認した。道路舗装及び路盤層を除去すると、中世遺構確認面であるⅡ層が現れた。Ⅳ層は 18 年度調査で B・C 区に局部的に堆積していたが、今回の調査区では確認できなかった。Ⅶ層以下においては、18 年度調査同様、Ⅶ層と同色の灰オリーブ色シルト層が確認できた。

以下、基本層序を記していく。

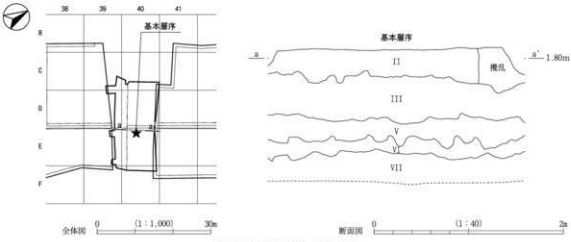
Ⅱ層　暗灰黄色粘質シルト（2.5Y5/2）しまり・粘性強い。100mm 以下の小石、砂粒、黒褐色土を少量含む。試掘調査Ⅲ層。

Ⅲ層　オリーブ黒色粘質シルト（5Y3/2）しまり・粘性強い。砂粒、黄褐色土を微量含む。試掘調査Ⅴ層。

Ⅴ層　黒褐色粘質シルト（2.5Y3/1）しまり・粘性強い。黒色土を少量、黄褐色土を微量含む。試掘調査Ⅸ層。

Ⅵ層　黒色粘質土（2.5Y2/1）しまり・粘性強い。黒褐色粘質シルトを中量含む。試掘調査Ⅺ層。

Ⅶ層　灰オリーブ色シルト（7.5Y5/2）しまりやや強く、粘性強い。黒色粘質土、暗褐色土を少量含む。試掘調査Ⅹ Ⅲ層。



第 21 図　窪田遺跡　基本層序

2 遺　　物

19 年度調査では、陶磁器類 46 点が出土した。近世の遺物が 2 点、そのほかは近・現代のものである。すべて撹乱土中から出土した。近・現代のものは、椀・ティーカップ・皿・甕などの日用品であった。これらは、今回の調査区が農道として機能していた時期のものではないかと推測する。

近世の遺物は、2 点とも肥前系磁器である。18 年度調査でも近世の肥前系陶磁器は出土陶磁器の約 9 割を占めていた。今回の遺物 2 点は、椀と皿であり、椀は 18 世紀代、皿は 17 世紀代と推定した。

3 ま と め

19 年度調査では Ⅶ 層上面から SR5 を検出したのみである。18 年度調査に比べ、土層の堆積状況が良好であり、SR5 の上部は撹乱を受けていなかった。SR5 の落ち込みは Ⅵ～Ⅶ 層で始まっており、遺物の出土はない。18 年度調査で、中世の確認面が Ⅱ 層、古代の確認面が B 区北側で Ⅴ～Ⅵ 層、B 区南側で Ⅱ～Ⅲ 層であることから、それより下層の SR5 は所属する時代が古代か、それより遡る可能性がある。今回、調査区西側で検出されるはずであった SR4 は、SR5 に切られているため、当然こちらの所属する時代も遡る可能性がある。18 年度調査では SR4 から近代のガラス瓶が出土したが、1 層出土であるので上部の撹乱で混入したものと考えたい。これらのことから、B 区北側で検出した打ち込み柱建物は SR5 の流路に沿って構築された可能性を指摘できる。

遺物は近世の磁器 2 点以外は近代以降の遺物であった。すべて撹乱土から出土した。近世の遺物が肥前系磁器であったことは、18 年度調査で肥前系陶磁器が出土陶磁器の約 9 割を占める傾向と一致した。

要　約

大館跡

1　大館跡は新潟県村上市天神岡字大館ほかに所在する。遺跡は東西約 110m、南北約 100m を測る中世の方形居館である。

2　本発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、平成 18・19 年度に実施した。本書に係る 19 年度調査面積は 3,878m^2 である。

3　遺跡は、三面川水系山田川支流の小谷川左岸に立地する。

4　発掘調査の結果、中世及び近世以降の遺構を検出した。遺構は、堀 2 条、土塁 1 基、井戸・土坑 4 基、性格不明遺構 1 基などである。このうち中世の遺構は堀 2 条、土塁 1 基、近世以降の遺構は溝 1 条、木組護岸 1 基、土坑 1 基であり、そのほかは時期不明である。

5　中心となる遺構は、館の周囲を巡ると推測する堀である。堀の最下層からは、陶磁器類のほか漆器を含む多量の木製品が出土した。

6　遺物は、縄文土器から近代陶磁器まで幅広い時代のものが出土した。中心は中世の遺物で、青白磁・白磁・青磁・瀬戸美濃焼・珠洲焼・越前焼・土師質土器・瓦器や鉄鍋、漆器を含む多量の木製品などで、15 世紀中～後葉が主体となる。

7　遺物には、高級品である皆朱漆器や京都産土師質土器皿、大型の鉄鍋などの希少品が含まれる。

8　木製品にはスギが多用され、そのほかブナ属・モクレン属・クリ・ヒノキ・ケヤキなどの樹種が確認できた。また皆朱漆器の塗布回数はほかの漆器に比べ多いことが判明した。

8　館主は、館の規模や出土遺物などから有力国人領主階級であったと推測する。

東興屋遺跡

1　東興屋遺跡は村上市東興屋字宮ノ前ほかに所在する。

2　本発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、平成 19 年度に実施した。調査面積は 798m^2 である。

3　遺跡は、門前川左岸に広がる岩船丘陵に位置し、標高 32 ～ 34 m を測る。

4　発掘調査の結果、縄文時代中期前～中葉の小集落を検出した。また、詳細時期は不明であるが陥穴の存在から一時期狩場であったことも判明した。

5　検出した遺構は、竪穴住居 2 軒、竪穴建物 1 軒、陥穴 1 基、土坑 3 基、ピット 96 基である。また遺物集中 3 か所を確認した。

6　遺物は縄文土器や石匙・不定形石器・磨製石斧・石錘・磨石類などの石器が出土した。縄文土器は、器形・文様などから中期前～中葉の汎北陸系・汎東北系と越後系である。越後系は、火焔型土器・王冠型土器が出土した。

7　小集落は丘陵中腹という特殊な地形に立地し、当該期の集落の立地や構造を考える上で貴重な調査例となった。

高山東遺跡

1　高山東遺跡は村上市仲間町字高山 351 ほかに所在する。

2　本発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、平成19年度に実施した。調査面積は353m^{2}である。
3　遺跡は、岩船丘陵内の尾根先端に位置し、標高24～29mを測る。
4　検出した遺構は、土坑5基、ピット23基、性格不明遺構2基である。縄文時代前期中葉の土器と石錐を伴ったSK20を除き、そのほかは出土遺物・覆土などから縄文時代中期前葉の帰属と推測する
5　遺物は、縄文土器や石錐・石匙・不定形石器・磨石類などの石器が出土した。土器は、器形・文様などから前期中葉・中期前葉のものである。
6　前期中葉の鉢形土器は、東北地方の大木2a式土器に類例が求められ、東北地方の影響が看取できる。
7　遺跡は、遺構・遺物などから短期間の活動の場と想定する。

窪田遺跡

1　窪田遺跡は村上市（旧神林村）南田中字窪田1521ほかに所在する。
2　調査原因、調査年度は大館跡と同じである。調査面積は264m^{2}である。
3　河川跡1条を検出した。遺物は、近世・近代以降の陶磁器類が出土した。

引用・参考文献

青木　学・松井政信・千喜良淳・北村和穂　2008　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第180集　松藤東遺跡・中曽根遺跡Ⅱ・大館跡Ⅰ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

朝倉氏遺跡調査研究所　1976　『特別史跡一乗谷　朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ－朝倉館跡の調査－』福井県教育委員会

五十川伸矢　1997　「中世の鍋釜　鋳鉄製煮炊用具の名称」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集　国立歴史民俗博物館

伊藤多三郎　1980　「第3章　第3節　諸城跡の分布」『朝日村史』新潟県朝日村教育委員会

伊藤啓雄　2002　「中世越後の城館と寺院」『第15回　北陸中世考古学研究会資料集　中世北陸の城館と寺院』北陸中世考古学研究会

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

大島秀俊　2006　「田屋遺跡」『埋文にいがた』No.56　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

大島秀俊　2007　「谷地遺跡」『埋文にいがた』No.61　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

小熊博史　2003a　「新潟県における縄文時代中期の住居跡－その特徴と変遷－」『シンポジウム　新潟県の縄文集落（第1分冊）－中期前葉から中葉を中心に－』同実行委員会・新潟県考古学協会

小熊博史　2003b　「岩野原遺跡出土の火焔型土器群（1）－火焔型土器群の研究Ⅰ」『長岡市立科学博物館研究報告第38号』新潟県長岡市立科学博物館

小田由美子ほか2001　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第99集　堀越館跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

小野正敏　1982　「15、16世紀の染付椀、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

神林村史編纂委員会　1985　『神林村誌　通史編』新潟県神林村

川崎義雄・佐々木洋治・實川順一・土　任隆・山崎　天　2001　『五泉市文化財調査報告（6）大蔵遺跡』新潟県五泉市教育委員会

九州近世陶磁学会　2000　『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念　九州近世陶磁学会

児玉義隆　2002　『梵字でみる密教』大法輪閣

齋田美穂子　2000　「新潟県域における大木7b式系統の浅鉢－新発田市石田遺跡出土資料の紹介を兼ねて－」『北越考古学』第11号　北越考古学研究会

財団法人福島県文化センター（遺跡調査課）1994　『福島県文化財調査報告書　第296集　六朗次遺跡　塩吹岩除遺跡』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・日本道路公団

坂井秀弥　1997　「第5章　第5節　中世集落の展開と城館の動向」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』桂書房

櫻井佳代子　2002　「第5章　遺物　石器・石製品　C分類と分析（32）しゃもじ形石製品」『朝日村文化財報告書　第22集　元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』新潟県朝日村教育委員会・新潟県

佐藤雅一　1990　『塩沢町埋蔵文化財報告書　第12輯　吉峰遺跡』新潟県塩沢町教育委員会

塩原知人・竹内　裕　2000　『大関上野遺跡　山崎遺跡』新潟県村上市教育委員会

塩原知人・竹内　裕　2001　『村上市文化財調査報告書　高平遺跡』新潟県村上市教育委員会

品田高志　1987　「「王冠型土器」考－形態分類とその分布を中心に－」『柏崎市立博物館　館報』No.2　新潟県柏崎市立博物館

菅沼　亘・阿部恭平・石原正敏　1998　『十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書　第14集　笹山遺跡発掘調査報告書』新潟県十日町市教育委員会

鈴木俊成　1996　「第Ⅳ章　2C（2）b.出土石器の分類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第72集　清水上遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会

鈴木俊成・寺崎裕助・加藤正樹・高橋一功・大杉真美　1996　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第72集　清水上遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会

高桑　登　2006　「山形・小田島城跡」『木簡研究』28号　木簡学会

高橋　保・寺崎裕助　1999　『第2章　第2節　第4項　中期』『新潟県の考古学』新潟県考古学会

高橋理彦ほか　2001　『柿崎町埋蔵文化財発掘調査報告書　第5集　江島神社跡・大二反遺跡　発掘調査報告書』新潟県柿崎町教育委員会

高橋保雄・荒谷伸郎　2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第119集　北野遺跡Ⅰ（下層）』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

高橋保雄・奥村伸男・木村雄司・村上章久　2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第160集　上野東遺跡　現明嶽遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

滝沢規朗　2007　『長割遺跡　現地説明会資料』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

滝沢規朗・高橋保雄・池田淳子・野水晃子ほか　2002　『朝日村文化財報告書　第22集　元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』新潟県朝日村教育委員会・新潟県

滝沢規郎・富樫秀之　1998　『朝日村文化財報告書　第14集　アチヤ平遺跡中・下段』新潟県朝日村教育委員会・新潟県

田中耕作ほか　1990　『新発田市埋蔵文化財調査報告　第13　三光館跡・宝積寺館跡』新潟県新発田市教育委員会

田中耕作・鈴木　暁ほか　2003　『新発田市埋蔵文化財調査報告　第26　二タ子沢Ａ遺跡　発掘調査報告書』新潟県新発田市教育委員会

田中照久・木村宏一郎　2005　「第1部　産地別による生産技術の展開から編年　越前」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会

田辺早苗　1992　『神林村埋蔵文化財報告書　第4　牧目館跡発掘調査報告書』新潟県神林村教育委員会

田辺早苗　1994　『神林村埋蔵文化財報告　第5　八幡山遺跡発掘調査報告書』新潟県神林村教育委員会

田辺早苗・大賀　健・長谷川一郎　2001　『神林村埋蔵文化財報告　第10　城田遺跡』新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所

田辺早苗・高林真人・八藤後順子　2005　『神林村埋蔵文化財報告　第22　国史跡　平林城跡確認調査概報Ⅱ　平成14年度調査』新潟県神林村教育委員会

田辺早苗・八藤後順子・近江屋成陽・大賀　健・松田政基　2002　『神林村埋蔵文化財報告　第19　桃川遺跡群発掘調査報告書』新潟県神林村教育委員会

地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会　1996　『地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡発掘調査報告書3　江戸城外堀跡赤坂御門・喰違土橋』地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会

継　実　2007　『桜林遺跡』『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成18年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

鶴巻康志　2003　『第1章　第2節　9　至徳寺遺跡（至徳寺館跡・至徳寺跡）』『上越市史叢書8　考古　－中・近世資料－』新潟県上越市

寺崎裕助　1990　「火炎土器様式の出現と展開」『火炎土器様式文化圏の成立と展開』火炎土器研究会

寺崎裕助　1996a　「火炎土器の成立・展開・終焉」『火焔土器研究の新視点』新潟県十日町市博物館

寺崎裕助　1996b　『第Ⅳ章　2B（5）c.縄文時代前期前半の土器について』『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第72集　清水上遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会

田海義正ほか　1990　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第55集　清水上遺跡』新潟県教育委員会

富樫秀之・阿部友晴・金内　元・長田友也・高橋　優　2002　『朝日村文化財報告書　第21集　アチヤ平遺跡上段』新潟県朝日村教育委員会・新潟県

富樫秀之・川村三千男ほか　1993　『朝日村文化財報告書　第8集　前田遺跡』新潟県朝日村教育委員会

新潟県教育委員会　1987　『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』新潟県教育委員会

丹羽　茂　1981　「大木式土器」『縄文文化の研究 4』雄山閣
布尾和史　2007　「北陸地方　新崎式・上山田式」『津南学叢書第 5 輯　火焔土器前夜－資料集－』信濃川火焔街道連携協議会・新潟県津南町教育委員会
秦　昭繁　1991　「特殊な剥離技法をもつ東日本の石鏃　－松原型石鏃の分布と製作時期について－」『考古学雑誌』第 76 巻第 4 号　日本考古学会
藤澤良祐　2005　「瀬戸系（施釉陶器生産技術の伝播）」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
堀江格・植村泰徳　1995　『摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告 4　下ノ平Ｄ遺跡　弓手原Ａ遺跡（第 1 次）』福島市教育委員会・財団法人福島市振興公社・建設省東北地方建設局摺上川ダム工事事務所
前川雅夫・片山博道・山崎良二・大山祐喜ほか　2007　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 176 集　窪田遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
増子正三　1999　「第 2 章　第 3 節　第 3 項　炉址」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
水澤幸一　1997　『中条町埋蔵文化財調査報告　第 13 集　江上館跡Ⅴ』新潟県中条町教育委員会
水澤幸一　1999　『中世越後の城館』『中世の越後と佐渡　遺物と文書が語る中世的世界』高志書院
水澤幸一　2001　『中条町埋蔵文化財調査報告　第 21 集　下町・坊城遺跡Ⅴ～Ｃ地点遺構編・総論編～』新潟県中条町教育委員会
水澤幸一　2006　『日本の遺跡 15　奥山荘城館遺跡』同成社
村上市　1999　『村上市史　通史編 1　原始・古代・中世』新潟県村上市
村上市　2000　『村上市史　別編　絵図・地図、年表』新潟県村上市
森　幸彦　1998　「福島県内の大木 8a 式土器について」『第 11 回縄文セミナー　中期中葉から後葉の諸様相』縄文セミナーの会
森田　勉　1982　「14 ～ 16 世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会
横山勝栄ほか　2005　「フィールドノート　猿澤城の研究」『新潟考古』第 16 号　新潟県考古学会
吉井雅勇　2004　『荒川町埋蔵文化財調査報告　第 11 集　馬場館跡Ⅱ』新潟県荒川町教育委員会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館
四柳嘉章　2006　『ものと人間の文化史 131・Ⅰ・漆（うるし）Ⅰ』財団法人法政大学出版局

自然科学分析引用文献

安藤一男　1990　『淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用』東北地理
Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10, 35-47.
伊藤良永・堀内誠示　1991　「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」珪藻学会誌
北野信彦　2005　『近世出土漆器の研究』吉川弘文館
岡田文男　1995　『古代出土漆器の研究　顕微鏡で探る材質と技法』京都書院
パリノ・サーヴェイ株式会社　2001a　「城田遺跡の自然科学分析」『神林村埋蔵文化財報告　第 10 城田遺跡（本文編）』新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
パリノ・サーヴェイ株式会社　2001b　「里本庄遺跡群の自然科学分析」『神林村埋蔵文化財報告　第 11　里本庄遺跡群内御堂遺跡・大木戸遺跡・里本庄Ｂ遺跡・光明寺遺跡』新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
パリノ・サーヴェイ株式会社　2002a　「山屋遺跡群の自然科学分析」『神林村埋蔵文化財報告　第 15　山屋遺跡群　前坪遺跡・鋼鉄遺跡・フケ田遺跡・天王前遺跡・水口沢遺跡』新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
パリノ・サーヴェイ株式会社　2002b　「六百地遺跡の自然化学分析」『神林村埋蔵文化財報告　第 13　六百地遺跡』新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所

パリノ・サーヴェイ株式会社　2003a　「木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 126 集　浦廻遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

パリノ・サーヴェイ株式会社　2003b　「樋渡・堀下遺跡の自然科学分析」『神林村埋蔵文化財報告　第 18　樋渡・堀下遺跡』新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所

パリノ・サーヴェイ株式会社　2003c　「桃川遺跡群の自然科学分析」『神林村埋蔵文化財報告　第 19　桃川遺跡群　石川遺跡・草田遺跡・桃川板碑・堤下瓦窯跡』新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所

パリノ・サーヴェイ株式会社　2005　「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 148 集　西部遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

パリノ・サーヴェイ株式会社　2007a　「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 174 集　道下遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

パリノ・サーヴェイ株式会社　2007b　「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 176 集　窪田遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

山田富貴子　1986　「赤外線吸収スペクトル法」『機器分析のてびき』第 1 集　化学同人

大館跡 II　遺物観察表

凡例　1.法　量（　）は現存値、＜　＞は推定値
　　　2.胎　土　長：長石　英：石英　雲：雲母　針：海綿骨針　黒：黒色粒子　白：白色粒子　赤褐：赤褐白粒子

土器・陶磁器類（1）

報告No.	出土位置 遺構	グリッド等	層位	種別	器種	残存部位	残存率(X/36)	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土・断面色調	色調・釉調	焼成	時期・備考
1	空堀2			肥前系磁器	碗	完形		9.7	3.8	6.8	白色	透明	良	17世紀前～中葉
2	堀1	8C	最下層	青白磁	皿？	体部		−	−	−	白色　黒（少量）	淡緑青	良	内底有段
3	堀1	5C	最下層	白磁	皿	口縁～底部	1/6	<9.6>	−	−	灰白色　黒（微量）	白	良好	磁器質。D群
4	堀1	7C	最下層	青磁	皿	体～底部		−	<8.0>	−	灰白色　黒（少量）	灰緑	良好	底部釉ハギ。高台内露胎
5	堀1	7C	最下層	青磁	盤？	底部		−	−	−	灰色　白微（少量）	青緑	良	高台内露胎
6	堀1	10C	最下層	青花	鉢？	体部		−	−	−	白色	透明	良好	16世紀代。輪花状
7	堀1	8C	最下層	瀬戸	卸皿	体～底部			5.2		被熱し、変色	不明	不明	内外面炭化物付着
8	堀1	14C	最下層	珠洲	壺（K種）	体部		−	−	−	灰色　黒・長・礫（少量）、針（微量）	灰	良好	輪積み痕あり
9	堀1	7C	最下層	珠洲	壺（T種）	体～底部		−	<10.7>	−	灰色　長・針（少量）	灰・黒	良	表面、黒色となる部分多い
10	堀1	7C	最下層	珠洲	壺（T種）	体部		−	−	−	灰色　黒・針（少量）	灰	良好	綾杉状。IV期前後か
11	堀1	7C	最下層	珠洲	甕	体部		−	−	−	灰色　黒・長（少量）、針（微量）	灰	良	
12	堀1	7C	最下層	珠洲	片口鉢	体～底部		−	<11.0>	−	灰色　礫・長（少量）、針（微量）	灰	良	卸目摩耗
13	堀1	8C	最下層	越前	甕	体部		−	−	−	にぶい橙色　長（中量）	にぶい赤褐	良	
14	堀1	11C	最下層	土師質土器	皿（R種）	口縁～底部	5/6	13.2	7.6	2.5	浅黄色　礫・長・赤褐（微量）	浅黄	良	底部回転糸切
15	堀1	10C	最下層	土師質土器	皿（R種）	口縁～底部	完形	13.4	7.3	2.5	長（微量）	灰白	良好	内面ロクロ痕顕著。体部外面に接合痕？あり。底部回転糸切
16	堀1	11C	最下層	土師質土器	皿（R種）	口縁～体部	1/16	<16.0>	−	−	灰黄色　長・雲（微量）	灰黄	良好	
17	堀1	10C	最下層	土師質土器	皿（T種）	口縁～底部	1/3	<20.8>	<10.8>	(2.8)	灰白色　長（微量）	灰白・灰黄	良好	京都産。内面に「2」の字状ナデ上げ痕
18	堀1	9C	最下層	土師質土器	皿（T種）	口縁～底部	2/3	21.7	10.2	3.0	灰黄色　長（微量）	灰黄	良好	京都産。外面に指頭痕。内面に「2」の字状ナデ上げ痕
19	堀1	8・10C	最下層	土師質土器	皿（T種）	口縁～底部	2/3	22.2	11.0	3.6	灰白色　長（微量）	灰白	良	京都産。外面に指頭痕
20	堀1	10C	最下層	土師質土器	皿（T種）	口縁～底部	1/6	<20.4>	<11.0>	(3.6)	灰白色　長（微量）	灰白・灰黄	良好	京都産。
21	堀1	7B・C	下層	青磁	腰折皿？	口縁～体部		<13.4>	−	−	灰色　黒（微量）	青緑	良好	内面に縦描文様あり。杯の可能性あり。15世紀後半以降か？
22	堀1	7B・C	下層	瀬戸美濃	天目碗	口縁～体部	1/8	<13.4>	−	−	灰色	鉄釉　黒・褐	良好	古瀬戸後IV期
23	堀1	7B・C	下層	瀬戸美濃	香炉	口縁～底部		<8.0>	−	−	灰色	鉄釉　黒	良好	古瀬戸後II－III期
24	堀1	7B・C	下層	瀬戸	瓶	体部		−	−	−	灰白色　黒（微量）	鉄釉　黒・褐	良	詳細な器種不明
25	堀1	10C	下層	信楽？	壺	体部		−	−	−	灰白色　英・長（中量）	にぶい橙	不良	
26	堀1	4C	下層	珠洲	片口鉢	口縁～体部		−	−	−	灰色　白（少）	灰	良好	珠洲III期
27	堀1	7B・C	下層	珠洲	片口鉢	口縁～体部		−	−	−	灰色　白（少）針（微）	灰	良	珠洲VI期
28	堀1	6B・C	下層	珠洲	片口鉢	口縁～体部		−	−	−	灰色　白（少）針（微）	灰	良好	片口部分
29	堀1	7B・C	下層	越前	甕	体部		−	−	−	褐色　長（中量）	褐灰	良好	刻印「本」あり
30	堀1	7B・C	下層	越前	甕	体部		−	−	−	褐灰色　長（中量）	褐灰	良好	刻印「本」または「大」あり
31	堀1	10C	下層	土師質土器	皿（R種）	口縁～底部		<12.2>	<7.2>	3.3	にぶい橙色　長（微量）	にぶい黄橙	良	外面にスス。底部回転糸切
32	堀1	7B・C	下層	土師質土器	皿（R種）	体～底部		−	<8.6>	−	にぶい黄橙色　長・赤褐（微量）	灰白	良好	底部回転糸切
33	堀1	5C	下層	土師質土器	皿（R種）	体～底部		−	<7.0>	−	にぶい黄橙色　長・雲・赤褐（微量）	にぶい黄橙	良好	底部回転糸切
34	堀1	5C	下層	土師質土器	皿（R種）	体部		−	−	−	にぶい橙色　長（微量）	にぶい橙	良好	
35	堀1	7B・C	下層	瓦器	火鉢	口縁部		<54.6>	−	−	にぶい黄褐色　白（微量）	にぶい黄褐	良好	口唇および口縁部内面上端にスタンプ文あり

土器・陶磁器類 (2)

報告No	出土位置			種別	器種	残存部位	残存率(X/36)	法量(cm)			胎土・断面色調	色調・釉調	焼成	時期・備考
	遺構	グリッド等	層位					口径	底径	器高				
36	堀1	7B・C	下層	唐津	皿	体～底部		−	<4.2>	−	にぶい褐色　白（微量）	にぶい褐	良好	胎土目痕あり。17世紀前半
37	堀1	12B	中層	白磁	皿	口縁～底部		<10.2>	<3.1>	2.6	白色　黒（微量）	透明	良好	磁器質。D群
38	堀1	9C	中層	青磁	碗	口縁～体部		<14.0>	−	−	灰色　黒（微量）	灰緑	良好	直口縁。横位の線描文あり。被熱
39	堀1	8C	中層	青磁	盤	口縁部		−	−	−	灰白色　黒（微量）	緑	良好	釉厚く、胎土・焼成良い。優品
40	堀1	10C	中層	瀬戸	壺	底部		−	<12.6>	−	暗灰色　黒・長（微量）	鉄釉　黒・褐	良	
41	堀1	8C	中層	珠洲	甕	体部		−	−	−	オリーブ灰色　礫・英・針（少量）	灰	良好	
42	堀1	10C	中層	珠洲	片口鉢	口縁～体部		<42.2>	−	−	灰色　礫・長（少量）	灰	良	卸目6本一単位。珠洲VI期
43	堀1	8C	中層	越前	甕	口縁部	1/8	<62.6>	−	−	褐色　長（中量）	にぶい赤褐	良好	15世紀中葉
44	堀1	9C	中層	越前	甕	肩部		−	−	−	にぶい橙色　長（中量）	にぶい赤褐	良好	刻印あり
45	堀1	8C	中層	越前	甕	肩部		−	−	−	褐色　長（中量）	褐灰	良好	刻印あり
46	堀1	7B・C	中層	不明	皿	底部		−	<4.5>	−	浅黄色	暗オリーブ灰	良好	磁器質。砂目痕あり。17世紀前半か？
47	堀1	5B・C	上層	青磁	碗	口縁部		−	−	−	暗灰色　黒（微量）	くすんだ灰緑	良好	青磁碗D類
48	堀1	8C	上層	青磁	碗？	体部		−	−	−	灰色　黒（微量）	青緑	良好	釉厚い
49	堀1	5B・C	上層	青磁	碗	体部		−	−	−	灰白色　黒（微量）	灰黄緑	良好	
50	堀1	5B	上層	青磁	碗	底部		−	<6.6>	−	灰白色　黒（少量）	灰緑	良好	高台内露胎
51	堀1	9C	上層	青磁	香炉	体部		−	−	−	灰色	濃緑	良好	線描文あり
52	堀1	11C	上層	青花	端反碗	口縁部			−	−	灰白色	透明	良好	
53	堀1	11B	上層	瀬戸	卸目付大皿	体～底部		−	<15.0>	−	灰白色	灰白	良	漆継痕あり。古瀬戸後IV期前後
54	堀1	6C	上層	珠洲	甕	口縁部		−	−	−	灰色　長（少量）、針（微）	灰	良	
55	堀1	6C	上層	珠洲	片口鉢	口縁～体部		−	−	−	灰色　長（微量）	灰	良好	片口部分。卸目6本一単位か。
56	堀1	6B	上層	珠洲	片口鉢	体～底部		−	<13.6>	−	灰色　長・英・針（微量）	灰	良好	漆継痕あり。卸目9本一単位。珠洲V期以降か？
57	堀1	8C	上層	越前	甕	体部		−	−	−	灰白色　黒（中量）、白（微量）	赤褐	良好	表面自然釉
58	堀1	5B・C	上層	越前	片口鉢	体部		−	−	−	灰黄色　長（少量）	浅黄	良好	卸目8本一単位。越前IV 3～V 1期か？
59	堀1	12B	上層	土師質土器	皿（R種）	体～底部		−	<8.0>	−	橙色　赤褐（微量）	橙	不良	底部切り離し不明
60	堀1	7B・C	上層	肥前系磁器	碗	体部～底部		−	<4.4>	−	灰白色	透明	良好	18世紀前～中葉
61	堀1	5B	上層	肥前系磁器	皿	口縁～体部		<13.0>	−	−	灰白色　黒（微量）	淡灰緑	良好	17世紀中葉か？
62	堀1	5・6C	上層	陶器	土鍋	口縁～体部		<21.5>	−	−	明褐色　長（少量）	赤褐	良好	口縁上部から内面に極暗赤褐色釉がかかる。近世以降。産地不明
63	堀1	9C	上層	陶器	擂鉢	体部～底部		−	<16.7>	−	にぶい赤褐色　黒・白（少量）	鉄釉　黒褐	良好	高台付近に砂付着。肥前系か？18世紀後半以降（V期）
64	土坑10		下層	珠洲	甕	口縁部		−	−	−	褐灰色　礫・針（少）、英（微）	灰	良	
65	土坑10		1層	瓦器	風炉	脚部		−	−	−	にぶい黄橙色　長・英（微量）	にぶい黄橙	良	
66	SR9	14D	下層	瀬戸	平碗	体部		−	−	−	灰白色	灰釉　灰オリーブ	良好	胎土に黒粒混入。15世紀代
67	SR9	14D		信楽	壺	体部		−	−	−	灰色　英（少量）	灰	良	
68	SR9	14D		瓦器	風炉	脚部		−	−	−	橙色　長・雲（微量）	橙	良好	
69	SR16	7・8D		青磁	碗	口縁部		<13.9>	−	−	灰白色　黒（微）	灰オリーブ	良	直口縁
70	SD17	3D	下層	珠洲	甕	体部		−	−	−	灰色　長・針（少量）、黒（微量）	灰	良好	
71	SD17	3D		珠洲	片口鉢	体～底部		−	<12.3>	−	灰色　黒（少量）、長・英（微量）	灰	良好	内面・底部摩耗。内面に炭化物付着
72	SD17	3C	下層	磁器	碗	口縁部		−	−	−	灰白色　黒（微）	透明	良好	近世。産地不明
73	SK39			青白磁	合子	口縁～底部	2/3	4.2	3.5	1.7	灰白色　黒（微量）	明緑灰	良	13世紀代か？
74	SK39			珠洲焼	甕	肩部		−	−	−	灰白色　長・英・針（微量）	灰白	良好	

土器・陶磁器類 (3)

報告No.	出土位置 遺構	グリッド等	層位	種別	器種	残存部位	残存率(X/36)	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土・断面色調	色調・釉調	焼成	時期・備考
75	SR39			珠洲焼	甕	体部		−	−	−	明オリーブ灰色　長・針（微量）	明オリーブ灰	良	摩耗
76	SR39			珠洲焼	甕	頸部		−	−	−	灰色　長（少量）、英（微量）	灰	良好	縁辺摩耗
77	SR39			珠洲焼	片口鉢	口縁～体部		<32.2>	−	−	灰色　長（微量）	灰	良好	内面および縁辺摩耗。珠洲 II − III 期？
78	SR39			珠洲焼	片口鉢	体部		−	−	−	灰色　長・英・針（微量）	灰白	良	摩耗
79	SR39			越前焼	甕	体部		−	−	−	にぶい黄橙色　長（微量）	褐	良好	摩耗
80	SR39			肥前系磁器	碗	口縁～体部		<9.8>	−	−	白色	透明		17 世紀中～後葉
81	SR39			不明	鉢	体部		−	−	−	褐灰色　長（微量）	外：鉄釉　内：灰釉	良好	摩耗
82	SK40		1 層	珠洲焼	片口鉢	体部		−	−	−	灰色　黒（中量）、長・英（微量）	灰	良好	内面摩耗
83	SK40		1 層	肥前系磁器	碗	体～底部		−	<4.8>	−	灰白色	透明	不良	陶器質。被熱か？ 17 世紀代
84		39T		白磁	皿	体～底部		−	<3.2>	−	淡黄色　陶器質	透明	良	目痕、漆継痕あり。高台付近漆付着。試掘調査遺物。館内出土
85				青磁	碗	口縁部		−	−	−	灰白色	灰緑	良	雷文、線描文あり。15 世紀代。試掘調査地点表採遺物
86		39T		青磁	碗	口縁～体部		−	−	−	灰色　黒（微量）	明緑灰	良	試掘調査遺物。館内出土
87		39T		珠洲	片口鉢	口縁～体部		<36.4>	−	−	灰色　黒・白・英（微量）	灰	良好	珠洲 V 期。試掘調査遺物。館内出土
88		39T		土師質土器	建盞天目	体部～底部		<12.5>	−	−	橙色　白（微量）	にぶい赤褐	良好	試掘調査遺物。館内出土
89		39T		土師質土器	皿（R 種）	口縁～底部		<12.5>	<7.6>	<2.4>	橙色　白・雲（微量）	橙	良	底部回転糸切。試掘調査遺物。館内出土
90		39T		土師質土器	皿（R 種）	体～底部		−	<8.0>	−	橙色　白（微量）	橙	良	底部回転糸切。試掘調査遺物。館内出土
91		39T		土師質土器	皿（R 種）	体～底部		−	<7.4>	−	にぶい橙色　白（微量）	にぶい橙	良	底部回転糸切。内外にスス。試掘調査遺物。館内出土
92		39T		土師質土器	皿（R 種）	底部		−	6.2	−	にぶい橙色　白（微量）	にぶい褐	良	底部回転糸切。試掘調査遺物。館内出土
93		39T		土師質土器	皿（R 種）	体～底部		−	6.2	−	淡黄色	淡黄	良	底部回転糸切。試掘調査遺物。館内出土
94		4B・C		青磁	碗	口縁部		−	−	−	灰色　黒（微量）	青緑	良	
95		49T		青磁	碗	口縁～体部		−	−	−	灰色	オリーブ灰	良好	線描文あり。試掘調査遺物
96		9D		青磁	稜花皿	口縁～体部		<17.4>	−	−	にぶい黄橙色　白（微）	灰オリーブ	不良	14 世紀代
97		42T		青磁	盤	底部		−	<14.9>	−	灰白色　黒（微量）	濃緑	良好	釉厚い。試掘調査遺物
98				青花	碗	体～底部		−	−	−	灰白色　黒（微量）	透明	良好	端反碗か？ 15 世紀後半
99		2D		青花	皿	口縁部		−	−	−	白色　黒（微量）	透明	良好	
100		14D		瀬戸	瓶	底部		−	<12.0>	−	灰色　白（微量）	鉄釉？	良好	
101				珠洲	片口鉢	口縁～体部		−	−	−	灰色　礫・長・針（少量）	灰	良	珠洲 VI 期
102		3C		越前	甕	体部		−	−	−	褐灰色　長（中量）	灰褐	二次焼成	破片同士融着。窯道具か？
103				土師質土器	皿（R 種）	口縁～底部		<15.8>	<12.4>	22	灰黄色　赤褐（微量）	灰黄	良	
104		9D		肥前系磁器	壺	体～底部		−	<5.8>	−	灰白色	透明	良好	沈香壺。17 世紀代か？

縄 文 土 器

報告No.	出土位置 遺構	グリッド	層位	種別	器種	残存部位	残存率(X/36)	法量(cm) 口径	底径	器高	胎土・断面色調	色調・釉調	焼成	時期・備考
318	堀 1			縄文土器	鉢	口縁部		−	−	−	褐灰色　長（中量）	にぶい橙	不良	口縁部に沈線による文様あり。縄文時代後期
319	SR16		上層	縄文土器	深鉢	口縁～胴部		−	−	−	橙色　長・英・砂（中量）	にぶい褐	良	
320		8C		縄文土器	深鉢	胴部		−	−	−	長・英・砂（多量）	橙	良	横位の幅広い沈線
321	SR16	7・8D	上層	縄文土器	深鉢？	胴～底部		−	<11.8>	−	にぶい黄褐色　長・英・雲（少）	にぶい黄橙	不良	時期不明

銭　貨

報告No.	出土位置			出土銭種類	初鋳年	王朝	書体	法量			備考
	遺構	グリッド	層位					直径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	
105	堀1	5C	最下層	元□通寶	1078 または 1086	北宋	行書	23.0	0.8	13.7	元豊通寶か元祐通寶
106	堀1	5C	最下層	不明				21.0	0.5	8.1	摩滅
107	堀1	5C	最下層	不明				21.0	0.4	7.7	摩滅
108	表土一括			正隆元寶	1157	金	楷書	24.0	1.1	10.9	

金属製品

報告No.	出土位置			種別	材質	遺存状況	法量				備考
	遺構	グリッド	層位				長さ(口径)(cm)	幅(底径)(cm)	厚さ(器高)(cm)	重量(g)	
109	堀1	7C	最下層	鉄鍋	鉄	図上復元	78.0	53.2	33.9	3,600.0	器厚0.6cm前後
110	堀1	8C	上層	蹄鉄	鉄	完形	10.2	12.4	1.7	135.8	
111	SR16	7・8D	上層	鉄滓	鉄		8.1	5.4	1.8	92.6	
112	SR16	7・8D	上層	鉄滓	鉄		5.2	4.3	1.8	40.1	
113	SK40			簪	銅	完形	11.2	4.1	2.0	28.4	

石　製　品

報告No.	出土位置			器種	石材	法量				備考
	遺構	グリッド	層位			長さ(径)(cm)	幅(cm)	厚さ(器高)(cm)	重量(g)	
114	堀1	7C	上層	硯	粘板岩	12.4	5.3	1.5	168.0	
115	堀1	9C	上層	砥石	凝灰岩	4.8	4.9	1.2	33.7	
116		14E		石鉢	凝灰岩	42.0	−	−	280.0	

木　製　品（1）

報告No.	出土位置			器種	法量(cm)			樹種	木取り	製作痕跡など	時期	備考
	遺構	グリッド	層位		長さ(口径)	幅(底径)	厚さ(器高)					
117	堀1	9C	最下層	漆器椀	16.7	7.8	6.7	ケヤキ	横木地柾目取			皆朱漆器
118	堀1	9C	最下層	漆器椀	−	5.8	(3.5)	ケヤキ	横木地柾目取			皆朱漆器
119	堀1	12C	最下層	漆器椀	−	<6.1>	(2.1)	ケヤキ	横木地柾目取			皆朱漆器
120	堀1	15D	最下層	漆器椀	−	<6.5>	(1.5)	ブナ属	横木地柾目取			皆朱漆器
121	堀1	4B	最下層	漆器椀	13.8	<6.7>	5.8	ブナ属	横木地柾目取	「引挽技法」	15世紀後半	
122	堀1	8C	最下層	漆器椀	−	−	(1.9)	ブナ属	横木地柾目取			123と同一意匠
123	堀1	10C	最下層	漆器椀	−	−	(2.0)	ブナ属	横木地柾目取			122と同一意匠
124	堀1	5B	最下層	漆器椀	−	6.9	(3.8)	ブナ属	横木地柾目取			高台内に「寿」
125	堀1	4B	最下層	漆器椀	−	8.2	(5.1)	ブナ属	横木地柾目取			
126	堀1	4C	最下層	漆器椀	14.2	−	(4.5)	ブナ属	横木地柾目取	「引挽技法」	15世紀後半	
127	堀1	4C	最下層	漆器椀	−	−	(4.7)	ブナ属	横木地柾目取	「引挽技法」	15世紀後半	
128	堀1	7C	最下層	漆器椀	−	<9.6>	(2.2)	ブナ属	横木地柾目取			内面に文様
129	堀1	10C	最下層	漆器椀	−	6.8	(4.8)	ブナ属	横木地柾目取			
130	堀1	11C	最下層	漆器椀	−	−	(5.0)	ブナ属	横木地柾目取			
131	堀1	11C	最下層	漆器椀	(15.4)	8.2	6.7	ブナ属	横木地柾目取	体部に穿孔あり		
132	堀1	9C	最下層	漆器椀	−	−	(3.4)	ブナ属	横木地			
133	堀1	9C	最下層	漆器椀	−	−	(3.7)	ブナ属	横木地			
134	堀1	8C	最下層	漆器椀	−	−	(4.0)	ブナ属	横木地柾目取			
135	堀1	8C	最下層	漆器椀	−	<8.0>	(1.8)	ブナ属	横木地柾目取			被焼遺物
136	堀1	9B	最下層	漆器椀	<14.3>	−	(6.0)	ケヤキ	横木地柾目取			
137	堀1	10C	最下層	漆器皿	8.6	6.4	1.1	ケヤキ	横木地柾目取			
138	堀1	15C	最下層	漆器皿	9.1	<5.8>	(3.0)	ブナ属	横木地柾目取	高台内に刃物痕有り		漆パレットに使用
139	堀1	4C	最下層	漆器鉢？	(36.6)	−	(7.3)	ケヤキ	横木地			
140	堀1	10C	最下層	漆器鉢？	−	<13.8>	(2.1)	トチノキ	横木地板目取			底部内面に文様有り
141	堀1	15C	最下層	漆器盤？	(13.5)	<5.5>	0.9	アスナロ	横木地			
142	堀1	5C	下層	漆器椀	−	<7.5>	(2.1)	ブナ属	横木地柾目取			
143	堀1	9C	下層	漆器皿	−	<6.8>	(1.4)	ブナ属	横木地柾目取			被焼遺物
144	堀1	10C	最下層	木地椀	−	6.3	(2.1)	ブナ属	横木地柾目取	底部外面に留め具痕		底部に穿孔あり
145	堀1	8C	最下層	木地皿	9.4	6.6	1.9	ブナ属	横木地柾目取	底部外面に「×」状刃物痕		
146	堀1	9C	最下層	木地皿	14.2	7.5	3.4	ブナ属	横木地柾目取			
147	堀1	4B	最下層	木地皿	−	6.0	(1.1)	ブナ属	横木地柾目取	底部外面に留め具痕		
148	堀1	9C	最下層	曲物	9.6	9.5	3.9	側・底板：スギ	柾目	現状1列下内2段綴じ		
149	堀1	8C	最下層	曲物側板	(15.2)	3.5	0.5	スギ	柾目	現状1列内2段綴じ		
150	堀1	5C	最下層	曲物側板	(18.5)	3.4	0.3	スギ	柾目			
151	堀1	7C	最下層	曲物側板	10.9	2.8	0.3	スギ	柾目			
152	堀1	3B	最下層	曲物側板	10.9	3.8	0.2	スギ	柾目			
153	堀1	5C	最下層	曲物側板	7.6	(5.3)	(0.4)	アスナロ	板目			炭化著しい
154	堀1	7・8C	最下層	曲物底板	16.6	7.0	0.9	スギ	柾目	樹皮綴じ痕あり		
155	堀1	6C	最下層	円形板	8.4	8.4	0.7	スギ	柾目			底板か？
156	堀1	6C	最下層	円形板	9.4	9.5	1.1	スギ	柾目			底板か？

木　製　品 (2)

報告No.	出土位置 遺構	グリッド	層位	器種	法量 (cm) 長さ (以上)	幅 (以上)	厚さ (以上)	樹種	木取り	製作痕跡など	時期	備考
157	堀 1	3B	最下層	円形板	9.3	(5.2)	(0.4)	スギ	板目	前穴 2 か所		
158	堀 1	9C	最下層	円形板	8.7	(6.6)	(0.4)	ヒノキ	板目	前穴 2 か所		
159	堀 1	4B・C	最下層	円形板	9.1	(3.0)	(0.4)	ヒノキ	板目	前穴 2 か所		
160	堀 1	3B	最下層	円形板	4.1	(3.2)	(0.3)	ヒノキ	柾目			底板か？
161	堀 1	10C	最下層	楕円形板	26.5	(4.2)	(0.2)	スギ	板目			
162	堀 1	10C	最下層	円形板	(26.1)	(4.9)	(0.7)	スギ	板目	前穴 2 か所		
163	堀 1	4B・C	最下層	円形板	(24.0)	(3.7)	(0.8)	スギ	柾目	前穴 2 か所		外面黒漆塗，底板か？
164	堀 1	11B・C	最下層	蓋	(25.0)	(7.0)	(0.8)	スギ	柾目	内側補造有穴		黒漆塗
165	堀 1	10C	最下層	蓋	(17.4)	(2.3)	(0.8)	スギ	柾目	裏面周縁は中央を除き，面取りされる		表面黒漆塗，蓋か？
166	堀 1	14C	最下層	指物部品	(19.3)	5.4	0.6	スギ	柾目	上下面に前穴，うち上面に木釘あり		表裏上下面黒漆塗，裏面刀物痕多数
167	堀 1	4B・C	最下層	指物部品	23.0	5.5	0.8	スギ	柾目	前穴 4 か所，方形孔 1 か所		黒漆塗
168	堀 1	4B・C	最下層	指物部品	16.0	3.8	0.6	スギ	柾目			黒漆塗
169	堀 1	7B	最下層	指物部品	(12.7)	(5.4)	(0.7)	スギ	柾目	前穴 3 か所		表裏右側面黒漆塗，裏面刀物痕多数
170	堀 1	7C	最下層	指物部品	12.4	(3.8)	(0.8)	アスナロ	追柾			黒漆塗，表面に刀物痕多数，被覆遺物
171	堀 1	7C	最下層	指物部品	16.1	4.8	0.2	アスナロ	柾目	前穴 4 か所，うち 1 か所に側板あり		
172	堀 1	10C	最下層	指物部品	31.0	1.8	1.4	スギ	分割角材	下面に前穴あり		両側面黒漆塗
173	堀 1	10C	最下層	指物部品	17.4	12.5	0.9	スギ	柾目	表裏 4 か所，両側面各 4 か所の前穴		孔裏面部分炭化
174	堀 1	14C	最下層	方形板	25.0	5.0	0.6	アスナロ	柾目			刀物痕多数
175	堀 1	6C	最下層	方形板	25.2	8.9	0.4	スギ	柾目	前穴 2 か所		
176	堀 1	8C	最下層	方形板	(26.2)	13.9	(0.6)	スギ	柾目	前穴 3 か所		被覆遺物
177	堀 1	4C	最下層	方形板	27.0	4.1	0.3	スギ	柾目	前穴 3 か所		
178	堀 1	4B	最下層	方形板	22.5	6.5	0.5	マツ属複維管束亜属	柾目	前穴 2 か所，西 5 か所		刀物痕多数
179	堀 1	10C	最下層	方形板	(7.8)	5.1	(0.5)	スギ	柾目	縁辺に前穴 5 か所		
180	堀 1	11B・C	最下層	部材	18.2	0.8	0.7	スギ	柾目	側面前穴 2 か所，うち 1 か所に木釘あり		
181	堀 1	4B・C	最下層	方形板	15.0	5.3	0.5	スギ	板目	上下端に前穴各 3 か所		
182	堀 1	10C	最下層	方形板	12.5	2.6	0.7	スギ	柾目	前穴 5 か所		
183	堀 1	9C	最下層	部材	19.3	4.8	0.8	スギ	柾目	前穴 2 か所，裏面上下端に横位の圧痕		灯明台？
184	堀 1	7B	最下層	部材	(11.0)	(3.1)	(0.3)	スギ	柾目			
185	堀 1	12B・C	最下層	植物個板	13.6	19.8	10.2	スギ	追柾			186 と同一規格
186	堀 1	12B・C	最下層	植物個板	13.4	19.5	10.1	スギ	追柾			185 と同一規格
187	堀 1	9C	最下層	植物個板	11.5	9.5	1.7	スギ	板目	内面下部に横位の圧痕および黒漆付着		
188	堀 1	3C	最下層	方形板	24.2	10.1	1.5	スギ	板目	内面下部に黒漆付着		植物個板か？
189	堀 1	9C	最下層	栓	4.6	4.1	2.3	マツ属複維管束亜属	削出丸木	前穴，割り痕あり		
190	堀 1	12B・C	最下層	栓	6.4	5.0	5.0	マツ属複維管束亜属	削出丸木	木釘あり		
191	堀 1	10C	最下層	折敷	18.5	(3.8)	(0.2)	ヒノキ	柾目	前穴あり		
192	堀 1	9C	最下層	折敷	16.8	(5.0)	0.3	スギ	柾目	前穴あり		刀物痕多数
193	堀 1	10C	最下層	折敷	20.6	(3.5)	(0.1)	ヒノキ	柾目			
194	堀 1	7C	最下層	折敷	(14.5)	(4.6)	(0.4)	マツ属複維管束亜属	板目	前穴 3 か所		
195	堀 1	8C	最下層	折敷？	(16.2)	(1.6)	(0.2)	スギ	柾目			八寸か？
196	堀 1	5C	最下層	部材	(17.8)	2.0	0.2	スギ	柾目	弧状の削りこみあり		
197	堀 1	4B・C	最下層	杓子	(29.2)	(6.9)	6.8	モクレン属	分割材（割物）	先端は使用により磨滅		黒漆塗
198	堀 1	6C	最下層	杓子？	19.2	3.3	0.5	ヒノキ	柾目	下半，側縁面取り		柄部分か？
199	堀 1	8C	最下層	箸状木製品	24.5	0.5	0.5	スギ	削出棒			
200	堀 1	8C	最下層	箸状木製品	(24.0)	0.6	0.5	スギ	削出棒			上下欠
201	堀 1	12B・C	最下層	箸状木製品	(18.4)	0.7	0.6	スギ	削出棒			下欠
202	堀 1	8C	最下層	箸状木製品	(17.2)	0.7	0.5	スギ	削出棒			上欠
203	堀 1	10C	最下層	箸状木製品	(16.7)	0.5	0.5	スギ	削出棒			上下欠
204	堀 1	9C	最下層	箸状木製品	(12.0)	0.8	0.8	スギ	分割角棒			下欠
205	堀 1	8C	最下層	箸状木製品	(12.2)	0.9	0.6	スギ	削出角棒			下欠
206	堀 1	11C	最下層	刺	(25.1)	2.3	0.9	スギ	柾目	上部面取り		
207	堀 1	9C	最下層	扇	26.2	4.5	2.0	スギ	柾目	現状 5 枚で構成，うち 3 枚軸に接合		
208	堀 1	9C	最下層	扇	25.7	3.8	0.3	スギ	柾目	基部穿孔		207 の一部か？
209	堀 1	7B	最下層	扇	(13.8)	2.1	(0.2)	スギ	柾目	基部穿孔		
210	堀 1	7C	最下層	扇	23.7	3.7	0.3	スギ	柾目	基部穿孔		
211	堀 1	7B	最下層	柾手	30.7	3.3	2.5	スギ	分割角材	穿孔 3 か所		
212	堀 1	4B・C	最下層	柾手	28.4	4.1	3.6	スギ	柾目	左側部に樹皮残存		灯篭柾手か？

木製品 (3)

報告No.	出土位置			器種	法量(cm)			樹種	木取り	製作痕跡など	時期	備考
	遺構	グリッド	層位		長さ(口径)	幅(底径)	厚さ(高さ)					
213	堀1	10C	最下層	鞘	9.5	2.1	0.7	モクレン属	柾目	手斧→刳り貫き→糸による接合→赤漆塗		小刀様の鞘
214	堀1	7C	最下層	台	13.5	5.3	1.1	ヒノキ	板目			硯台か？
215	堀1	9C	最下層	部材	21.6	4.9	2.0	ハリギリ	分割角棒	下部柄状		
216	堀1	9C	最下層	部材	28.3	1.1	1.2	スギ	分割角棒	切り込み2か所、下面に釘穴		
217	堀1	6C	最下層	部材	(22.5)	1.9	1.4	スギ	分割角棒	下端切り込み、上面に釘穴あり		下欠
218	堀1	9C	最下層	部材	(18.4)	1.1	(1.2)	スギ	角材（四方柾）	中央に切り込み。上面に釘穴、下面は木釘あり		
219	堀1	9C	最下層	部材	(10.0)	1.3	(1.0)	スギ	分割角材	釘穴2か所		
220	堀1	8C	最下層	部材	(21.2)	1.8	(0.5)	スギ	柾目	上部段、釘穴あり		
221	堀1	11B・C	最下層	部材	(45.6)	2.3	(1.5)	本体：スギ 接木：スギ	分割材	接木あり。接木部分木釘で接合		
222	堀1	9C	最下層	部材	42.1	1.4	1.2	スギ	分割角棒	表上下面に釘穴あり。3か所に木釘あり		
223	堀1	5C	最下層	部材	14.2	5.2	3.2	スギ	分割角棒	表面両側縁面取り。裏面中央に方形の抉り		
224	堀1	7C	最下層	下駄	22.5	10.0	3.7	台、歯：モクレン属	柾目			露卯下駄
225	堀1	9C	最下層	下駄	21.3	9.6	6.6	台：クリ 前・後歯：モクレン属	台：板目 前・後歯：柾目			露卯下駄
226	堀1	12B・C	最下層	下駄歯	12.7	10.8	1.7	モクレン属	板目			露卯下駄
227	堀1	12B	最下層	下駄	21.6	10.6	3.4	モクレン属	板目			連歯下駄
228	堀1	4B・C	最下層	下駄	(6.6)	10.7	7.5		板目？			連歯下駄
229	堀1	9C	最下層	下駄	19.8	10.0	3.6	モクレン属	板目			連歯下駄
230	堀1	10C	最下層	下駄	20.8	9.0	4.8	クリ	板目			連歯下駄
231	堀1	4B	最下層	下駄歯	14.8	(8.3)	(1.5)		板目	側縁面取り。刃物痕あり		露卯下駄
232	堀1	10C	最下層	下駄歯	9.8	13.8	1.6	モクレン属	柾目			露卯下駄
233	堀1	6C	最下層	下駄歯？	12.5	(5.8)	(1.5)	モクレン属	板目	表面縁辺削り		
234	堀1	8C	最下層	下駄歯	12.1	(7.4)	(1.6)		柾目	側縁面取り		露卯下駄
235	堀1	7C	最下層	下駄	21.4	10.2	2.7	クリ	柾目			連歯下駄
236	堀1	12B・C	最下層	下駄	20.4	10.1	4.4	モクレン属	追柾			連歯下駄
237	堀1	9C	最下層	下駄	22.1	10.1	4.2	モクレン属	柾目			連歯下駄
238	堀1	8C	最下層	下駄歯	10.7	(7.2)	(1.5)		柾目	側縁面取り		露卯下駄
239	堀1	9C	最下層	下駄歯	10.3	12.5	1.4	モクレン属	板目			露卯下駄
240	堀1	5C	最下層	下駄歯	(6.0)	(8.8)	(1.5)		柾目	側縁面取り。亀甲状の圧痕あり		露卯下駄
241	堀1	10C	最下層	板草履	–	3.2	0.3	スギ	板目			242とセットか？
242	堀1	10C	最下層	板草履	–	4.2	0.3	スギ	板目			241とセットか？
243	堀1	7B	最下層	板草履	23.3	4.8	0.2	スギ	板目			
244	堀1	9C	最下層	木槌	37.5	5.4	4.7	サクラ属	芯持丸木	柄部削り出し		横槌
245	堀1	9C	最下層	コモヅチ	23.0	4.0	4.0	クリ	芯持丸木	2か所に抉り		
246	堀1	9C	最下層	コモヅチ	18.3	4.2	3.5	クリ	芯持丸木	中央に抉り		
247	堀1	4C	最下層	舟形	23.6	5.2	1.6	スギ	柾目	刳り貫き、船首削り。中央穿孔		
248	堀1	7C	最下層	舟形	10.8	3.2	1.1	スギ	柾目	刳り貫き、船首削り。船尾より穿孔		
249	堀1	7C	最下層	舟形？	24.2	5.0	0.4	スギ	柾目	中央に釘穴3か所		
250	堀1	5C	最下層	刀形	20.7	2.0	0.4	スギ	柾目			ナイフ様
251	堀1	8C	最下層	刀形	30.3	2.1	1.0	スギ	板目	刃部峰側に弧状の削りこみ		
252	堀1	4B・C	最下層	刀形	68.1	3.3	0.4	スギ	板目			廃棄時に切断
253	堀1	7C	最下層	木簡	27.7	3.0	0.6	スギ	板目	裏面削り痕明瞭		塔婆。墨書は梵字
254	堀1	7C	最下層	木簡	(23.9)	3.4	0.3	スギ	柾目			下部欠。不明瞭。
255	堀1	11C	最下層	木簡	(9.3)	1.9	(0.2)		板目			断片
256	堀1	4C	最下層	木簡	(9.5)	2.5	0.4	スギ	追柾			墨書は梵字
257		11C	最下層	木簡	(6.9)	2.5	0.3	スギ	板目			墨書は梵字
258	堀1	9C	最下層	木簡	(8.3)	2.5	0.3	スギ	板目			墨書は梵字。不明瞭
259	堀1	7C	最下層	木簡状製品	(7.3)	2.7	0.3	スギ	板目			256～258と同一規格
260	堀1	4C	最下層	木簡状製品	(12.0)	2.1	0.35	スギ	柾目	下部削り		261・262とほぼ同一規格
261	堀1	8C	最下層	木簡状製品	(7.8)	2.1	0.35	スギ	柾目			260・262とほぼ同一規格
262	堀1	9C	最下層	木簡状製品	15.0	2.0	0.3	スギ	柾目	釘穴2か所		260・261とほぼ同一規格
263	堀1	9C	最下層	木簡状製品	(10.5)	4.2	0.4	スギ	柾目	下部削り		264と同一規格
264	堀1	7C	最下層	木簡状製品	10.2	4.6	0.4	スギ	柾目			263と同一規格
265	堀1	5C	最下層	木簡状製品	(22.5)	1.7	0.6	スギ	柾目	下部削りで尖らす		

木　製　品（4）

報告No.	出土位置			器　種	法量(cm)			樹　種	木取り	製作痕跡など	時　期	備　考
	遺　構	グリッド	層　位		長さ(口径)	幅(底径)	厚さ(高さ)					
266	堀1	4B	最下層	鞘形	49.4	3.1	0.5	スギ	板目			
267	堀1	5B・C	最下層	木簡状製品	17.3	3.4	0.3	スギ	柾目	中央に釘穴2か所		折敷転用か？
268	堀1	5C	最下層	木簡状製品	(21.0)	3.5	0.2		柾目			
269	堀1	10C	最下層	木簡状製品	(14.3)	2.1	0.6		柾目	下部削り		上下欠
270	堀1	7C	最下層	木簡状製品	24.3	2.5	0.3	スギ	板目			不明製品
271	堀1	4B・C	最下層	不明製品	(14.9)	1.5	0.8	スギ	削出楕円棒	上部削りこみ、側縁面取り、下部方形切り込み		
272	堀1	10C	最下層	不明製品	13.6	9.8	0.3	ヒノキ	柾目	釘穴、放射状刃物痕あり		
273	堀1	4C	最下層	不明製品	6.2	2.6	0.2	スギ	柾目	釘穴1か所		
274	堀1	9C	最下層	小杭	13.0	10.2	0.9	スギ	分割材	下部削り		断面三角形
275	堀1	8C	最下層	不明製品	(10.2)	1.1	0.9	スギ	分割材			上下欠
276	堀1	5C	最下層	不明製品	(9.4)	2.0	0.9	クリ	柾目	半截後、上部削りこみ		
277	堀1	11C	最下層	不明製品	13.8	13.6	1.6	マツ属複維管束亜属	板目	円形の刃物痕、中央に留め具痕あり		木地蓋粗形か？
278	堀1	9C	最下層	不明製品	20.0	5.0	0.3	スギ	柾目	釘穴1か所、両側下部削り		
279	堀1	11C	最下層	不明製品	29.0	3.7	0.9		板目	上部左側、斜め方向に切断		
280	堀1	9C	最下層	不明製品	(22.1)	3.9	0.8		板目	上部左側、斜め方向に切断		279と同様
281	堀1	11B・C	最下層	不明製品	10.7	7.5	2.0	モクレン属	追柾	釘穴2か所		下駄歯か？つぶれ観察できない
282	堀1	6C	最下層	不明製品	(19.2)	7.0	1.7	マツ属複維管束亜属	板目	右縁辺面取り		
283	堀1	4B・C	最下層	不明製品	30.2	3.5	1.6	カエデ属	分割材	両側面に連続した切り込み		「ささら」に類似
284	堀1	7C	最下層	不明製品	(39.1)	2.7	0.5	スギ	板目	表面に横状の筋、右側面に連続した切り込み		定規ではない。
285	堀1	9C	最下層	不明製品	35.6	3.3	1.6	マツ属複維管束亜属	削出楕円棒	右側面、刃部状に削る		木刀状
286	堀1	14C	最下層	不明製品	(25.0)	5.0	1.5	モクレン属	追柾	側面刃部状に削る		
287	堀1	12B・C	最下層	楔形製品	20.2	5.3	3.0		板目	削り痕あり		
288	堀1	7C	最下層	楔形製品	20.8	2.9	5.0		柾目			
289	堀1	5C	最下層	切断痕のある角	(25.2)	3.3	(0.3)		板目	上部に切断痕		
290	堀1	7C	最下層	切断痕のある角	(13.4)	3.0	(0.2)		柾目	2か所に切断痕		
291	堀1	9C	最下層	不明製品	10.9	3.7	3.4	タケ	－	切断面に刃物痕あり		
292	堀1	10C	最下層	不明製品	27.3	(6.0)	(0.6)		板目			底板か？
293	堀1	5B・C	最下層	不明製品	8.6	11.4	8.8	クリ	芯持材			臼か？
294	堀1	9C	最下層	不明製品	33.9	4.5	1.4		柾目	上端縁辺面取り		
295	堀1	15D	最下層	棒状材	32.2	3.0	2.9		柾目	切断面磨滅		
296	堀1	7C	最下層	方形板	(40.0)	8.4	(0.8)	スギ	板目	上端面取り		
297	堀1	10C	最下層	不明製品	41.0	12.6	1.4	モクレン属	板目	下端を除き、縁辺面取り		
298	堀1		最下層	方形板	54.4	16.9	1.5	マツ属複維管束亜属	柾目			
299	堀1	15D	最下層	付け木	10.0	10.4	0.7		－	先端炭化		
300	堀1	11C	最下層	付け木	8.4	1.1	0.5		－	先端炭化		
301	堀1	9C	最下層	付け木	12.7	0.9	0.7		－	先端炭化		
302	堀1	8C	最下層	杭	33.7	4.5	1.8	スギ	追柾	釘穴2か所		
303	K37			杭	(54.8)	5.1	(4.0)	クリ	分割材			
304	K32			杭	(51.5)	6.9	(4.6)	クリ	分割材			
305	K33			杭	(53.2)	5.1	(4.1)	クリ	分割材			
306	堀1	15C	最下層	杭	(95.4)	10.6	(5.9)	クリ	半截			
307	SE25			井戸側板	(133.8)	19.6	6.6	クリ	芯持角板状			
308	SE25			杭	(67.4)	4.1	3.3	クリ	芯持丸太			
309	SR16		中層	不明製品	19.9	1.7	0.5	スギ	板目	斜め方向の刃物痕あり		
310	SR16		中層	方形板	8.0	5.1	0.4		板目			
311	K28		最下層	杭	(86.6)	3.4	2.0	クリ	半截（芯外し）			
312	K15			杭	(59.9)	5.9	(2.4)		芯外し			
313	K31			杭	(46.2)	4.5	(4.5)		半截			
314	K30			杭	(40.0)	7.5	(3.3)		芯外し			
315	SD17		下層	下駄	17.2	8.2	7.3	モクレン属	板目		近世	連歯下駄
316	SR39			漆器椀	－	6.2	(6.4)		横木地	「丸に釘抜き」	近世	外面文様、黄漆か？
317	SX27		下層	不明製品	(32.2)	3.1	0.4	スギ	板目			

石　　器

報告No.	出土位置			器　種	石　材	法　量				欠　損	備　考
	遺　構	グリッド	層　位			長さ（径）(cm)	幅(cm)	厚さ（器高）(cm)	重量(g)		
322	一括			尖頭器	珪質頁岩	7.1	2.7	0.9	74.2	先端・下部欠損	
323	堀1	4B・C	最下層	しゃもじ形石製品	千枚岩	4.6	2.1	0.5	23.8		

東興屋遺跡　遺構観察表

SI

遺構名	グリッド	平面形	平面規模（m）		深さ（m）	床面積（㎡）	主軸方位	覆土	Pit	主柱穴
			長径（軸）	短径（軸）						
SI1	2・3B	楕円形	(5.23) <6.07>	5.12	0.05	(23.15) <26.13>	N-50°-W	5層	地床P	4本
SI2	3B	楕円形	(2.60) <6.93>	(2.25) <5.85>	0.19	(8.43) <22.15>	N-50°-W	3層	地床P	6本
SI4	2C	長方形	(4.38)	3.34	0.08	(11.86)	N-179°-E	3層	なし	6本

SI1 柱穴

遺構名	グリッド	平面形	断面形	規模（m）			覆土
				長径（直径）	短径	底面の標高	
P1	2B	円形	U字状	0.49	0.42	31.66	3層
P2	2・3B	円形	階段状	0.40	0.34	32.07	3層
P3	2B	円形	台形状	0.40	0.37	32.18	3層
P4	2B	長楕円形	半円状	0.40	0.23	32.34	2層
P5	2B	楕円形	階段状	0.43	0.34	31.97	3層
P6	2B	円形	U字状	0.29	0.27	32.03	3層
P7	2B	円形	U字状	0.29	0.28	31.87	3層
P8	2B	円形	漏斗状	0.68	0.60	31.64	3層
P9	2B	楕円形	U字状	0.30	0.22	31.84	2層
P10	2B	楕円形	U字状	0.27	0.20	31.85	3層
P11	2B	楕円形	袋状	0.32	0.24	31.86	3層
P12	2B	楕円形	U字状	0.37	(0.30)	31.90	3層
P13	2B	円形	台形状	0.35	0.33	32.11	2層
P14	2B	円形	U字状	0.19	0.18	32.26	2層
P15	2B	円形	U字状	0.21	0.20	32.16	2層
P16	2B	円形	U字状	0.20	0.18	32.17	2層
P17	2B	楕円形	U字状	0.22	0.17	32.11	2層
P18	2B	楕円形	階段状	0.29	0.22	32.00	2層
P19	2B	楕円形	半円状	0.27	0.21	32.13	3層
P20	2B	楕円形	U字状	0.21	0.15	31.96	2層
P21	2B	楕円形	弧状	0.34	0.23	32.02	2層
P22	2B	円形	半円状	0.26	0.23	32.14	2層
P23	2B	楕円形	台形状	0.32	0.24	32.32	3層
P24	2B	楕円形	階段状	0.26	0.21	31.87	1層
P25	2B	円形	台形状	0.20	0.17	31.86	1層
P26	2B	楕円形	漏斗状	0.21	0.17	31.91	2層
P27	3B	楕円形	U字状	0.15	0.11	32.09	2層
P28	3B	円形	U字状	0.17	0.17	32.20	2層
P29	3B	円形	台形状	0.19	0.16	32.33	2層
P30	2B	楕円形	U字状	0.25	0.18	31.94	2層
P31	2B	円形	漏斗状	0.18	0.17	32.17	2層
P32	2B	円形	弧状	0.16	0.16	32.31	1層
P33	2B	円形	U字状	0.24	0.23	31.74	3層
P34	2B	円形	U字状	0.27	0.23	32.01	1層
P35	2B	楕円形	U字状	0.27	0.21	32.01	2層
P36	2B	楕円形	U字状	0.42	0.34	31.85	3層
P37	2B	円形	U字状	0.24	0.22	32.18	2層
P39	2B	楕円形	U字状	0.19	0.15	32.30	1層
P40	2B	楕円形	U字状	(0.49)	0.33	31.97	1層
P42	2B	円形	台形状	0.18	0.17	32.39	1層
P43	2B	円形	U字状	0.18	0.16	32.21	1層
P46	2B	楕円形	半円状	(0.16)	0.13	32.13	1層
P47	2B	楕円形	U字状	0.18	0.15	32.10	1層
P48	2B	円形	U字状	0.14	0.13	32.11	1層
P49	2B	楕円形	階段状	0.24	0.18	32.00	1層
P50	2B	楕円形	U字状	0.17	0.14	31.96	1層
P51	2B	円形	半円状	0.16	0.15	32.04	1層
P52	2B	円形	U字状	0.19	0.19	32.25	1層
P53	2B	円形	半円状	0.16	0.15	32.19	1層

SI2 柱穴

遺構名	グリッド	平面形	断面形	規模(m)			覆土
				長径(底径)	短径	底面の標高	
P1	3B	楕円形	箱状	0.25	0.19	32.03	2層
P2	3B	円形	箱状	0.31	0.30	32.13	3層
P3	3B	円形	U字状	0.33	0.28	32.10	3層
P4	3B	楕円形	階段状	0.39	0.28	32.23	3層
P5	3B	円形	半円状	0.37	0.32	32.33	2層
P6	3B	楕円形	半円状	0.33	0.25	32.37	1層
P7	3B	円形	半円状	0.33	0.29	32.58	2層
P8	3B	円形	台形状	0.41	0.36	32.44	2層
P9	3B	楕円形	U字状	0.29	(0.23)	32.33	3層
P10	3B	円形	U字状	0.18	0.16	32.39	2層
P11	3B	楕円形	台形状	0.25	0.20	32.40	3層
P12	3B	楕円形	半円状	0.38	0.29	32.32	3層
P13	3B	円形	箱状	0.37	0.31	32.07	3層
P14	3B	楕円形	箱状	0.27	0.22	32.16	2層
P15	3B	長楕円形	U字状	0.18	0.12	32.10	3層
P18	3B	円形	台形状	(0.22)	0.22	31.96	3層
P19	3B	楕円形	台形状	0.42	0.33	32.42	2層
P21	3B	楕円形	U字状	0.22	(0.17)	32.35	1層
P23	3B	楕円形	半円状	0.29	0.24	32.28	2層
P24	3B	円形	半円状	0.29	0.27	32.35	2層
P26	3B	円形	半円状	0.33	0.31	31.95	2層
P27	3B	楕円形	台形状	0.37	0.28	32.20	2層

SI4 柱穴

遺構名	グリッド	平面形	断面形	規模(m)			覆土
				長径(底径)	短径	底面の標高	
P4	2C	円形	U字状	0.28	0.24	33.09	3層
P5	2C	円形	半円状	0.34	0.30	33.17	2層
P9	2C	円形	階段状	0.34	0.32	32.98	1層
P10	2C	楕円形	半円状	0.23	0.19	33.47	1層
P11	2C	楕円形	半円状	0.16	0.12	33.52	1層
P13	2C	楕円形	漏斗状	0.22	0.18	33.36	2層
P14	2C	長楕円形	弧状	0.54	0.33	33.41	1層
P15	2C	長楕円形	U字状	0.35	0.23	33.11	1層
P16	2C	円形	台形状	0.23	0.20	33.34	1層
P17	2C	円形	台形状	0.20	0.20	33.40	1層
P18	2C	円形	箱状	0.23	0.23	33.19	2層
P20	2C	円形	弧状	0.21	0.18	33.35	1層
P21	2C	円形	U字状	0.12	0.11	33.11	1層
P23	2C	円形	半円状	0.14	0.13	33.02	1層
P24	2C	楕円形	半円状	0.14	0.11	33.03	1層
P26	2C	円形	弧状	0.10	0.10	33.03	1層
P27	2C	円形	U字状	0.13	0.11	32.90	1層
P28	2C	楕円形	半円状	0.17	0.12	33.08	1層
P29	2C	円形	半円状	0.17	0.16	33.94	1層
P30	2C	円形	U字状	(0.20)	0.20	33.06	1層
P31	2C	円形	半円状	0.18	0.16	33.16	1層
P32	2C	円形	台形状	0.18	0.16	33.36	1層
P33	2C	円形	台形状	(0.20)	0.20	33.63	1層
P34	2C	円形	U字状	(0.13)	0.11	33.65	1層

土坑・ピット

遺構名	グリッド	平面形	断面形	規模(m)			主軸方位	覆土
				長径(底径)	短径	深さ		
SK5	2・3C	長楕円形	漏斗状	3.71	0.40	0.80	N-15°-E	6層
SK6	3D	楕円形	台形状	0.77	0.59	0.11	N-15°-W	2層
SK75	3D	円形	弧状	0.79	0.68	0.15	N-73°-W	2層
SK112	2C	長楕円形	弧状	0.78	(0.48)	0.20	西北	2層
P9	3C	円形	半円状	0.28	0.24	0.15	−	2層
P16	2C	楕円形	U字状	0.34	0.28	0.38	−	2層

東興屋遺跡　遺物観察表

縄文土器（1）

報告No.	出土位置 出土層位	器種 器形	時期	分類	残存部位	法量(cm) 口径	底径	高さ	胎土	色調 外面	内面	焼成	施文・調整など 外面	内面	煤外面	煤内面	備考
1	SI1	深鉢	中期前葉	I 2	口縁部	−	−	(5.5)	やや粗、2mm以下の砂を中量、長石を少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	半隆起線、ナデ	ナデ			
2	SI1	深鉢	中期前葉	I 2	口縁部	−	−	(2.9)	やや粗、2mm以下の砂を中量、長石を少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	口縁端部：沈線、半隆起線、ナデ	ナデ			
3	SI1	深鉢	中期前葉	I 2	口縁部	−	−	(4.9)	やや粗、3mm以下の雲母を中量、長石を少量含む	浅黄橙	にぶい黄橙	良好	半隆起線、単節縄文LR（横位）	ナデ（横位）			
4	SI1	深鉢	中期前葉	I 3	胴部	−	−	(4.2)	粗、3mm以下の雲母、砂を多量含む	にぶい橙	にぶい褐	良好	単節縄文LR（横位）、半隆起線	ナデ			
5	SI1	深鉢	中期前葉	I3	胴部	−	−	(2.8)	粗、3mm以下の雲母を中量、長石を少量含む	灰黄	橙	良好	単節縄文LR（横位）、半隆起線	ナデ（横位）			
6	SI1	深鉢	中期中葉	I 5	胴部	−	−	(5.2)	やや粗、2mm以下の雲母、砂を中量、石英、長石を少量含む	にぶい褐	にぶい黄橙	良	半隆起線、円形文、三叉文	ナデ			器面は摩耗、風化
7	SI1	深鉢	中期中葉	II 6	装飾	−	−	(3.2)	やや粗、2mm以下の砂を中量含む	にぶい黄橙	黒褐	良好	孔、半隆起線				
8	SI1	深鉢	中期中葉	III 13	口縁部	14.0	−	(6.2)	やや粗、3mm以下の雲母、砂を中量、長石を少量含む	明赤褐	明褐	良	単節縄文LR（横位）、隆帯、沈線	ナデ	○	○	器面は摩耗、風化
9	SI1	深鉢 B	中期中葉	III 13	口縁〜胴部	(21.4)	−	(12.2)	やや粗、3mm以下の雲母、砂を中量、石英、長石を少量含む	橙	明褐	良好	単節縄文LR（縦位）、隆帯、沈線	ナデ（横位）			
10	SI1	深鉢	中期中葉	III 14	口縁部	−	−	(4.8)	粗、3mm以下の砂を多量、長石を少量含む	明赤褐	褐	良	隆帯	ナデ			
11	SI1	深鉢	中期前半		胴〜底部	−	9.8	(1.6)	粗、3mm以下の雲母、砂を多量、長石を少量含む	にぶい褐	にぶい黄橙	良	ナデ	ナデ			
12	SI1	深鉢	中期前半		胴〜底部	−	(10.5)	(3.5)	やや粗、3mm以下の石英、長石、砂を少量含む	黄橙	橙	良	ナデ	ナデ（横位）		○	器面は摩耗、風化
13	SI1	深鉢	中期前半		底部	−	−	(0.8)	やや粗、2mm以下の石英、長石、砂を少量含む	にぶい赤褐	橙	良	網代痕				
14	SI1	小形深鉢	中期前半		胴〜底部	−	4.9	(3.8)	粗、3mm以下の雲母、砂を多量、長石を少量含む	暗褐	橙	良	ナデ	ナデ			
15	SI1	浅鉢	中期前葉	III 9	口縁〜胴部	−	−	(6.6)	やや粗、3mm以下の砂を中量、雲母、長石を少量含む	にぶい褐	灰黄褐	良好	隆帯、縄文側面圧痕（2段LR）、ミガキ	ナデ（横位）、ミガキ			
16	SI2	深鉢 D	中期中葉	II 7	口縁〜胴部	(17.6)	−	(17.4)	やや粗、3mm以下の雲母、砂を中量、長石を少量含む	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	三脚状突起、袋状突起、基隆帯、刻目、半隆起線、抉り	ナデ		○	
17	SI2	深鉢	中期中葉	II 6	口縁部	−	−	(12.7)	やや粗、3mm以下の砂を中量、長石を少量含む	浅黄橙	にぶい黄橙	良好	基隆帯、半隆起線	ナデ			
18	SI2	深鉢	中期中葉	II 6	口縁部	−	−	(6.1)	やや粗、3mm以下の砂を中量、長石を少量含む	にぶい橙	褐灰	良好	基隆帯、半隆起線、袋状突起	ナデ			
19	SI2	深鉢	中期中葉	II 6	口縁部	−	−	(6.9)	粗、3mm以下の砂を多量、長石を少量含む	浅黄橙	黒褐	良	基隆帯、半隆起線、抉り			○	
20	SI2	深鉢	中期中葉	II 6	胴部	−	−	(5.1)	やや粗、2mm以下の砂を中量、長石を少量含む	にぶい橙	にぶい褐	良好	基隆帯、半隆起線、メガネ状突起	ナデ		○	
21	SI2	深鉢	中期中葉	II6	胴部	−	−	(5.2)	やや粗、3mm以下の砂を中量、長石を少量含む	灰黄褐	にぶい黄褐	良	基隆帯、半隆起線	ナデ（横位）		○	
22	SI2	深鉢	中期前葉	III 12	口縁部	−	−	(4.9)	粗、3mm以下の雲母、砂を多量、長石を少量含む	にぶい橙	橙	良好	口縁端部：沈線、単節縄文LR（横位）				器面は摩耗、風化
23	SI2	深鉢	中期中葉	III 15	口縁部	−	−	(5.6)	やや粗、3mm以下の雲母、砂を中量、長石を少量含む	橙	橙	良	沈線、ナデ（横位）	ナデ（横位）			器面は摩耗、風化
24	SI2	深鉢	中期中葉	III 12	胴部	−	−	(8.2)	やや粗、3mm以下の砂を中量、長石を少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	単節縄文LR（横位）、沈線	ナデ（横位）、ミガキ			
25	SI2	深鉢	中期中葉	III 12	胴部	−	−	(4.4)	やや粗、2mm以下の雲母、砂を中量、長石を少量含む	橙	にぶい黄褐	良好	単節縄文LR（横位）、沈線	ナデ		○	
26	SI2	深鉢	中期中葉	III 14	装飾	−	−	(3.8)	粗、3mm以下の雲母、砂を多量含む	にぶい褐	橙	良好	隆帯				

縄文土器（2）

報告No.	出土位置 出土層位	器種 器形	時期	分類	残存部位	法量（cm）口径	底径	高さ	胎土	色調 外面	内面	焼成	施文・調整など 外面	内面	煤外面	煤内面	備考
27	SI2	深鉢	中期前半	IV 17	口縁～胴部	－	－	(3.8)	やや粗、2mm以下の長石、砂を少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	口縁部：ナデ、ミガキ　胴部：無節L（横・縦位）	ナデ、ミガキ		○	
28	SI2	深鉢	中期前半	IV 17	口縁～胴部	－	－	(8.1)	やや粗、5mm以下の礫、砂を中量、長石を少量含む	橙	橙	良好	口縁部：ナデ、断面R側面圧痕？胴部：ケズリ、単節縄文LR（縦位）RL（横位）	ケズリ、ナデ			
29	SI2	深鉢	中期中葉	II 7	胴～底部	－	10.4	(4.8)	粗、4mm以下の雲母を多量、長石を少量含む	明赤褐	にぶい黄橙	良	基隆帯、刻目、半隆起線			○	
30	SI2	深鉢	中期中葉	II 6	胴～底部	－	11.6	(2.6)	やや粗、3mm以下の雲母、砂を中量、長石を少量含む	橙	黄橙	良好	基隆帯、半隆起線	ナデ			
31	SI2	深鉢	中期前半		胴～底部	－	12.4	(4.6)	粗、5mm以下の砂を多量、長石を少量含む	にぶい黄橙	浅黄橙	良好	網代痕、磨り消し	ナデ			
32	SI2	浅鉢	中期前半		胴～底部	－	(8.0)	(3.4)	やや粗、2mm以下の砂を中量、長石を少量含む	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	ナデ	ナデ			
33	SI4	深鉢	中期前葉	I 1	口縁部	－	－	(3.6)	粗、4mm以下の雲母、砂を中量、長石を少量含む	にぶい黄橙	黄橙	良	半隆起線、連続爪形	ナデ（横位）			
34	SI4	深鉢	中期前葉	I 1	胴部	－	－	(3.4)	やや粗、3mm以下の砂を少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄褐	良好	半隆起線、連続爪形	ナデ（横位）			
35	SI4	深鉢	中期前葉	I 2	口縁部	－	－	(3.5)	やや粗、2mm以下の長石、雲母、砂を少量含む	橙	明褐	良好	半隆起線	ナデ、ミガキ		○	
36	SI4	深鉢	中期中葉	II 7	口縁部	－	－	(5.3)	やや粗、2mm以下の砂を中量含む	灰褐	灰黄褐	良好	鋸歯状突起、半隆起線	ナデ			器面は摩耗、風化
37	SI4	深鉢	中期中葉	II 7	口縁部下半	－	－	(6.5)	やや粗、2mm以下の砂を中量含む	にぶい黄褐	黒褐	良好	基隆帯、半隆起線、袋状突起、刺突	ナデ（横位）			
38	SI4	深鉢	中期中葉	II 7	口縁部下半	－	－	(4.7)	やや粗、2mm以下の砂を中量含む	黒褐	にぶい黄橙	良	基隆帯、刻目、半隆起線	ナデ			
39	SI4	深鉢	中期中葉	II 7	口縁部下半	－	－	(5.1)	やや粗、2mm以下の砂、5mm大の砂を中量含む	にぶい黄褐	黒褐	良好	基隆帯、刻目、半隆起線	ナデ			
40	SI4	深鉢	中期中葉	II 7	口縁部下半	－	－	(4.3)	やや粗、2mm以下の砂を中量含む	にぶい黄褐	にぶい黄橙	良	基隆帯、半隆起線、三叉文	ナデ			
41	SI4	深鉢	中期中葉	II 7	口縁部下半	－	－	(5.5)	やや粗、2mm以下の砂を中量、長石を少量含む	にぶい黄褐	黒褐	良好	基隆帯、刻目、半隆起線	ナデ			
42	SI4	深鉢	中期中葉	II 7	口縁部下半	－	－	(5.5)	やや粗、2mm以下の砂を中量含む	にぶい黄褐	暗灰黄	良好	基隆帯、刻目、半隆起線	ナデ			
43	SI4	深鉢	中期中葉	II 7	胴部	－	－	(5.5)	やや粗、2mm以下の砂を中量含む	灰黄褐	黄褐	良好	基隆帯、刻目、半隆起線	ナデ			内面は摩耗、風化
44	SI4	深鉢	中期中葉	II 7	胴部	－	－	(8.3)	やや粗、2mm以下の砂を中量含む	灰黄褐	黒褐	良好	基隆帯、半隆起線	ナデ			
45	SI4	深鉢	中期中葉	II 7	装飾	－	－	(4.3)	やや粗、2mm以下の砂を中量含む	にぶい黄橙	灰黄褐	良好	鋸歯状突起、半隆起線、ケズリ、ナデ	ケズリ			
46	SI4	深鉢	中期中葉	II 7	装飾	－	－	(3.3)	やや粗、2mm以下の砂を中量含む	黄褐	にぶい黄橙	良好	半隆起線、孔				
47	SI4	深鉢	中期中葉	II 7	装飾	－	－	(5.2)	やや粗、2mm以下の砂を中量含む	浅黄橙	にぶい黄橙	良	半隆起線	ナデ			
48	SI4	深鉢	中期中葉	II 7	装飾	－	－	(3.2)	やや粗、2mm以下の砂を中量含む	にぶい黄褐	黒褐	良好	メガネ状突起				
49	SI4	深鉢	中期中葉	II 6	口縁部	－	－	(6.8)	やや粗、4mm以下の砂を中量、長石を少量含む	灰黄褐	黒褐	良好	基隆帯、半隆起線、袋状突起	ナデ			
50	SI4	深鉢 B	中期中葉	III 11	口縁～底部	(29.0)	12.0	(38.3)	やや粗、4mm以下の長石、雲母、礫、砂を少量含む	浅黄橙	にぶい黄橙	良好	単節縄文LR（縦位）、隆帯、底部：網代痕、磨り消し	ケズリ（横位）、ミガキ（横位）			
51	SI4	深鉢 C	中期中葉	III 13	口縁～胴部	－	－	(22.0)	粗、2mm以下の雲母、砂を多量、長石を少量含む	橙	明黄褐	良	単節縄文LR（縦位）、隆帯、沈線	ナデ	○	○	
52	SI4	深鉢	中期中葉	III 13	口縁部	－	－	(3.4)	やや粗、5mm以下の礫、砂を中量、長石を少量含む	にぶい黄橙	暗褐	良	単節縄文LR？、隆帯、沈線	ナデ（横位）			
53	SI4	深鉢	中期中葉	III 10	口縁部	－	－	(3.3)	やや粗、2mm以下の砂を少量含む	にぶい黄褐	黒褐	良好	C字状突起、沈線、ナデ（横位）	ナデ（横位）			
54	SI4	深鉢	中期前葉	III 8	口縁部	－	－	(2.7)	粗、2mm以下の砂を多量含む	浅黄橙	浅黄橙	良	半隆起線、隆帯、連続押捺	ナデ			器面は摩耗、風化

縄文土器(3)

報告No.	出土位置 出土層位	器種 部位	時期	分類	残存部位	法量(cm) 口径	底径	高さ	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	施文・調整など 外面	施文・調整など 内面	煤外面	煤内面	備考
55	SI4	深鉢	中期中葉	III 11	口縁～胴部	–	–	(5.4)	粗、2mm 以下の雲母、砂を多量含む	にぶい黄橙	浅黄橙	良	単節縄文 LR（縦位）、隆帯			○	器面は摩耗、風化
56	SI4	深鉢 B	中期中葉	III 13	口縁～胴部	(25.8)	–	(16.6)	やや粗、2mm 以下の雲母、砂を中量含む	浅黄橙	にぶい黄橙	良好	単節縄文 LR（縦位）、隆帯、沈線	ナデ			器面は摩耗、風化
57	SI4	深鉢	中期中葉	III 11	口縁～胴部	–	–	(11.0)	やや粗、4mm 以下の雲母、礫、砂を中量、長石を少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	単節縄文 LR（横位）、隆帯	ナデ、ミガキ			
58	SI4	深鉢	中期中葉	III 13	胴～胴部	–	–	(7.2)	やや粗、4mm 以下の砂を中量、長石を少量含む	にぶい黄橙	暗灰黄	良好	単節縄文 LR（縦位）、隆線、沈線	ナデ			
59	SI4	深鉢	中期中葉	III 12	胴部	–	–	(6.8)	やや粗、3mm 以下の長石、砂を少量含む	にぶい褐	にぶい褐	良好	単節縄文 RL（一部押圧？）、沈線	ナデ			
60	SI4	深鉢	中期中葉	III 12	胴部	–	–	(6.0)	やや粗、3mm 以下の砂を中量、長石を少量含む	橙	黒褐	良	単節縄文 LR（横位）、沈線	ケズリ（横位）、ナデ		○	
61	SI4	深鉢	中期前～中葉	III 16	口縁部	–	–	(6.3)	やや粗、3mm 以下の砂を中量含む	にぶい黄橙	にぶい褐	良	口縁部原体：沈線、円形竹（刺突）、連続刺突、沈線、隆帯	ケズリ（横位）、ナデ			
62	SI4	深鉢	中期前～中葉	III 16	胴部	–	–	(3.7)	粗、2mm 以下の砂を中量含む	浅黄橙	橙	良	連続刺突	ナデ			器面は摩耗、風化
63	SI4	深鉢	中期中葉	II 7	底部	–	–	(1.4)	やや粗、2mm 以下の砂を中量含む	にぶい黄橙	黒褐	良好	平縄起源				
64	SI4	深鉢	中期前半		底部	–	–	(11.2)	(1.1)	やや粗、2mm 以下の雲母、砂を中量、長石を少量含む	にぶい黄橙	灰黄褐	良好	横代痕、磨り消し	ナデ			
65	P9	深鉢	中期前～中葉	I 5	口縁部	–	–	(3.0)	やや粗、3mm 以下の雲母、砂を少量含む	橙	橙	良好	平縄起源、連続押捺、円形竹（刺突）、ナデ（横位）	ナデ（横位）			
66	P16	深鉢	中期前葉	III 8	口縁～胴部	–	–	(10.1)	粗、2mm 以下の雲母、砂を多量、長石を少量含む	にぶい橙	暗灰黄	良	平縄起源、隆帯、連続押捺、単節縄文 RL（縦・横位）	ナデ			
67	遺物集中 1 III 層	深鉢	中期中葉	I 5	胴部	–	–	(3.5)	やや粗、2mm 以下の砂を中量、石英、長石を少量含む	橙	黒褐	良好	平縄起源、三叉文			○	
68	遺物集中 1 III 層	深鉢	中期前葉	I 4	口縁～胴部	–	–	(6.2)	粗、2mm 以下の雲母、砂を多量、長石を少量含む	褐灰	にぶい橙	良好	平縄起源、刺突	ナデ			
69	遺物集中 1 III 層	深鉢	中期前葉	I 3	胴部	–	–	(5.6)	やや粗、2mm 以下の雲母、砂を中量、長石を少量含む	にぶい橙	灰黄褐	良好	単節縄文 LR（横位）、平縄起源	ナデ（横位）			
70	遺物集中 1 III 層	深鉢	中期中葉	I 5	胴部	–	–	(3.6)	やや粗、3mm 以下の長石、雲母、砂を少量含む	にぶい黄橙	にぶい橙	良好	平縄起源	ナデ			
71	遺物集中 1 III 層	深鉢	中期中葉	III 10	口縁部	–	–	(5.2)	やや粗、3mm 以下の石英、長石、雲母、砂を少量含む	暗褐	にぶい黄橙	良	C 字状突起、隆帯、孔、ナデ	C 字状突起、ナデ			
72	遺物集中 1 III 層	深鉢	中期中葉	III 13	口縁部	–	–	(3.9)	粗、3mm 以下の雲母、砂を多量、長石を少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄褐	良	縄文？、隆帯、沈線	ナデ			器面は摩耗、風化
73	遺物集中 1 III 層	深鉢	中期中葉	III 15	口縁部	–	–	(3.6)	やや粗、1mm 以下の長石、砂を少量含む	にぶい黄褐	にぶい褐	良好	沈線、ナデ、ケズリ、ミガキ	ナデ			
74	遺物集中 1 III 層	深鉢	中期中葉	III 12	胴部	–	–	(3.9)	粗、5mm 大の礫を中量、2mm 以下の長石、砂を少量含む	灰褐	灰黄褐	良	縄文（原体不明）、沈線				器面は摩耗、風化
75	遺物集中 1 III 層	深鉢	中期中葉	III 12	胴部	–	–	(5.4)	やや粗、2mm 以下の石英、長石、砂を少量含む	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	単節縄文 LR（縦位）、沈線	ナデ			
76	遺物集中 1 III 層	深鉢	中期前～中葉	III 16	口縁部	–	–	(4.0)	粗、2mm 以下の雲母、砂を多量、長石を少量含む	橙	灰黄褐	良好	隆帯、円形文、刺目	沈線、ナデ（横位）、ミガキ			器面は剥落
77	遺物集中 1 III 層	深鉢	中期前半	IV 17	胴部	–	–	(8.3)	粗、2mm 以下の雲母、砂を多量、長石を少量含む	にぶい黄橙	灰黄褐	良	単節縄文 LR（横位）	ナデ（横位）			
78	遺物集中 2 III 層	深鉢	中期中葉	I 5	口縁部	–	–	(4.9)	やや粗、2mm 以下の雲母、砂を中量、長石を少量含む	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	平縄起源、三叉文、円形文、ナデ	ナデ			
79	遺物集中 2 III 層	深鉢	中期前葉	I 3	胴部	–	–	(3.9)	やや粗、2mm 以下の雲母、砂を中量、長石を少量含む	にぶい橙	橙	良好	単節縄文 LR（横位）、平縄起源（横位）	ナデ			
80	遺物集中 2 III 層	深鉢	中期中葉	I 5	胴～胴部	–	–	(10.6)	やや粗、2mm 以下の雲母、砂を中量、長石を少量含む	にぶい橙	にぶい橙	良好	平縄起源、三叉文、瘤手文	ケズリ（横位）、ナデ、ミガキ			

縄文土器（4）

報告No.	出土位置 出土層位	器種 器形	時期	分類	残存部位	法量(cm) 口径	底径	高さ	胎土	色調 外面	内面	焼成	施文・調整など 外面	内面	煤外面	煤内面	備考
81	遺物集中2 III層	深鉢	中期中葉	III 13	口縁部	－	－	(5.0)	粗、5mm以下の礫、砂を多量含む	浅黄橙	にぶい黄橙	良	単節縄文LR（縦位）,隆帯、円形文、沈線	円形文			器面は摩耗、風化
82	遺物集中2 III層	深鉢	中期中葉	III 13	胴部	－	－	(4.9)	粗、5mm以下の砂、礫を中量含む	にぶい黄橙	にぶい橙	良	縄文（原体不明）、沈線	ナデ？			器面は摩耗、風化
83	遺物集中2 III層	深鉢	中期前～中葉	III 16	胴部	－	－	(5.4)	やや粗、3mm以下の砂を中量含む	橙	黄橙	良好	単節縄文LR（縦位）,隆帯、連続刺突、沈線	ナデ			器面は摩耗、風化
84	遺物集中2 III層	浅鉢	中期前～中葉	I 5	口縁－底部	(42.0)	8.4	(14.9)	粗、4mm以下の雲母、砂を中量、長石を少量含む	橙	明赤褐	良	口縁部：半隆起線、円形瘤（刺突）、隆帯、胴部：単節縄文LR？ 底部：網代痕、磨り消し	ケズリ、ナデ			器面は摩耗、風化
85	遺物集中2 III層	浅鉢	中期前葉	III 9	口縁部	－	－	(6.5)	やや粗、2mm以下の砂を少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	大形突起,縄文側面圧痕（2段RL）、ナデ、抉り	沈線、ナデ			器面は摩耗、風化
86	遺物集中3 III層	深鉢	中期前葉	I 1	口縁部	－	－	(3.7)	やや粗、2mm以下の砂を中量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	半隆起線、連続爪形	ナデ			
87	遺物集中3 III層	深鉢	中期前葉	I 1	胴部	－	－	(3.3)	やや粗、3mm以下の雲母、砂を中量含む	黒褐	にぶい黄橙	良好	半隆起線、連続爪形	ナデ			
88	遺物集中3 III層	深鉢	中期中葉	I 5	口縁部	－	－	(4.8)	やや粗、3mm以下の砂を中量含む	にぶい黄橙	浅黄橙	良好	半隆起線（2種類）、鋸歯状？	隆帯、円形文、ナデ			
89	遺物集中3 III層	深鉢	中期前葉	I 3	胴部	－	－	(5.2)	やや粗,2mm以下の雲母,砂を中量、長石を少量含む	橙	橙	良好	半隆起線、渦巻文	ナデ（横位）、ミガキ			
90	遺物集中3 III層	深鉢	中期前葉	I 3	胴部	－	－	(5.1)	やや粗,3mm以下の雲母,砂を中量、長石を少量含む	橙	にぶい黄褐	良好	半隆起線、渦巻文、刺突	ミガキ		○	
91	遺物集中3 III層	深鉢	中期前葉	I 3	胴部	－	－	(6.4)	やや粗、2mm以下の雲母、砂を少量含む	黒褐	橙	良好	縄文、磨り消し、半隆起線、渦巻文	ナデ、ミガキ		○	
92	遺物集中3 III層	深鉢	中期前葉	I 4	胴部	－	－	(2.9)	粗、3mm以下の雲母、砂を多量含む	にぶい褐	黒褐	良好	半隆起線、刺突	ナデ			
93	遺物集中3 III層	深鉢	中期前葉	I 4	胴部	－	－	(2.2)	やや粗、2mm以下の砂を中量、長石を少量含む	にぶい黄褐	赤褐	良好	半隆起線、刺突	ナデ			
94	遺物集中3 III層	深鉢	中期前半		底部	－	10.6	(1.3)	やや粗,2mm以下の雲母,砂を中量、長石を少量含む	明赤褐	にぶい橙	良好	網代痕、磨り消し	ケズリ			
95	遺物集中3 III層	浅鉢	中期前葉	III 16	口縁部	－	－	(3.4)	粗、2mm以下の砂を多量含む	橙	橙	良	交互刺突、沈線	ナデ			器面は摩耗、風化
96	2C8 III層	深鉢	中期前葉	I 3	胴部	－	－	(3.8)	粗、3mm以下の雲母、砂を多量、長石を少量含む	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	単節縄文LR（横位）、半隆起線、渦巻文	ナデ			
97	2C22 III層	深鉢	中期前葉	I 3	胴部	－	－	(3.7)	やや粗,2mm以下の雲母,砂を中量、長石を少量含む	にぶい橙	灰黄褐	良好	単節縄文LR（横位）、半隆起線、円形文	ナデ			
98	2C III層	深鉢	中期前葉	I 4	胴部	－	－	(3.5)	やや粗、2mm以下の長石、雲母、砂を少量含む	暗オリーブ褐	灰黄褐	良好	半隆起線、刻目	ミガキ（横位）			
99	2C9 III層	深鉢	中期中葉	I 5	胴部	－	－	(4.5)	やや粗、1mm以下の長石、雲母、砂を少量、5mm大の礫を含む	にぶい橙	橙	良好	半隆起線、円形文、三叉文、刺突	ナデ（横位）			
100	調査区 表土	深鉢	中期前葉	I 2	口縁部	－	－	(4.9)	やや粗、2mm以下の長石、砂を少量含む	橙	明赤褐	良好	半隆起線	ナデ			
101	3C 表土	深鉢	中期中葉	I 5	胴部	－	－	(4.0)	粗、4mm以下の雲母、砂を多量、長石を少量含む	にぶい黄橙	橙	良好	半隆起線、隆帯、円形文？	ナデ（横位）			
102	2C8 III層	深鉢	中期中葉	II 7	口縁部	－	－	(7.6)	やや粗、2mm以下の砂を中量含む	黒褐	灰黄褐	良好	口縁端部：単沈線、鋸歯状突起、半隆起線	ナデ、ミガキ			器面は剥落
103	2C14 III層	深鉢	中期中葉	II 7	口縁部	－	－	(4.2)	やや粗、2mm以下の砂を中量、5mm大の礫を含む	灰黄褐	黒褐	良	隆帯、半隆起線	ナデ、ミガキ			器面は摩耗、風化
104	2C20 III層	深鉢	中期中葉	II 6	胴部	－	－	(3.9)	やや粗、2mm以下の長石、砂を少量含む	にぶい黄橙	灰黄褐	良好	半隆起線	ナデ			器面は摩耗、風化
105	2C20 III層	深鉢	中期中葉	II 6	装飾	－	－	(2.9)	やや粗、2mm以下の長石、雲母、砂を少量含む	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	鋸歯状突起、半隆起線	半隆起線、鋸歯状突起			

縄文土器(5)

報告No.	出土位置 出土層位	器種 器形	時期	分類	残存部位	法量(cm) 口径	底径	高さ	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	施文・調整など 外面	施文・調整など 内面	煤外面	煤内面	備考
106	2C20 III層	深鉢	中期前葉	III9	口縁部	−	−	(2.9)	やや粗、2mm以下の長石、雲母、砂を少量含む	にぶい褐	にぶい黄褐	良好	隆帯、縄文無節圧痕（2段以上）、ナデ		○		
107	2E03 III層	深鉢	中期中葉	III13	胴部	−	−	(6.2)	粗、3mm以下の砂を中量含む	灰黄褐	浅黄橙	良	縄文？、隆帯、沈線	ナデ（磨位）			器面は摩耗、風化
108	3C III層	深鉢	中期中葉	III12	口縁～胴部	−	−	(11.9)	粗、2mm以下の砂を多量、長石を少量含む	明赤褐	にぶい黄橙	良好	口縁隆帯・沈線、胴部：単節縄文LR（磨位）、沈線	ナデ			器面は摩耗、風化
109	2C III層	深鉢	中期中葉	III15	口縁部	−	−	(3.2)	やや粗、2mm以下の雲母、砂を中量、長石を少量含む	にぶい褐	にぶい黄褐	良	沈線、ナデ	ナデ（磨位）			器面は剥落
110	3C III層	深鉢	中期中葉	III12	胴部	−	−	(7.6)	やや粗、2mm以下の長石、砂を少量含む	にぶい褐	にぶい黄褐	良	単節縄文LR（磨位）、沈線	ナデ			
111	3C III層	深鉢	中期前～中葉	III16	口縁部	−	−	(2.8)	やや粗、2mm以下の雲母、砂を中量含む	橙	にぶい黄橙	良	連続刺突、沈線	ナデ？			器面は摩耗、風化
112	3E11 III層	深鉢	中期前半	IV17	口縁～胴部	−	−	(3.4)	粗、2mm以下の長石、砂を少量含む	灰黄褐	にぶい黄橙	良	単節縄文LR（磨位）	ナデ（磨位）			
113	3C23 III層	深鉢	中期前半	IV18	口縁～胴部	−	−	(8.9)	粗、3mm以下の石英、砂を多量、長石を少量含む	橙	橙	良	ナデ（磨位）	ナデ（磨位）			
114	4Z7 III層	深鉢	中期前半	IV18	口縁～胴部	−	−	(2.9)	粗、3mm以下の雲母、砂を中量、長石を少量含む	橙	橙	良	ナデ	ナデ			
115	4Z7 III層	深鉢	中期前半	−	胴～底部	−	(11.0)	(4.3)	粗、4mm以下の雲母、砂を多量、長石を少量含む	明黄褐	橙	良	ナデ	ナデ			

石　器

報告No.	出土位置	出土層位	分類	器種	石材	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重量(g)	欠損	備考
116	SI2	1層	B	石匙	珪質頁岩	7.80	7.10	1.15	30.0	なし	
117	4Z7	III層	A4	石匙	珪質頁岩	4.32	2.90	0.94	9.0	なし	微細剥離痕
118	遺物集中3	III層	H	不定形石器	珪質頁岩	6.13	5.67	2.10	47.0	なし	微細剥離痕
119	SI2	1層	I	不定形石器	珪質頁岩	4.42	3.30	0.80	6.0	なし	微細剥離痕
120	SI2	1層	H	不定形石器	珪質頁岩	6.82	6.62	2.03	80.0	なし	微細剥離痕
121	遺物集中3	III層	J	不定形石器	流紋岩	4.10	3.67	1.10	16.0	なし	微細剥離痕
122	SI2	1層	A2	磨製石斧	凝灰岩	(8.92)	5.25	2.44	219.0	刃部	全面摩耗、風化、安山岩質凝灰岩
123	SI2	1層	A1	磨製石斧	蛇紋岩	6.10	3.52	1.60	52.0	基部、側面の一部	基部側面に研痕
124	遺物集中1	III層	A2	石錘	閃緑岩	10.25	8.20	3.40	445.0	なし	
125	遺物集中2	III層	A1	石錘	花崗岩	9.30	8.10	3.27	330.0	なし	
126	調査区	−	A2	石錘	閃緑岩	9.50	8.17	2.90	328.0	なし	
127	3D3	III層	B	石錘	凝灰岩	10.50	8.90	2.30	370.0	なし	
128	SI2	1層	F	磨石類	凝灰岩	9.53	7.70	4.60	506.0	なし	表面は変色（黒色）、被熱による赤化
129	SI4	2層	A	磨石類	凝灰岩	14.53	8.00	5.50	967.0	なし	溶結流紋岩質凝灰岩
130	SI1	1層	A	磨石類	凝灰岩	(17.47)	8.40	4.25	852.0	下部	
131	遺物集中2	III層	A	磨石類	凝灰岩	(8.00)	8.30	4.00	361.0	上部	流紋岩質凝灰岩
132	SI2	1層	A	磨石類	凝灰岩	(4.81)	6.60	4.10	213.0	上・下部	
133	2I5	III層	E	磨石類	砂岩	10.35	9.35	4.20	439.0	なし	

高山東遺跡　遺構観察表

遺構名	グリッド	平面形	断面形	規　模（cm）			遺構底部標高（m）	主軸方位	覆　土
				長軸（直径）	短　軸	深　さ			
SK20	4C	長楕円形	台形状	1.10	0.68	0.40	26.15	N-68°-W	3
SK9	4C	円形	弧状	0.56	0.48	0.12	27.09	－	1
SK17	4C	長楕円形	半円状	1.22	0.64	0.17	27.39	N-54°-W	1
SK27	4B	楕円形	皿状	0.80	0.60	0.10	25.72	N-50°-E	1
SK28	4B	円形	弧状	0.68	0.58	0.14	25.60	－	1
P2	3C	楕円形	U字状	0.29	0.20	0.30	27.10	－	1
P5	3C	円形	半円状	0.22	0.20	0.14	27.29	－	1
P6	3C	円形	弧状	0.23	0.20	0.08	27.40	－	1
P7	3D	楕円形	半円状	0.24	0.19	0.12	27.44	－	1
P8	3C	楕円形	弧状	0.36	0.30	0.10	27.21	－	1
P10	4C	円形	U字状	0.24	0.22	0.20	26.97	－	1
P11	4C	楕円形	U字状	0.17	0.14	0.12	27.16	－	1
P12	4C	円形	弧状	0.32	0.28	0.08	27.04	－	1
P13	4C	楕円形	弧状	0.34	0.25	0.07	26.98	－	1
P14	4C	円形	弧状	0.26	0.24	0.06	26.95	－	1
P15	4C	楕円形	弧状	0.26	0.18	0.08	26.89	－	1
P16	4C	楕円形	皿状	0.40	0.30	0.07	26.90	－	1
P29	4C	楕円形	半円状	0.29	0.22	0.15	26.20	－	1
P23	4C	円形	皿状	0.22	0.22	0.07	26.52	－	1
P22	4C	円形	U字状	0.19	0.16	0.19	26.30	－	1
P23	4C	楕円形	弧状	0.20	0.15	0.06	26.37	－	1
P24	4C	楕円形	弧状	0.20	0.14	0.07	26.34	－	1
P25	4C	長楕円形	皿状	0.28	0.14	0.10	26.31	－	1
P26	4B	円形	U字状	0.16	0.15	0.24	26.04	－	1
P29	4C	円形	U字状	0.27	0.23	0.24	26.23	－	1
P30	3・4C	楕円形	半円状	0.24	0.17	0.14	26.27	－	1
P31	3C	円形	U字状	0.24	0.24	0.41	26.11	－	1
P32	3C	円形	台形状	0.26	0.22	0.11	26.28	－	1
SX1	3・4C	不整形	不整形	3.32	1.22	0.20	26.51	－	2
SX18	4C	長楕円形	半円状	0.98	0.32	0.14	27.61	N-89°-E	1

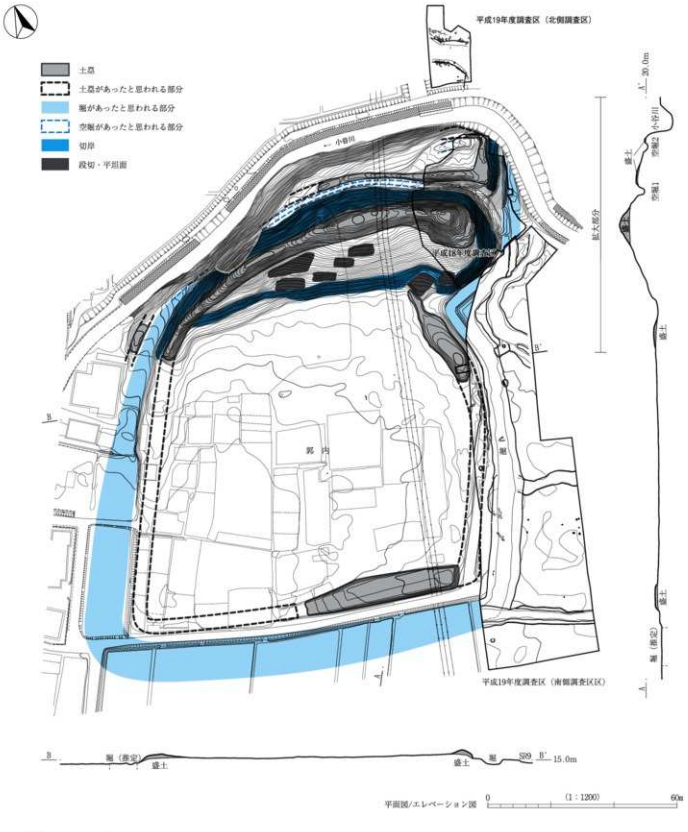
縄文土器

報告No.	出土位置 出土層位	器形 器部	時期	分類	残存部位	法量(cm) 口径	底径	高さ	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	文様・調整など 外面	文様・調整など 内面	煤付着 外面	煤付着 内面	備考
1	SK20	鉢	前期中葉	−	口縁～底部	16.6	9.2	9.8	やや粗・3mm以下の石英、長石、砂を少量含む。	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	押引北裏（横位）、コンパス文（横位）	小突起の内側に刺突	○		L1縄部に3単位の突起、大木3a式
2	SX1	深鉢 A	中期前葉	I 1	口縁～底部	11.7	7.1	14.7	粗・3mm以下の石英、長石、雲母、砂を中量含む。	にぶい黄橙	黒褐	良	半隆起線（横位・縦位）、爪形、刻隆帯、沈線（横位）	不明	○	○	L1縄部に4単位の突起
3	SX1	深鉢	中期前葉	I 1	口縁部	−	−	(4.2)	粗・2mm以下の石英、長石、雲母、砂を多量含む。	黒褐	にぶい赤褐	良	半隆起線（横位）、爪形	不明			小突起を確認。報告No.4・5と同一個体。
4	SX1	深鉢	中期前葉	I 1	胴部	−	−	(5.1)	やや粗・2mm以下の石英、長石、雲母、砂を中量含む。	橙	暗褐	良好	半隆起線（横位）、爪形、単節縄文LR（横位）	不明		○	報告No.3・5と同一個体
5	SX1	深鉢	中期前葉	I 1	胴部	−	−	(8.6)	粗・2mm以下の石英、長石、雲母、砂を中量含む。	にぶい黄橙	黒褐	良	半隆起線（横位）、爪形、単節縄文LR（横位）	不明	○		報告No.3・4と同一個体
6	SX1	深鉢	中期前葉	IV 17	口縁部	−	−	(5.4)	やや粗・2mm以下の石英、長石、雲母、砂を少量含む。	黒褐	にぶい黄橙	良	単節縄文LR（横位）、工具痕	指頭圧			
7	SX1	深鉢	中期前葉	III 9	口縁～胴部	−	−	(4.3)	やや粗・2mm以下の長石、砂を少量、2mm以下の石英、雲母を微量含む。	にぶい黄橙	明黄褐	良	十字、隆帯、単節縄文LR（押圧）	不明			
8	SX1	深鉢	中期前葉	III 9	胴部	−	−	(4.5)	やや粗・2mm以下の石英、長石、雲母、砂を少量含む。	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	単節縄文LR（横位・押圧）、隆帯	指頭圧			
9	SX1	深鉢	中期前葉	−	底部	−	(15.6)	(2.4)	粗・2mm以下の長石、砂を少量、2mm以下の石英、雲母を微量含む。	明黄褐	にぶい黄橙	良	網代底	不明			
10	SX1	深鉢	中期前葉	IV 17	胴部	−	−	(7.1)	やや粗・2mm以下の石英、長石、雲母、砂を少量含む。	黒	にぶい黄橙	良好	単節縄文LR（横位）	指頭圧			
11	3B III 層	深鉢	中期前葉	III 12	L1縄部	−	−	(3.7)	やや粗・2mm以下の石英、長石、砂を少量含む。	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	沈線（横位）、単節縄文LR（横位）	不明			報告No.12と同一個体
12	3B III 層	深鉢	中期前葉	III 12	胴部	−	−	(6.7)	やや粗・2mm以下の石英、長石、砂を少量含む。	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	単節縄文LR（横位）	不明			報告No.11と同一個体
13	4B III 層	深鉢	中期前葉	I 1	胴部	−	−	(3.5)	やや粗・2mm以下の石英、長石、砂を少量含む。	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	半隆起線（横位）、爪形	不明			報告No.14と同一個体
14	4B III 層	深鉢	中期前葉	I 1	胴部	−	−	(3.3)	やや粗・2mm以下の石英、長石、砂を少量含む。	灰黄褐	にぶい黄橙	良	半隆起線（横位・縦位）	不明			報告No.13と同一個体
15	4B III 層	深鉢	中期前葉	IV 17	L1縄～胴部	−	−	(7.2)	やや粗・2mm以下の石英、長石、雲母、砂を中量含む。	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	単節縄文LR（横位）	不明	○		
16	4C III 層	深鉢	中期前葉	−	底部	−	(9.1)	(1.1)	やや粗・2mm以下の長石、砂を少量、2mm以下の雲母を微量含む。	明黄褐	にぶい黄橙	良	木葉痕	不明			

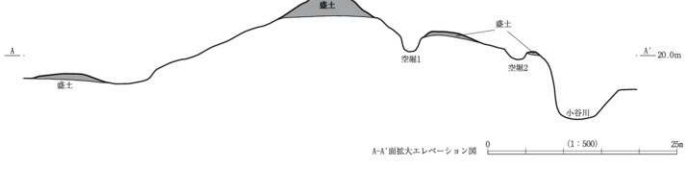
石器

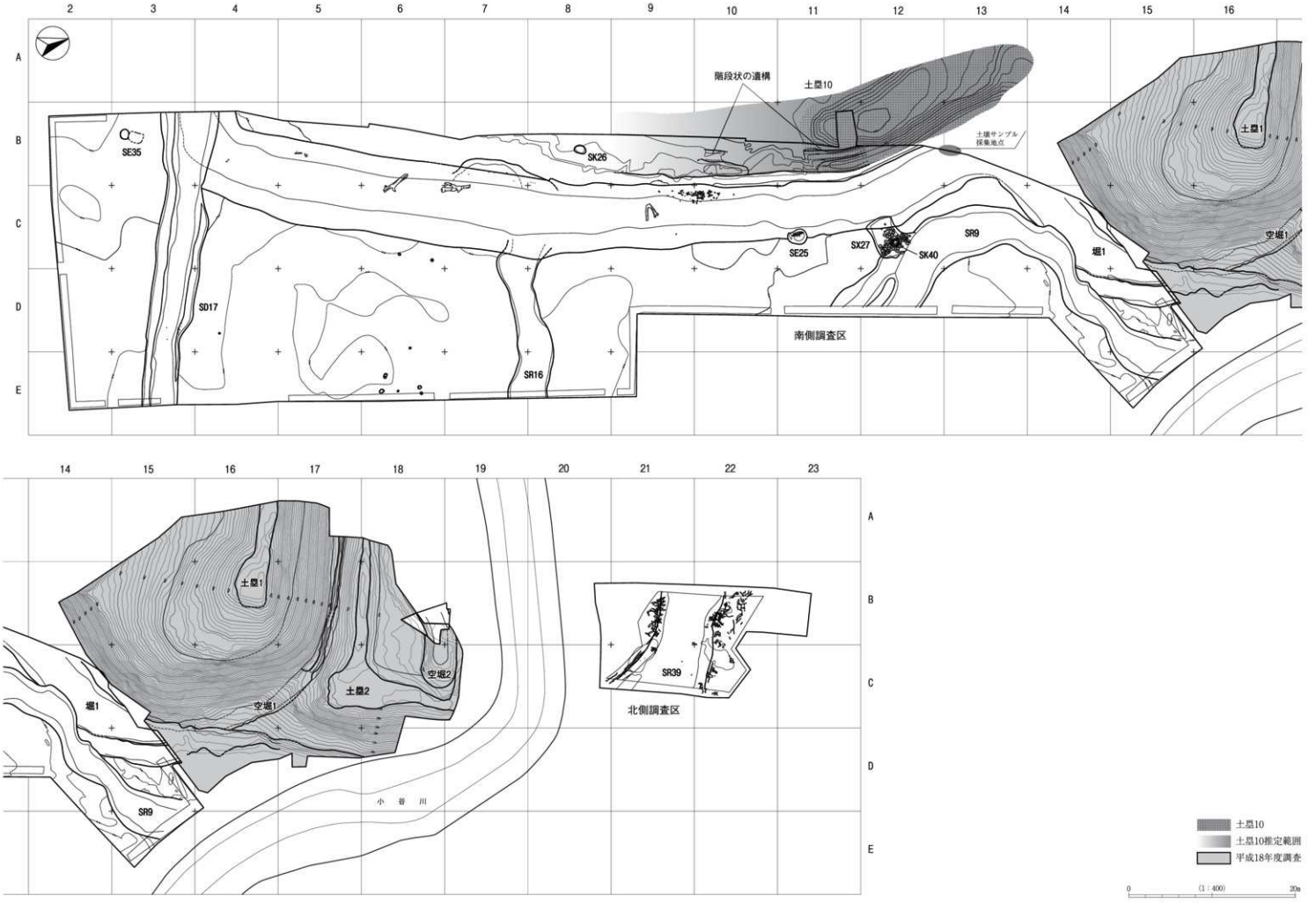
報告No.	出土位置	出土層位	分類	器種	石材	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損	備考
17	SK20	3層	C1	石錘	珪質頁岩	4.1	(1.5)	0.8	4.3	なし	石錘の可能性あり
18	3C	II層	A4	石匙	珪質頁岩	5.4	2.5	0.7	8.0	あり	松屋型石匙
19	SX1	1層	J	不定形石器	玉髄	4.0	2.5	1.2	6.0	不明	微細剥離あり
20	4B	II層	J	不定形石器	珪石英	2.5	1.9	0.8	3.5	不明	微細剥離あり
21	4C	II層	J	不定形石器	頁岩	7.6	4.3	1.5	16.9	不明	微細剥離あり
22	4C	II層	G	不定形石器	凝灰岩	6.5	4.6	1.8	31.0	不明	二次加工あり
23	SX1	1層	B3	剥片	流紋岩	5.4	4.9	1.3	26.9	−	
24	4C	II層	A2	磨製石斧	流紋岩？	7.1	3.4	1.6	62.3	なし	未成品
25	SX1	1層	G	敲石類	粗粒凝灰岩	15.3	6.9	2.8	434.0	なし	側面に打痕あり
26	3C	II層	G	敲石類	閃緑岩	8.9	8.9	5.1	579.0	なし	両面の中央部に打痕あり
27	4C	II層	A	敲石類	閃緑岩	12.7	6.8	3.6	487.0	なし	正面に磨痕あり
28	SX1	1層	B2	石鏃	粗粒凝灰岩	(14.4)	(12.6)	4.0	421.0	あり	

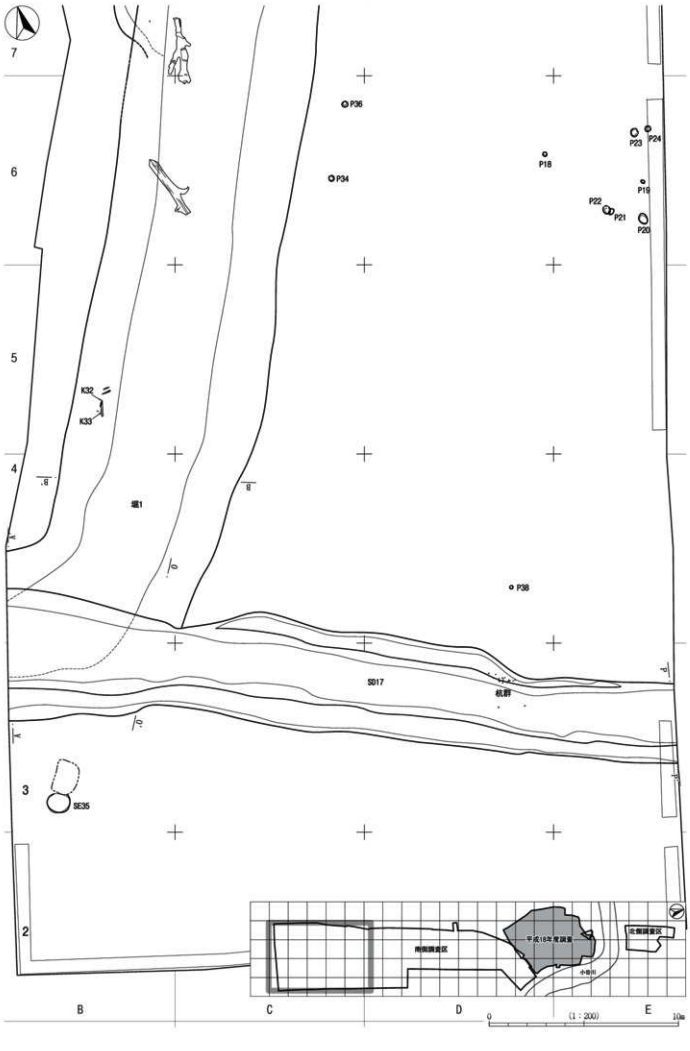
図　　版

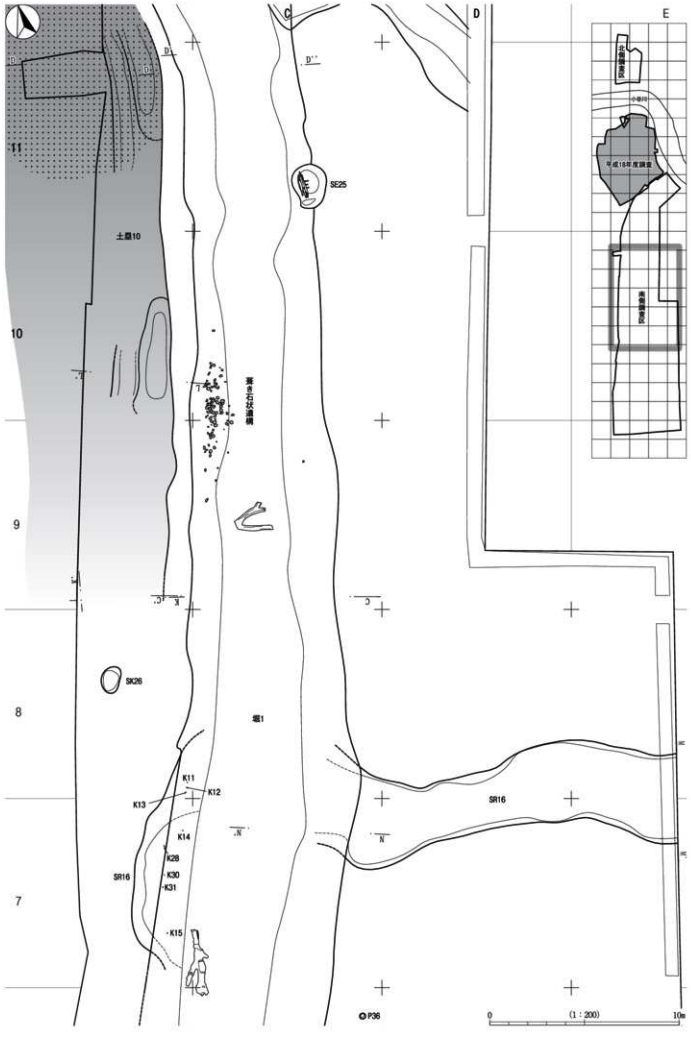


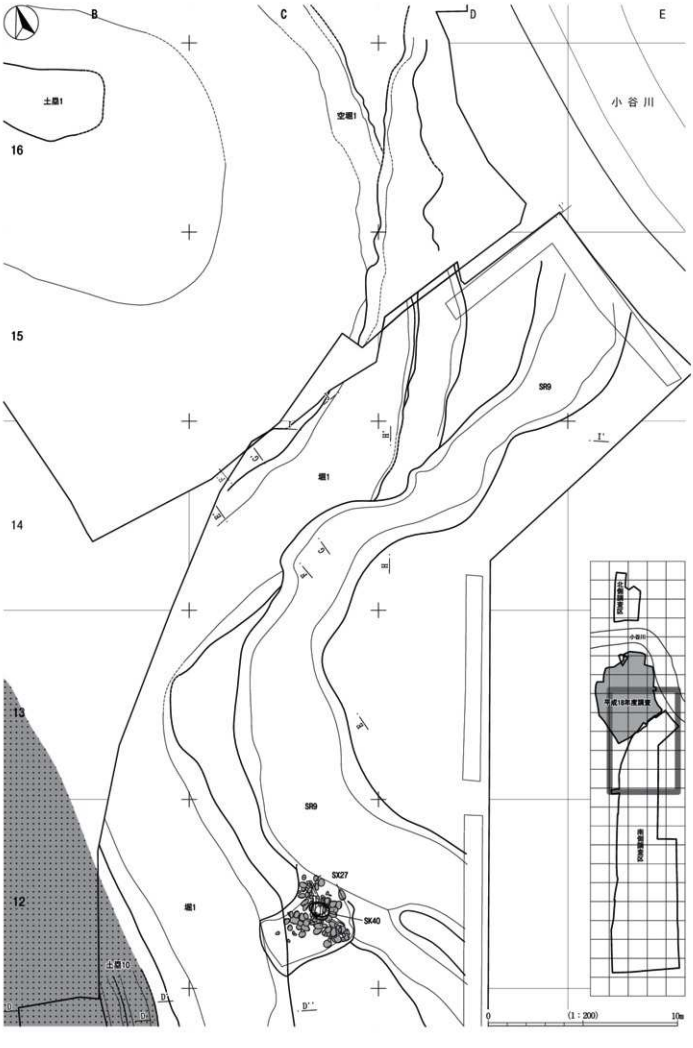
A-A'面拡大エレベーション図

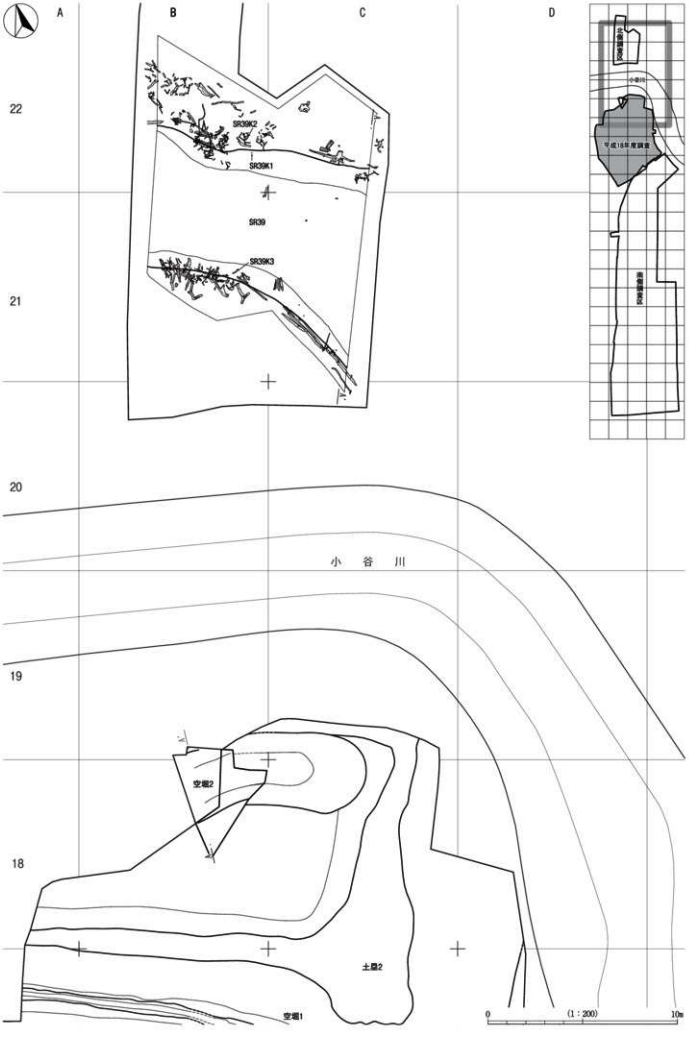



階段状の遺構
土塁10
土壌サンプル
採集地点
SE35
SK26
SD17
SR16
SE25
SX27
SK40
SR9
堀1
土塁1
空堀1
南側調査区
土塁1
空堀2
堀1
空堀1
土塁2
SR9
小 谷 川
SR39
北側調査区
土塁10
土塁10推定範囲
平成18年度調査
0
(1：400)
20m

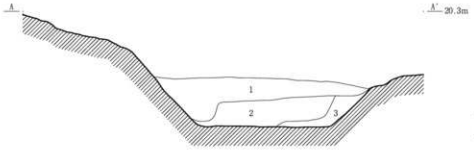

7
6
5
4
3
2
B
C
D
E
P36
P34
P18
P23
P24
P19
P22
P21
P20
K32
K33
堀1
P38
SD17
杭群
SE35
南側調査区
平成18年度調査
北側調査区
小館川
0
(1：200)
10m


C
D
E
11
10
9
8
7
土層10
SE25
SK26
K11
K12
K13
K14
K28
K30
K31
K15
SR16
SR16
P36
0
(1：200)
10m


B
C
D
E
土塁1
空堀1
小 谷 川
16
15
14
13
12
SR9
堀1
SX27
SK40
土塁10
D
D'
D''
I
I'
H
H'
0
(1：200)
10m

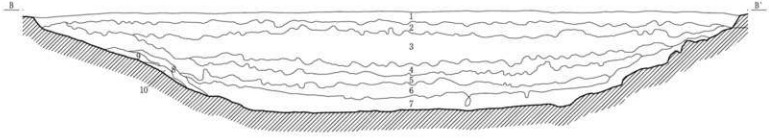

A
B
C
D
22
21
20
19
18
SR39K2
SR39K1
SR39
SR39K3
小　谷　川
空堀2
土塁2
空堀1
平成16年度調査
0
(1：200)
10m

空堀2　南北セクション



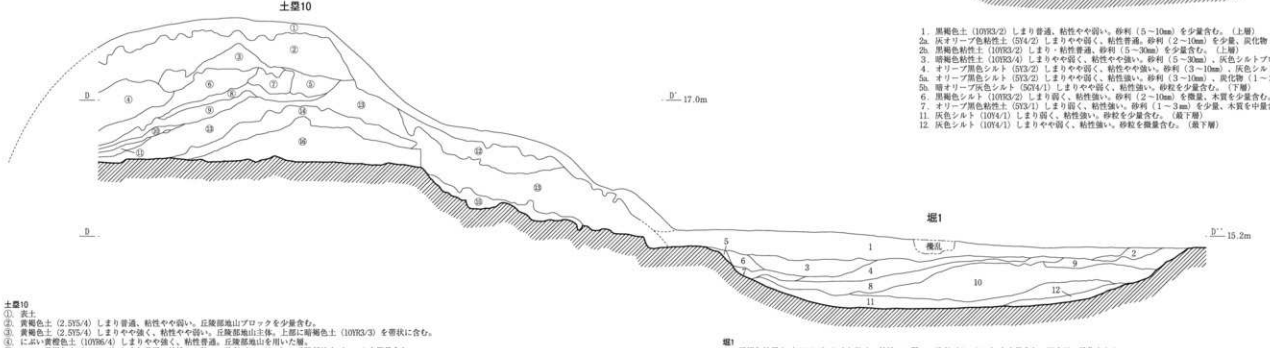
1．褐灰土。
2．褐色土（10YR4/6）しまり普通、粘性やや弱い。
基盤層の砂利を多量含む。
3．褐色砂質土（10YR4/4）しまり普通、粘性弱い。
石（20～30mm）を少量含む。

堀1　4B・C区　東西セクション



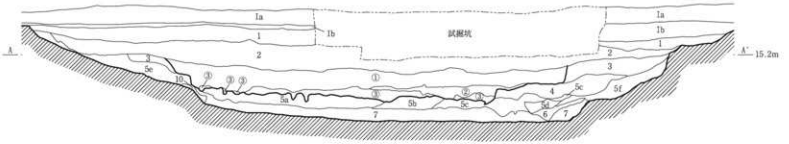
1．黒褐色土（10YR3/1）しまり普通、粘性やや弱い。砂利（5～10mm）を微量含む。水田の床土層の可能性有。ただし、この層の上面でプラン確認可能。（上層）
2．オリーブ黒色粘質土（5Y3/2）しまりやや強く、粘性普通。砂利（5mm）を微量含む。（上層）
3．黒褐色粘質土（2.5Y3/2）しまり・粘性普通。砂利（10～30mm）を微量、灰色シルトブロック（5～10mm）を少量含む。（中層）
4．暗褐色粘質土（10YR3/4）しまり・粘性普通。砂利（5～10mm）、灰色シルトブロック（5～10mm）を微量含む。木質を微量含み、やや茶色が強い。（下層）
5．暗褐色粘質土（10YR3/4）しまりやや弱く、粘性やや強い。砂利（5～20mm）、炭化物（1mm）を微量含む。4層より茶色味強い。（下層）
6．オリーブ黒色シルト（2.5Y3/2）しまり弱く、粘性強い。木質を少量含む。砂の互層。（最下層）
7．暗オリーブ褐色粘質土（2.5Y3/3）しまり弱く、粘性強い。灰色砂質シルトブロック（10～30mm）を微量、木質を中量含む。（最下層）
8．黒褐色シルト（2.5Y3/2）しまり普通、粘性やや強い。青灰色砂質シルトブロック（10～30mm）を少量含む。（最下層）
9．黒褐色シルト（2.5Y3/2）しまり普通、粘性やや強い。青灰色砂質シルトブロック（5～10mm）を中量含む。（最下層）
10．青灰色シルト（10BG5/1）しまり強く、粘性やや強い。暗オリーブ褐色土を斑状に少量含む。（最下層）

堀1、土塁10　11B・C区　東西セクション



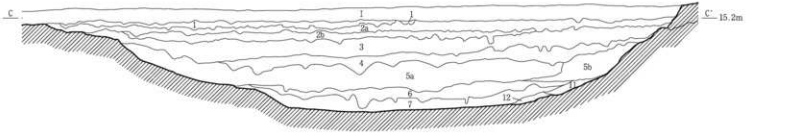
土塁10
①．表土
②．黄褐色土（2.5Y5/4）しまり普通、粘性やや弱い。丘陵部地山ブロックを少量含む。
③．黄褐色土（2.5Y5/4）しまりやや強く、粘性やや弱い。丘陵部地山主体。上部に暗褐色土（10YR3/3）を帯状に含む。
④．にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまりやや強く、粘性普通。丘陵部地山を用いた層。
⑤．にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり普通、粘性やや強い。砂利（10～20mm）、丘陵部地山ブロックを微量含む。
⑥．黒色土（10YR2/1）しまりやや強く、粘性やや弱い。黄褐色土ブロック、砂質土を少量含む。
⑦．褐色土（10YR4/4）しまり強く、粘性弱い。丘陵部地山ブロックを斑状に中量含む。
⑧．褐色土（10YR4/4）しまり普通、粘性弱い。6層との混合土。
⑨．にぶい黄橙色土（10YR6/4）しまり強く、粘性普通。黒色土を少量含む。
⑩．黒色土（10YR2/1）しまり強く、粘性弱い。丘陵部地山ブロックを斑状に多量含む。
⑪．にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり強く、粘性普通。
⑫．暗褐色土（10YR3/4）しまり・粘性普通。炭化物（2～3mm）を微量、黄褐色土ブロックを斑状に少量含む。
⑬．にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり普通、粘性弱い。砂利（5～20mm）を少量含む。
⑭．黄褐色土（10YR5/6）しまりやや強く、粘性普通。砂利（5mm）を微量含む。
⑮．暗褐色土（10YR3/3）しまりやや強く、粘性普通。黄褐色土ブロックを斑状に少量含む。
⑯．暗褐色土（10YR3/4）しまりやや強く、粘性普通。炭化物（1mm）、砂利（5～10mm）を微量、黄褐色土ブロック（10～30mm）を少量含む。

堀1、SD17　3・4B区　南北セクション



1．灰色土（N5/）しまり強く、粘性弱い。砂・礫（10～20mm）・砂利を少量含む。2層よりも色調明るい。
2．灰色土（N5/）しまりやや弱く、粘性やや強い。粘土を微量含む。（最下層）
3．灰色砂質シルト（N5/）しまり強く、粘性弱い。砂利を中量、礫（5～10mm）を少量含む。
4．灰色シルト（N5/）しまり弱く、粘性強い。砂・砂利を中量、木片を少量、礫（10mm）を微量含む。
5a．灰色粘質土（N5/）しまり弱く、粘性強い。礫（5mm）・砂・青灰色粘性ブロック（10mm）を微量含む。
5b．灰色シルト（N5/）しまり弱く、粘性強い。砂利・砂を少量含む。10層よりも色調明るい。
5c．灰色シルト（N5/）しまり弱く、粘性強い。砂利・砂・礫（10～15mm）を中量、粘土ブロック（2～15mm）を少量含む。
5d．灰色シルト（N5/）しまりきわめて弱く、粘性強い。砂・木片を少量含む。
5e．灰色シルト（N5/）しまり強く、粘性弱い。砂・礫（5mm）を少量、青灰色粘土ブロック（5～20mm）を多量含む。
5f．灰色シルト（N5/）しまり弱く、粘性やや強い。砂利・砂を多量、木片を含む。
6．青灰色砂層（10BG5/1）しまり・粘性弱い。粘土を微量含む。（最下層）
7．灰色粘質土（N4/）しまりきわめて弱く、粘性強い。木片を少量含む。（最下層）
10．青灰色シルト（5B6/1）しまり強く、粘性やや強い。青灰色粘土ブロック主体。
①．灰色シルト（N5/）しまりやや弱く、粘性やや強い。礫（5～20mm）・木片・砂利・砂を中量含む。2層よりも粘性に富み、色調暗い。SD17。
②．灰色シルト（N5/）しまり弱く、粘性強い。砂を多量、木片を中量、礫（5mm）を少量、青灰色粘土ブロック（2～10mm）を微量含む。SD17。
③．灰色砂利層（N5/）しまり・粘性弱い。木片を微量含む。SD17。

堀1　9B・C区　東西セクション



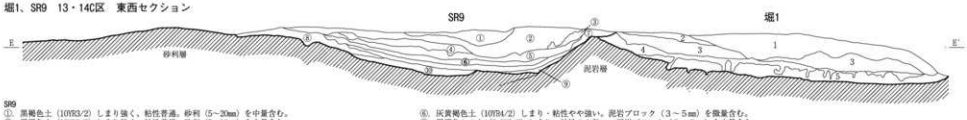
1．黒褐色土（10YR3/2）しまり普通、粘性やや弱い。砂利（5～10mm）を少量含む。（上層）
2a．灰オリーブ色粘性土（5Y4/2）しまりやや弱く、粘性普通。砂利（2～10mm）を少量、炭化物（2mm）を微量含む。（上層）
2b．黒褐色粘性土（10YR3/2）しまり・粘性普通。砂利（5～30mm）を少量含む。（上層）
3．暗褐色粘性土（10YR3/4）しまりやや弱く、粘性やや強い。砂利（5～30mm）、灰色シルトブロック（3～5mm）を少量含む。（中層）
4．オリーブ黒色シルト（5Y3/2）しまりやや弱く、粘性やや強い。砂利（3～10mm）、灰色シルトブロック（2～5mm）を微量含む。（中層）
5a．オリーブ黒色シルト（5Y3/2）しまりやや弱く、粘性強い。砂利（3～10mm）、炭化物（1～2mm）を微量含む。下部は砂利が集中する。（下層）
5b．暗オリーブ灰色シルト（5GY4/1）しまりやや弱く、粘性強い。砂粒を少量含む。（下層）
6．黒褐色シルト（10YR3/2）しまり弱く、粘性強い。砂利（2～10mm）を微量、木質を少量含む。（最下層）
7．オリーブ黒色粘性土（5Y3/1）しまり弱く、粘性強い。砂利（1～3mm）を少量、木質を中量含む。（最下層）
11．灰色シルト（10Y4/1）しまり弱く、粘性強い。砂粒を少量含む。（最下層）
12．灰色シルト（10Y4/1）しまりやや弱く、粘性強い。砂粒を微量含む。（最下層）

堀1

1．黒褐色粘質土（10YR3/2）しまり強く、粘性やや弱い。砂利（5～30mm）を少量含む。旧水田の耕作土か？
2．黒褐色粘質土（色調同じ）しまり普通、粘性やや強い。砂利（5～100mm）を少量含む。
3．黒褐色粘質土（色調同じ）しまりやや強く、粘性やや弱い。砂利（2～30mm）を中量含む。
4．砂・砂利の互層。砂・砂利（0.5～50mm）
5．暗オリーブ灰色シルト（5GY4/1）しまり強く、粘性やや弱い。砂利（5～20mm）を多量含む。
6．灰色シルト（5Y5/1）しまり・粘性強い。砂利（0.5～10mm）を微量含む。
7．暗オリーブ灰色シルト（5GY4/1）しまりやや弱く、粘性強い。砂利（2～30mm）を多量含む。（壁の崩落層）
8．オリーブ黒色シルト（7.5Y2/2）しまり弱く、粘性強い。砂の互層。
9．灰オリーブ色砂質シルト（5Y4/2）しまり強く、粘性普通。砂質シルト・砂利・砂の層。
10．灰色シルト（7.5Y4/1）砂利・砂の互層。
11．オリーブ黒色粘質土（5Y3/1）しまり弱く、粘性強い。砂利（5～10mm）を少量含む。木質の遺物を含む。（最下層相当層）
12．オリーブ黒色粘質土（5Y3/1）しまりやや弱く、粘性強い。砂利（5～10mm）を中量含む。（壁の崩落層）

0　(1：50)　2m

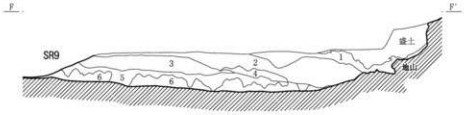
堀1、SR9　13・14C区　東西セクション



SR9
①. 黒褐色土（10YR3/2）しまり強く、粘性普通。砂利（5～20mm）を中量含む。
②. 黒褐色土（10YR3/2）しまり強く、粘性普通。砂利（5～10mm）を少量含む。
③. 灰黄褐色シルト（10YR4/2）しまり強く、粘性やや強い。砂利（5mm）を微量含む。
④. 暗褐色シルト（10YR3/3）しまりやや強く、粘性普通。砂利（5～10mm）を少量含む（2層より少ない）。
⑤. 灰黄褐色シルト（10YR5/2）しまり・粘性やや強い。砂利（5mm）を微量含む。
⑥. 灰黄褐色土（10YR4/2）しまり・粘性やや強い。泥岩ブロック（3～5mm）を微量含む。
⑦. 黒褐色シルト（2.5Y3/2）しまり・粘性やや強い。泥岩ブロック（3～5mm）を少量含む。
⑧. 暗灰黄土（2.5Y4/2）しまり強く、粘性普通。砂利（5～10mm）を微量含む。
⑨. 暗黄灰色シルト（2.5Y5/2）しまり強く、粘性普通。地山の泥岩ブロックを微量含む。
⑩. 灰色砂利層（5Y4/1）しまり強く、粘性弱い。砂利（3～20mm）。

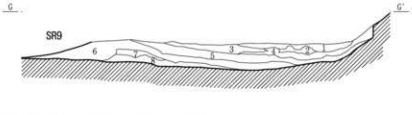
堀1
1. 砂利層。洪水で堆積か。
2. にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）しまり普通。粘性やや弱い。
3. 灰黄褐色砂質土（10YR4/2）しまり普通。粘性やや弱い。灰色シルトブロックを上部に少量含む。
4. 黒褐色粘質土（10YR3/2）しまりやや弱く、粘性強い。地山ブロック（10～20mm）を少量、木質を中量含む。（最下層相当）
5. 黒褐色粘質土（10YR3/2）しまり弱く、粘性強い。地山ブロック（5～50mm）を斑状に中量、木質を少量含む。（最下層相当）

堀1　14C区　東西セクション①



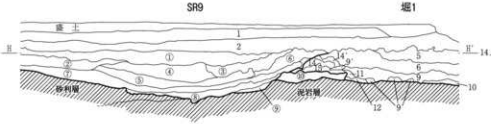
1. 砂利層。
2. 黒褐色砂質シルト（10YR3/2）しまり普通。粘性やや弱い。砂利（5～10mm）を中量含む。
3. 灰黄褐色砂質土（10YR4/2）しまり普通。粘性やや弱い。泥岩ブロックを上部に少量含む。
4. 黒褐色砂質シルト（10YR3/2）しまり・粘性普通。砂利（5～10mm）を少量含む。
5. 黒褐色粘質土（10YR3/2）しまりやや弱く、泥岩ブロック（10～20mm）を少量、木質を中量含む。（最下層相当）
6. 黒褐色粘質土（10YR3/2）しまり弱く、粘性強い。泥岩ブロック（5～10mm）を斑状に中量、木質を少量含む。（最下層相当）

堀1　14C区　東西セクション②



1. 黒褐色粘質土（10YR2/3）しまり普通。粘性やや強い。
2. 灰黄褐色土（10YR4/2）しまり普通。粘性やや強い。泥岩ブロック（拳大～）、砂を中量含む。
3. 砂利層。
4. 泥岩ブロック。
5. 黒褐色シルト（10YR3/2）木質を少量含む。
6. 砂利層。
7. 黒褐色粘質土（10YR3/2）しまりやや弱く、粘性強い。泥岩ブロック（10～20mm）を少量、木質を中量含む。（最下層相当）
8. 黒褐色粘質土（10YR3/2）しまり弱く、粘性強い。泥岩ブロック（5～10mm）を斑状に中量、木質を少量含む。（最下層相当）

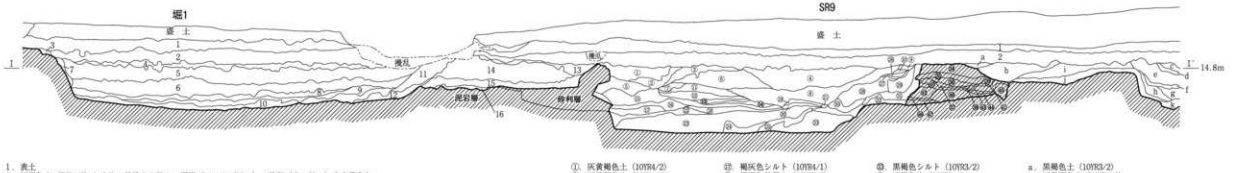
堀1、SR9　14D区　南北セクション



①. 黒褐色土（10YR3/2）しまり強く、粘性普通。砂利（5～10mm）を微量含む。
②. 黒褐色土（10YR3/2）しまりやや強く、粘性普通。炭化物（1～2mm）を微量含む。
③. 黒褐色シルト（10YR2/2）しまり・粘性やや強い。砂利（5～20mm）を微量含む。
④. 黒褐色土（10YR3/2）しまり普通。粘性やや強い。砂利（5～10mm）を少量含む。
⑤. 黒褐色土（10YR3/2）しまり普通。粘性やや強い。砂利（5～20mm）を少量含む。
⑥. 灰黄褐色シルト（10YR4/2）しまり普通。粘性やや強い。
⑦. 黒褐色土（10YR2/2）しまり・粘性普通。砂利（5～10mm）、泥岩ブロック（5mm）を少量含む。
⑧. 黒褐色粘質土（10YR3/2）しまりやや弱く、粘性強い。砂利（5～10mm）を少量含む。
⑨. 黒褐色粘質土（10YR2/2）しまり弱く、粘性強い。泥岩ブロック（5mm）を微量含む。
⑩. 灰黄褐色土（10YR4/2）しまり普通。粘性やや強い。砂利（5～20mm）を中量、泥岩ブロック（5～20mm）を少量含む。地山の可能性有。

5・6・9～12層は14C・D区東西セクション参照
9'．黒褐色シルト（10YR3/2）
14'．灰黄褐色シルト（10YR4/2）炭化物（1～2mm）を微量含む。

堀1、SR9　14C・D区　東西セクション



1. 表土
2. 灰褐色土（5YR4/2）しまり・粘性やや強い。泥岩ブロック（10mm）・砂利（5～20mm）を少量含む。
3. にぶい黄褐色土（10YR6/4）しまりやや弱く、粘性やや強い。基盤の泥岩の流れ込み。
4. 褐灰色土（7.5YR4/1）しまり普通。粘性やや強い。泥岩ブロック（10mm）・砂利（10mm）を微量、炭化物（1～3mm）を少量含む。
5. 黒褐色シルト（10YR3/2）しまり・粘性やや強い。部分的に砂質シルトブロックとなる。
6. 黒褐色土（10YR3/2）しまり普通。粘性やや強い。5層より砂質、木質を微～少量含む。
7. にぶい黄褐色土（10YR6/4）3層と同一
8. 黒褐色砂質土（10YR3/2）しまり普通。粘性やや強い。砂の水平堆積がみられる。
9. 黒褐色シルト（10YR3/2）しまりやや弱く、粘性強い。炭化物（2～3mm）を少量、木質を中量含む。（最下層相当）
10. 黒褐色シルト（10YR2/2）しまり弱く、粘性強い。砂質感強い。木質・炭化物（1～2mm）を微量含む。（最下層相当）
11. 灰黄褐色シルト（10YR5/2）しまりやや弱く、粘性強い。14層の崩落層。炭化物（1～2mm）を微量、泥岩ブロック（10～20mm）を少量含む。
12. にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまりやや弱く、粘性やや強い。14・15層の落層。砂利（2～5mm）を微量含む。
13. 黒褐色土（10YR3/2）しまり・粘性普通。砂利（5～30mm）を少量含む。
14. にぶい黄褐色土（10YR7/3）しまり・粘性やや強い。泥岩による盛土層。黒褐色土ブロック（10～30mm）を少量含む。
15. 灰黄褐色土（10YR4/2）しまり普通。粘性やや強い。炭化物（1～2mm）、砂利を微量含む。
16. 褐色土（10YR3/2）しまり普通。粘性やや強い。炭化物（1～2mm）を微量含む。

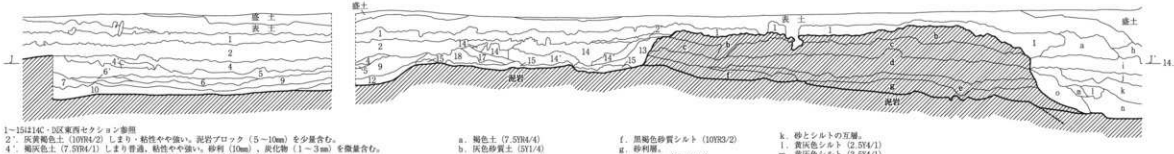
①. 灰黄褐色土（10YR4/2）
②. 灰黄褐色土（10YR4/2）
③. 黒褐色土（10YR3/2）
④. 黒褐色土（10YR3/2）
⑤. 黒褐色土（10YR3/2）
⑥. 黒褐色土（10YR3/2）
⑦. 褐灰色土（10YR4/1）
⑧. 灰黄褐色土（10YR4/2）
⑨. 褐灰色土（10YR5/2）
⑩. 褐灰色土（10YR4/2）
⑪. 灰黄褐色シルト（10YR4/2）
⑫. 灰黄褐色土（10YR4/2）
⑬. 黒褐色シルト（10YR2/2）
⑭. 黒褐色土（10YR3/2）
⑮. 黒褐色土（10YR3/3）
⑯. 暗灰黄褐色シルト（2.5Y5/2）

⑰. 褐灰色シルト（10YR4/1）
⑱. 黒褐色粘質土（10YR3/2）
⑲. 黒褐色シルト（10YR3/2）
⑳. 黒褐色シルト（10YR2/2）
㉑. 石
㉒. 黒褐色粘質土（10YR2/2）
㉓. 砂利層
㉔. 黒褐色シルト（10YR3/2）
㉕. 灰色粘質土（5Y5/1）
㉖. 灰黄褐色シルト（10YR4/2）
㉗. 灰黄褐色シルト（10YR4/2）
㉘. 褐灰色土（10YR5/1）
㉙. 褐灰色土（10YR5/1）
㉚. 灰黄褐色土（10YR4/2）
㉛. 灰黄褐色土（10YR4/2）
㉜. 暗褐色砂・砂利層（10YR3/3）

㉝. 黒褐色シルト（10YR3/2）
㉞. 暗褐色土（10YR3/4）
㉟. 褐灰色土（10YR4/1）
㊱. 黒褐色土（10YR3/2）
㊲. 褐灰色土（10YR4/1）
㊳. 褐灰色土（10YR4/1）
㊴. 褐灰色土（10YR4/1）
㊵. 灰黄褐色土（10YR4/2）
㊶. 褐灰色粘質土（10YR4/1）
㊷. 暗灰黄色シルト（2.5Y5/2）
㊸. 灰黄褐色土（10YR4/2）
㊹. 灰黄褐色土（10YR4/2）
㊺. 灰黄褐色土（10YR4/2）
㊻. 褐灰色シルト（10YR4/1）
㊼. 灰色砂質シルト（5Y4/1）
㊽. 黒褐色土（10YR3/2）

a．黒褐色土（10YR3/2）
b．灰黄褐色土（10YR4/2）
c．黒褐色土（10YR3/2）
d．褐灰色土（10YR4/1）
e．褐灰色シルト（10YR4/1）
f．灰黄色褐色土（10YR4/2）
g．黒褐色土（10YR3/2）
h．褐灰色シルト（10YR4/1）
i．褐灰色砂質シルト（10YR4/1）
k．黒褐色粘質土（10YR2/2）
a～k 流路か？

堀1　15C・D・16D区　南北セクション

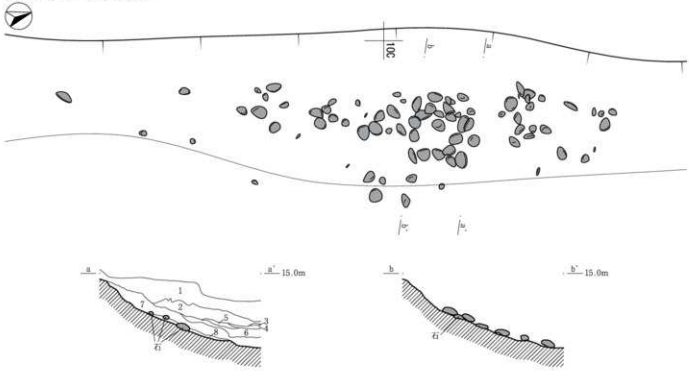


1～15は14C・D区東西セクション参照
2'．灰黄褐色土（10YR4/2）しまり・粘性やや強い。泥岩ブロック（5～10mm）を少量含む。
4'．褐灰色土（7.5YR4/1）しまり普通。粘性やや強い。砂利（10mm）、炭化物（1～3mm）を微量含む。
6'．黒褐色シルト（10YR3/2）しまり普通。粘性やや強い。木質を微量含む。
14'．にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまり普通。粘性やや強い。泥岩による盛土層。黒褐色土ブロックが14層より多い。
17. 灰黄褐色土（10YR4/2）しまり普通。粘性やや強い。泥岩ブロック（5～10mm）を微量含む。
18. 褐灰色シルト（10YR5/1）しまりやや弱く、粘性やや強い。黒褐色シルトブロック（5～10mm）を少量含む。

a．褐色土（7.5YR4/4）
b．灰色砂質土（5Y1/4）
c．灰色砂質土（5Y1/4）
d．砂および小砂利（10mm）の互層。
e．砂およびシルトの互層。
f．黒褐色砂質シルト（10YR3/2）
g．砂利層。
h．灰褐色土（7.5YR4/2）
i．灰褐色土（7.5YR5/2）
j．灰褐色土（7.5YR4/2）
k．砂とシルトの互層。
l．黄灰色シルト（2.5Y4/1）
m．黄灰色シルト（2.5Y4/1）
n．黒褐色シルト（10YR3/2）
o．小砂利（5～10mm）およびシルトの互層。

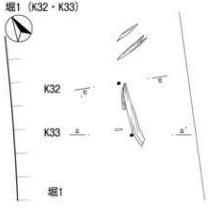
0　(1：50)　2m

堀1　9・10B区　葺き石状遺構

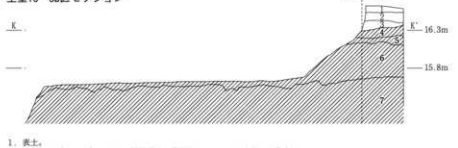


1．暗褐色粘質土（10YR3/4）しまりやや弱く、粘性やや強い。砂利（5～30mm）を少量含む。
2．オリーブ黒色シルト（5Y3/2）しまりやや弱く、粘性やや強い。砂利（3～10mm）を微量含む。
3．暗オリーブ灰色シルト（5GY4/1）しまりやや弱く、粘性やや強い。砂利（3～10mm）を微量含む。
4．暗オリーブ灰色シルト（5GY4/1）しまりやや弱く、粘性強い。粘粒を微量含む。
5．オリーブ灰色シルト（5GY5/1）しまりやや弱く、粘性やや強い。砂粒を少量含む。
6．黒褐色シルト（10YR3/2）しまり弱く、粘性強い。木質を少量含む。
7．オリーブ黒色粘質土（5Y3/1）しまり弱く、粘性強い。木質を中量含む。
8．オリーブ黒色粘質土（5Y3/1）しまりやや弱く、粘性強い。砂利（5～10mm）を微量含む。

堀1（K32・K33）



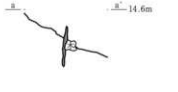
土塁10　9B区セクション



1．表土。
2．暗褐色土（10YR3/4）しまり・粘性普通。黄褐色土ブロックを斑状に少量含む。
3．暗褐色土（10YR3/4）しまり・粘性普通。黄褐色土ブロックを微量含む。
4．10B区基本層序I1層
5．10B区基本層序I11層
6．10B区基本層序IV層
7．10B区基本層序V層

K32

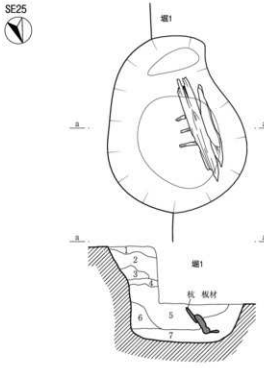
K33



土塁10　10B区　東西セクション

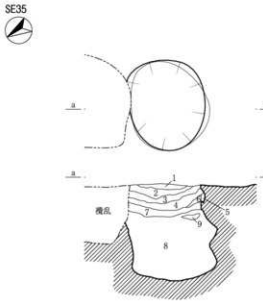
1．表土。
2．褐色土（10YR4/4）しまり普通、粘性やや弱い。褐色土（10YR4/6）を斑状に多量、黄褐色土ブロック（5～10mm）を中量含む。以下土塁盛土か。
3．褐灰色砂質土（10YR5/1）しまり強く、粘性普通。灰色黄褐色土ブロック（3～5mm）を少量含む。
4．褐灰色土（10YR4/1）しまり強く、粘性やや弱い。黄褐色砂質土を斑状に少量含む。
5．褐灰色土（10YR6/1）しまり・粘性やや強い。3層に褐色土ブロックを少量含む。

SE25



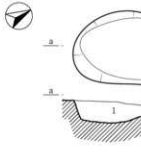
1. 灰黄褐色土（10YR4/2）しまり強く、粘性やや弱い。砂利（5～30mm）を少量含む。
2. 灰オリーブ色土（10Y4/2）しまり強く、粘性弱い。砂利（1～10mm）を少量含む（1層より多い）。
3. 灰色シルト（5Y4/1）しまり強く、粘性やや強い。炭化物（0.5mm）、砂利（5mm）を微量含む。
4. 黒褐色シルト（10YR2/2）しまり・粘性やや強い。炭化物（1mm）、砂利（1～5mm）、木質を微量含む。
5. 黒褐色シルト（10YR3/2）しまり弱く、粘性強い。炭化物（1～2mm）を微量、砂利（1～3mm）、木質を少量含む。
6. 黒褐色土（10YR3/2）しまりやや弱く、粘性強い。砂利（3～50mm）を中量含む。壁、崩落層。
7. 黒褐色土（10YR2/3）しまり弱く、粘性強い。砂利（10～30mm）、木質を少量含む。

SE35



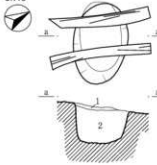
1. オリーブ黒色土（5Y3/1）しまり強く、粘性普通。炭化物（1～2mm）、灰色シルトブロック（5～10mm）を少量含む。
2. オリーブ黒色シルト（5Y3/2）しまり・粘性やや強い。炭化物（1～5mm）を微量、灰色シルトを斑状に少量含む。
3. 黒色粘質土（7.5Y2/1）しまり普通、粘性強い。炭化物（1～10mm）、灰色シルトブロック（5mm）を少量含む。
4. 灰色シルト（5Y4/1）しまり普通、粘性強い。炭化物（1～3mm）、植物質繊維を少量、灰オリーブ色シルトを斑状に中量含む。
5. 灰色シルト（5Y4/1）しまり普通、粘性強い。炭化物（1～3mm）、地山由来の砂質土を少量含む。
6. 灰オリーブ色シルト（5Y4/2）しまりやや弱く、粘性やや強い。4層が帯状に入る。
7. 灰オリーブ黒色粘質土（5Y2/2）しまりやや弱く、粘性やや強い。炭化物（1～5mm）、灰オリーブ色シルトを斑状に少量、植物質繊維を中量含む。
8. 灰色シルト（5Y4/1）しまりやや弱く、粘性強い。木片、灰色粘（時間が経つと青に変色）を少量含む。
9. 7層相当のブロック。

SK26



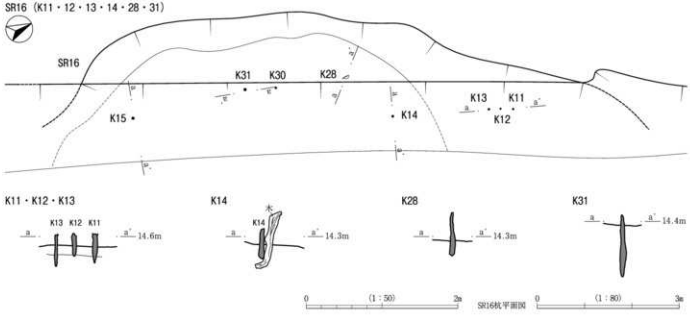
SK26
1. 暗褐色土（10YR2/3）しまりやや強く、粘性やや弱い。砂利（10～20mm）、黄褐色土ブロック（5～10mm）を少量含む。

SK40

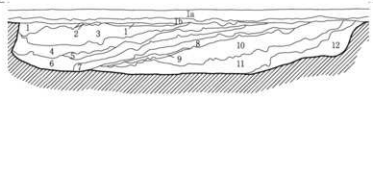


SK40
1. 黒褐色土（10YR3/2）しまりやや強く、粘性普通。砂利（5～20mm）を少量含む。
2. オリーブ黒色粘質土（5Y3/2）しまり普通、粘性やや強い。砂利（1～5mm）を少量含む。

SR16（K11・12・13・14・28・31）

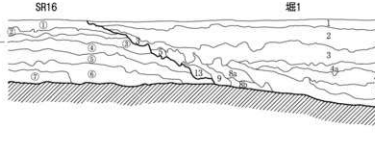


SR16　南北セクション



1. 灰黄褐色粘質土（10YR4/2）しまり強く、粘性やや強い。黒褐色土粒（0.5～20mm）を少量含む。
2. 灰黄褐色粘質土（10YR5/2）しまり・粘性やや強い。黒褐色土粒（0.5～20mm）を少量含む。
3. 褐灰色シルト（10YR4/1）しまり強く、粘性やや強い。にぶい黄褐色粘を斑状に中量、炭化物（1㎜）を微量含む。
4. 暗灰黄色シルト（2.5Y4/2）しまり・粘性やや強い。黒褐色土ブロック（2～5㎜）、にぶい黄褐色砂ブロックを少量含む。
5. 黒褐色粘質土（10YR3/2）しまり普通、粘性やや強い。炭化物（1～3㎜）、灰黄褐色シルトを斑状に少量含む。
6. 黒褐色粘質土（10YR2/2）しまり普通、粘性やや強い。灰黄褐色シルトを斑状に少量含む。
7. 黒褐色土（10YR2/2）しまりやや強く、粘性やや弱い。炭化物（1～2㎜）を微量、灰黄褐色シルトを斑状に少量含む。
8. 灰黄褐色土（10YR4/2）しまりやや強く、粘性普通。砂利（5～20㎜）、灰色砂（0.5㎜）、黒褐色シルトを斑状に少量含む。
9. 灰黄褐色土（10YR4/2）しまりやや強く、粘性普通。砂利（5～10㎜）、灰色砂（0.5㎜未満）を少量含む。
10. 黒褐色粘質土（10YR3/2）しまり・粘性やや強い。炭化物（1～3㎜）を少量含む。
11. 黒褐色土（10YR3/2）しまり普通、粘性強い。砂利（10～30㎜）、灰色砂（0.5㎜未満）を微量含む。
12. 黒褐色土（10YR2/2）しまり普通、粘性やや強い。砂利（5～20㎜）を微量含む。

堀1、SR16　東西セクション



SR16

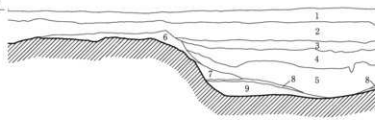
①褐灰色シルト（10YR4/1）しまり強く、粘性普通。黒褐色土粒（5～10㎜）を中量、灰色砂粒（0.5㎜）を少量含む。
②灰黄褐色砂質土（10YR4/2）しまり強く、粘性やや強い。黒褐色土粒（5～20㎜）を中量含む。
③黒褐色シルト（10YR3/1）しまり・粘性やや強い。灰色シルトブロック（10㎜前後）を少量、砂質土ブロック（10～20㎜）を微量含む。
④褐灰色シルト（10YR4/1）しまり普通、粘性やや強い。炭化物（1㎜）を微量、灰色砂を帯状に2～3条含む。
⑤黒褐色シルト（10YR3/1）しまり普通、粘性やや強い。炭化物（0.5～1㎜）を微量、砂利（5～10㎜）、灰色シルトブロック（10㎜）を微量含む。砂粒少量。
⑥灰黄褐色粘質土（10YR4/2）しまりやや強く、粘性強い。灰色シルト・黒褐色シルトブロック（5～10㎜）を斑状に中量、木質を微量含む。
⑦黒褐色砂質シルト（10YR2/2）しまり普通、粘性やや強い。灰色シルトを斑状に少量、砂粒（3㎜前後）を微量。植物の根？を少量含む。

堀1

1・2・3・5・6・7・9層は、図版7 堀1 4B・C区 東西セクション参照。

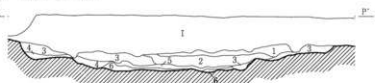
4a. 黒褐色シルト（10YR3/2）しまり普通、粘性やや強い。砂利（5～10㎜）・木質を微量含む。
4b. オリーブ黒色シルト（5Y3/2）しまりやや強く、粘性強い。砂利（5～20㎜）を微量、木質を少量含む。
8a. 灰色シルト（5Y4/1）しまり・粘性やや強い。砂利（5～10㎜）を少量含む。
8b. 暗青灰色シルト（10BG4/1）しまり・粘性やや強い。8bまとの混合土。木質を少量含む。
13. 灰色砂質シルト（5Y4/1）しまり普通、粘性やや強い。SR16基層の崩落層。

SD17　南北セクション1



1. 灰色土（N4/）しまり強く、粘性弱い。小礫（5～10㎜）・砂利・砂を少量、青灰色ブロック（2～5㎜）を微量含む。堀の上層と類似。
2. 灰色土（N4/）しまり強く、粘性弱い。小礫（2～15㎜）を中量、礫（20㎜）・砂利・砂を微量含む。堀の上層と類似。
3. 灰色土（N4/）しまり強く、粘性やや弱い。小礫（5～15㎜）を少量、砂利・砂を中量、木片・青灰色ブロック（2㎜）を微量含む。堀の上層と類似。
4. 灰色シルト（N5/）しまり弱く、粘性強い。砂を中量、小礫（2～10㎜）・青灰色ブロック（5～15㎜）・木片を少量含む。図版7 堀1 SD17南北セクション①堀相当
5. 灰色シルト（N6/）しまり弱く、粘性強い。木片を少量、木製品を含む。上層よりも粘性に富み、しまりは弱い。図版7 堀1 SD17南北セクション②堀相当
6. 赤灰土（5R5/1）しまり強く、粘性弱い。青灰色ブロック（5～15㎜）を中量含む。
7. 赤灰シルト（5R5/1）しまり弱く、粘性強い。砂利・砂を中量、青灰色粘土（5㎜）を少量含む。
8. 灰オリーブ砂利層（5Y5/3）しまり・粘性なし。砂利主体層。図版7 堀1 SD17南北セクション③堀相当
9. 赤灰粘質土（5R5/1）しまり弱く、粘性強い。青灰色ブロック（5～10㎜）を中量含む。

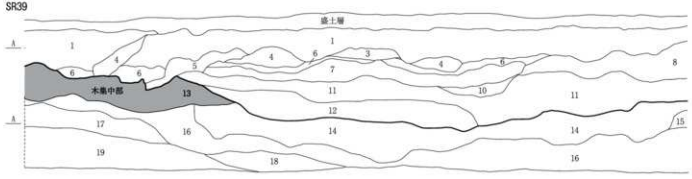
SD17　南北セクション2



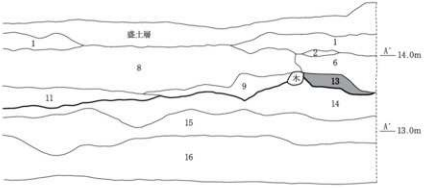
1. 灰色土（N5/）しまり強く、粘性やや弱い。砂を中量、砂利を少量含む。
2. 灰色土（N5/）しまりやや弱く、粘性強い。砂利を微量、明灰色粘土ブロック（2～20㎜）を少量含む。2層よりもやや明るい。
3. 灰色土（N5/）しまり弱く、粘性強い。砂利・砂を少量含む。3層よりもやや暗い。
4. 灰色土（N5/）しまりやや弱く、粘性強い。砂・炭片を微量含む。4層よりもやや明るく粘性に富む。
5. オリーブ黒色シルト（5Y3/2）しまり弱く、粘性強い。有機質物質を多量含む。
6. オリーブ黒色シルト（5Y3/2）しまりやや弱く、粘性強い。粘土層。

0　(1：50)　2m

SR39



1. 褐灰色土（10YR5/1）しまりやや強く、粘性普通。明赤褐色土を多量、黄褐色土、砂利（30mm以下）を少量、砂粒を微量含む。
2. 褐灰色土（10YR6/1）しまり強く、粘性弱い。砂利（50mm以下）を多量に含む。
3. 褐灰色土（10YR5/1）しまり普通、粘性やや弱い。砂利（7mm以下）を中量、明赤褐色土を少量含む。
4. 褐灰色土（10YR6/1）しまり強く、粘性弱い。砂利（50mm以下）を多量に含む。
5. 褐灰色粉質土（10YR5/1）しまり・粘性普通。明赤褐色土を少量含む。
6. 褐灰色シルト（10YR5/1）しまりやや弱く、粘性強い。砂利を少量、明赤褐色土を微量含む。
7. 褐灰色砂利（10YR4/1）しまり強く、粘性弱い。砂利（50mm以下）主体。砂粒を少量含む。
8. 褐灰色砂利（10YR6/1）しまり強く、粘性弱い。砂利（100mm以下）主体。
9. 黒褐色粘質土（10YR2/2）しまり普通、粘性やや強い。砂利（20mm以下）を少量含む。10層の崩落土。
10. 褐灰色粉質シルト（10YR4/1）しまりやや弱く、粘性やや強い。暗褐色土を少量含む。
11. 暗赤褐色砂利（5YR3/6）しまり強く、粘性弱い。砂利（10～50mm）主体。砂（10mm以下）～砂粒を少量含む。（11・12層下面が川底）
12. 黒褐色砂利（10YR2/2）しまり強く、粘性普通。砂利（50mm前後）主体。黒褐色粘質土シルトを少量含む。
13. 黒褐色粘質土（10YR2/2）しまり・粘性やや強い。材を含む層。
14. 褐灰色砂利層（10YR4/1）しまり強く、粘性弱い。砂利（30～50mm）主体。褐灰色粉質シルトを少量含む。
15. 黒褐色シルト（10YR3/2）しまり普通、粘性やや強い。砂との互層。
16. 灰黄褐色砂利（10YR5/2）しまり強く、粘性弱い。砂利（30～50mm）主体。
17. 褐灰色砂利（10YR5/1）しまり強く、粘性弱い。砂利（10～30mm）主体。
18. 褐灰色粉質土（10YR4/1）しまり普通、粘性弱い。
19. 褐灰色砂利（10YR4/1）しまりやや強く、粘性弱い。砂利（50～100mm）主体。

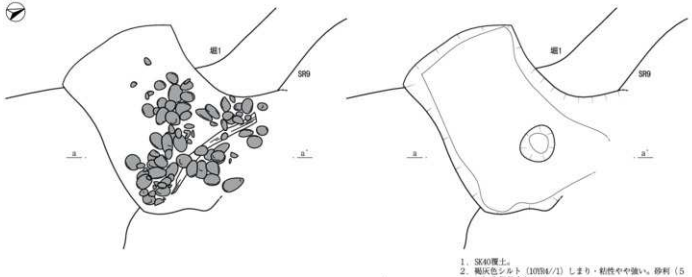


SR39 K1

SR39 K3

SR39　0　(1：50)　2m

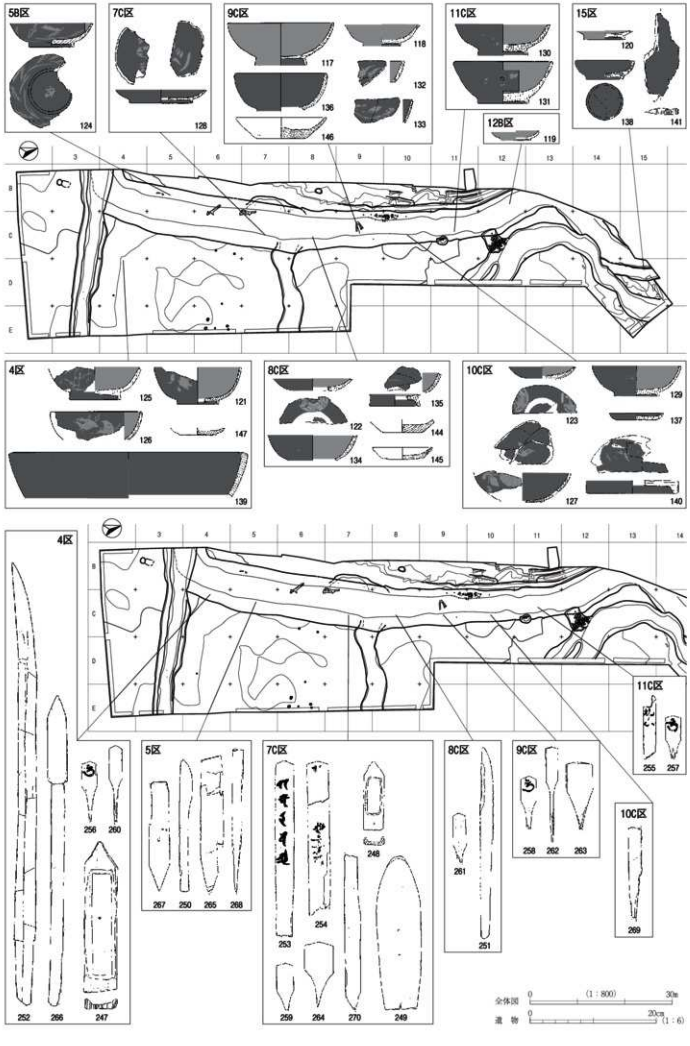
SX27

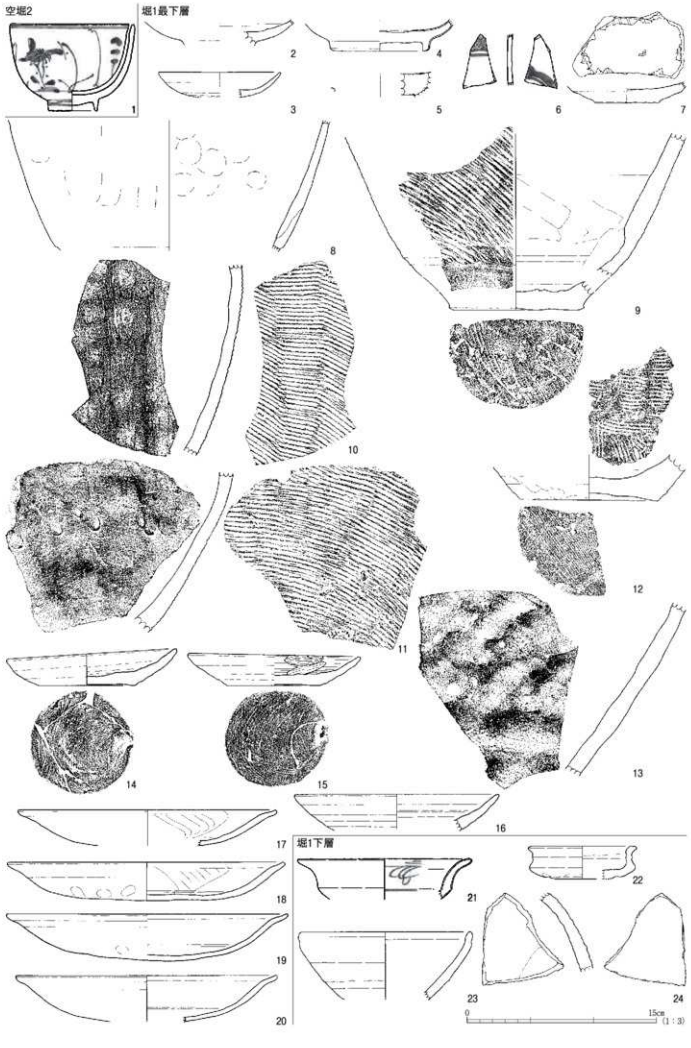


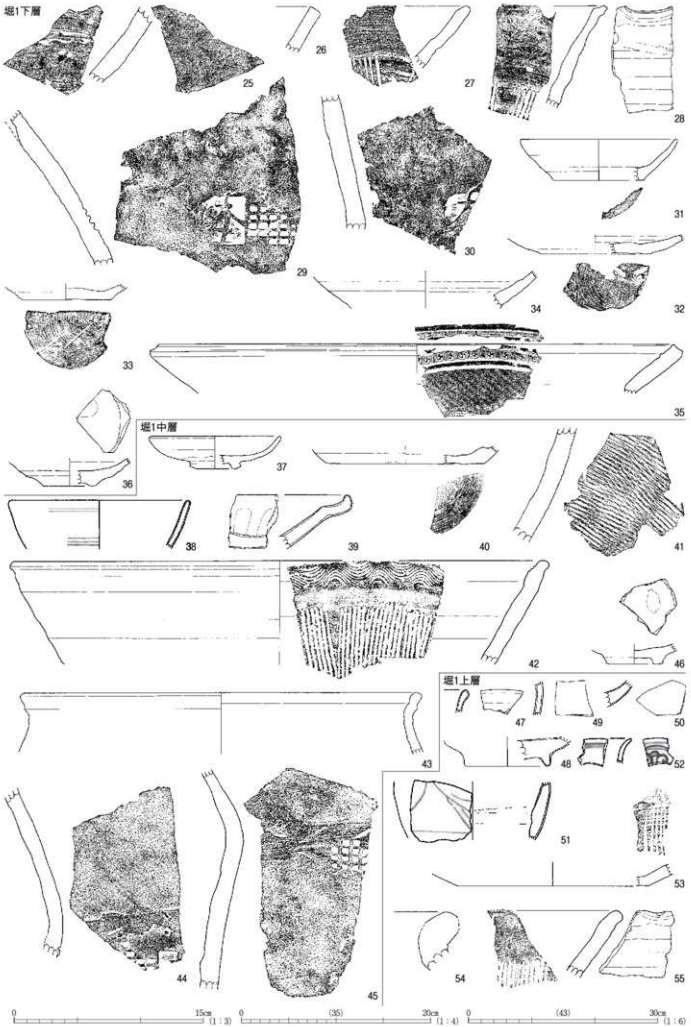
1. SK40覆土。
2. 褐灰色シルト（10YR4/1）しまり・粘性やや強い。砂利（5mm）を微量含む。
3. 暗青灰色砂利（5BG3/1）しまり強く、粘性弱い。砂利（1～2mm）主体。
4. 黄灰色シルト（2.5Y4/1）しまりやや弱く、粘性強い。砂との混合層。
5. 暗青灰色砂利（5BG3/1）しまり・粘性強い。砂利（1～5mm）主体。
6. 黒褐色粘質土（10YR3/1）しまり弱く、粘性強い。植物質を中量含む。
7. 灰色シルト（5Y4/1）しまり弱く、粘性強い。
8. 暗青灰色砂利（5BG3/1）しまり強く、粘性弱い。砂利（5～20mm）主体。黒褐色土を少量含む。
9. オリーブ黒色シルト（5Y3/2）しまりやや弱く、粘性強い。砂利（5～20mm）を少量含む。

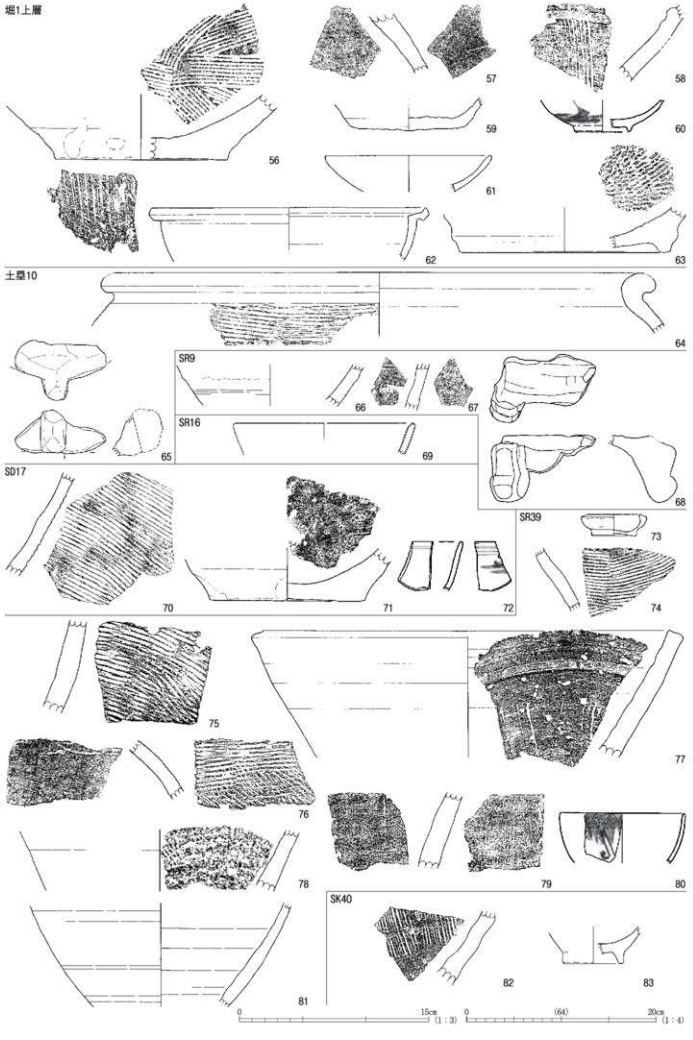
SX27平面図　0　(1：100)　5m

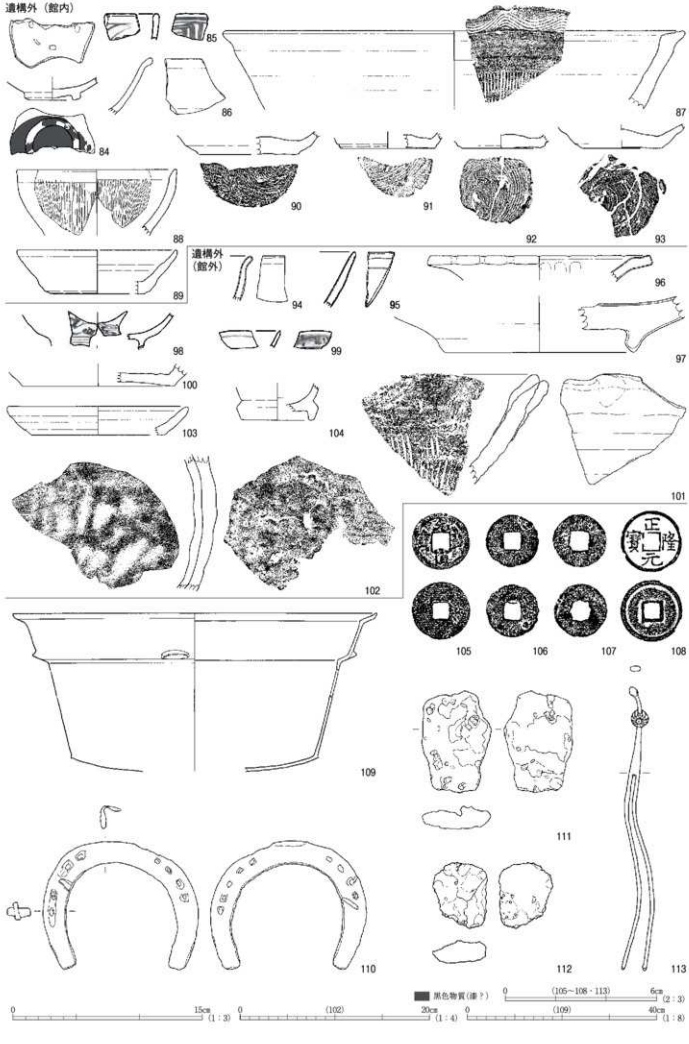
SX27断面図　0　(1：60)　3m

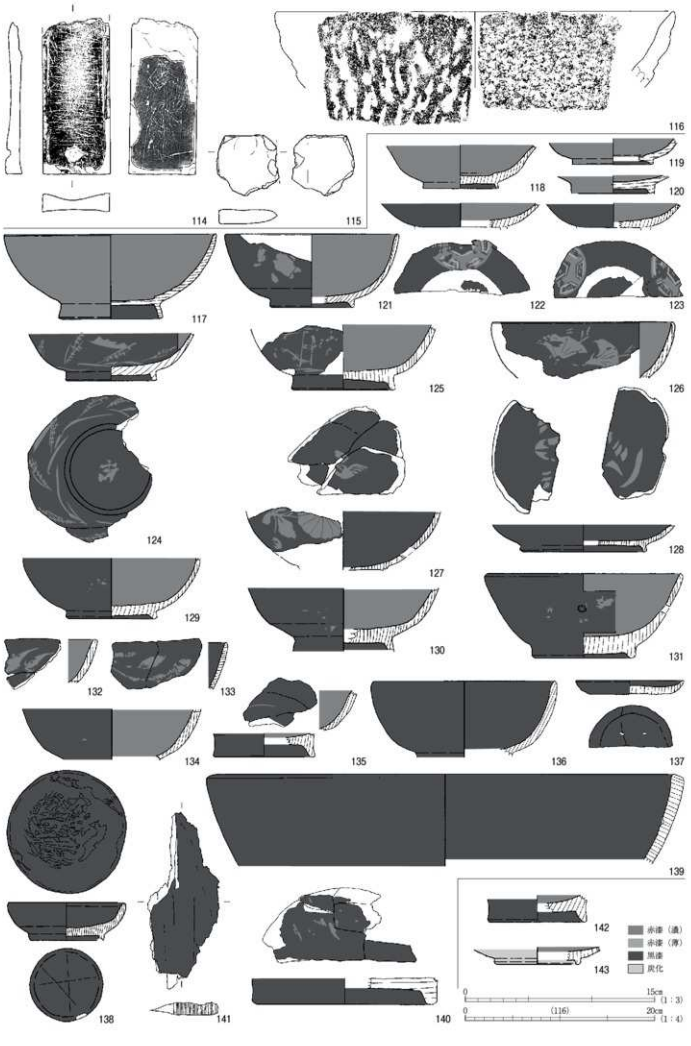

58区
124
7C区
128
9C区
117
118
132
136
133
146
11C区
130
131
12B区
119
15区
120
138
141
4区
125
121
126
147
139
8C区
135
122
144
134
145
10C区
129
123
137
127
140
4区
256
260
252
266
247
5区
267
250
265
268
7C区
248
254
253
259
264
270
249
8C区
261
251
9C区
258
262
263
11C区
255
257
10C区
269
全体図
0
(1：800)
30m
遺　物
0
20cm
(1：6)

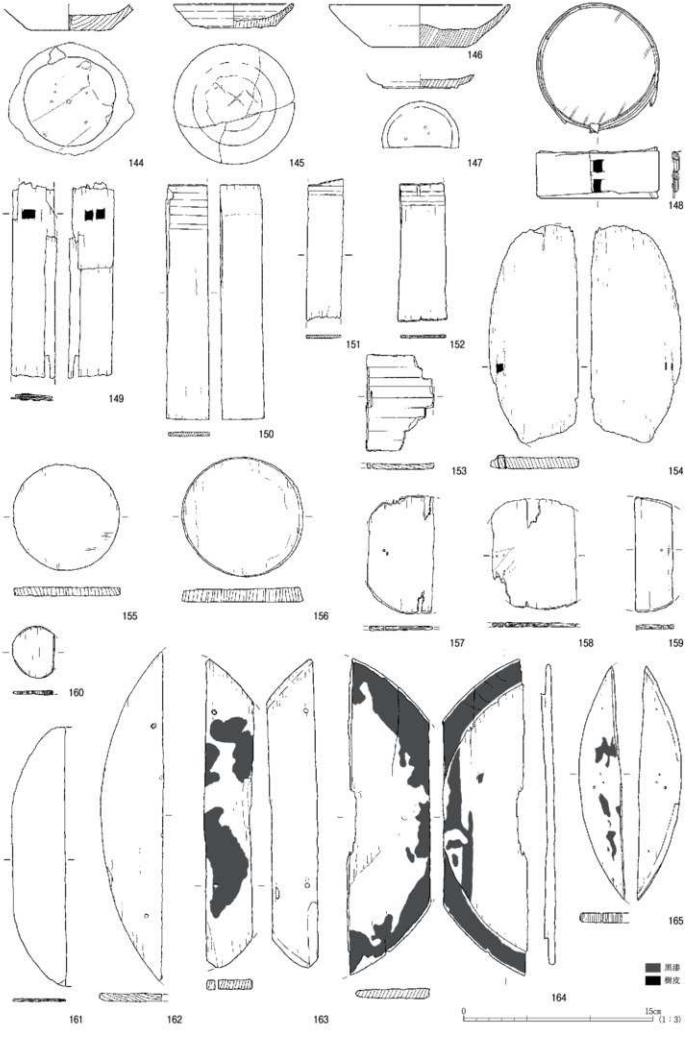

空堀2
堀1最下層
堀1下層
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
0
15cm
（1：3）

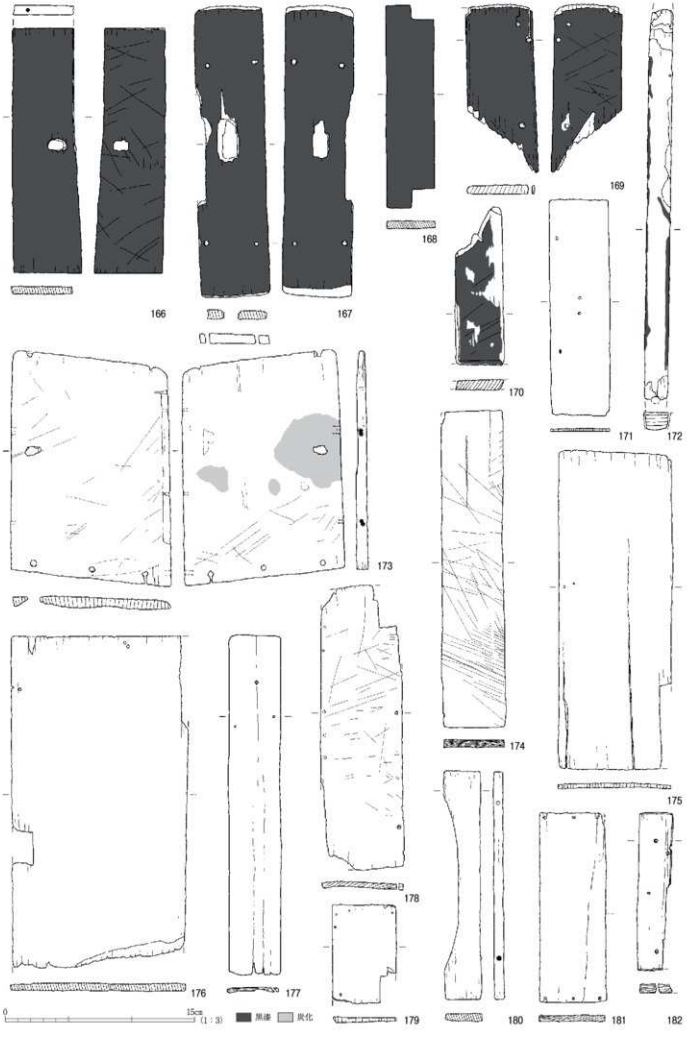

堀1下層
堀1中層
堀1上層
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
0 15cm (1：3)
0 (35) 20cm (1：4)
0 (43) 30cm (1：6)

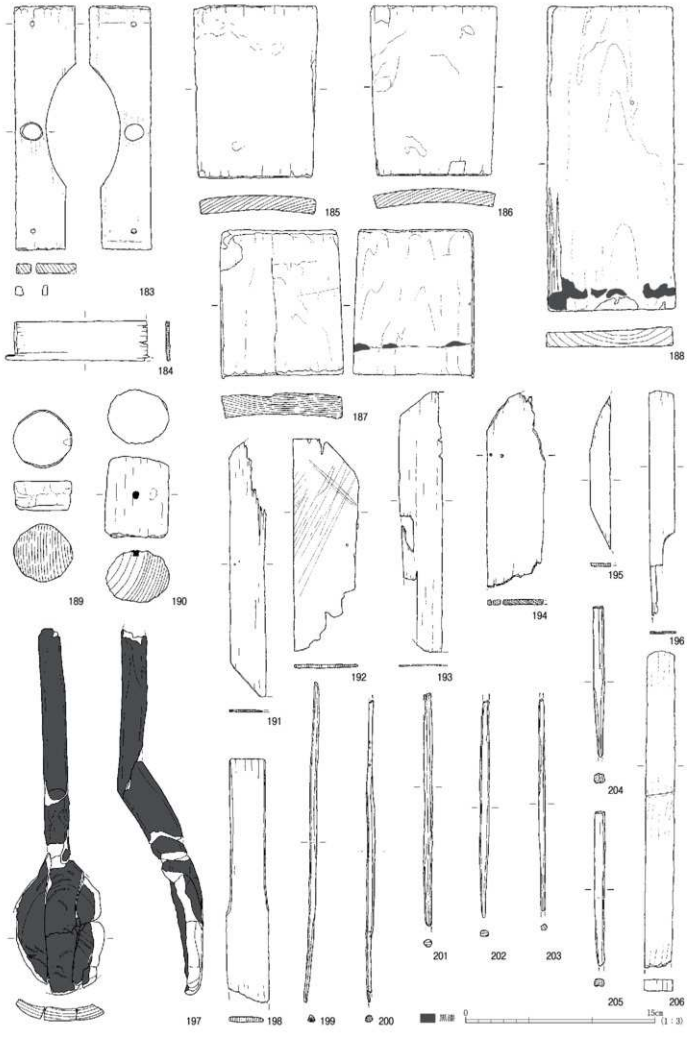

堀1上層
56
57
58
59
60
61
62
63
土壙10
64
SR9
65
66
67
SR16
69
68
SD17
70
71
72
SR39
73
74
75
76
77
78
79
80
SK40
81
82
83
0　15cm　(1：3)
0　(64)　20cm　(1：4)

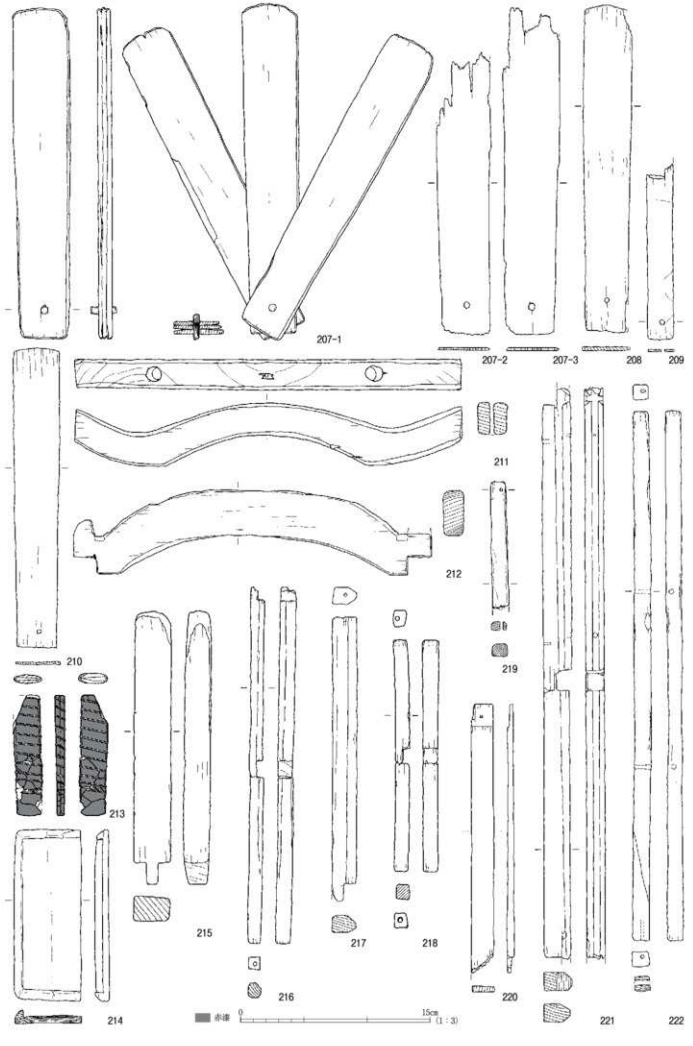

遺構外（館内）
85
86
87
84
90
91
92
93
88
遺構外
（館外）
89
94
95
96
98
99
97
100
103
104
101
102
105
106
107
108
109
111
110
112
113
黒色物質（漆？）
0　15cm　（1：3）
0　（102）　20cm　（1：4）
0　（105～108・113）　6cm　（2：3）
0　（109）　40cm　（1：8）

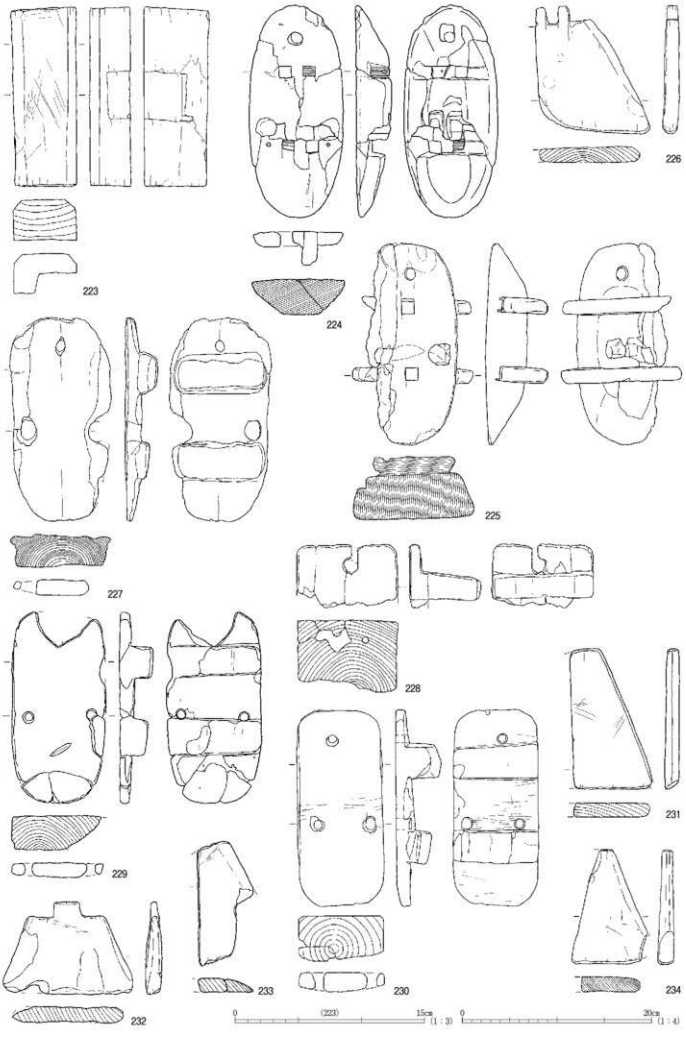

114
115
116
118
119
120
117
121
122
123
125
126
124
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
139
138
141
140
142
143
赤漆（濃）
赤漆（薄）
黒漆
炭化
0
15cm
（1：3）
0
（116）
20cm
（1：4）

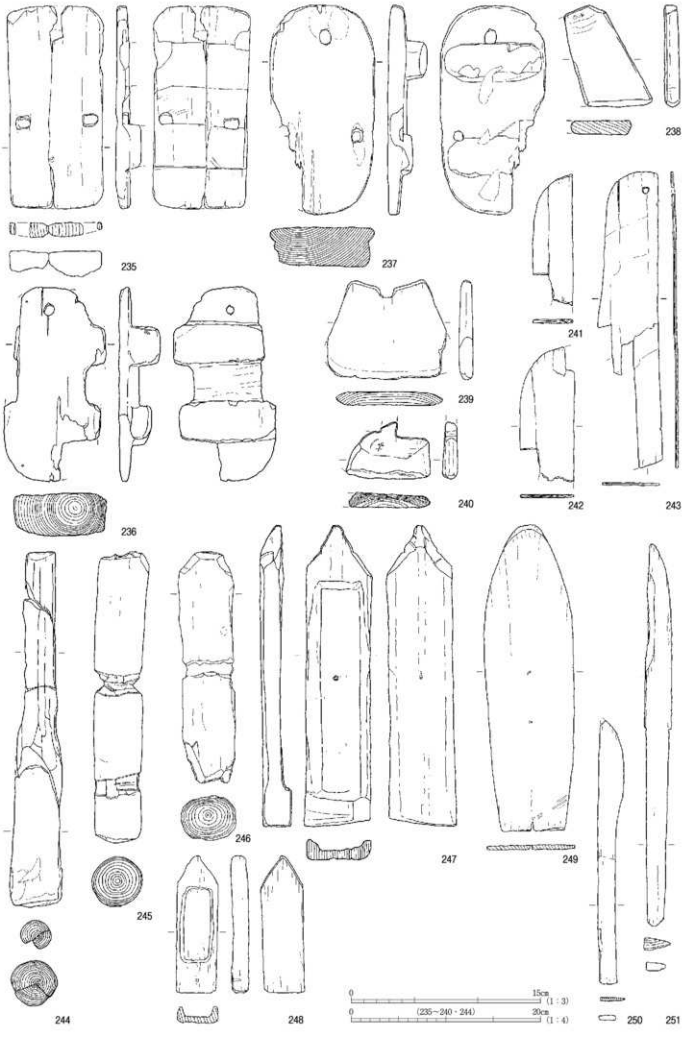

144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
黒漆
樹皮
0
15cm
(1：3)

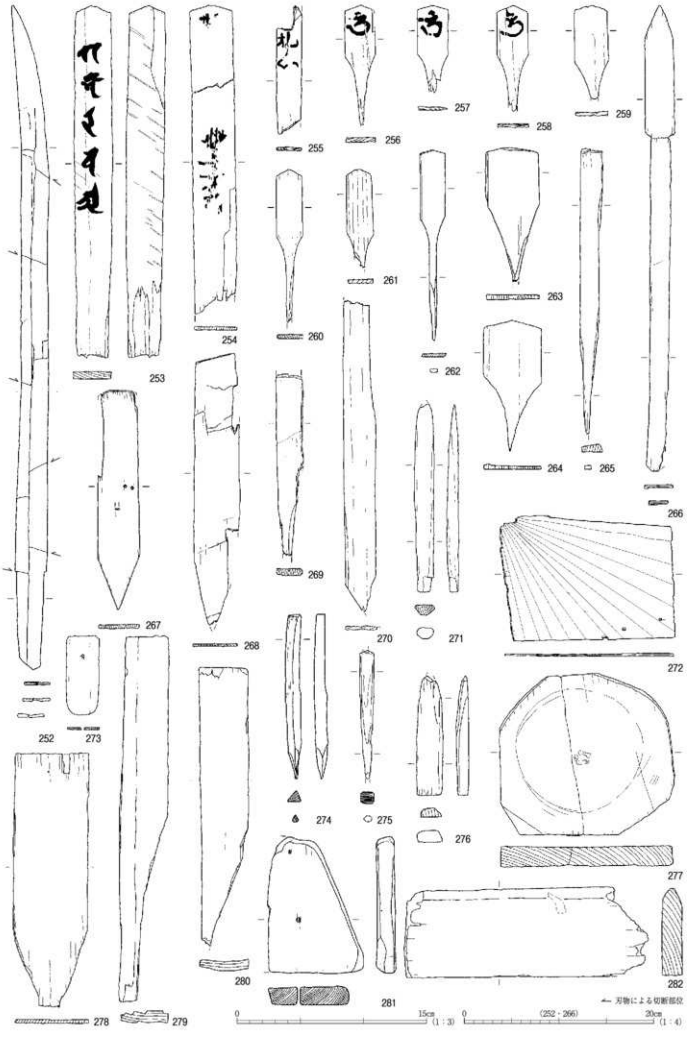

166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
0
15cm
(1：3)
黒漆
炭化

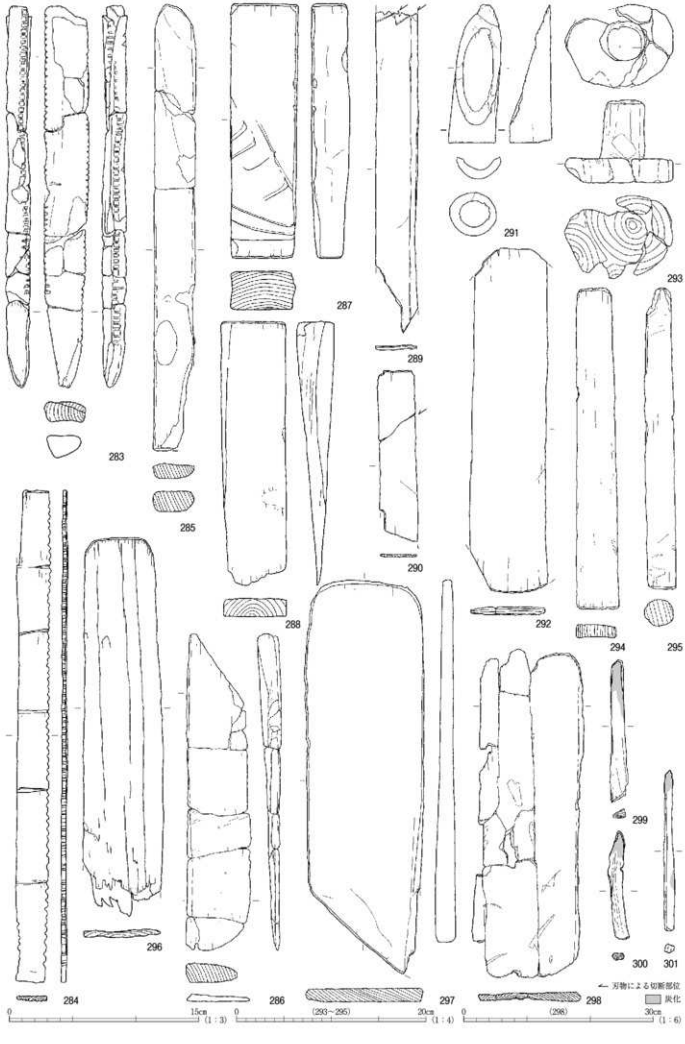

183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
黒鉛
0
15cm
(1：3)

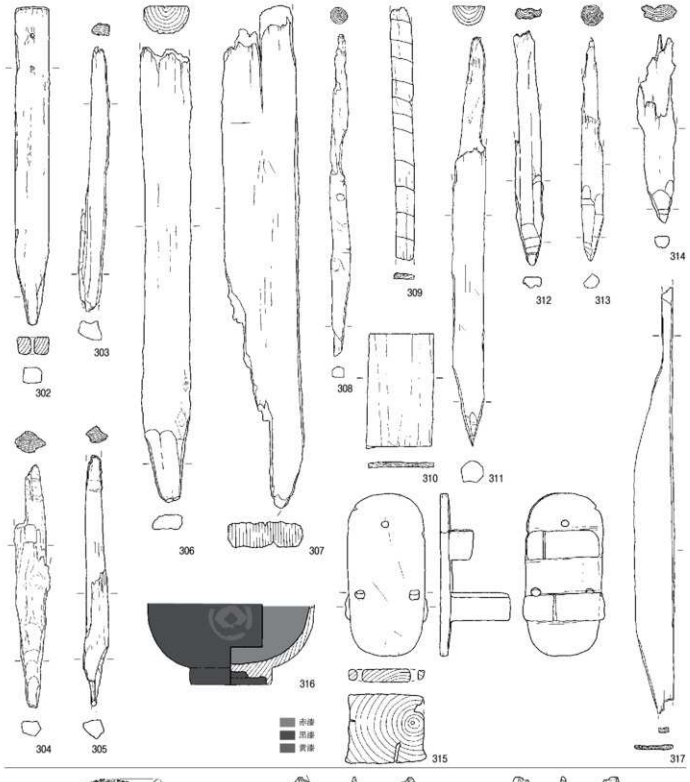

207-1
207-2
207-3
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
0
15cm
(1：3)

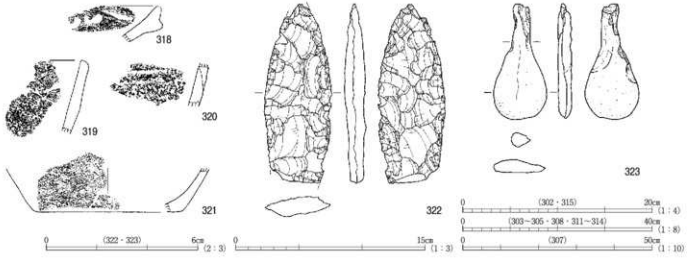

223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
0
(223)
15cm
(1 : 3)
0
20cm
(1 : 4)

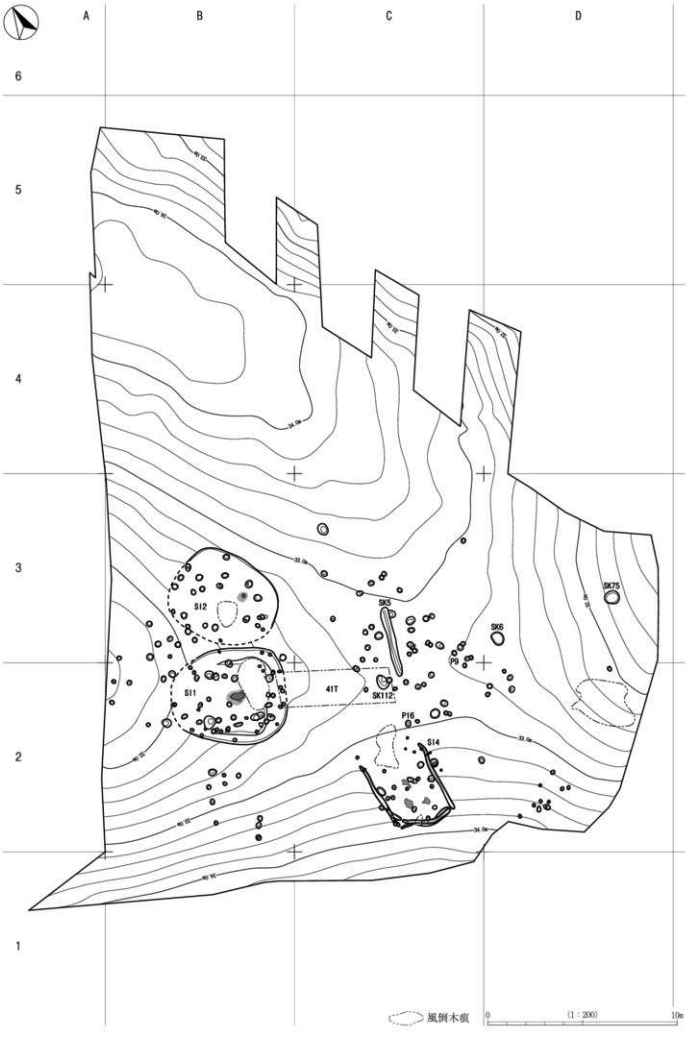

235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
0 15cm (1：3)
0 (235～240・244) 30cm (1：4)

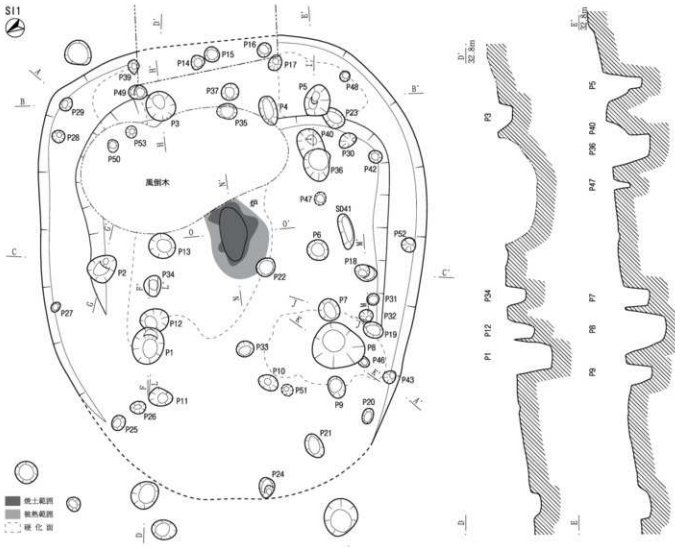

252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
木物による切断部位
0 15cm (1:3)
0 (252・266) 20cm (1:4)

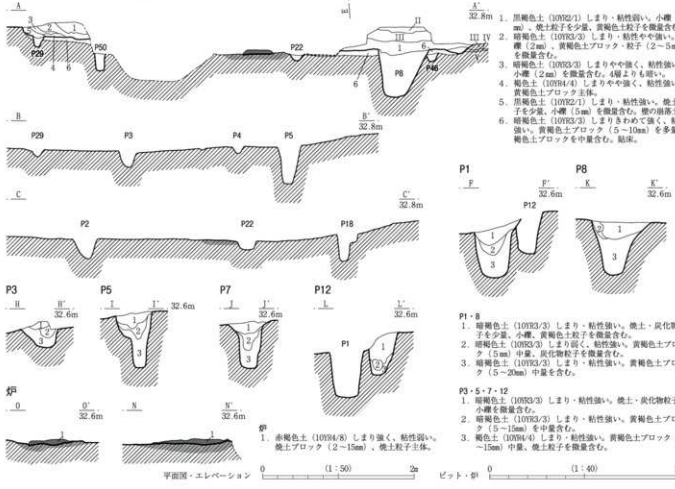

283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
← 万物による切断部位
炭化
0 15cm (1：3)
0 (293～295) 20cm (1：4)
0 (298) 30cm (1：6)


302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
赤漆
黒漆
黄漆


318
319
320
321
322
323
(322・323)
6cm
(2：3)
15cm
(1：3)
(302・315)
20cm
(1：4)
(303～305・308・311～314)
40cm
(1：8)
(307)
50cm
(1：10)


A
B
C
D
6
5
4
3
2
1
SI2
SI1
SK5
SK6
SK75
P9
41T
SK112
P16
SI4
風倒木痕
0
(1：200)
10m





1. 黒褐色土（10YR2/1）しまり・粘性弱い。小礫（5㎜），焼土粒子を少量，黄褐色土粒子を微量含む。
2. 暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性やや強い。小礫（2㎜），黄褐色土ブロック・粒子（2～5㎜）を微量含む。
3. 暗褐色土（10YR3/3）しまりやや強く，粘性強い。小礫（2㎜）を微量含む。4層よりも暗い。
4. 褐色土（10YR4/4）しまりやや強く，粘性強い。黄褐色土ブロック主体。
5. 黒褐色土（10YR2/1）しまり・粘性強い。焼土粒子を少量，小礫（5㎜）を微量含む。壁の崩落土。
6. 暗褐色土（10YR3/3）しまりきわめて強く，粘性強い。黄褐色土ブロック（5～10㎜）を多量，褐色土ブロックを中量含む。貼床。

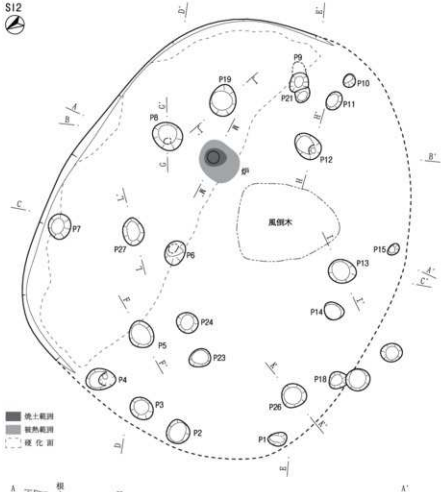
P1・8
1. 暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性強い。焼土・炭化物粒子を少量，小礫，黄褐色土粒子を微量含む。
2. 暗褐色土（10YR3/3）しまり強く，粘性強い。黄褐色土ブロック（5㎜）中量，炭化物粒子を微量含む。
3. 暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック（5～20㎜）中量を含む。

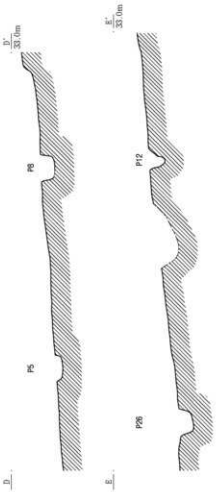
P3・5・7・12
1. 暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性強い。焼土・炭化物粒子，小礫を微量含む。
2. 暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック（5～15㎜）を中量含む。
3. 褐色土（10YR4/4）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック（5～15㎜）中量，焼土粒子を微量含む。

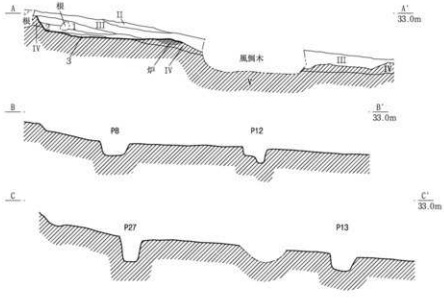
炉
1. 赤褐色土（10YR4/8）しまり強く，粘性弱い。焼土ブロック（2～15㎜），焼土粒子主体。

平面図・エレベーション　0　（1：50）　2m

ピット・炉　0　（1：40）　2m





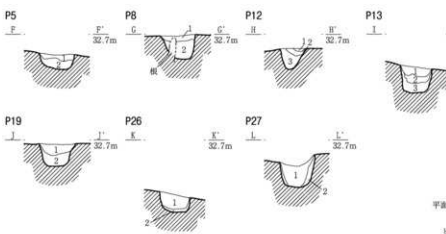


1．暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性強い。小礫（2～5mm）を少量、黄褐色土・焼土・炭化物粒子を微量含む。
2．暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック（5～10mm）を中量含む。
3．暗褐色土（10YR3/3）しまり強く、粘性弱い。黄褐色土ブロック（5mm）を中量含む。

P5・8・19・26
1．暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性強い。黄褐色土・炭化物粒子を少量含む。
2．褐色土（10YR4/4）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック主体。

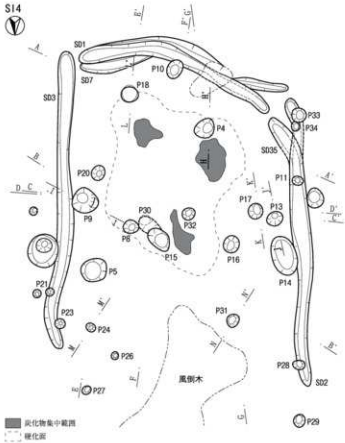
P12・13
1．黒褐色土（10YR2/1）しまり・粘性強い。焼土・炭化物粒子を微量含む。
2．黒褐色土（10YR2/1）しまり・粘性強い。焼土粒子を微量含む。
3．褐色土（10YR4/4）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック主体。

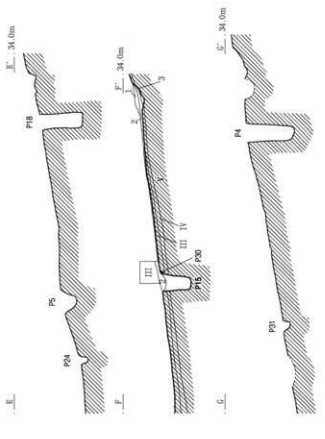
P27
1．暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性強い。黄褐色土粒子を微量含む。
2．褐色土（10YR4/4）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック（5～10mm）を中量含む。

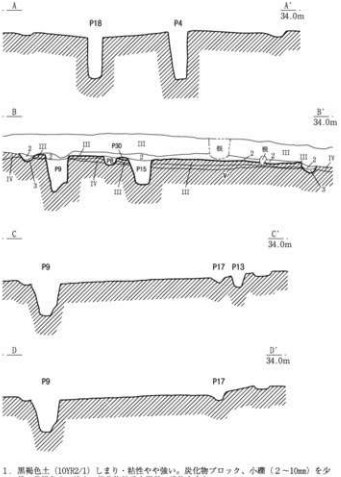


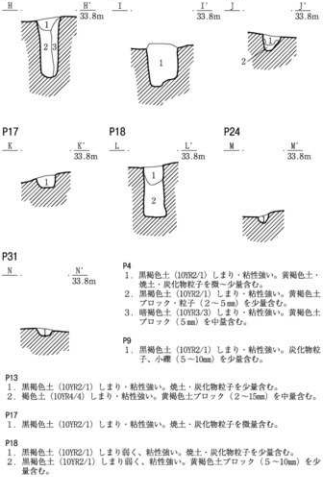
1．暗赤褐色土（2.5YR3/6）しまりやや弱く、粘性強い。焼土ブロック（2～5mm）主体。

平面図・エレベーション　0　(1：50)　2m
ピット・炉　0　(1：40)　2m









1．黒褐色土（10YR2/1）しまり・粘性やや強い。炭化物ブロック、小礫（2～10mm）を少量、黄褐色土・焼土・炭化物粒子を微量、遺物を含む。
2．褐色土（10YR4/4）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック（5～10mm）を少量、焼土粒子、小礫（2mm）を微量含む。周溝。
3．褐色土（10YR4/4）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック主体。周溝。

P4
1．黒褐色土（10YR2/1）しまり・粘性強い。黄褐色土・焼土・炭化物粒子を微～少量含む。
2．黒褐色土（10YR2/1）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック・粒子（2～5mm）を少量含む。
3．暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック（5mm）を中量含む。

P9
1．黒褐色土（10YR2/1）しまり・粘性強い。炭化物粒子、小礫（5～10mm）を少量含む。

P13
1．黒褐色土（10YR2/1）しまり・粘性強い。焼土・炭化物粒子を少量含む。
2．褐色土（10YR4/4）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック（2～15mm）を中量含む。

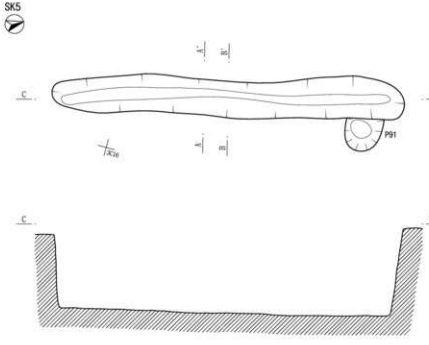
P17
1．黒褐色土（10YR2/1）しまり・粘性強い。焼土・炭化物粒子を微量含む。

P18
1．黒褐色土（10YR2/1）しまり弱く、粘性強い。焼土・炭化物粒子を少量含む。
2．黒褐色土（10YR2/1）しまり弱く、粘性強い。黄褐色土ブロック（5～10mm）を少量含む。

P24・31
1．暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック（2～5mm）、小礫（2mm）を少量含む。

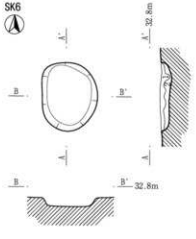
平面図・エレベーション　0　(1：50)　2m　　ピット　0　(1：40)　2m

SK5



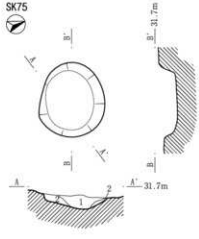
1．黒褐色土（10YR1/2）しまりやや強く、粘性普通。炭化物粒子（3～5㎜）を少量含む。
2．黄褐色土（10YR6/6）しまり・粘性強い。地山の崩落土。
3．暗褐色土（10YR3/3）しまり弱く、粘性普通。
4．暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性強い。地山の崩落土と3層の混合土。
5．暗灰黄褐色土（2.5YR5/2）しまり弱く、粘性普通。礫（10㎜前後）を少量含む。
6．暗灰黄褐色土（2.5YR5/2）しまりやや弱く、粘性普通。地山の崩落土と5層の混合土。

SK6



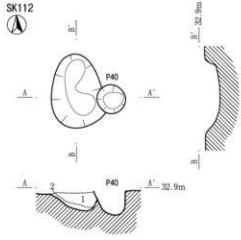
1．黒褐色土（10YR2/1）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック中量、焼土・炭化物粒子を微量含む。
2．黄褐色土（10YR6/6）黄褐色土ブロック主体。暗褐色土を少量含む。

SK75



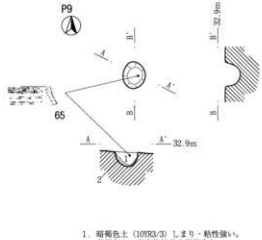
1．黒褐色土（10YR2/1）しまり・粘性強い。黄褐色土・焼土粒子を微量含む。
2．黒褐色土（10YR2/1）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック（5～7㎜）を中量含む。

SK112



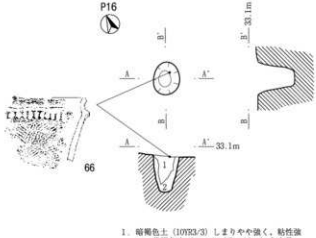
1．黒褐色土（10YR2/1）しまり・粘性強い。黄褐色土粒子を少量、炭化物粒子、小礫を微量含む。
2．黄褐色土（10YR6/6）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック主体。

P9



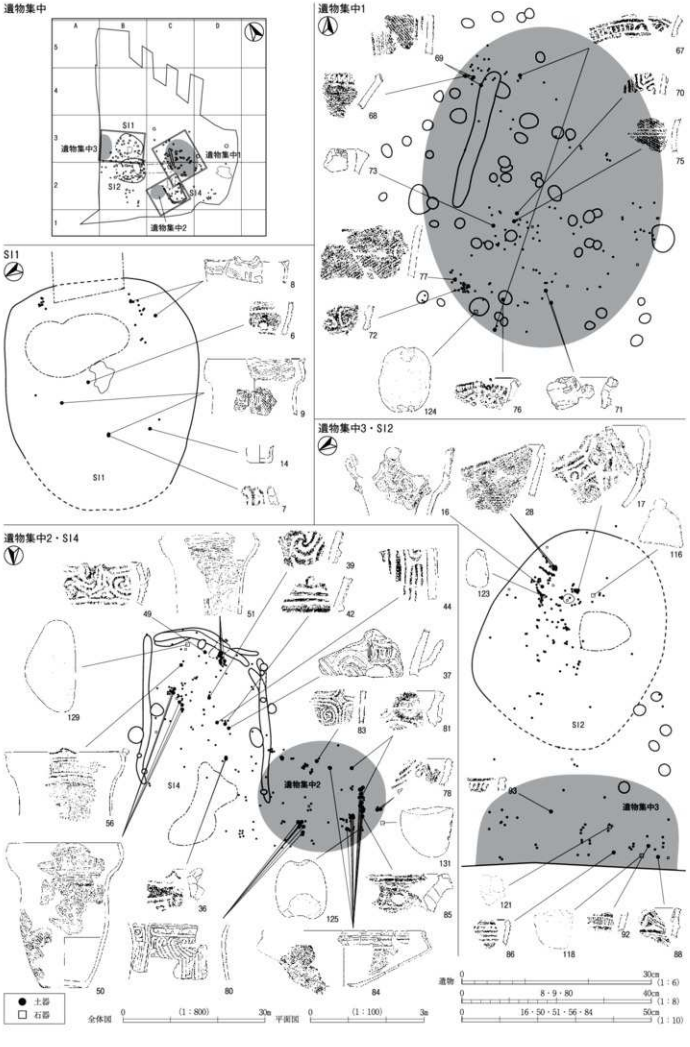
1．暗褐色土（10YR3/3）しまり・粘性強い。黄褐色土・炭化物粒子を微量含む。
2．褐色土（10YR4/4）しまり・粘性強い。黄褐色土ブロック中量を含む。

P16



1．暗褐色土（10YR3/3）しまりやや強く、粘性強い。黄褐色土ブロック（5～10㎜）を少量、小礫（5㎜）を微量含む。
2．褐色土（10YR4/4）しまりやや強く、粘性強い。黄褐色土ブロック（7～10㎜）を中量含む。

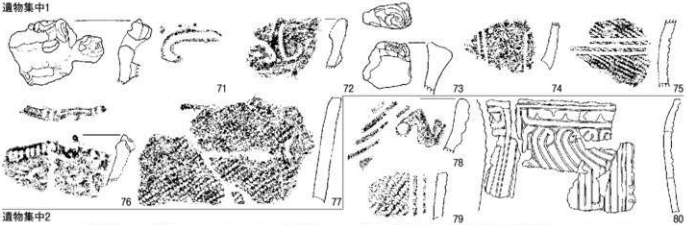
遺物 0　30cm　（1：6）　0　（1：40）　2m


遺物集中
A
B
C
D
5
4
3
2
1
SI1
SI2
SI4
遺物集中1
遺物集中2
遺物集中3
遺物集中1
SI1
SI1
遺物集中3・SI2
SI2
遺物集中2・SI4
SI4
遺物集中2
遺物集中3
● 土器
□ 石器
全体図　0　(1：800)　30m
平面図　0　(1：100)　3m
遺物
0　30cm　(1：6)
8・9・80
0　40cm　(1：8)
16・50・51・56・84
0　50cm　(1：10)

SI1
SI2
SI4
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
0 15cm (1：3)
0 (8・9・11・12・14・16・29～32) 20cm (1：4)

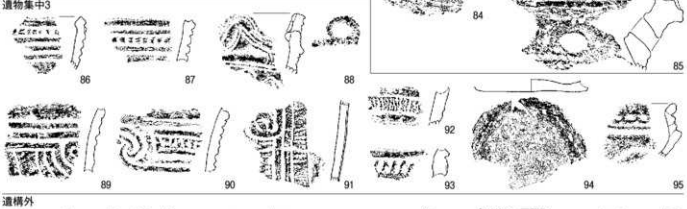
SI4
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
58
57
59
60
61
P9
65
62
63
64
P16
66
遺物集中1
67
68
69
70
0
15cm
(1：3)
0
(50・51・56・58・64)
20cm
(1：4)

遺物集中1

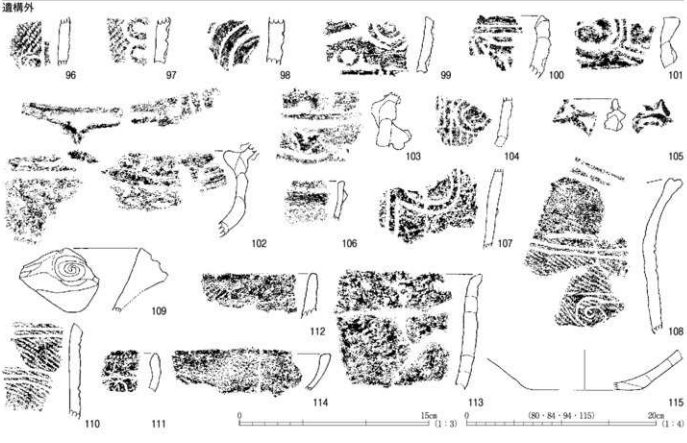


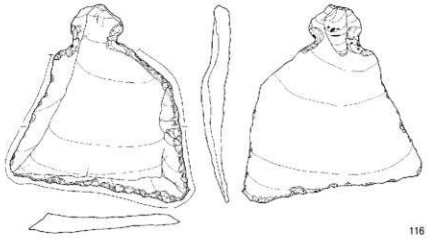
遺物集中2

遺物集中3

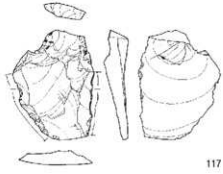


遺構外

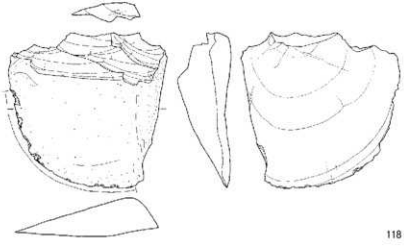




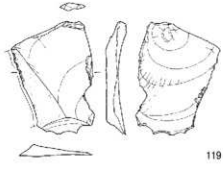
116



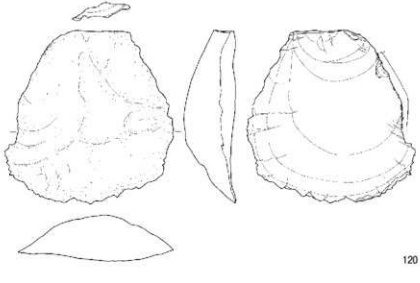
117



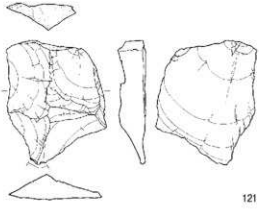
118



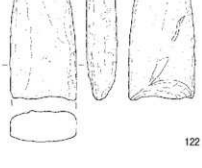
119



120

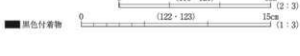


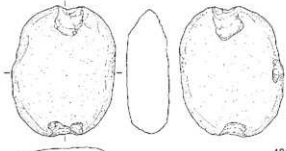
121

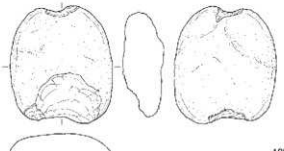


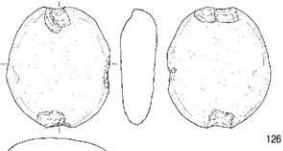
122

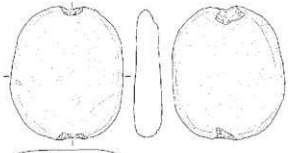
123

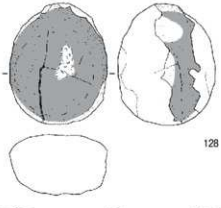


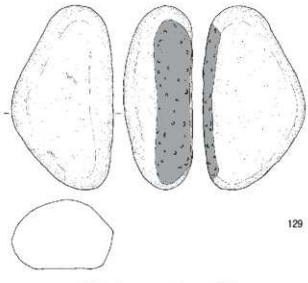

124

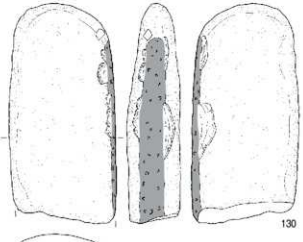

125

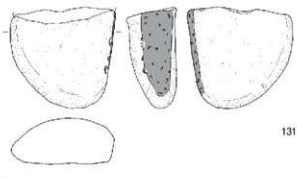

126

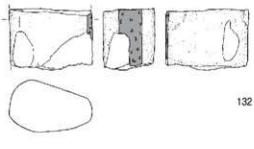

127

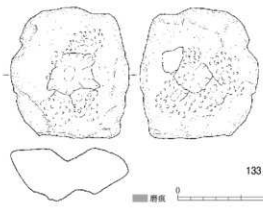

128

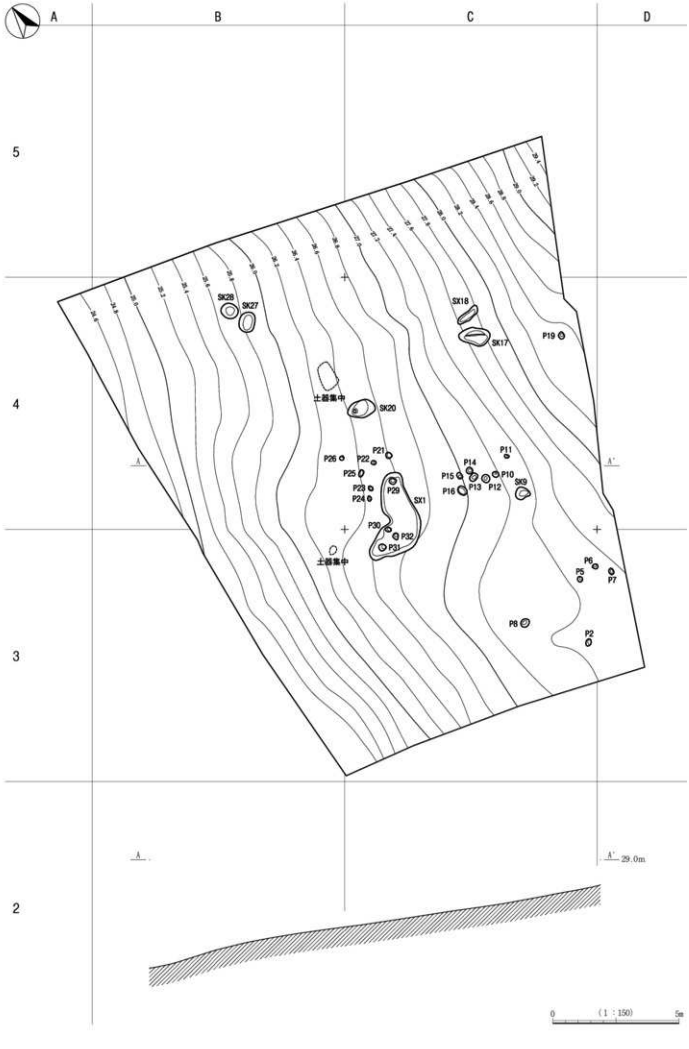

129

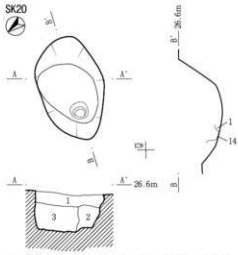

130


131

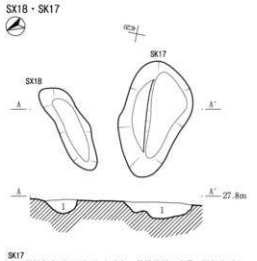

132


133


A
B
C
D
5
4
3
2
SK28
SK27
SX18
SK17
P19
土器集中
SK20
P21
P26
P22
P25
P23
P24
P29
SX1
P30
P32
P31
土器集中
P14
P15
P13
P16
P12
P10
P11
SK9
P6
P5
P7
P8
P2
A
A'
A
A' 29.0m
0
(1 : 150)
5m

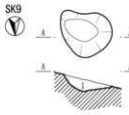


1．暗褐色土（10YR3/3）しまりやや弱く、粘性普通。炭化物（1～3㎜）を少量含む。
2．暗褐色土（10YR3/4）しまり・粘性普通。炭化物（1～3㎜）を微量含む。
3．黒褐色土（10YR2/2）しまりやや弱く、粘性普通。小礫、炭化物（1～3㎜）を微量含む。

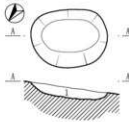


SK17
1．黒褐色土（10YR2/2）しまり・粘性普通。小礫、褐色土（1～3㎜）を少量、炭化物を微量含む。

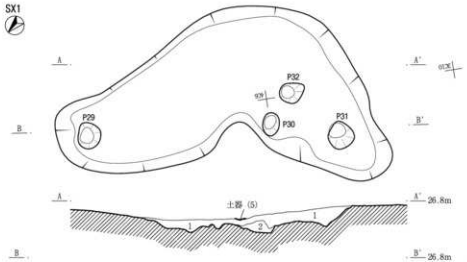
SX18
1．黒褐色土（10YR2/3）しまり・粘性やや強い。褐色土を中量、小礫（1～3㎜）、炭化物を微量含む。



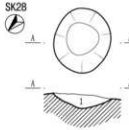
1．暗褐色土（10YR3/4）しまりやや弱く、粘性やや強い。小礫、炭化物（1～3㎜）、褐色土を微量含む。



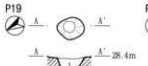
1．暗褐色土（10YR3/4）しまりやや弱く、粘性やや強い。小礫、炭化物（1～3㎜）、褐色土を微量含む。



SX1
1．暗褐色土（10YR3/4）しまりやや弱く、粘性やや強い。小礫、炭化物（1～3㎜）、褐色土を微量含む。
2．にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりやや弱く、粘性やや強い。小礫、炭化物（1～3㎜）、暗褐色土、褐色土を微量含む。

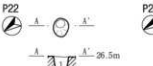


1．暗褐色土（10YR3/4）しまりやや弱く、粘性やや強い。小礫、炭化物（1～3㎜）、褐色土を微量含む。



1．暗褐色土（10YR3/4）しまりやや弱く、粘性やや強い。小礫、炭化物（1～3㎜）、褐色土を微量含む。

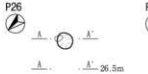
1．暗褐色土（10YR3/4）しまり普通、粘性やや強い。小礫、炭化物（1～3㎜）、褐色土を微量含む。



1．黒褐色土（10YR3/2）しまりやや強く、粘性やや普通。炭化物（1～3㎜）を微量含む。

1．暗褐色土（10YR3/4）しまり普通、粘性やや強い。小礫、炭化物（1～3㎜）、褐色土を微量含む。

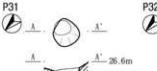
1．暗褐色土（10YR3/4）しまり普通、粘性やや強い。小礫、炭化物（1～3㎜）、褐色土を微量含む。



1．黒褐色土（10YR3/2）しまりやや弱く、粘性弱い。炭化物（1～3㎜）を微量含む。

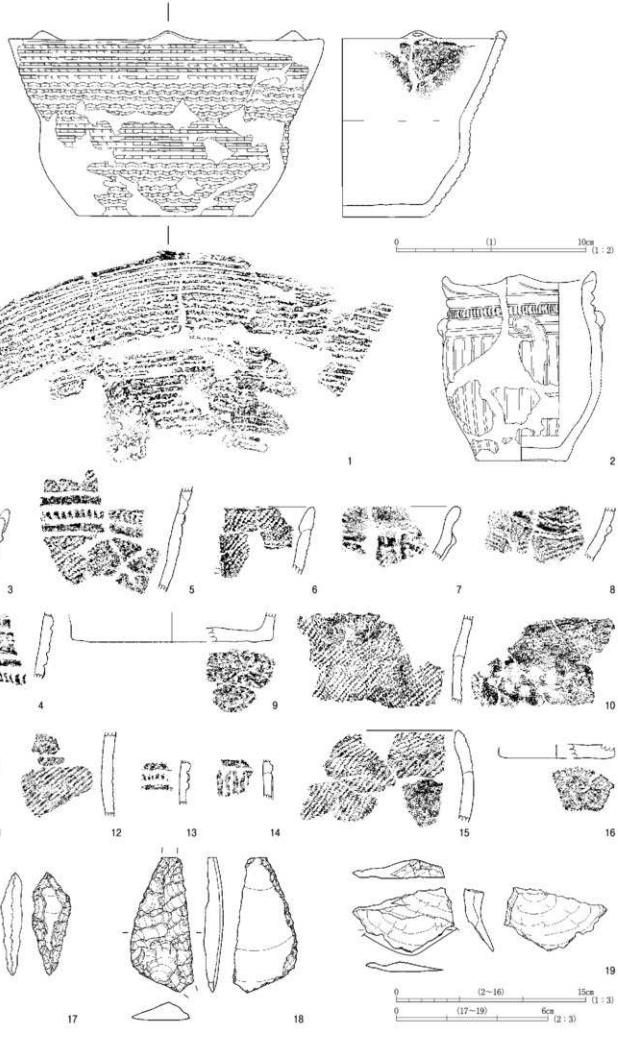
1．黒褐色土（10YR2/2）しまり普通、粘性やや強い。炭化物（1～3㎜）を少量、赤褐色土ブロック（3～5㎜）を微量含む。

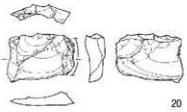
1．黒褐色土（10YR2/2）しまり普通、粘性やや強い。炭化物（1～3㎜）を少量、赤褐色土ブロック（3～5㎜）を微量含む。

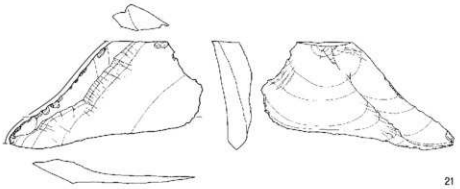


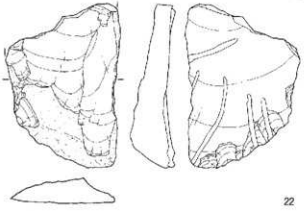
1．黒褐色土（10YR2/2）しまり普通、粘性やや強い。炭化物（1～3㎜）を中量、赤褐色土ブロック（3～5㎜）を微量含む。

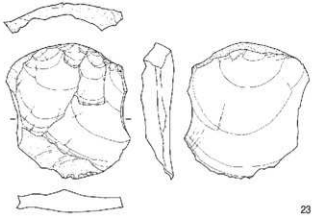
1．黒褐色土（10YR2/2）しまり普通、粘性やや強い。炭化物（1～3㎜）を小量、赤褐色土ブロック（3～5㎜）を微量含む。

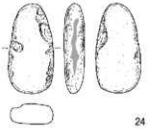

0 (1) 10cm (1:2)
1
2
3
5
6
7
8
4
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
0 (2~16) 15cm (1:3)
0 (17~19) 6cm (2:3)

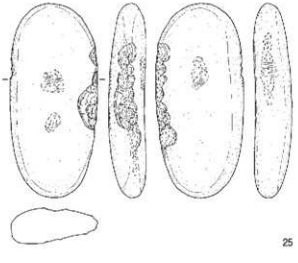

20

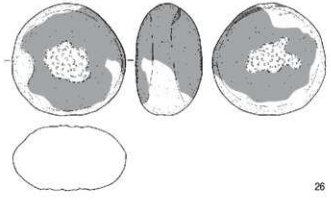

21

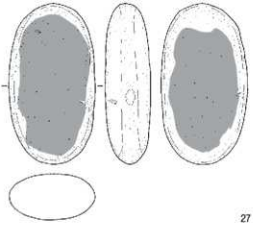

22

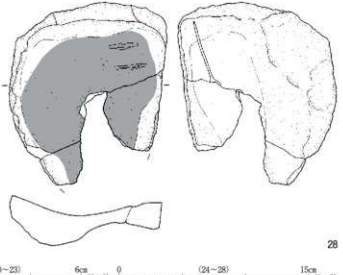

23


24

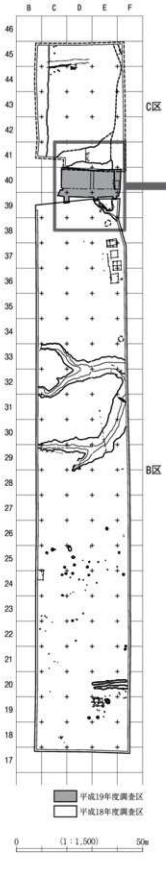

25

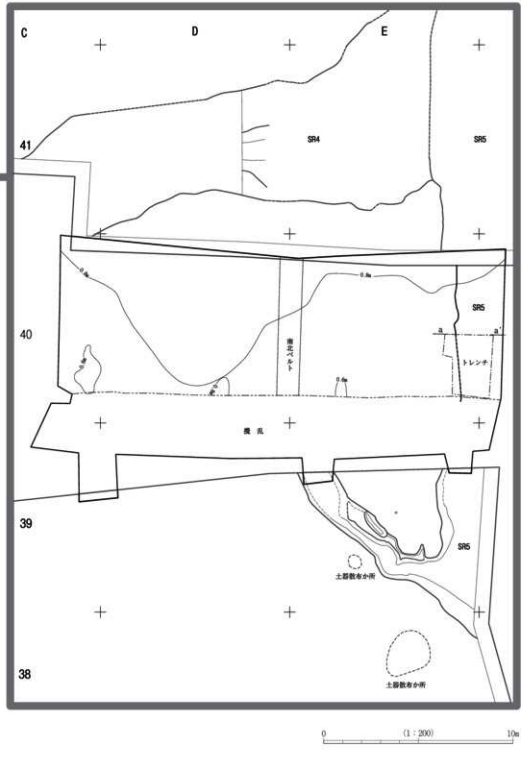

26

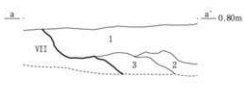

27


28

磨痕　0　(20～23)　6cm　(2：3)　0　(24～28)　15cm　(1：3)







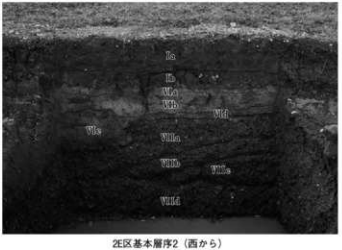
1. 黒色粘質土（2.5Y2/1）しまり・粘性強い。黒褐色粘質シルトを中量含む。
2. 褐灰色砂粒（10YR4/1）しまり・粘性弱い。枯れ葉を少量含む。
3. 黒褐色粘質土（10YR3/1）しまり・粘性強い。枯れ葉を少量含む。

大館跡全景

大館跡全景（東から）

調査区全景（南から山形県方面を望む）

2B区基本層序1（南から）



2E区基本層序2（西から）

10D区基本層序3（南から）

10B区基本層序4（東から）

堀1　完掘（北から）

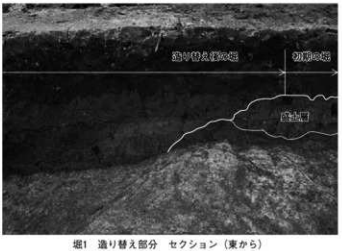
堀1　完掘（南から）

堀1、SD17　3・4B区南北セクション（東から）

堀1　11B・C区東西セクション（北から）

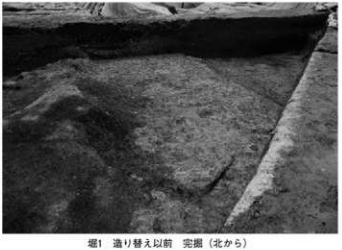
堀1　14C区東西セクション②（東から）

堀1　15C・D区南北セクション（北東から）



堀1　造り替え部分　セクション（東から）

堀1　造り替え後　完掘（北から）



堀1　造り替え以前　完掘（北から）

堀1　葺き石状遺構（東から）

堀1　葺き石状遺構部分 セクション（南から）

K33・K37・K32検出状況（東から）

堀1　遺物（土師質土器）出土状況1（東から）

堀1　遺物（曾朱漆器椀）出土状況2（西から）

堀1　遺物（舟形）出土状況3（東から）

堀1　遺物（木簡）出土状況4（西から）

空堀2　南北セクションおよび完掘（東から）

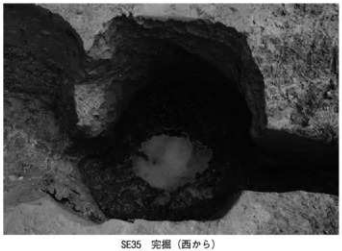
土塁10　東西セクション（南西から）

土塁10　東西セクション下部（南東から）

SE25　東西セクション（北から）

SE25　完掘（南から）

SE35　南北セクション（西から）


SE35　完掘（西から）

SK26　完掘（東から）

SR9　南北セクション（東から）

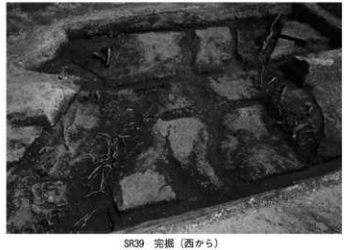
SR9　東西セクションおよび完掘（南から）

SR16　南北セクション（西から）

SR16　完掘（東から）

SD17　完掘（東から）

SR39　南北セクション（南西から）


SR39　完掘（西から）

SR39　護岸検出状況（東から）

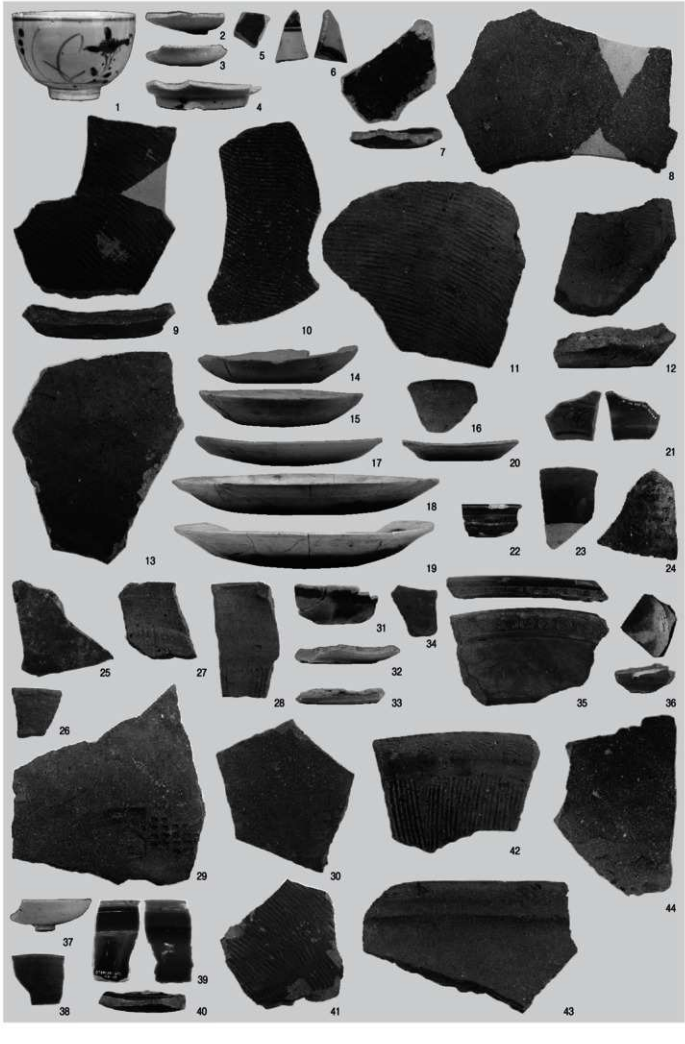
SR39　木組施設（北から）

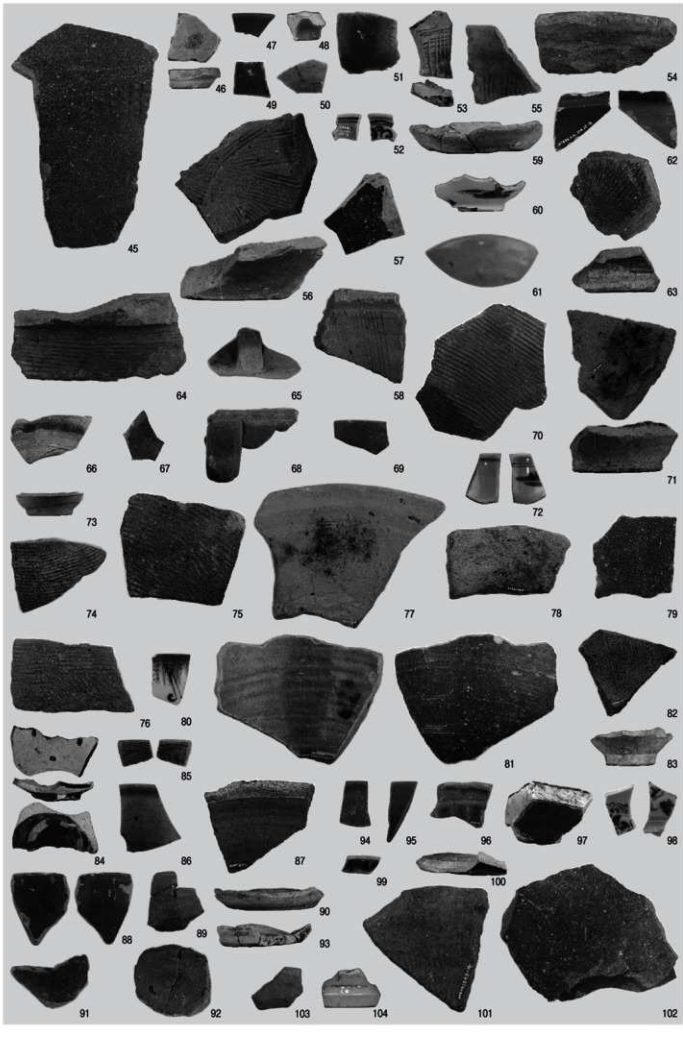
SX27　石検出状況（西から）

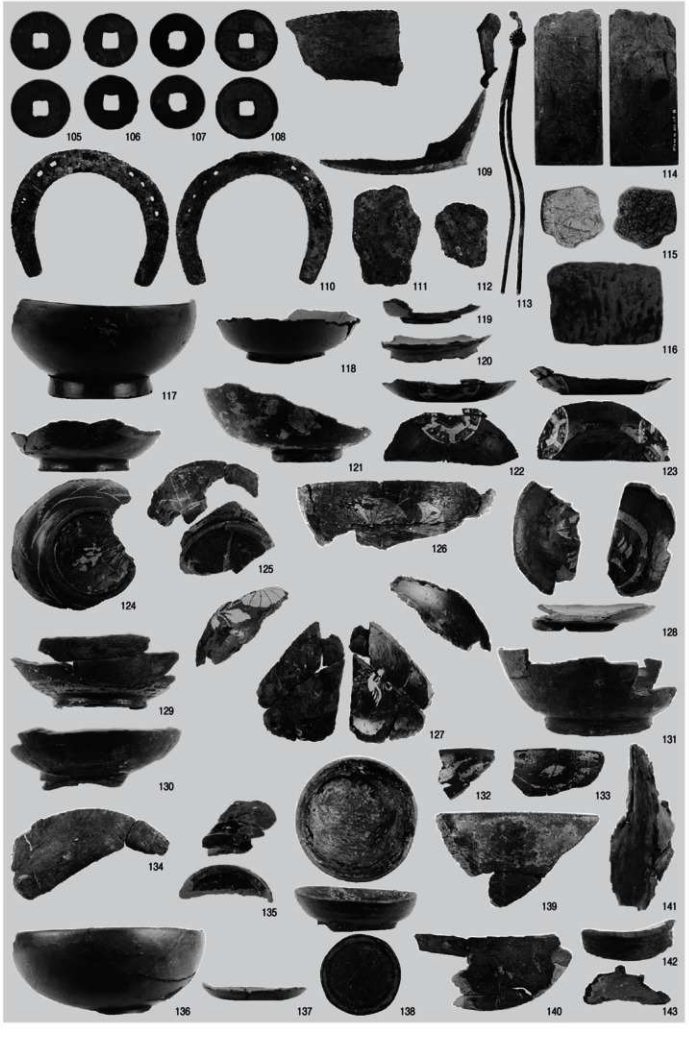
SX27　完掘（北東から）

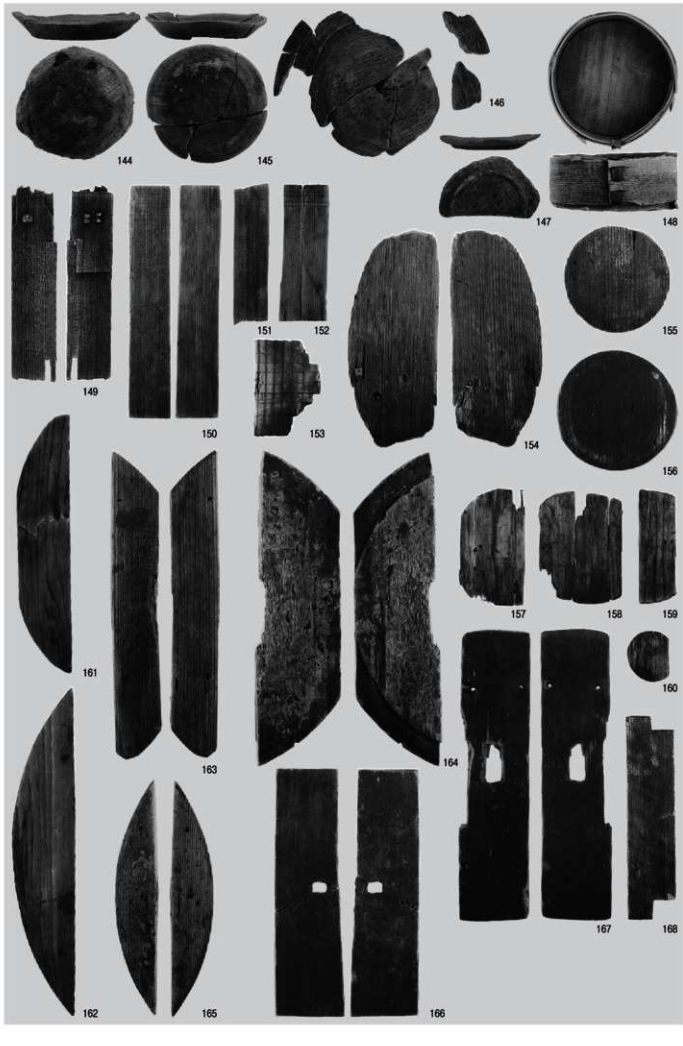
SX27　南北セクション（東から）

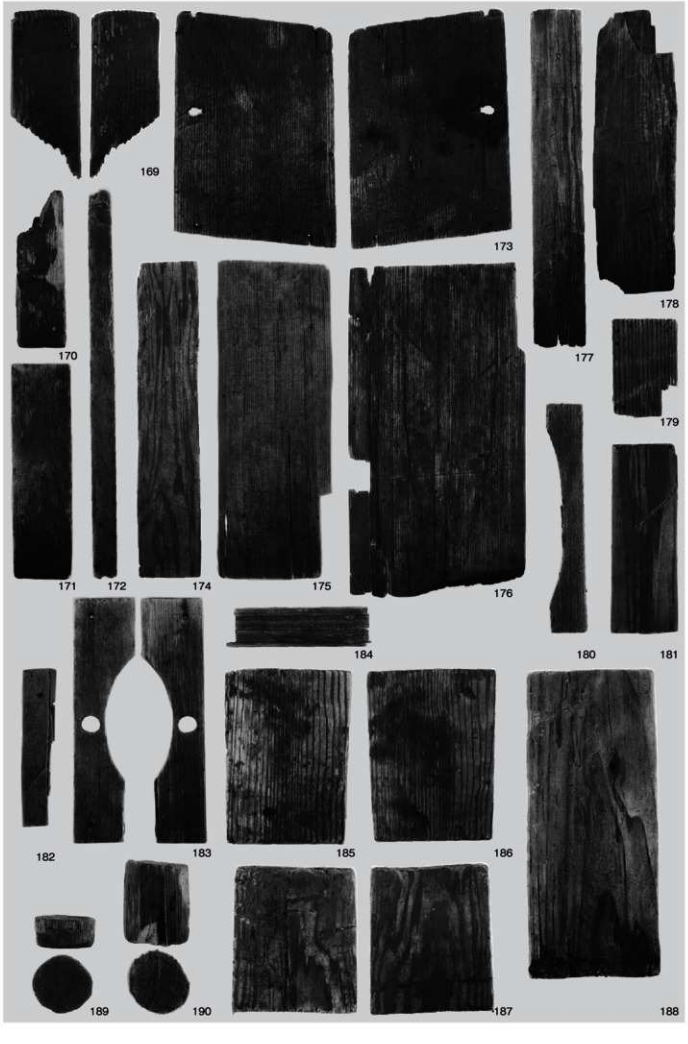
SK40　完掘（東から）

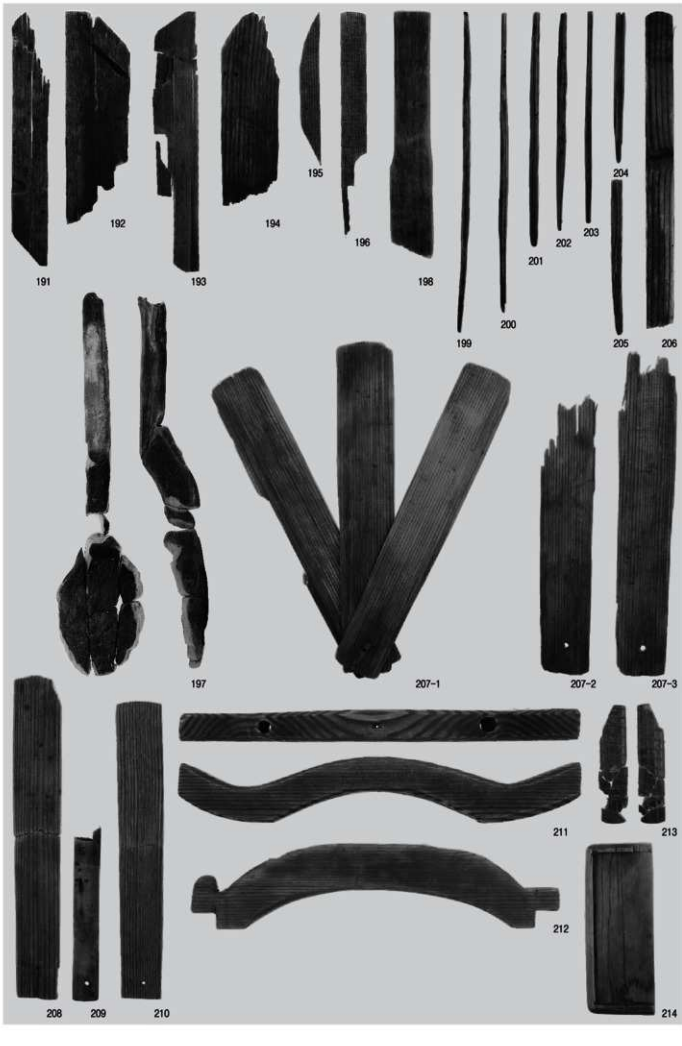

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

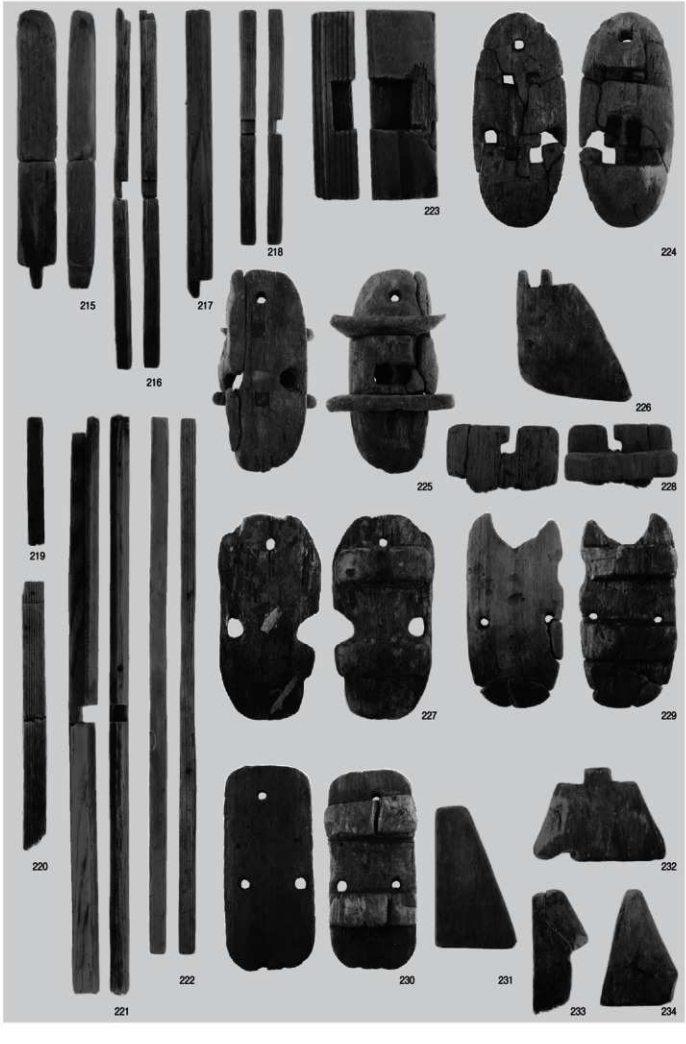

45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
59
60
61
62
63
64
65
58
70
66
67
68
69
71
72
73
74
75
77
78
79
76
80
82
81
83
85
84
86
87
94
95
96
97
98
99
100
88
89
90
93
91
92
103
104
101
102

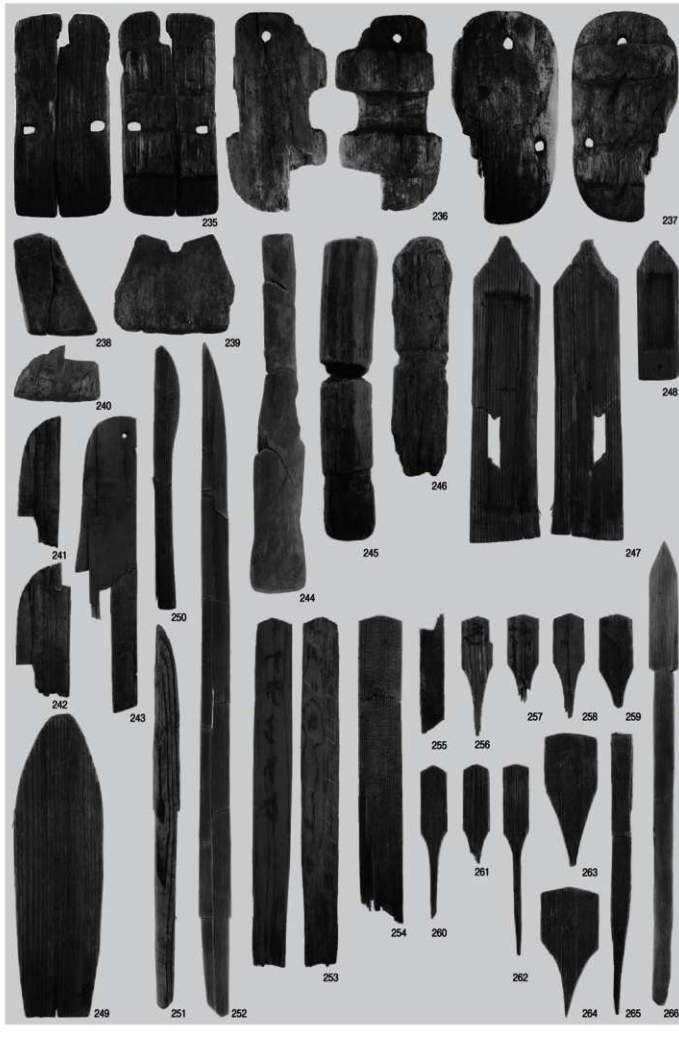

105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143

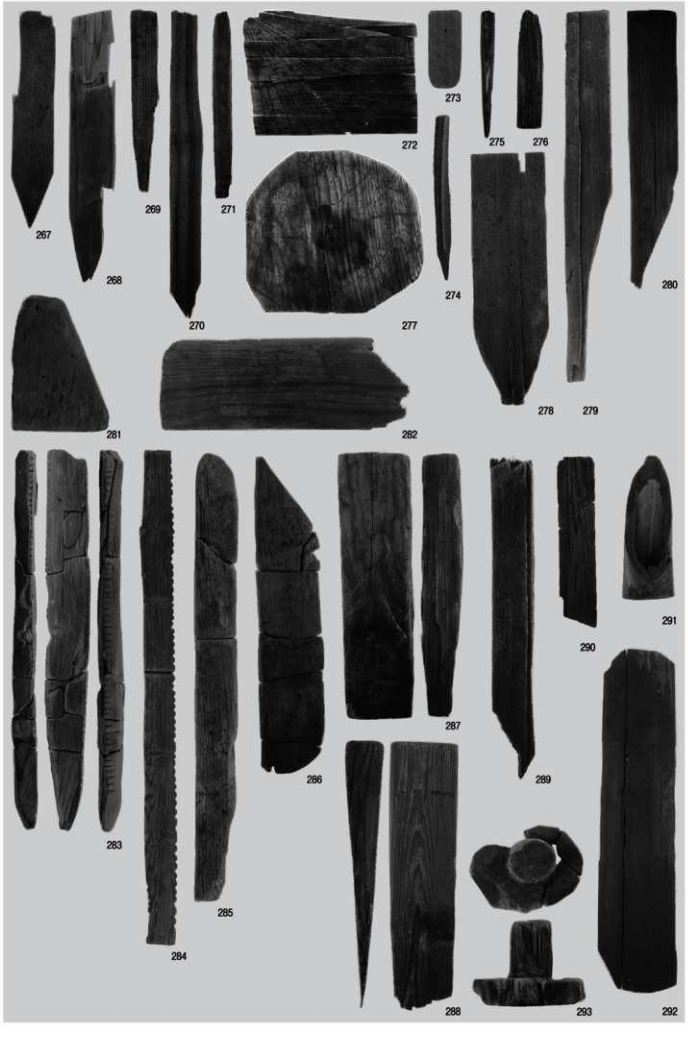

144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168

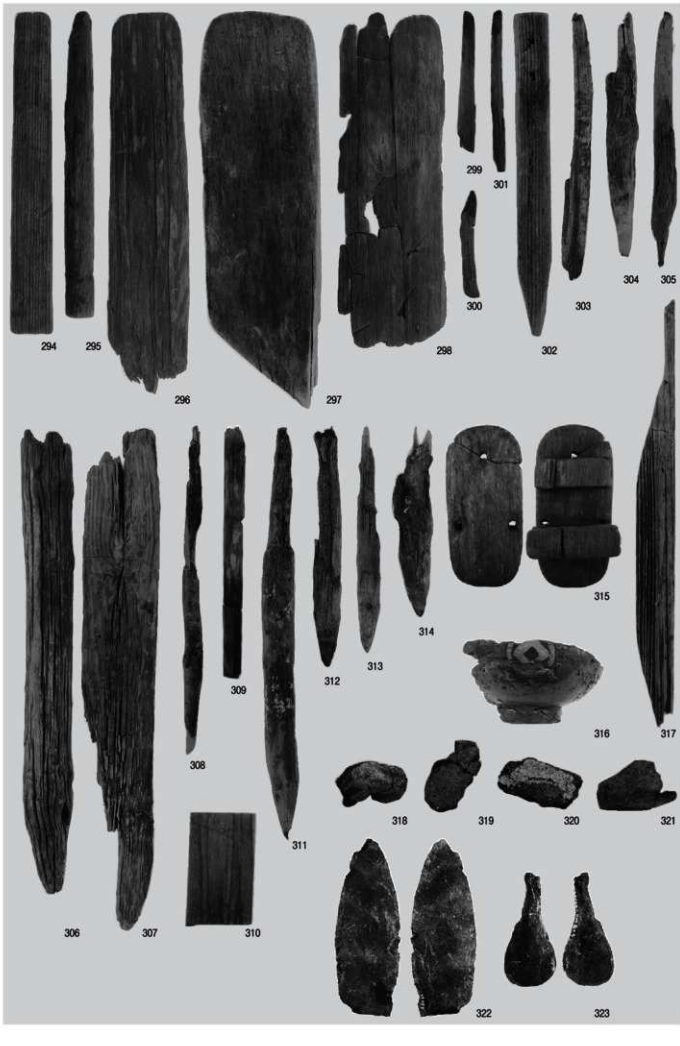

169
173
178
170
177
179
171
172
174
175
176
180
181
184
182
183
185
186
189
190
187
188


191
192
193
194
195
196
198
199
200
201
202
203
204
205
206
197
207-1
207-2
207-3
208
209
210
211
212
213
214


215
216
217
218
223
224
225
226
228
219
227
229
220
221
222
230
231
232
233
234


235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266


267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293


294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323

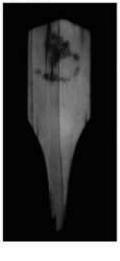
1号　木簡

梵字（オン）

3号　木簡

梵字（オン）

4号　木簡



梵字（オン）（カ）

2号　木簡

梵字

（キャ）

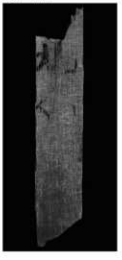
（カ）

（ラ）

（バ）

（ア）

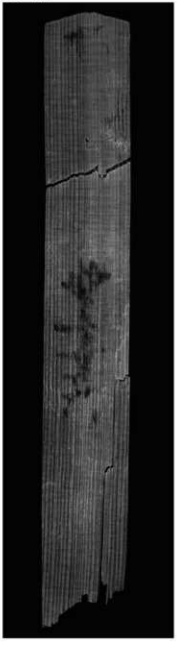
5号　木簡



札

心（カ）

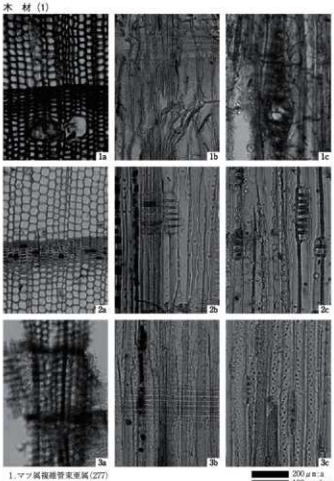
6号　木簡



□〔　〕

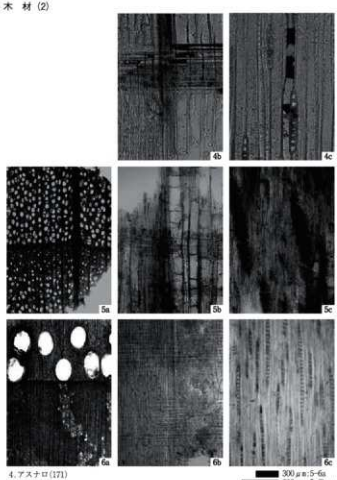
0　(2:3)　6cm

木 材 (1)



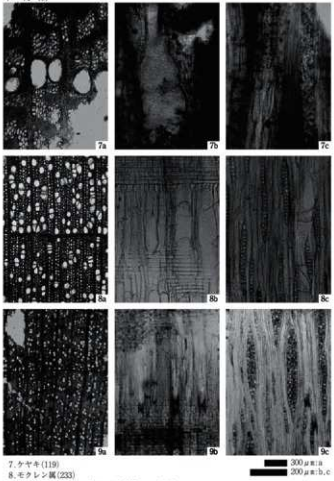
1.マツ属複維管束亜属(277)
2.スギ(150)
3.ヒノキ(272)　a：木口，b：柾目，c：板目

木 材 (2)



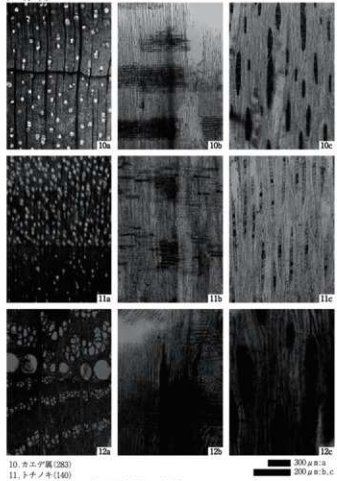
4.アスナロ(171)
5.ブナ属(134)
6.クリ(311)　a：木口，b：柾目，c：板目

木 材 (3)



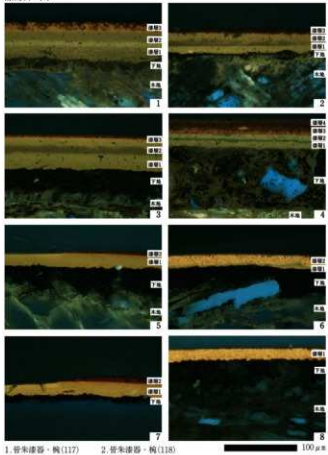
7.ケヤキ(119)
8.モクレン属(233)
9.サクラ属(244)　a：木口，b：柾目，c：板目

木 材 (4)



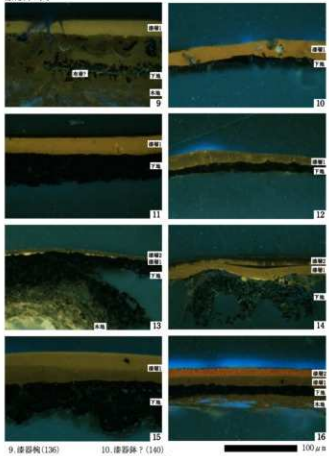
10.カエデ属(283)
11.トチノキ(140)
12.ハリギリ(215)　a：木口，b：柾目，c：板目

漆薄片（1）



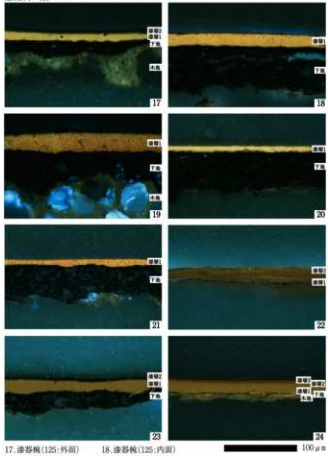
1.骨朱漆器・椀(117)　2.骨朱漆器・椀(118)
3.骨朱漆器・椀(120)　4.骨朱漆器・椀(119)
5.漆器椀(123:外面)　6.漆器椀(123:内面)
7.漆器椀(122)　8.漆器椀(124)

漆薄片（2）



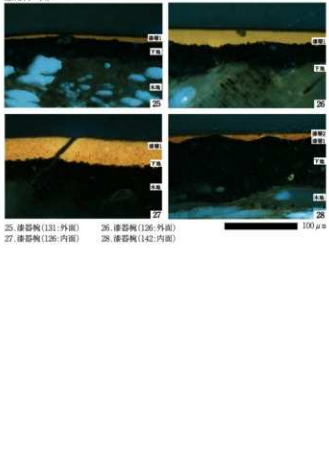
9.漆器椀(136)　10.漆器鉢？(140)
11.漆器椀(127)　12.漆器椀(129:外)
13.漆器椀(126)　14.漆器皿(137)
15.漆器椀(135:外面)　16.漆器椀(135:内面)

漆薄片（3）



17.漆器椀(125:外面)　18.漆器椀(125:内面)
19.漆器椀(121:内面)　20.漆器椀(133:外面)
21.漆器椀(132:内面)　22.漆器皿(138)
23.漆器鉢？(139)　24.漆器盤？(141)

漆薄片（4）



25.漆器椀(131:外面)　26.漆器椀(126:外面)
27.漆器椀(126:内面)　28.漆器椀(142:内面)

東興屋遺跡遠景（北から）

調査区近景（南から）

調査区全景（東から）

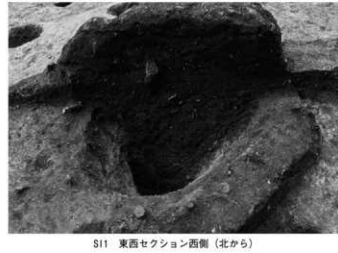
調査区基本層序D（東から）

調査区基本層序C（西から）

調査区基本層序B（南から）

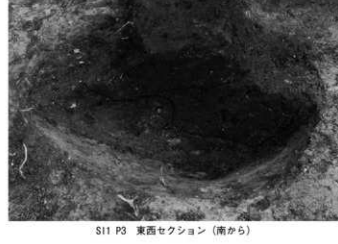
SI1　全景（西から）

SI1　東西セクション東側（北から）

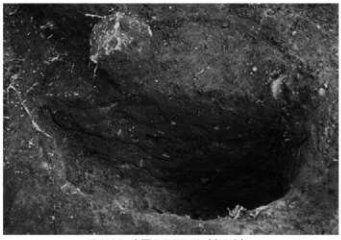


SI1　東西セクション西側（北から）

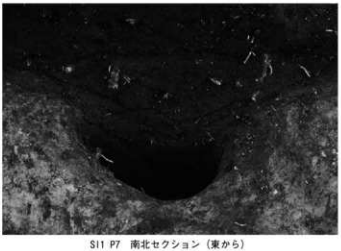
SI1 P1　東西セクション（南から）



SI1 P3　東西セクション（南から）

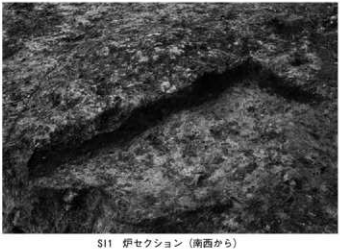


SI1 P5　東西セクション（南から）



SI1 P7　南北セクション（東から）

SI1　炉検出状況（西から）



SI1　炉セクション（南西から）

SI2　全景（西から）

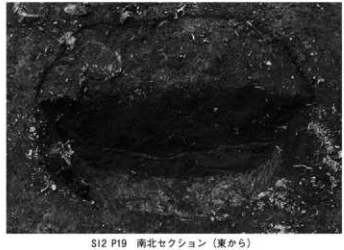
SI2　遺物出土状況（南から）

SI2　遺物出土状況（南西から）

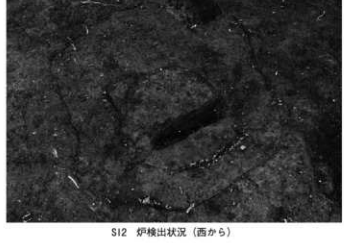
SI2　南北セクション（東から）

SI2 P8　東西セクション（南から）

SI2 P13　東西セクション（南から）


SI2 P19　南北セクション（東から）

SI2 P27　東西セクション（南から）


SI2　炉検出状況（西から）

SI4　全景（北から）

SI4　遺物出土状況（北から 右側は遺物集中2）

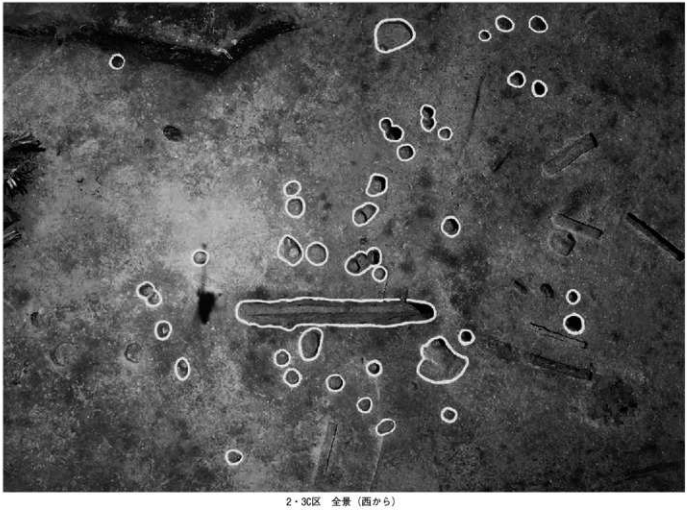
SI4　遺物出土状況（東から）

SI4　王冠型土器(49)出土状況（北から）

SI4　東西セクション（北から）

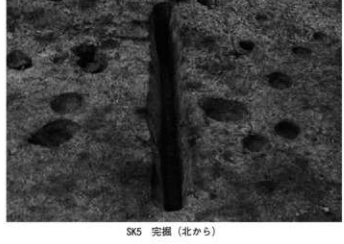
SI4 P4　南北セクション（東から）

SI4 P18　南北セクション（東から）

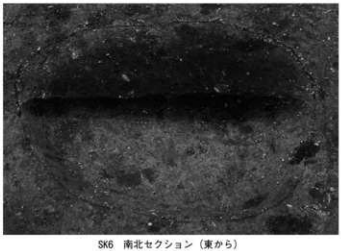


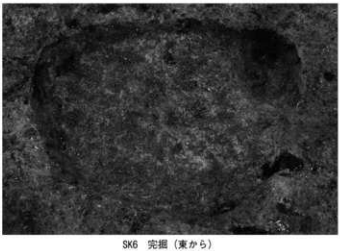
2・3C区　全景（西から）

SK5　東西セクション（北から）

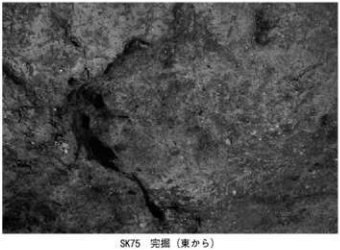


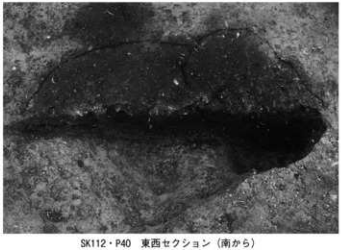
SK5　完掘（北から）

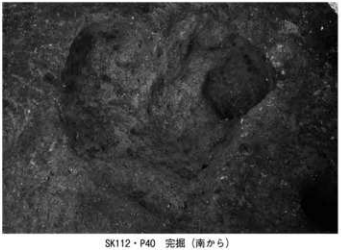

SK6　南北セクション（東から）


SK6　完掘（東から）

SK75　東西セクション（南から）


SK75　完掘（東から）

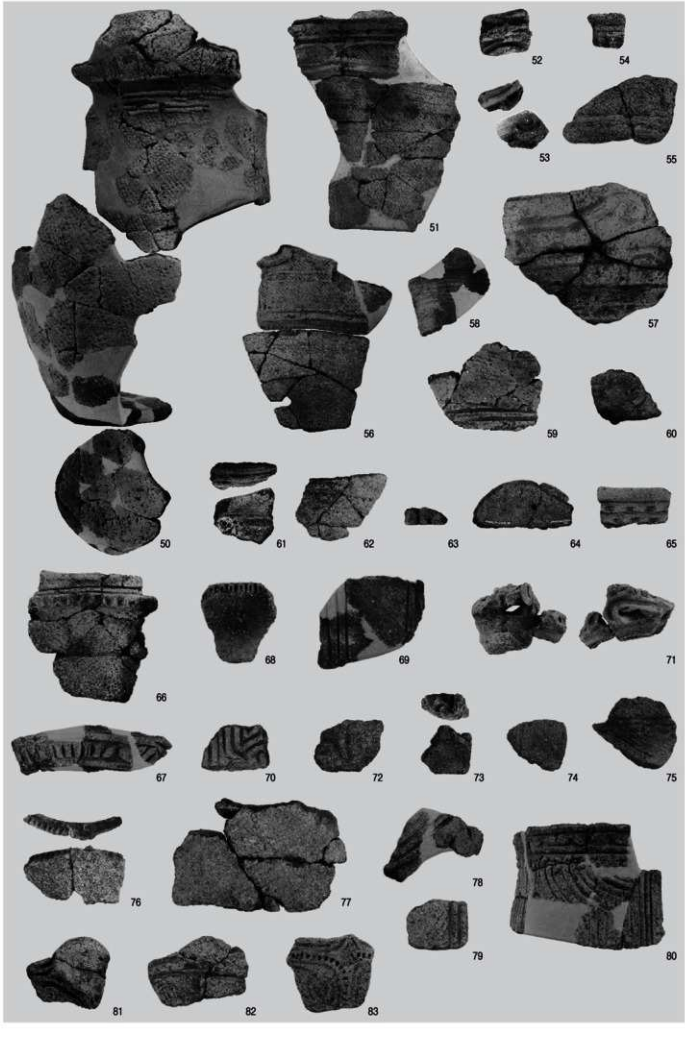

SK112・P40　東西セクション（南から）

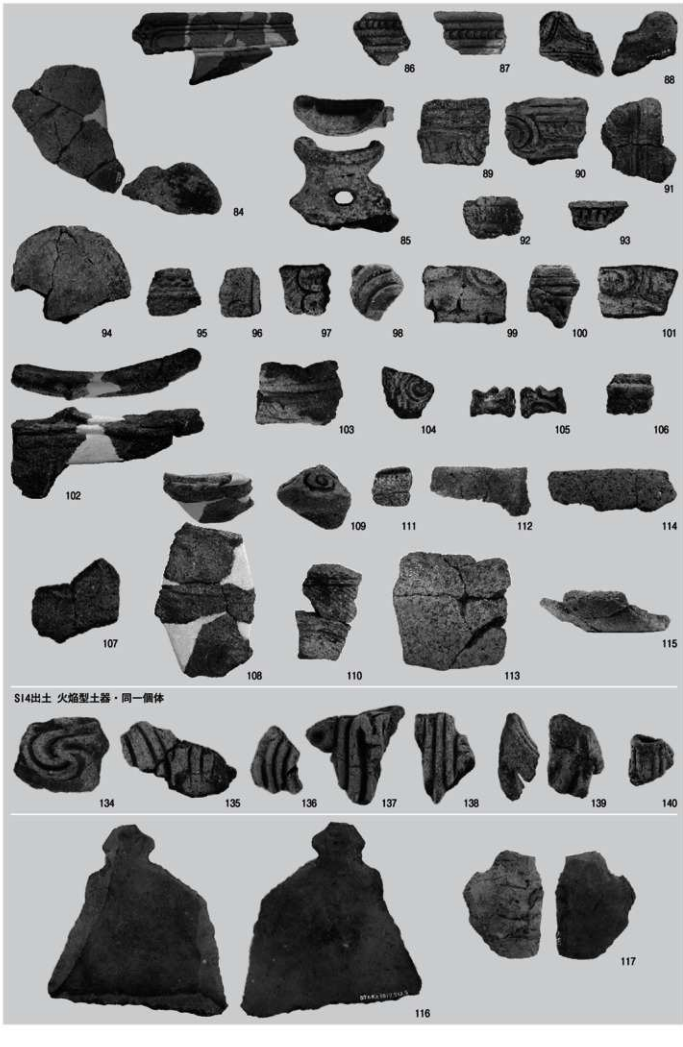

SK112・P40　完掘（南から）

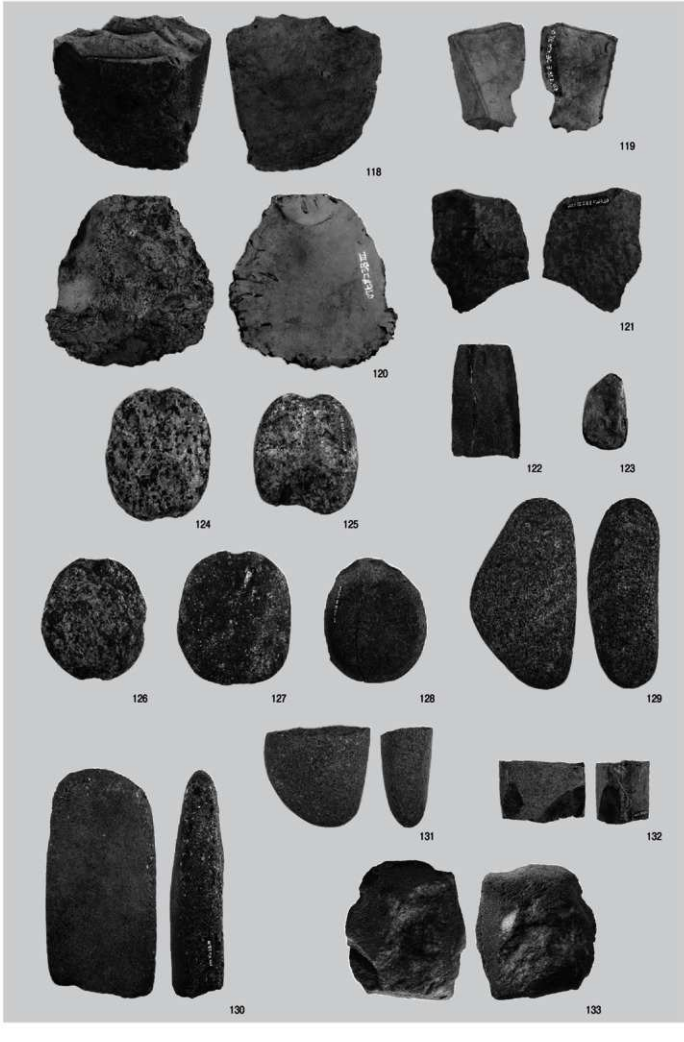
P9　東西セクション（北から）

P16　東西セクション（南から）

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49


50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83


86
87
88
84
89
90
91
85
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
109
111
112
114
107
108
110
113
115
S14出土 火焔型土器・同一個体
134
135
136
137
138
139
140
116
117

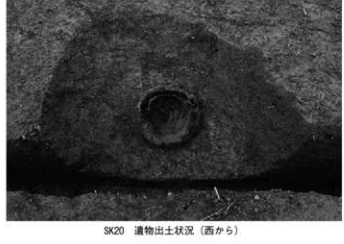

118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133

高山東遺跡近景（南から）

調査区完掘（南東から）

基本層序1（南から）

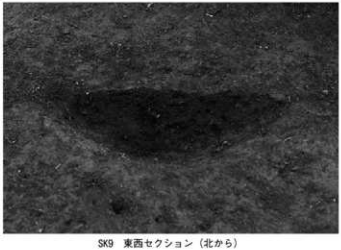
基本層序2（北から）

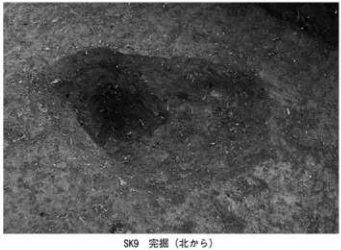


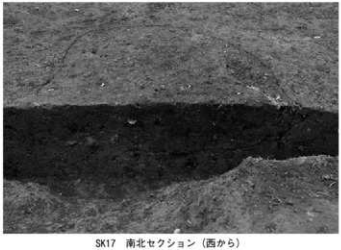
SK20　遺物出土状況（西から）

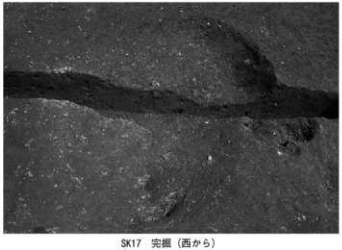
SK20　南北セクション（西から）

SK20　完掘（西から）


SK9　東西セクション（北から）


SK9　完掘（北から）

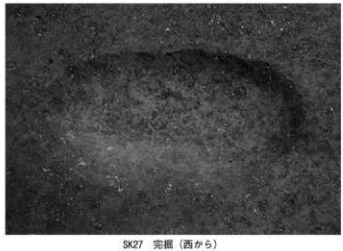

SK17　南北セクション（西から）


SK17　完掘（西から）

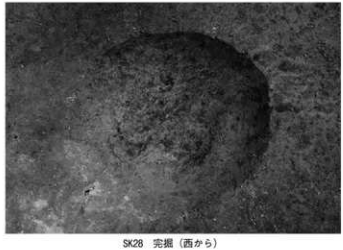
SX18　南北セクション（西から）

SX18　完掘（西から）

SK27　南北セクション（西から）

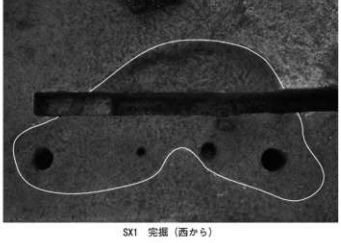

SK27　完掘（西から）

SK28　南北セクション（西から）

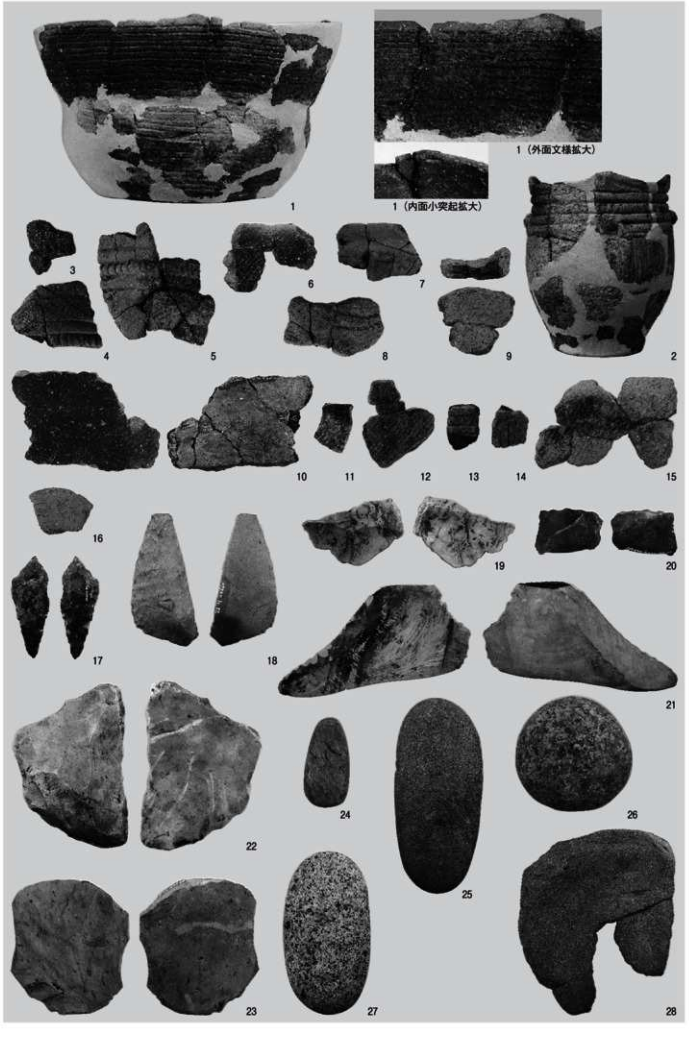

SK28　完掘（西から）

SX1　遺物出土状況（北から）

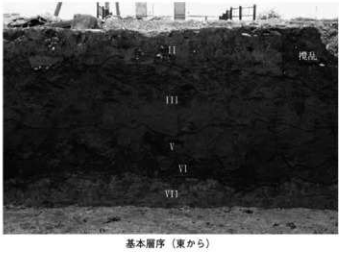
SX1　南北セクション（西から）


SX1　完掘（西から）

作業風景（東から）


1
1（外面文様拡大）
1（内面小突起拡大）
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28

窪田遺跡全景（東から）



基本層序（東から）

III層上面全景（東から）

SR5　東西セクション（南から）

撹乱土 出土遺物（近世）

報告書抄録

ふりがな	おおだてあと　に・ひがしこうやいせき・たかやまひがしいせき・くぼたいせき　に
書　名	大館跡 II・東興屋遺跡・高山東遺跡・窪田遺跡 II
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書
巻　次	XXVIII
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 192 集
編著者名	青木　学・石川博行・北村和樹（加藤建設株式会社埋蔵文化財調査部） 高橋　敦・伊藤良永・斉藤紀行（パリノ・サーヴェイ株式会社） 鈴木俊成（財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団）
編集機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団・加藤建設株式会社埋蔵文化財調査部
所在地	〒 956-0845　新潟県新潟市秋葉区金津 93 番地 1　電話 0250（25）3981　財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒 959-0251　新潟県燕市吉田本所 83-1　電話 0256（92）8899　加藤建設株式会社新潟支店
発行年月日	西暦 2009（平成 21）年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
大館跡	新潟県村上市 天神洞字大館ほか	152129	57	38 度 14 分 46 秒	139 度 30 分 29 秒	20070412 ～ 20071024	3,878 ㎡	日本海沿岸東北自動車道建設
東興屋遺跡	新潟県村上市 東興屋字宮ノ前 ほか	152129	120	38 度 13 分 00 秒	139 度 30 分 12 秒	20070423 ～ 20070731	798 ㎡	日本海沿岸東北自動車道建設
高山東遺跡	新潟県村上市 仲間町字高山 361 ほか	152129	119	38 度 12 分 49 秒	139 度 30 分 03 秒	20070507 ～ 20070601	353 ㎡	日本海沿岸東北自動車道建設
窪田遺跡	新潟県村上市 南田中字窪田	152129	425	38 度 09 分 49 秒	139 度 26 分 58 秒	20070927 ～ 20071017	264 ㎡	日本海沿岸東北自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大館跡	城館跡	中世	堀（2 条） 土塁（1 基） 井戸・土坑（3 基） 溝・自然流路（2 条） 性格不明遺構（1 基）	輸入磁器（青白磁・白磁・青磁・青花）、瀬戸美濃焼、信楽焼、珠洲焼、越前焼、土師質土器、銭貨、鉄鍋、漆器・木簡・下駄などの木製品	館周囲を巡る堀の東辺を調査。堀最下層から、高級品である曽禰漆器を含む多量の木製品が出土した。
	散布地	近世	溝・自然流路（2 条）	肥前系陶磁器・銭貨	
東興屋遺跡	集落	縄文時代（中期前葉～中葉）	竪穴住居（2 軒） 竪穴建物（1 軒） 陥穴（1 基） 土坑（3 基） ピット（96 基）	縄文土器（中期） 石器（石匙・不定形石器・磨製石斧・磨石類・凹石・石錘）	丘陵中腹に立地する小規模集落。
高山東遺跡	散布地	縄文時代（前期中葉・中期前葉）	土坑（5 基） ピット（23 基） 性格不明遺構（2 基）	縄文土器（中期） 石器（石錐・石匙・不定形石器・磨製石斧・磨石類・石皿）	SK20 から大木 2a 式に比定される鉢形土器が出土。
窪田遺跡	散布地	近世		肥前系磁器	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第192集
日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXⅧ
大館跡Ⅱ・東興屋遺跡・高山東遺跡・窪田遺跡Ⅱ

平成21年3月30日 印刷
平成21年3月31日 発行

発　　行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市中央区新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市秋葉区金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社　第一印刷所
〒950-8724　新潟市中央区和合町2丁目4番18号
電話　025（285）7161

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第192集『大館跡Ⅱ　東興屋遺跡　高山東遺跡　窪田遺跡Ⅱ』正誤表追加

頁	位置	誤	正
抄録	大館跡　北緯	３８度１４分４６秒	３８度１３分５８秒
抄録	大館跡　東経	１３９度３０分２９秒	１３９度３０分１８秒
抄録	東興屋遺跡　北緯	３８度１３分００秒	３８度１３分１２秒
抄録	東興屋遺跡　東経	１３９度３０分１２秒	１３９度３０分０１秒
抄録	高山東遺跡　北緯	３８度１２分４９秒	３８度１３分００秒
抄録	高山東遺跡　東経	１３９度３０分０３秒	１３９度２９分５２秒
抄録	窪田遺跡　北緯	３８度１０分４８秒	３８度１０分５８秒
抄録	窪田遺跡　東経	１３９度２７分２０秒	１３９度２７分３１秒

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第192集

『大館跡Ⅱ・東興屋遺跡・高山東遺跡・窪田遺跡Ⅱ』 正誤表

頁	誤	正
図版33		
図版65	調査区全景（西から）	調査区全景（東から）